
とある野望の凶刃

将真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある野望の凶刃

【Nコード】

N9372K

【作者名】

将真

【あらすじ】

学園都市内でカップルが次々と斬殺される事件が起こった、三週間で四組のカップルが殺されると言う残酷な事件に学園都市中が震撼する。

犯人の目的は？

一人の男の異常な野心が学園都市を恐

怖のどん底に陥れる。

序章 惨劇の始まり（前書き）

初めて二次創作に挑戦させてもらいました。まとめるのが苦手なので、ぐだぐだな駄文になってます。それでもよい方は見て下さい。

原作キャラは出せる限りは出していききたいと思っています

序章 惨劇の始まり

「はあはあ……後もうちょっとだ、頑張れさおり！」

午後七時半 学園都市第七学区のとある公園の中を二人の男女が手をつないで走っていた。

男は小笠原俊一しゅんいち十八歳 この学園都市の、第七学区にある、平凡な高校に通う高校三年生だ。

なお学園都市とは、独自の研究により、超能力を人口的に作る事が出来る都市である。
一緒に走っている女性は水原さおり。

13歳で小笠原俊一の彼女であり、名門常盤台中学の一年生でもある。

なお常盤台中学とは、学園都市内でも、五指に入る名門である。
なぜ平凡高校の生徒と常盤台のお嬢様が、恋人同士かと言うと、単純に両者がいとこ同士であるからである。

その彼らが何故？夜の公園を走っているのかと言うと、話しは今朝にさかのぼる。

今朝

この日久しぶりに、二人の予定が合い朝からデートしていた。

だが…二人共久しぶりのためつい時を、忘れて遊んでしまったのだ。常盤台中学の寮の門限が厳しいと言う事も忘れて。

幸い寮の近くの漫画喫茶にいたので、慌てて全力疾走して、今に至ると言う訳である。

「この公園を抜ければ寮はすぐだ、寮についたら思う存分休めるだから、頑張れ！」

そう言って俊一は自分の後ろを走る、さおりに喝を入れる。

しかしその喝もむなしく、さおりのスピードはどんどん失速していく。
更には右左に体が揺れて今にも転けてしまいそうだ。

(無理もないか)

まだ時間にして、約三分。

だが全力疾走で駆けてきたのだ。

引退したとはいえ、野球部のレギュラーを三年間勤めた。俊一と、典型的な文化系のさおりとでは、体力が違いすぎる。

俊一は身長百七十八の長身で、対するさおりは百四十四センチと、小柄。

また手をつないで走ってきたので、さおりは俊一の早さに合わせねばならず。

文化系で日頃運動不足のさおりに俊一の健脚についていくのは無理な相談だった。

「ええい仕方ない！」

俊一はある決心をすると突然走るのを、止める。

「えっちょっとおっ俊ちゃんどうしたの？」

俊一と手をつないで走っていたさおりは、突然の俊一の停止で、バランスを崩して前のめりになって、倒れそうになるが停止していた俊一が、前に周りこんですかさず受け止める。

更に俊一は、そのままさおりを抱え上げお姫さま抱っこにする。

「ちょっと俊ちゃん、何してんのよ？降ろしてよ」

羞恥のあまりさおりは真っ赤になって、抗議するが、俊一は気にせずお姫さま抱っこのまま走りだす。

「しょうがねえだろ　お前このまま走るほど体力ねえだろ？だからといってお前の能力は移動とかには、使えないし：俺は無能力だしな。^{レベルゼロ}

それとも力つきて間に合わず、寮監のお仕置き食らう方がいいのか？」

彼女の能力はレベル3のチューニングで、触れた道具の、性能を引き上げる事が出来る。

彼女が触れた物は　だいたい数時間から数秒単位で、性能が上がりレベル5になったら　ツリーダイアグラムの演算力を時代遅れのパソコンにも与えられると学者は豪語している。

ただレベル3なので　制限も多い

1 性能を上げるだけで耐久力等は上がらない

2 生物には作用しない

3 触れないと能力は使えない。
常盤台中学に入学できるほどの、すごい力だが今は何の役にも立たない。

失礼話しを戻そう。

俊一の一言が効いたのか、さおりは首を何度も左右にふつた後俊一の胸に顔を押しつけ、さらにきつくしがみついた。

「いい子だ。」

そう言つて俊一は、さおりの頭を撫でながら更にスピードを上げる。

人一人抱えているとは思えないスピードで、ゴールである。

常盤台女子寮（美琴や黒子と同じ）目指して走っていくのだった。

後に訪れる悲劇も知らずに。

「よしもうすぐだ、何とか門限に間に合いそうだぞ。」

さおりをお姫さま抱っこしてから大体数分はたつたろうか。

俊一は門限に間に合いそうなので、少し楽しようと　スピードを落としたり。

遠目だが、常盤台中学女子寮が見えている。

もう恥ずかしいから降りしてよ俊ちゃん！」

さおりも女子寮が見えて安心したら、再び羞恥心が高まったのか？降りようともがく

「わかった　わかった　ここまで来たら大丈夫だろう。」

「すぐ降りしてやるから暴れるな」

俊一は慌ててさおりを降ろしてやる。

「悪かったな、危うく門限破らせる、ところだった。」

さおりを降ろした後、俊一は自分の坊主頭を搔きながら、さおりに謝る。

「いいよ謝らなくても、お互い様だし。」

さおりは笑いながら俊一に言う。

「気にしてないようだ。」

「そうか。」

「まあ今度からは気をつけるよ。」

「じゃあね俊ちゃんお休み。」

「またメールか電話するね。」

「あゝ待たな！こつちもまた連絡入れるわあゝん？ ……誰だ？」
その時別れの挨拶をしていた俊一は、遠くからこちらに歩いて来る人間に気づいた。

遠いし夜だが、元野球部で外野手を、してた俊一にはよく見えた。

年は十七、八か？

Tシャツにジーパンというラフな格好だ。

顔も普通で美形でも不細工でもない。
特徴のない顔をした普通の学生だった。

強いて特徴を上げるとすれば、右手に木刀を持っている事か。

普通ならおかしいか危険だと思ふ所だが…

俊一は警戒しなかった。

なぜならその歩いて来る少年は左腕に、ジャツジメント風紀委員の腕章をつけていたからだ。

（ジャツジメントの巡回かあゝまあ最近物騒だからなご苦労な事だ。

）
その歩いて来るジャツジメントは、早足で俊一たちの方に近づいて来る。

「何だあゝ俺達に用でもあるのか？」

俊一は隣にいるさおりに話しかける

「そんな事私を知るわけないでしょ。」

「それもそうか？」

二人が話していると いつ間にか、その風紀委員が、俊一の目

の前まで来ており、こちらを見ていた。

無言でただこちらを、見ている。

風紀委員の少年は 俊一をじっと見てから次に、さおりの方を見た。

風紀委員は、更に一步俊一に近づいた後
きた

やっと話しかけて
「カップルですか

？」

目の前の風紀委員は そう俊一達に問いかけた。

(どう答えりゃいいん

だ?)

俊一は混乱していた。

予想だにしていなかった質問だったからだ。

(何て答えたらいいんだ。)

風紀委員の意外な質問に俊一は戸惑っていた。

(まあ隠すような事じゃねえか。

おふくろには、言ってるし…さおりの奴もママには言ってるって言
ってたから、一応親公認になるかな。)

俊一は少し考えた後

包み隠さず正直に答えた。

「そうです。

俺たちはカップルです。

でも風紀委員が、何でそんな質問するんですか？」

俊一は答えた後、気になった疑問を風紀委員にぶつけた。

すると風紀委員は、にっこり笑うと　こう言った。

「何簡単な事ですよ。…獲物かどうか確かめただけですよ。」

そう言うと、目の前の風紀委員は右手に持っていた。

木刀を腰に引きつけ、木刀の柄の方を左手で掴んで、低い体勢で、さおりのいる方に飛び込んで行った。　飛び込みながら、

左手で木刀を抜く、正確には抜き身の真剣をだ。風紀委員の持っていた木刀は仕込み杖だったのだ。　こ

の間会話終了から　僅か十秒ほど。

風紀委員は抜刀した刃を、何が起きているのか、解らず困惑した顔をしている。

さおりの喉を左手の片手突きで突き刺した。

グサツと刀が肉を貫く小さな音が鳴った。悲鳴はない　即死だ。

鮮やかな手並みだ。

恐らくさおりは自分が死んだ事も知らず天国に旅立った事だろう。

さおりの喉に刀を突き刺した、風紀委員はすぐさま刀を抜きつつ、刀でさおりの死体を、引っ張りながら、喉から刀を抜くと同時に、回し蹴りで、さおりの死体を俊一目掛けて蹴り飛ばした。

(何が起こったんだ?)

俊

一は完全に混乱していた。

彼女の死も理解していなかった。

そうこうし

ている内に俊一の目の前に、喉から血が流れ服が真っ赤に染まった

さおりの死体が迫ってきた

その死に顔は今の俊一と同

じくパニックで混乱した顔だった。

俊一は無意識でとっさに死体

を抱き止めた。

するとその俊一の真横をヒュツと風が吹き抜けた。

風が吹き抜けた後

突然俊一の首から血が噴きだした。

薄れゆく意識の中で 俊一は背後で仕込み杖を納刀している風紀委員の姿を見た。

それが俊一がこの世で見た最後の映像だった

映像を脳が認識した時には、俊一はさおりを抱きしめながら、彼女を下敷きにしつつ、うつ伏せに地面に倒れて事切れていたのだった。

これが後に多くの犠牲者を出す 殺人事件の幕開けだった。

序章 惨劇の始まり（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

？

次回

からこの話しの主人公が出てきます

今回はプロローグなの

で？

ではご意見 ご感想待ってます。

自分は未熟なのでアドバイスは出来るだけ 参考になりたいと思っ
てます。

第一話 転校生藤田学（前書き）

ふうふう やつと更新できました。しかしまとめるのが難しい。

気に入って頂けたら、いいのですが。？ それから

感想 ポイント お気に入り登録して頂いた皆様ありがとうございます。
ます。 それでは未熟者の書いた駄文ですが、どうぞ。

第一話 転校生藤田学

「ここが僕の新しい学校かあ？」

その日藤田学は第七学区にある 柵川中学校の校門前に立っていた。
た。

時刻は8時ちょうど 思ったより早く着いた。

藤田学は十三歳で身長は百五十と小柄な少年だ。大人しそうな雰囲気結構整った顔で、美少年と言って差し支えないだろう。

学はこの柵川中学に今日から通う転校生だ 学は前まで別の中学校に通っていたのだが、そこでトラブルを起こしてしまい、形的には転校だが実質は退学になったのだ。 その

後学は、幾つかの学校の中からこの柵川中学を選んで転入したのだ。
理由は二つ。 一つ

は高レベルの能力者が少ない事 二つ目は能力至上主義があまり徹底していない事である。 (前の学

校は名門校で、能力至上主義が徹底しておりレベルの低い能力者は高能力者に下に見られ蔑まれ、またイジメも多かった。) 学はこの能力至上主義の考え方が、嫌いだったので、前の学校に未練はない。

「さ〜ととりあえず 職員室に行きますか〜」

職員室に向かって、歩きだしたのだった。
校門に立っていた、学は転校の挨拶のため

「ねえねえ初春〜またうちのクラスに転校生来るって聞いたんだけど本当なの？」

「ええ本当のようですよ」佐天さん。」

学が職員室に向かつていた頃、学の転入するクラスでは転校生の話
しで持ちきりだった。今話しているのは、クラスの女子の佐天涙子
と初春飾利である。佐天は初春の机に手を付いて立って初春に
話しかけている。一方初春は席に座って携帯を触つて
いる。

「で初春、どんな子なの？」

と佐天

は興味津々な顔を隠そうともせず、初春に聞く。

「え」と確か先生に聞いた話しでは、蒼天飛翔館そつてんひしゅうかん中学校からの転校
で男の子だそうですよ」

そう言いながら、初春は操作していた携帯をポケットに戻して佐
天の質問に答える。

「ええ！蒼天飛翔館からうちなんかに、来たの」

佐天は驚きの声をあげる。

佐天が驚くのも、無理はなかった。蒼天飛翔館中学校は、学
園都市でもベスト10に入る程の名門校だったからだ。

長天上機学園に卒業生の二割が進学し、その上その中から特
に、優秀な三名は特別推薦で入学する事ができる。特別推薦で入
学した者は学費タダなどの特典を得る事ができる。もちろん残
りの八割の卒業生も長天上機ほどではないにしろ、名のある学校に
進学する。共学の常盤台とも呼ばれる、超一流学校なのだ。

「それがセじゃないの」

佐天

は疑いの目線で、初春を見る。

「ちゃんと先生に聞いた、情報ですからガセネタじゃないですよ」
そう言いながら、初春は頬を膨らます。

怒っているようだが、ただ初春の可愛さを引き出してるだけだ。
「でもじゃあ何で、そんなエリートがうちなんかに来るの？」

「そんな事私に聞かれても、解らないですよ」

「ふん！どうせ、学業が能力開発について行けなくなっただけだろう。よくある話だ。」 突然初春と佐天

の会話にクラスメートの男子が割込んできた。

中学一年生にしては 高い身長百七十の長身に日焼けした肌に、鍛えた体をしている。 男子の名は長田健児 (けんじ)

初春たちのクラスメートである。

この学校では僅かしかないレベル3 (強能力) の能力者である。 「長田さん

そんな言い方はないんじゃないですか」 初春は長田の暴言に反論する。 「じゃあ聞くが、落ちこぼ

れじゃなかったら、何でうち何かに来るんだ？落ちこぼれてないなら、蒼天中にいればいいじゃねえか？ 蒼天中から長天上機学園

に進学、将来約束されたようなもんじゃねえか？ まあ蒼天中に居たからって、俺たちの事バカにしたり、お高くとまったりするなら、お置きしてやるけどな。蒼天中が何だ！俺だつてレベル3の強能力者だ。

また他の、能力に依存してる能力者たちとは、違う。

格闘技やその他武器の扱いだって、習ってるんだぜ。」

「まあまあ推測は、これぐらいにしとこうよ。」

もうすぐ見れるんだしき、それで判断したらいいじゃない」

険悪なムードになって来たのを悟った佐天は慌てて、宥めに入るのだった。

一方クラスメートたちが自分について、噂している事など、知るはずもない学は、案内版を見て移動し職員室に着いたところだった。

早速事前に聞いている担任の名前を呼ぶ。

「失礼します。」

沢田先生は、いらっしやいますか？

先生のクラスに転

入する、藤田学です。」

と大きな声で言うと

間もなく、

座ってコーヒーを飲んでいた

一人の男が、立ちあがり、こちら

に向かって来る。

身長百六十五ぐらいの小柄で（まあ小柄と言っても、学より大きい
が）
年は四十半ばぐらいか？

疲れているような 覇気のない顔をしている。

「ああ君が藤田君か？おはよう。」

君の担任の沢田陽平

（ようへい）だ」

そう名乗る

と、沢田先生は握手をしようと、腕を伸ばしてきた。

学はすぐ

に自分も手を伸ばして、握手する。「今日から、宜しくお願いしま
す」

「そう畏まらなくて、いいよ。」

ちよつと

早いけど、教室に案内しようか？

ついて来なさい」

そ

う言った沢田先生は、職員室から出ていく。

時計を見ると八時二十分だった。

確かに少し早い、ゆっくり歩いていったら、ちよつどいい

時間になるだろう。

学は職員室から出て、教室に

向かって行く 沢田先生の後を追うのだった。

第一話 転校生藤田学（後書き）

いかがだったでしょうか？

少し

短かったですかね。

ネタは

思いついても、それを書きまとめるのが苦手です。

でも読者の皆様が0にならない限り頑張っていく所存なので、長い目で見て頂けたら、幸いです。

ではこ

意見 ご感想 ポイント待っております。

ついつい長文になってしまいます。

最後まで読んで頂きありがとうございます。なお感想 意見の返信率は100%なので、安心して感想 意見 送ってきてもらって大丈夫です？

第一話 転校生 藤田学（その2） （前書き）

やっと更新出来ました。

まとめるの難しい。 学校卒業して早十年近く、当時を思い出して学校の雰囲気出して、見ましたが、上手くいったかどうか？

それでは、相変わらずの駄文ですが…始まりです。

第一話 転校生 藤田学（その2）

「え」と確か藤田君は、蒼天飛翔館中学校から、転校してきたんだよね？」

先に教室に向かって歩いていった。担任に追いついた学は、その横に並んで、歩いて一緒に教室に向かっている。

その途中で沢田先生が話しかけてきたのだ。

子供である、佐天たちですら、不思議に思い興味を持つのだから、大人が気にしない、訳がない。

（やれやれ……蒼天飛翔館の人間が、そんなに珍しいかね、まあ珍しいケースで、ある事は認めるが……）

学は色眼鏡で見てくる担任を、うっとうしいと思いつつも、転校初日から、教師に喧嘩をふっかける、わけにもいかず、当たり前障りのない答えを返す。

（スマイル スマイル）

と心に念じつつ、満面の笑みを浮かべる。

「はい！そうです。」

「そうか。ところで 聞きづらい事を、聞くのだが、何かあったのかい？」

資料を見たんだが、成績は悪くないし、学校内での生活態度も悪くない、何故落第をしたんだい？」

という担任の質問に、あっさりと

「簡単ですよ、学業が良くても、この学園都市内では、あまり意味はないです。

まあ外の世界に出たら、わかりませんが……僕は開発が駄目だったんですよ。能力が小学校の時からずつとレベル1（低能力）で……」

「それで落第かい？ 厳しいなあ〜そう言う子はうちにはザラにいるよ」

「まあ僕の場合は これ以上伸びないと 判断されてしまつて」

「そうかい。
名門は厳しいんだなあ」

沢田先生は、話を聞きながら、何度も頷く。

（まあ表向きはそうなってるんだけどね。 本当はもっと複雑な理由があるんだけど、それを言ったところで、蒼天中の偉いさん連中は絶対否定するからな。）

わざわざ隠したがってる事を暴露はくろする必要もねえだろ）

そうこう話しながら、歩いていると、教室が見えてきた。

「さく着いたぞ、時間は八時二十三分かあ　もうすぐ予鈴がなるなあ。

少し早いがホームルームはじめるか。

じゃあ藤田君は私が、呼んだら教室に入ってきてくれ。」

そう言い終わると沢田先生は、扉を開けて教室の中に入っていくのだった。

「ここが、これから通う学校の教室かあ？」

沢田先生を見送った後、学は教室の外にあるクラスの案内板を見ていた。
板には一年A組と書かれてある。

「ークラスの数は蒼天とそんなに変わらないなあ？だいたい男女合わせて四十人位か。」学は待っている間、暇なので、廊下側の窓から、教室の中を覗いた。

学が、これからクラスメイトとなる、同級生たちの顔を、盗み見している時

キーン　コーン　カーン　コーン
ちょ

うど予鈴が鳴りだした。

するとその予鈴に、負けないぐらいの、大きな声が聞こえてくる。

「おはよう！　　まだ予鈴が鳴ったばかりだが、今日

は転校生を紹介しなければ、ならないから、少し早いが、ホームルームを始めるぞというわけで、みんな席につけ！」

教室に入った沢田先生は、大きな声を張り上げて、生徒たちを席に座るようにうながす。

「いよいよ、蒼天飛翔のお坊ちゃんの、お出ましって訳か？
楽しみだぜ。」

ニヤニヤ笑いながら、先生にうながされた、長田健児は席につく。

「長田さん。 前は蒼天飛翔に通ってたんでしよう
けど、今日からは私たちの、クラスメートなんですから、仲良くしないと、駄目ですよ。」

明らかな敵意を転校生に向けている、クラスメートに初春は注意を与える。

「偉い！さすがはあたしの親友 いい事言う。」

「そう言いながら、佐天は初春の頭を撫でる。 ナデナデ」

「ちょっと佐天さん！そんな事してないで、席に座ってくださいよ」

「初春の言うとおりだ。」

佐天。 席に座りなさい」

初春の頭を撫でていた、佐天に担任のキツイ一言が飛ぶ。

「は〜いわかりましたあ。」

佐天はそう言うと、初春の机から離れ、自分の席に座る。

「よし全員座ったな。これより、ホームルームを始める。」

全員が座ったのを確認した。沢田先生はホームルームの、開始を宣言する。

こうして藤田学の、転校初日は始まり出したのだった。

まさかその初日から、トラブルに巻き込まれる事になるうとは、この時、学は知るよしもなかった。

第一話 転校生 藤田学（その2） （後書き）

いかがでしたでしょうか？

なかなか話し進まないですね？

作者の力量不足です。申し訳ございません？ではご意見 ご感想

ポイント お気に入り登録待ってます。 出来れば二十

九日は休みなので、二十九日中にもう一回更新したいと思っています。

出来なかつたら、すみません。（あくまで予定ですの

で） では最後まで、読んで頂きありがとうございます

ました。

長文になりましたが、これで失礼します。

第一話 転校生 藤田学（その3） （前書き）

やっと更新できました。

本来なら、二十九日に更新するはずだったのですが、出来ませんでした。？

また少し長くなったので、分けて投稿します。

続きはあまり時間差なく投稿できると思います。

それでは楽しんで、頂けたら、幸いです。

第一話 転校生 藤田学（その3）

キーン コーン カーンコーン

「ふう〜やっと終わったか。」

4 時限目終了のチャイムを聞いて、藤田学 （ふじたまなぶ）は
伸びをした。

朝のホームルームで、転校生として、紹介された学は、満面の笑み
で自己紹介をしたのだった。

最初のつかみはOKだった学だったが、やはり、学園都
市でもベスト10に入る名門校から、平凡な中学校に転入してきた
学に、クラスのみんな（特に女子）は興味津々（きょうみしんしん）
一時間目から、休憩時間になるたび質問攻めにされたのだっ
た

嫌な顔一つせず、一人一人に丁寧に対応していた学だったが、さす
がに疲れた。今は昼飯が大事なので質問攻めにする 女子はいない。

「さて僕も食事にするか。」

そう言うと、学はカバンから、弁当箱を取り出し机の上にのせる。

「えっ藤田さんって、自分でお弁当作れるんですか？」

学が弁当を机に広げたのを、隣の席のクラスメイト、初春飾利が
驚いた様子で見ている。

学が弁当を出したのが、彼女にとっては、予想外だったらしい。

なお柵川中学校に、給食はない。

生徒の自炊力を高めるためとか、言ってるが実際は給食費滞納が、多いためだ。

その為自分で弁当を作るものは弁当を、作れないものや面倒なものは、コンビニで買って来るか、近くにパン屋が出張で売りにくるので、それを利用する。

当然男子のほとんどがパン屋かコンビニを愛用する。

「僕が弁当を持ってきたらいけないかい？」

「いえ、いけないとかそんな事はないですけど……」

学の鋭い返答に、動揺したのか、初春の声は段々小さくなっていく。

「初春と一緒にご飯食べよう」

学と初春が話していると、両手に弁当箱を、持っている佐天が、話に入ってきた。

「あれ、藤田さんも、お弁当なんですか？」

と話しに入ってきた 佐天も以外に、思ったのか、初春と同じ質問をしてくる。

「君たち二人は、男は料理出来ないとしても、思ってるのかい？」
とちよつと苛立ちながら、学は答える。

「いえそんな事はないですけど…確か蒼天中って、給食でしたよね。
三万円の」

両手で弁当箱を持ちながら、首を左右にふりつつ佐天は答える。

「確かに蒼天中学校に給食はあるよ、何であんなにクソ高いか、わ
からない給食だけだね。
でも常盤台には、負けるけどね。」

君たちが僕の事を、どんな風に、見てるのか知らないけど、お坊ち
やんでも、自炊はするよ。」

と学はため息をつきながら、答える。

「すみません。」と二人同時に頭を下げる。

「まあいいけどね。色眼鏡で見られるのは、慣れてるし。」

（僕がお坊ちやんだって事だけで、こうだから、僕の生まれの事を
知ったらもつと、ひどいだろうなあ）

「それより、初春さんと一緒に昼ご飯食べるんだらう？
だったら早くした方が、いいんじゃないの？」

と学は佐天の目的を、思い出させてやる。

「あ〜！そうだよ、早くしないと、昼休み終わっちゃう。」

初春早くご飯食べよ、今日は天気がいいから、屋上に食べに行こう」

と言って佐天は、初春を連れて行くこととする。

「ちょっと待って下さい。

今、弁当箱カバンから出しますから」

初春は佐天に待って、もらうように言うと、カバンを開けて、中から弁当箱を取り出す。

「おっと二人に気を取られている、場合じゃないな。

僕も食べるか」

そうやって学が、弁当箱を開けようとすると、カバンから弁当箱を取り出した、初春がこつちを見ている。

「ん〜どうしたんだい？」

初春の方を見て、学が言うと、初春は学の近くまで寄っていき、小さな声で話しかける。

「あの……良かったら一緒に食べませんか？」

「一緒にと言う事は、三人で屋上で食べると言う事だよな。」

「はいそうです。」

「僕は構わないけど、佐天さんはいいのかい？」

と学が佐天の方を、見る。

すると佐天はあっさりと軽い感じで

「私？私は全然いいよ」
と答える。

「そうか。」

「じゃあ屋上に食べに行くのだろうか？
すまないが、案内してくれるかい？」

「うん任せて、じゃあ初春行こっか、藤田さんは、あたしたちの後に付いてきてくださいね。」

そう言うと、佐天は初春と一緒に教室を出て行った。
学は言われた通り、ついていくのだった。

「ほう、ここが二人のお気に入り場所か？悪くないな。」

教室を出てから、数分で学たち三人は、屋上についていた。

屋上には、他の生徒たちも、ちらほらと見える、だいたい10人位
かと学は、判断する。

「でしょう。」

ここからの景色は最高何ですよ。
ねえ初春」

「はいそうですね。」と言いながら、初春はレジャーシートのようなものを、地面に敷いて、僕たちの食べる場所の確保をしている。（えらく用意がいいなあ？）

後にわかった事だが、天気の良い時は、よく屋上で食べるので、シートは屋上に、隠しておいてるらしい。

初春の用意してくれた、レジャーシートに、腰を下ろした、三人は三者三様の弁当を、ひらく。学の弁当はご飯に、カレーがかけられて、おり、カレーの上にエビフライが二尾のせている。

初春はサンドイッチが小さな箱に、4つ並んで入っており、飲み物はジュース（アップル）だ。

最後の佐天は、普通にご飯とおかずが、バランスよく入った弁当だ。

三人とも全員手作りだ。

「いただきま〜す」 三人同時に言うと、屋上からのいい景色を、見ながら食べ始める。

「それにしても、いい眺めだね。」

学が食べながら、二人に話しかける。

「そうですね。」

気にいってもらえて、良かったですよ。」 と初春が答える。

「ありがとう初春さん。」

と言

って学が頭を下げる。「そんな…お礼なん…っていらないですよ」「めんと向かって、お礼を言われて、照れたのか、初春は顔を真っ赤にしながら、答える。

「お〜お〜初春ったら、顔を真っ赤にしちゃってえ〜可愛いねえ〜」

「佐天さん！からかわないで下さい！」

初春は顔を真っ赤に、しながら佐天を、睨みつけるが、可愛いだけで、全く怖くない。

「まあまあ初春、とりあえず落ち着きなよ。」

「私は落ち着いてますよ！」

そう言いながら、初春は、自分の弁当であるサンドイッチを食べる。

「あちゃー怒らせちゃったかあ〜初春機嫌治しなよ、あたしのおかずあげるからさ。」

と佐天が言うが、凄まじい勢いで、サンドイッチを食べている、初春には聞こえないようで、初春は返事すら、しない。

仕方ないので、佐天は初春の弁当箱の端っこに自分のおかずの卵焼きを乗せてあげる。

「へえ〜その卵焼きおいしそうだね。」

僕のエビフライと交換してくれる？」

学はそう言って、佐天の弁当箱の中にエビフライを乗せる。

「あっ！別にいいですよ！こんなので良ければ全部食べてくれて、結構ですよ。」

そう言いながら、佐天はエビフライを学の弁当箱に返そうとする。

「いやそれは、佐天さんにあげたものだから、いいよ。
じゃお言葉に甘えて」

そう言いながら、学は佐天の弁当箱に入ってる、卵焼き3つを全部取って、一気に口の中に入れてしまう。

もぐもぐと何度も噛み、目をつぶりながら、味を確かめつつ、飲みこんでいく。

「うんごちそうさま、とてもおいしかったよ。
また出汁巻きとは、こだわってるね。」

佐天さんは料理が上手なんだね」

と笑顔で佐天に礼を言う。

「そうですか。」

美味しかったんなら、良かったです。」

佐天も初春ほどでは、ないが、照れつつ返事をする。

「ふん！両手に花とは、いいご身分だな！ さすがお坊ちゃまだぜ。」

学が佐天と初春と、弁当を、食べてる反対側で長田健児も昼飯を食べていた。佐天や初春ほどでは、ないが彼も屋上で昼飯を食べる生徒の一人だ。

長田は反対側の、学と初春たち、三人の様子を見ながら、立って右手に食べかけのおにぎりを持っている。

長田の昼飯は自家製のおにぎり3つ（人の拳ぐらいの大きさで 具は鮭 ツナマ

ヨ 鰹である 昼飯は必ずこのおにぎりなのである。）

第一話 転校生 藤田学（その3） （後書き）

いかがだったでしょうか？

ではご意見 ご感想 ポイント 待っております。

未熟者にとつては、アドバイスはともありがたいです。

どんどんお願いします。

注

あくまで強制ではないです。？

自分も出来る限り いい作品にしたいので、皆様の意見が欲しいだけなのです。

自分で気づければ、いいのですが、なかなかそうはいかないんですよね。

では長文になってしまいましたが、最後まで読んで頂きありがとうございます。ございました。

第一話 転校生藤田学 その4（前書き）

続けて時間差なく 行こうと思いましたが、ちょっと遅くなり
ました。

お許し下さい。

有言実行とはいかないなあ。？

第一話 転校生藤田学 その4

長田は、三人で飯を食べようという藤田たちの会話を、聞いた後屋上にやって来て、藤田たち（実際は藤田のみ）を監視しているのである。

長田は藤田がどうしても気にいらなかった。藤田が蒼天飛翔館そつてんひしやうかんの転校生で、お坊ちゃまだ、というのもあるが、彼が気にいらぬのは、藤田の態度だ！特に笑顔が気にいらなかった。

満面の笑みを浮かべてるが、長田から見たら心から笑っているようには、どうしても見えない。演じているようにしか、感じないのだ。

（藤田学！貴様の化けの皮をはいでやるぜ！）

長田はこの自分の推測に自信を持っていた、なぜなら長田は勘が、物凄く鋭いからだ。そして、それは本人も自覚している。

「はあく貴重な昼休憩に何が悲しくて、男のけつを追っかけないといけないのかねえ」

長田が熱心に藤田の監視（ただの覗きだが）をしている時、近くで大きなため息が、聞こえた後、文句が聞こえてきた。

文句を言ったのは、長田とは違い、身長百五十三センチ位で、髪の毛を短く切り、髪を茶髪に染めている、少年だ。

少年は長田の近くの地面に座り、ハンバーガーを食べている。

少年は長田の友人だった（小学校の時から幼なじみで、小学校一年から中学一年の今まですべて同じクラスである。）

名前は 山咲 将真 （やまさき しょうま）で長田と同じ、

藤田のクラスメートである。

また長田と同じ柵川中学校では、数少ない レベル3（強能力者）である。

藤田が初春たちを、毒牙にかけようとしている。

その毒牙から、初春たちを守るために協力しろと！長田が言ってきたので、仕方なくここにいる。ただ阿呆の妄想に付き合う代償として、向こう3日間の昼飯代は、長田が払うという契約を結んでいる。

つまり今彼が、食べているハンバーガーは 長田の奢りである。

「将真！あまりやる気がないなあ？

そんな事では初春たちがみすみすやつ、毒牙にかかってしまうぞ！

お前はクラスメートが、毒牙にかかってもいいのか？……む！奴め自分のおかずを佐天に！ しかも佐天のおかずをもらうとは、餌付けもして、間接キスまでやり手だな！

やはり俺の目に狂いはない！

あゝやって女を食いものにしては、泣かせてるんだ！」

「餌付けって、食い物に釣られるほど、佐天は単純じゃねえだろ？」

「いやああいう小さな、積み重ねが大きな結果に繋がるんだ！」

計画的な奴だ、最初に自分の席を決める時　先生が山口の隣か？　初春の隣？どっちか好きな方を選べと言ったら、迷わず初春の隣を選んだではないか？　あれこそ、奴が初春を狙っている、証拠と言わず何だと言つのだ！」

と長田は力説するが、山咲はあつさりと否定する。

「いやあの状況じゃ　誰でも初春の隣選ぶぞ」

山口と言うのは、山咲たちのクラスメートで、身長百六十に対し体重八十五キロのデブである。

しかも授業中によく寝ておりそのイビキがウルサイ事（たまに歯ぎしりのオマケがついてくる。）

一番前の列の二番目である。

反対に初春の席は、　最後列で廊下側にあるその隣の席となれば、最後列で先生の目が、届きにくい。

かたや最前列で、先生の目が届きやすいため、気が抜けず隣はイビキのウルサイデブ。　なおこのデブが寝ても注意されないのは、

このデブの父親が、学園都市を支援している、とある会社の社長だからである。

対して最後列の席で、先生の目が届きにくく、廊下側のため夏は涼しく、隣は目の保養になる美少女。

下心のあるなしに、関わらず誰でも後者を選ぶに決まってる。

無論同じ立場なら、将真とて、間違いなく、初春の隣を選ぶ。

つまり長田の言ってる事はただの邪推じゃすいである。

「ぐっ…言われて見れば確かに…いや！そんな事はない、確かに理屈で言えば、下心のない可能性は高いが、それだけでは、初春を狙っていないという、証拠にはならない。」

一瞬、山咲の意見に賛同しそうになった長田だが、嫉妬心からの妄想がそれを上回る。

(どうしても、藤田を女を食い物にする、小悪党にしたいんだなあ。

あゝやだやだ男の嫉妬は醜いねえ……こいつに振り回されるのは、今に始まった事じゃないがな、とりあえず飯代分ぐらいは、働いてやるか？ 割に合わなくなったら、やめるか、飯代一週間なり二週間なりに、上げてもととりやいいか。)

「で、健児は藤田が、女を食い物にする、小悪党ならどうするんだよ？」

答えはわかりきってるのだが、あえて聞いてみる。

「決まってる、クラスメートを毒牙にかける外道は、この手でボコボコにして、二度と悪さ何か出来なくしてくれるわ！」

と拳を握りしめて、 答える。

(今日あったばかりの人間によくここまで敵意を向けられるなあ、藤田は災難だな。

本当こいつは昔から、変わらねえなあ。 もめ事とか、お節

介が大好きなんだよな。)

高レベル能力者は、学園都市に尽くす義務がある。

これが長田の行動理念だ。

学園都市のおかげで、こんな素晴らしい力が手に入れる事が出来たのだから、学園都市の為に働かなければならない。

将真は心の中で突っ込みつつ、嫉妬に狂った親友をみる。

すると親友は口元に　　笑みを浮かべたあと、ガッツポーズをする。
「いきなりどうした　　？」

長田の突飛な行動に　　思わず突っ込みを将真は入れてしまう。

するとニヤニヤ笑いながら長田は将真の方に振り向く。

「将真！さつきから、お前は俺の勘が、外れてると、心配していたが、それは杞憂きゆうに終わったぞ！　　奴め！放課後に佐天と初春と一緒に買い物に行こうと約束しやがった。

しかも晩飯も一緒に食おうときやがった。　　腹拵えした後ホテルに連れ込む算段に違いない。

しかもわざわざ奢るよって　　言ってるやがる。何て奴だ！初日にもうホテルに連れ込む気とは、不純異性交遊など断じて見過ごせん！
放課後奴を尾行するぞ、事に及ぼうとした所で御用だ。

クラスメートを毒牙から守りなおかつ、外道を罰し学園都市の治安が守られるというわけだ…待てよ！確か初春は風紀委員だったな　　毒牙から救った礼に　　初春に俺を風紀委員に推薦してもらおう。　　上手くすれば、念願の風紀委員になれるぞ
そもそも初春見たいな、お気楽少女がなぜ風紀委員なんだ！

毎回背後からスカートめくられてるんだぞ　　常に気をはって、注意していれば、そんな不覚は取らないはずだ。まあいい、いずれにせよ放課後だ藤田め！　　化けの皮を剥いでやるぜ、いやあ放課後楽しみだ、腕がなるぜ。」

と言いながら高笑いしている、健児をみながら、将真は向こう三週間の飯代に、報酬を釣り上げる決心をするのだった。

第一話 転校生藤田学 その4（後書き）

いかがでしたか？ まとめるの難しい 次の展開やネタは、出来てるんですが、それにいたるまでの、流れを作るのが難しいです。

話し進まないですね ひとえに作者の力量不足で、申し訳ないです。

ではご意見 ご感想 ポイント お待ちしております。

（あくまで強制ではないですよ）

今回つい調子に乗ってしまったので、皆様の反応が怖いです。？
読んで頂きありがとうございます。

第二話 「放課後の甘い罠」 (前書き)

やっと更新し終わりました。
修正に手間取りました

第二話 「放課後の甘い罠」

キーン コーン カーンコーン

「以上で今日のホームルームを終了する。 皆気をつけて帰るんだぞ。」

そう言った、沢田先生は、出席簿やその他の荷物を持って、教室から出ていく。

最後のホームルームも終わり、長い1日がやっと終わった。

「さてと帰るとしますか。」 学は荷

物をまとめ、帰り支度をする。 「はいそうですね。」

それじゃあ藤田さん お手数だとは、思いますが、今日は宜しくお願いします。」 隣の席で同じく帰り支度をしている、

初春が学に話しかける。

「あゝ別に構わないよ。」

お手数つてほど、めんどい訳じゃないし、 君たちみたいなの

美少女なら大歓迎。」

「そんな：美少女じゃないですよ。」

御坂さんに比べたら 私なんて」 と否定し

ているが、顔は嬉しそうだ。

まあどんな人間でも、褒められて、悪い気分にはならない。

「でも本当にいいんですか？」

「別に構わないよ。」

こっちの学区には、あまり知り合いもないし、どうせ今日は暇だしね。」

「でも…」

「まあ僕の事はいいから…早く行かないと　もう佐天が校門で待
ってると思うよ。」

「そうですね。」

「急がないと駄目ですね。」

ホームルーム終了と同時にダッシュで教室を出ていく佐天を見てい
たので、会話を切り上げすぐさま教室を出ていく二人であった。

「よし俺たちも行くぞ！」

藤田たちが教室から、出ていくのを確認した長田は、将真の席まで
来て、将真の腕を引っ張る。

「あゝわかってるよ。そんなに慌てなくても、飯代分ぐらいは、ち
やんと働くって」

せかせかしている、長田とは対照的に、ゆっくりと帰り支度をして
教室から出ていく、将真であった。

「遅い！初春もつと急ぐ」

「って何で私だけ…注意されるんですか！」

藤田が初春と一緒に校門についた時、既に校門では佐天が待ってい
た。

そして見つけるなり、初春を指差して今の言葉を放ったのだ。

「藤田は、初春に合わせて遅くなっただけでしょ」

「佐天さんが早すぎるんですよ。」

「初春が遅いのよ!」

「まあまあ二人とも、他の下校する生徒もいるんだし、校門の真ん中にいるのは邪魔だよ」

「すみません」 「ごめん ごめん」

そう言いつつ二人は、端っこに移動する。

端っこに移動した、三人は、学校を出て目的地へと移動していく。

「本当にすみません。藤田さん、私のせいで無理言っちゃって」「
そうだよ。初春が 今日でないと、駄目だからって言うから」

「佐天さんが予約して、なかったからじゃないですか!」

「いや、予約いるって知らなかったし」

佐天が頭を掻きながら言う。

「言わなくても、わかりますよ普通。」

あのお店の本店が、第一学区にある時から、予約制だったんですよ。

支店だって同じに決まってるじゃないですか!それに事前にチエックしておくのが、普通じゃないですか。」

「だから謝ってるじゃない」

と言いながら、歩きつつ佐天は隣を、歩いている初春に(学は後ろで少し離れてる)手を合わせて謝る。「私が今日の非番を手に入れるのに、どれだけ、どれだけ苦労したと思ってるんですか!」

初春は、声を張り上げて絶叫する。

「まあまあ、初春もそれぐらいで、許してあげなよ。今回は僕が奢るから、それに免じてさ」
少し離れてた、学が追いついて来て、初春をなだめる。

「わかりました。
藤田さん」

「そうだよ、藤田の言うとおりだよ。
結局食べれるから、いいじゃない」

「佐天さんは反省してください！」
そう言つて初春は、佐天を睨む。（相変わらず可愛いだけだが、本人は至つて真剣だ。）

「初春：てへっ」と言つて佐天は頭を掻く。

「ごまかさないで下さい！」
しかし佐天必殺の？ てへっも怒れる初春には通じない。

「初春も落ち着いて、機嫌なおして、お土産頼んでもいいからさ」

「えゝ初春だけなのゝ」

「もちろん佐天も、いいよ」

「やったゝ さすが藤田」
と言つて佐天は喜ぶ

(はあゝ女子の相手って疲れる…)
学は佐天と初春を見て、強くそう思い、こうなった事の始まりを思い出すのだった。

昼休憩、ご飯を食べ終わった三人は、楽しくお喋りしていた。

佐天が藤田さんの蒼天中ってどんなところ？藤田さんの能力は？とか色々聞いてきたが、他のクラスメートたちに答えるような、

適当な感じではなく、ちゃんと答えた。理由は佐天が図

々しく興味本意などではなく、礼儀正しく自分の事も話した後聞いてきたからだ。

自分のレベルが無能力ゼロである事

それで一度は道を踏み外した事などだ。なので学もちゃん

と答えた。

「僕はレベル1何ですよ。」

「レベル1何ですか？初春もレベル1何ですよ。ねえ初春」

「はいしかも小学校の低学年から、ずっとです。」

としょんぼりした感じで、答える。

「気にする事ないよ初春さん。」

僕何て能力開発受けた時から、ずっと変わらずレベル1だから」

「そっだよ初春。」

あんたが落ち込んでるんなら、あたしはどんなのよ？

あたし何てこの学園都市にきた時から、ずっとレベル0なんだよ」

「そうですね。」

すみません佐天さん。わかってるんですよ。レベルが低いとか高いなどより、もっと大事な事はあるって、でもやっぱり…レベルは高くなりたいですよ…」

初春は下を向きながら、悲しげに言う。

「大丈夫だよ初春さん。」

「藤田さん？」

「君も佐天さんも、まだまだ思春期の真っ只中。

いくらでも成長する。この時期の人間の成長率は目を見張るものがあるんだよ。」

もちろん努力すれば、必ずレベルが上がる何て言わない。でも仮にレベルが上がらなかつたとしても、その努力の結果は別の事の下地になるんだよ」

学は優しい眼差し（我が子を見守る親のような）で初春と佐天の二人を見ながら話す。

「そうですね。能力何て些細なものですよね」

「そうだよ。」

大事なのは心なんだよ。

外見とか磨こうとか、綺麗にしようとか、そういう事はすぐに来る。

でも心、中味の部分はそうはいかないんだよ」

学はしみじみと言いながら思う。

現に学はいやと言うほど見てきた。

常盤台ほど厳しくはないが、蒼天中も能力至上主義だったからだ。

高位能力者はまるで、自分たちが選ばれし、存在のように振る舞い、

レベル0など奴隷のような扱いだ。

中には酷いやつらがいて、無能力者狩りをする者たちさえもいた。学が蒼天中をやめたのは、そんな能力至上主義の馬鹿どもと、やり合いその内の一人が、偉いさんの息子だったので、パパに泣きついて、学校に圧力というわけだ。

まあすでにそんな学校の雰囲気嫌気がさしてきたので、渡りに船だったが。

「学園都市のカリキュラムは強い能力者を、生み出す事に躍起になっているが、能力開発をする者たちは、それを受ける者が、幼い子供たちだと、言うのを理解してない。能力に限る事じゃないが、銃を手渡して打ち方だけ、教えてはい終わり。」

その銃で人が簡単に殺せる、その銃は暴発する時もあるなんて事は教えない、学園都市のカリキュラム何てそんなものさ、まあ中には例外もいるが、僅かしかない。

力を行使するものには強い自制心が必要なんだよ。

だが残念ながら、その自制心を持つ能力者は、少ないがね。」

少し喋りすぎた学は 持ってきてる、水筒のお茶を飲む。

「さて話しがずれたね。確か僕の能力を聞きたいんだっただよなね。」

「一つ最初に確認しときたいんだが、僕の能力を聞いても君たちは怒らないかい？」

第二話 「放課後の甘い罠」(後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございました。
次の更新は遅くとも深夜までには致します

第二話「放課後の甘い罠」その2（前書き）

お待たせしました。（ってほど大層じゃないですが？）

また途中で区切る形ですが、読み安さを優先してこういう形を取りました。

ご了承下さい。

では読んでいただけたら幸いです。

第二話「放課後の甘い罠」その2

学はそう言いながら 二人の様子をうかがう。

佐天は不思議そうに、首を傾げながら答えた。

「何で藤田さんの、能力を聞いて、あたしたちが怒るんですか？」
右に同じと初春も続く

「そうですね、羨ましいと思う事はあっても、怒ったり何かしませんよ。」

「いやごめん、ごめん。」

前の学校の女子達は、怒ってきたから、ついね。

まあもったいたいぶるつもりは、なかったんだけどね。

僕の能力は肉体変化 (メタモルフォーゼ)の一種なんだ。」

「それって…すごいじゃないですか！

だよね初春」

佐天が驚きながら、初春に話しをふる

「はい。確か書庫にある記憶によると十数人くらいしかいない、能力ですね。」

初春が尊敬の眼差しで、学を見る。

「そんな大した能力じゃないよ。」

変身出来るわけでもないし、レベル1だしね。

詳しく説明すると

名前は肉体維持

(カロリー

コントロールまたはウェイトコントロール)って言ってね要するに

いくら食べても、太らないって能力なんだ。

ちなみに前に肉を十キロほど食べた後、能力使ったら体重全く増えてなかった。

まあいつもは能力をオフにしているけどね。でないといくら食っても満腹にならないから年中空きっ腹を抱えないといけないからね。後は食べたものの消化スピードを変えられることも出来るから、ちょっとした量でも、長時間空腹を抑える事も出来る。

試したことはないけど、熊みたいに詰めこむだけ詰めこんで、冬眠することも出来るらしい。

もっとレベルが上がったら、脂肪を筋肉に変えたり、体の中の水分や糖分、塩分を自在に操れるようになるらしいけど…万年レベル1だから関係ないよ。まあ大した能力じゃないよ。

後ついでに言うと、名称はカロリーコントロールの方がいいらしいよ。

ウェイトコントロールだと重量操作系と勘違いされるらしいからね」と言つて学は、能力の説明を終わる。

「へえ〜そんな能力があるんですね。でもそれが何で怒られる理由になるんですか？」

「ダイエットにせい出すクラスメートが、多かったからね」

学はかつての級友の、事を思い出して、ため息をつく。

「大変だったんですね。でも確かに羨ましい能力ですね」と初春が言う。

「初春は甘い物好きだからね」

「佐天さんだつて、そうじゃないですか」

「まああたしも甘い物は好きかなあ」

「ほら、そうじゃないですか」

と初春は納得する

「二人とも甘い物が好きなのかい？」

「はいそうですよ。前に学びやの園にある超有名店に御坂さんたちの案内で、連れて行ってもらったんですよ」

「あそこの店はむちゃくちゃ、美味しかったよね」

「そうでしたね」

「御坂さんってあの常盤台のレールガンの御坂美琴さんの事かい？」

と学が聞いてみる。

「はいその御坂さんですよ。」

私たち友達なんです」

「へえ〜でもどうやって知り合っただい？」

と言つて学が尋ねる。

「実は私風紀委員やっていまして、その同僚に白井黒子さんっていう友達がいるんです。でその白井さんが、御坂さんの後輩だったので頼み込んで、紹介してもらったんですよ」

「なるほどね」と学は納得した。

「あ〜そうそう。」

ところで話しは変わるけど初春。

今日買い物行って、その後ご飯食べに行く約束大丈夫なの？」

と佐天が話題を変える。

「はい大丈夫ですよ。この日の為に頑張って、風紀委員の仕事を片付けて、非番を勝ち取りました」

初春が拳を、握り締めながら力説する。

「じゃあ大丈夫だね。 買い物行けるね」

「はい！大丈夫です。 買い物行って、その後は第七学区に今日オーブンの超高級店で食事ですよね。」

で佐天さん予約は何時にしてるんですか？」と初春は目をキラキラさせながら話す。

「えっ……予約？」

「何言ってるんですか？あそこは本店が完全予約制ですから、支店も一緒ですよ？」

パンフレットにも、書いてたじゃないですか？」

「え〜そうだったっけ？」

佐天は苦笑いを浮かべつつ答える。

「で佐天さん、予約時間はいつですか？」

と初春は相変わらず、目をキラキラさせて、佐天に言う。

「初春！」

突然佐天は大声を上げながら、土下座する。「佐天さんどうしたんですか？」

初春は佐天が突然土下座したので、理解がついていかず、おろおろしている。

そんな初春の耳に、信じられない言葉が、入ってくる。

「ごめん！予約してない」

「えっ……佐天さん今なんて？」

「だからごめん……あたし予約いるなんて、知らなかったから、予約してないの」

佐天は土下座した状態のまま、再び親友に謝る。

「何言ってるんですか？佐天さん冗談は止めて下さいよ」

初春は信じられない、親友の言葉を聞いて、戸惑うがそれでも、最後の望みを込めてもう一度聞きなおす。

嘘だと心で思いながら。

「本当にごめん！初春。あたし予約してないの。」

知らなくて……」佐天はそう言っていると、頭を下げて土下座する。

「予約してないんですか？」

「うん」

佐天は小さな声でそう告げる。

あまりの事にしばらく黙ってしまった初春だが、突然大きな声でまくしたてる。

「どうするんですか！それじゃあ今日は、食べにいけないじゃないですか！」

初春は佐天を睨みつけ頬を膨らます。

「仕方ないから、今回は諦めて、次の非番の日に行く事にしない？お詫びにその時は、あたし奢るからさ」

と佐天は言うが、初春は絶望に満ちた表情でその提案を一蹴してしまふ。

「無理ですよ…私が今日の非番を手に入れるため、どれだけ苦労し

たと思ってるんですか！

書類仕事をもうスピードで片付け、白井さんに文句言われないうちに、始末書代わりに書いて、よまわりだってしたんですよ！
なのはどうしてこんな事に……神様私がおかしかったですか？」

そう言った初春の目から涙がこぼれ出す。初春はそのまま大泣きして泣き崩れる。

「初春……」

佐天はどう声をかけて慰めていいのかわからず、初春を眺めている事しか出来ない。

その時泣き崩れてる 初春に今まで二人のやりとりを、聞いているだけだった学が、初春の近くにいき話しかける。

「ちよつと聞きたいんだけど？いいかな？」

「うっ……うっ……何ですか……」

初春は学の方を見ようとせず、投げやりに答える。

「間違ってたら、ごめんなんだけど、ひよつとして、初春さんの行きたい店って、幻楼（げんろう）の第七学区店の事？」

泣き続けてる初春に、学は優しい声音で、話し続ける。

「そうですけど……」 と言った後顔伏せて、また泣き出す。

「やっぱりそうか。 その店だったら、何とかなるかも知れない」
学は強い口調で断言する。

それを聞いた初春が 泣きやんで、学に詰めよる。

「ほんと？ほんとなんですか！藤田さん」 初春は学の腕を掴みながら聞く。

「ああ大丈夫だと思う。 あの店の本店は、よくジジ……じゃなくて知り合いの人が常連だから、その店の人たちとは顔見知りだからとりあえず番号教えて？」

電話で聞いてみるから」

そう言っつて学は携帯をポケットから、取り出す。

そこにタイミングよく、初春が番号の書かれたチラシを持ってくる

「ありがとう。
じゃあかけるね。」

学は番号を確認すると電話を掛けだした。

「もしもし、藤田学というんだけど、店長の柏崎さんにかわって貰えませんか？」

「藤田学からの電話って言ったらわかるから」

学は電話に出た店員に、そう言った後、店長に代わるまで、待つ。するとそんなに待たないで、店長が電話に出た。時間にすれば、大体五分ぐらいか。

学は電話に出た店長に用件を伝え始める。

「柏崎さんですか？久しぶりですね。」

学、藤田学ですよ。いや柏崎店長と呼ぶべきですね。失礼しました。

ところで実は折り入って相談が、実は僕のクラスメートが幻楼で、食事したいそうなんですよ。

でもうっかり予約をしてなかったんですよ。何とかありませんか？人数は三人です」

学は自分の頼みを言った後、相手の返事を待つ。

程なく返事が返ってくる。

「はい……三人です はい……7時なら……行けますか。」

わかりました……じゃあ7時に……ありがとうございます」そう言った後、学は電話を切った。

第二話「放課後の甘い罠」その2（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
ではなるべく早く、次の更新します。

第二話（放課後の甘い罠）その3（前書き）

今晚は？

次の話しがやっとなってきたので、投稿します。では楽しんでってください。

第二話（放課後の甘い罠）その3

「藤田さんどうだったんですか？」

初春は目を、ウルウルさせながら学に聞く。

すると学は初春の方を見ると、次に初春の頭を撫でてやる。

「大丈夫だつてさ、時間は7時に予約しといたから、買い物をする時間も充分とれるだろ」

「ありがとうございます！」

初春は喜びのあまり、飛び跳ね出す。

「良かったね初春」

佐天がやつと初春に、話しかける。

「はい！……って元はと言えば佐天さんが、予約してたら、こんなにハラハラする事なかったんです！」

初春が佐天を恨めしそうな目で、見ながら言う。

「ごめん、ごめん。」

佐天は初春の方を見て手を合わせて謝る。

「それぐらいで許してやれよ あんまりしつこいと嫌われるぞ」

と言って間に入る。

すると何故か知らないが初春と佐天が、目を開いてじっと学を見る。

「んどうしたんだ？」

「えっ…いや急に口調変わったなあって…」
佐天が気まずそうに、答える。

「あっそうか、店長と話した時は地で喋ってたからな。
ついその調子で喋っちまったぜ」

佐天たちの奇妙な態度に、納得いった学は頭を掻く。

「ひよつとして、猫かぶってたんですか？」
と佐天が聞いてくる。

「あゝそうなるな」

佐天の質問に学は、あっさり答える。

「どうしてそんな事したんですか？」

初春も気になって、聞いてくる。

学はため息をついた後
けだるげに答える。

「簡単な事だよ。

俺は礼儀がなつてないんだつてよ。

よくクソあ…じゃなくて知り合いの兄ちゃん達に言われてなあ

そんなに親しくない人間には、気を悪くされたら悪いから気をつけ
てたんだが…ボロがでちまった。

まだまだだな俺も」

「それで猫かぶってたんですか」

佐天が答えを聞いて、納得する。

「でもそれは水くさいじゃないですか

私たちクラスメートで友達じゃないですか」

「いや、初春それをあんたが言う？」

あんた白井さんやあたしにも敬語じゃない？まあ御坂さんには、敬語でいいけど」初春の矛盾にすかさず、佐天が突っ込む。

「私はいいんですよ。性格的なものもありますし、そう言う言い方がしつくりきますから…でも藤田さんはあまり好きじゃないんでしょう？」

だったら私たちといる時は、気を遣わなくていいですから、自分の馴れた口調で喋ってください」

佐天の突っ込みを、うまくかわしながら、初春は学に話す。

「そうかい？じゃあお言葉に甘えさせて、もらおうかな、正直肩こるし」

「はい大丈夫ですよ　ねっ佐天さん」

「そうだね。」

あたしらもう友達だし私も同い年のそれも、男の子に敬語で、話されるの苦手だしさ」

「そういうが、佐天さん君も俺には敬語だったじゃないか？」「いやあれは…藤田さん蒼天中のエリート学生だし、あたしらとは違うんだあって、思っって」

と佐天が言う。

「蒼天中のエリートじゃねえよ。

さっきも言った通り 俺の能力はレベル1だし、それに俺はエラーオーファンだぜ」

学は佐天の先入観をあっさりうち消す。

「エラーオーファンって、チャイルドエラーが産んだ子供って事ですか？」

初春が驚きの表情で、言う。

「あゝそういう訳だから俺に、遠慮はいらないぜ」
学は軽い調子で話しを続ける。

「じゃあ初春さん…じゃなかった、初春のお言葉に甘えさしてもらうとしますか？」

佐天はそれでいいんだな？」

「はいOKです」と佐天は返事する。

「わかったじゃあこれから、二人の事は佐天と初春と呼び捨てにする。後、敬語もなしでいっけ。

二人は俺の事は、藤田って呼び捨てでいいぜ！

何なら下の名前で、呼んでくれてもいい。

ただ下の名前で呼ぶ時は学まなぶだからなガクとは間違えないでくれよ。もちろん敬語もなしでいいぜ。

後さっき言い忘れたんだが、幻楼はツケが効くらしいから、俺の奢

りでいいぜ」

と学が言った後、昼休憩の終わりを告げる　チャイムが聞こえてくる。

「喋りすぎたな。

じゃあ急いで教室に戻るとするか？」

学がそう言っていると、佐天と初春が慌てて片付け終わり、三人は屋上から出て行くのだった。

という経緯で、学は放課後佐天たちと、買い物に行く事になったわけだ。

二人は今パソコンのゲームを買いに行ってる。

学は一人そのパソコンのゲームを売ってる店の、二階にある本屋にいる。（ゲーム売り場は一階）

（さて女の買い物は長いから、適当に立ち読みでもしてますか）学は時間を潰すため、店内の小説コーナーに歩いていくのだった。

一方その頃ゲーム売り場で佐天たちは、ゲームを探していた。

「へえ〜これが初春が作ったゲームなんだあ〜」

佐天が一つのゲームのソフトを持っている

「私を作ったんじゃないですよ。」

少し手伝っただけですよ」と顔を真っ赤にしながら初春は言う。

佐天が持っているゲームは、制作に初春が関わった物だ。

元々は風紀委員のための戦闘シュミレーションのプログラムであったそれを、難易度を下げて一般用にしたものだ。

風紀委員の試験に受かりたいものが、よく買っていたりする。

(中にはスキルアウトなどが、対風紀委員対策などに買っているが)

「これ結構売れてるんだよね」

「そうですね。」

でもこのゲームかなり難しいので、クリアーできる人は少ないですけどね。

それより佐天さんが、買いにきたのはこのゲームじゃないでしょう
初春は佐天に、本来の目的を思い出させる。

「あゝそうだった そうだった。」

じゃ初春一緒に探そう」

「大丈夫ですよ。」

あそこに置いてますから」

と言って初春は指を指して、佐天に教える。

「じゃあさつさと買って次の服屋に、行こうか」

と言って佐天は初春の指さした場所に走っていく。

「待って下さいよう」

初春はそう言いながら慌てて佐天の後を、追いかけていくのだった。

「なあゝいつまで、つけ回すんだ？」

同じ頃下校から、学たちをつけてきていた。長田たちは、佐天たちと同じゲームコーナーにいた。

一応バレないようにと、二人とも私服を着ていて、長田はサングラスをかけており、山咲は髪型を変えて、眼鏡をかけている。店に入るまでは後方からつけていたが、店に入ったのち、長田が「変装してるから、大丈夫」と言い、店に入ったのだ。

佐天たちのとこだけにいるのは、男の学ら見ても面白くないと言う理由からだ。

しかし買い物するわけでもなく、ただ女の子たちが楽しく買い物をしているのを、見るだけは正直言って退屈すぎる。

（長田は正義に燃えているので、血走った目で佐天たちを見ている）

既に山咲のテンションは下がっており、やる気は0だが、向こう10日間の飯代のため（昼休憩後におこなった交渉のすえ、釣り上げた）に割り切って頑張っている。

第二話（放課後の甘い罠）その3（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ではご意見 ご感想 ポイント お気に入り登録 何でも待っています。

可能なら今日の深夜にはもう一回更新したいと思っております。

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

第二話 (放課後の甘い罠) (その4 (前書き))

やっと更新出来ました。

今回は主人公と佐天と初春はほとんど出てきません。会話と説明文だけですまたちょっと長くなりました。それでもいいかたは読んで見て下さい

第二話 (放課後の甘い罠) その4

「この後服も買いに行つて、その後飯食いにもいくんだろ？
なあ健児よぉ〜夜8時か下手すりや9時になるぞ！

そんな時間までこのストーカーを続けるのか？」

将真は無駄とわかつていながらも一縷の望みをかけて言う。

しかしそんな親友のささやかな願いを長田はあっさりと踏みじる。

「ストーカーとは何の事だ？

俺たちは佐天たちの貞操を、あの女たらしのケダモノから守るんだぞ。

これはストーカー行為何かじゃない、護衛だ！」

長田はかけらも悪びれる事なく言い切る。

(俺は忍者になつた覚えはないぞ)

将真は心の中で突つ込むが口には出さないでおく。

そんな会話をしている間に佐天たちは、
買い物を終えて

しまい、学と合流するため、書籍コーナーに移動しだした。

それを見た長田は

「行くぞ将真！善は急げだ」

と言って佐天たちの後を追うために移動する。

「了解」

将真は疲れきつた感じで言うと、ため息を吐いてから、長田を追うのだった。

「はあくおいおいまじかよ！」

佐天たち三人が入った店を見て、将真は思わず声を上げてしまった。佐天たちがゲーム売り場での買い物が終わってから、数時間が経っていた。

その後佐天たちは、第七学区の有名な服屋 セブンスミストに買い物に行った。

当然、将真たちは尾行し護衛を（長田の言い分。 将真はただのストーカーと思ってるが）し続けた。

セブンスミストで買い物をし終わった佐天たちは、将真の目の前に見える料理屋に入っていた。

目の前にある料理屋はいかにも金かけてますという外装をしており、店から出てくる客も常盤台のお嬢様や金を持ってそうな紳士や淑女ばかりである。

その店の名は幻楼第七学区店もしくは三号店である。

幻楼とは元々の本店は第一学区にある、数少ない高級料理店であり第七学区にあるのは、その支店である。

支店は他にも学園都市の食文化の、中心世界中の料理が食べられる第四学区にもある。幻楼は元々学園都市の上層部や外からの偉いさんの接待用の店である。

料理だけではなく、宿泊も可能でまた出入りが目立たないようにする秘密の通路もある店だ。

最初は第一学区に本店一つしかなかったのだが、接待された外の客たちが、その旨さを宣伝したため、接待だけではなく、それ以外の客が押し寄せ評判を呼び支店が出来たのだ。まず最初に第四学区に出来た二号店は、本店にない料理も出して人気を出したが高級料理屋であり、値段が高かった。

しかしこの第七学区店は中高生中心の学区であるため、二号店 本

店に比べて値段が安くなっているが、高級店である事に代わりはない。この第七学区店は今日がオープンの日であった。

店は完全予約制なのに客がひっきりなしに出てきてる。

そんなとんでもない店である。

将真が佐天たちが入っていったのを見て、驚くのは無理もない。

「どうすんだ健児？　今度は流石に入るって訳にはいかないぞ？

この寒空の下出てくるまで待つのか？」

と横にいる健児に話しかける。

健児は店の入り口をずっと見ていたが、将真の声を聞いて、すぐに将真の方をみる。

「将真なんとか店に入る方法はないか？」　　と言うが、将真は両手を胸の前で振りながら言う。

「無理！無理！　予約なしじゃ客として入れないし、あんな高級店に忍び込んで気づかれたりしたら、風紀委員だけじゃなくて、警備員がすぐやってくるよ」

「そうかでは仕方ない待つしかないか…いや待てよ幻楼は確か宿泊可能だったはず…何て事だ！これでは佐天たちは酒を飲まされ、なし崩しの部屋に連れ込まれてしまうではないか！　ええい！悠長な事は言つてられん

かくなる上は…」　　と言った後長田が店の方へ行こうとするので将真が慌てて後ろからしがみついて止める。

「離せ！何をする将真ここで悠長に構えてたら奴の思う壺だぞ！」
長田はしがみついている将真を解こうと体を振る。

そんな長田に将真は、しがみつきなから、落ち着くように言う。

「待て待て心配しなくても事には及ばないよ」

「何故そう言い切れる？ あのケダモノは女を宿泊可能な料理屋に入れたんだぞ。」

これぞまさに動かぬ証拠！ あのケダモノに今こそ天誅を与えるのだ！」

と力説するその顔は恍惚としている。

己の正義の行いに酔っているのだ。

「大丈夫、奴は手を出さないよ」

将真は長田を落ち着かせる為もう一度言う。

しかし長田は反論する「何故そう言い切れる？ 奴は健全な男だぞ」

ケダモノで精力絶倫だ。

しかも佐天も初春も美少女おまけに無防備（特に初春）だぞカモがネギしよって行くようなものだ。

俺も今日転校してきたばかりとはいえども、クラスメートに手荒な事はしたくない。

だが決定的な証拠が出た以上はもはや情けをかけてる場合ではない。

早く手を離せ！ こうしている間に初春たちの貞操が奪われたら、取り返しのつかない事になってしまうぞ！

それともお前は彼女たちが無事だともわかるのか！
と声を荒げる。

しかし将真はひるまず断言する。

「わかる！」

「何故言い切れる！」

(全てお前の妄想だからだ)

と思わず口から出そうになるが、飲み込んで我慢し、長田に丁寧にその理由を言う。

「本店の幻楼と違いこの三号店には宿泊のサービスがないんだ。

よしんばあったとしても未成年三人宿泊させる訳ねえだろ。

同じ理由で酒など出してくれねえよ。だから大丈夫だ奴は何も出来ない」

(まあ今日あったばかりのクラスメート高級料理店に誘うからには、下心はないって事はないだろうけど、だからって健児の言うように貞操の危機にはならねえだろ。

大体大人の女ならいざ知らず、中学生口説き落とすのに高級料理店に連れてこないだろ普通…とは思うがこの妄想正義野郎に言っても無駄か)

と将真は心の中で思うが、それは言わない事にして、長田が納得出来る言葉で説得する。

「以上の点から見て、奴は事に及べない。だから佐天たちの貞

操は大丈夫だ。

俺を信じる！」

将真は最後に強く言い切る。

すると長田もたじろぎ力を抜く。

「わかった。

お前は俺より頭が良いからな信じよう。

つまり奴が事に及ぶのはこの後食事を終わって店を出した後ホテルに入ったその時というわけだな？

よしわかった！奴が佐天たちと出てくるまで、ここで待つぞ。」

そう言つて長田は、夜食ように買っておいたハンバーガー(セブンスミストで佐天らが買い物してる間に購入)を食べ出す。

「お前も食べて置け、張り込みに体力は必要だからな！」

そう言つて将真の分のハンバーガーを渡す。
将真はそれを受け取ると食べ出す。

「ところで今何時だ？」

将真より先にハンバーガーを食べてしまった長田は聞いてくる。

「携帯持つてないのか？」

食べながら将真が答える

「充電切れだ」

と健児が答える。

「しょうがねえな」と言つて携帯をポケットから取り出し時間を見る。

「六時五十五分だよ」と言つ。

「何だと！」

突然長田が大声を上げる。

「うるせえな、何だよどうかしたのか？」

「大ありだ」

そう言つて長田は将真の近くに來た後将真の肩に両手を置きがっしり掴む。

そして一言

「親友よ」

「何だよ一体？」

突然の長田の真剣な様子に理解がついていかない。

そんな将真にお構いなしに長田は告げる

「…後は…任せた」

「はい？」

一瞬何を言われたかわからない将真だったが、長田がきびす返そうと
していたので、慌ててその手を掴む。

「待てどついう事だ！」

と長田に詰問する。

「タイムサービスだ」長田は真剣な顔で将真に答える。

「タイムサービス？」

「そうだ。いつも行ってるスーパーのタイムサービスが7時半にあ
るのだ」

そう長田は告げ更に続ける。

「という訳で後は頼む、心配するなお前の言った通りなら、奴が牙
を向くのはこの店を出た後、初春たちをラブホに連れ込んでからだ。

それまでには戻ってくる。

俺も初春たちから、目を離すのは心苦しいのだが、腹は減っては戦
は出来ずだ。

買い物が終わったら、すぐに駆けつける。

すまんがそれまでは、任せたぞ！」

長田は将真の掴んだ手を解くと。

「牛と卵は誰にも渡さん！」

絶叫しながら全速力で走っていき、あっという間に将真の視界から消えた。

「…いやあり得ねえだろ。」

こんな下らない事に、人かり出しとして　　自分の用事あるから、任せたって…てめえの妄想に付き合わされた挙げ句がこれかよ。

あの妄想正義野郎！　　飯代朝　晩ひと月いや　ふた月分だあゝ

奨学金全額使わしてやるから覚悟しやがれ！あの大馬鹿野郎があゝ

！

寒空の中一人残された将真は絶叫するのだった。

第二話 (放課後の甘い罠) (その4) (後書き)

いかがだったでしょうか？

それでは ご意見 ご感想等お待ちしております。最後まで読んでいただきありがとうございます。

第二話 放課後の甘い罇 (その5) (前書き)

やっと書けました。

今回も主人公たちの出番が少ないです。

また量が多めです

つい多くなりました すみません？

それでもいいかたは読んでいただけたら幸いです。

第二話 放課後の甘い罠 (その5)

将真が寒空の下。

絶叫していたころ、学たちは幻樓の店員に案内された座敷に座っていた。

厳しく躡られたと思われる、動作のきびきびとした、店員が座敷の椅子に座ってる、学たちに深々と頭を下げている。

「本日は幻樓第七学区店に、おこし頂き誠にありがとうございます。まもなく店長が挨拶に参りますので、お茶でも飲んで今しばらくお待ち下さいますよう。お願い申し上げます。なお御料理の方は、電話をいただいた時点で一番高いコースを準備させて貰っていますので、間もなく持つてまいりますので、そちらも合わせて、お待ち下さい。それではこれにて失礼させて頂きます」

店員はそう言った後もう一度深々とお辞儀した後退出していった。

「何か凄いな。初春」

佐天が座敷の周りに飾られてる、掛け軸や置物を見ながら、初春に話しかける

「そうですね。」

流石は学園都市でも名のある高級料理店の支店だけの事はありませんね。

藤田さんいいんですか？

本当に奢りで…」

と初春が学にすまなさそうな顔で言う。

「いいって気にすんなこの店長とは、知り合いだから、安くしてくれたし、ツケでいいってさ。」

まあ土産込みで十万ありや足りるだろ
と初春の心配を笑い飛ばす。

「でも少しくらいなら……」
と初春が食い下がるが

「いって本当に大丈夫だから、それよりそんな心配何かしないで、
これからの料理を堪能することだけ考えな
と学が初春に言っている時。

座敷の襖の後ろに人影が見えた。

「失礼いたします。」

当店の店長でございます。

ご挨拶に参りました。開けても宜しいでしょうか？」

とても丁寧で優しい感じの声が聞こえた。 「いいぜ！入ってき
ても」

学がすぐに許可を出す「それでは入らせて頂きます」

そう言つて店長は座敷の中に入ってきた。

年齢は三十五ぐらいか、綺麗な白衣を着ている。

優しい目をしており、顔もなかなか整つており、髪は黒髪で左手に
見えにくい小さな火傷の跡がある。

この幻楼第七学区店の店長で元本店の副料理長だった柏崎である。

店長柏崎は学の許可がおりた後音も立てず座敷に入ってきて、学た
ちの前で正座している。 背筋がピンと伸びていて、とても決ま
っている。

「学様そしてご学友の佐天様、初春様ようこそお越し下さいました。

当幻楼三号店の店長を勤めます。

柏崎と申します。

本日はごゆっくりお楽しみ下さい。

帰りに当幻楼三号店自慢の寿司おりを土産としてお持ち帰り下さい。

今当店が誇る最高級の料理をお持ちいたしますので、今宵はどうぞご満足いくまで、当店の料理をご堪能下さい。

それではこれにて、挨拶を終わりにさせていただきます。

ではごゆるりと、失礼いたします」そう言って店長は座敷を去ろうとしていく

「待った柏崎店長！」座敷から去ろうとする店長を学が呼び止めた。

店長は振り返り丁寧に答える「何用でございましょう学様？」

と答える。

学は、ばつが悪そうな感じで店長に言う。

「その悪かったな

急に無理言って…大変だったろう？」

学が手を合わせて、店長に謝罪する。

「無理などんでもないことです。

学様のお役に立てとても嬉しく思っております。

なので学様は些細な事など、気にせずご学友の方と当店の料理をお楽しみ下さい。

それではこれにて失礼します」店長はにっこりと学たちに微笑むと深く一礼して今度こそ退出していった。

店長が退出してほだなくして、コース料理が学たちの座敷に運ばれてくるのだった。

学たちの座敷に料理が届いていた頃。

三階に特別な客だけを通す最高レベルの座敷があった。

幻楼三号店の三階はこの最高レベルの座敷一室だけである。

今この座敷に一人の客がいた。

一言で言えば醜い男である。

身長百七十五ぐらいか腹の肉の付き方から見て体重は百キロは間違いないく超えているだろう。両手に沢山の指輪をつけ、両耳にピアスをつけており首にはゴツいいかにも高そうな、ペンダントをつけている。

この肥満男はワイシャツにズボンという格好だ。

さらに暑かったのか、座敷の床にブレザーが一着脱ぎ捨てられている。

そのブレザーが驚いた事に学園都市随一の名門校長点上機学園の物である事から見て、この肥満男は長点上機学園の生徒であることは間違いない（とても信じられないが）

事実彼は長点上機学園の生徒だった。

彼の名前は潮見朱鷺晴（しおみ　ときはる）十八歳。

実はこの肥満男長点上機学園の生徒会長なのだ。だが理由はある。

彼は長点上機学園の理事長の一人息子（ただし姉一人　妹一人いる）でさらに叔父が統括理事の一人という学園都市のVIPの息子すなわちボンボンである。能力はレベル0（能力開発して、体に悪影響を受けるかもしれないとだだをこねて能力開発は受けていない）

しかし叔父の権限を利用してバンクに細工してもらい、レベル3の強能力者　能力名は　アルティメットキャノンという架空の能力を使う事になっている。　能力内容は1日一回だけパイロキネシス　サイコキネシス　エレクトロマスター　エアロシューターのどれか一つの能力をレベル4から5までの威力で使える能力をでっち上げている。

もちろんシステムスキャンも親たちの権力で無理やり通している

生徒会長の地位も当然親の七光りで手に入れた。つまり潮見朱鷺晴は親の権力をたてにやりたい放題やっつる、最低の馬鹿息子である。　性格は我が儘で自尊心が強く自分が特別な人間と思ってる最

低のくず野郎である。

その最低のくず野郎がひたすら、飯を食べている。マナーも何もない、小学生が食べてるようだ。

口まわりや服が汚れてもお構いなし、よく噛まず、飲み込んで次々と料理を口に放り込んでいく。

（遅い！このボクを待たせるなんて、あの不良風紀委員何してやがる）

彼には待ち人がいた　しかし待ち人は約束の時間から一時間たつのに未だ現れない。

だから朱鷺晴は、我慢できず料理を食べ出したのだ。すでに自分の分は食い終わっており、待ち人の分まで食っている　しかし彼には関係ない。

約束の時間を守らないあの男が悪いのだ！　彼はそう思い悪びれる事もなく、食事を続ける。

彼が残り後二品で完食というとき、ようやく座敷の入り口に人影が見えた。

待ち人が来たようである。

朱鷺晴は食事を一旦止め「入れ！」と一言、言つと「失礼します」の一言の後、彼の待ち人がようやく姿を現した。

時間は午後八時十五分約束の時間より一時間十五分遅い到着だった。待ち人は高校生である。

身長百七十センチに、細い体型から見て体重は六十キロぐらいか、とある不幸な少年と同じ制服に左腕には風紀委員の腕章をつけている男だ。

そして右手に木刀を持っている。

容姿は美形という訳でもなく、また不細工という訳でもない。いたって普通の顔に、髪は黒髪で短く刈っている。

彼の名は村上　冬牙　（むらかみとうが）

風紀委員に所属しており、風紀委員第七学区統括支部（第七学区内にある全ての風紀委員支部の上に位置し第七学区内の全ての支部を

支配下に置く）所属の風紀委員であるとある不幸な少年と同じ学校の二年生である。

剣道の有段者で木刀を護身用に携帯している。だがこの男の持っている木刀が実は、仕込み杖であり、むらかみが剣道だけでなく居合と剣術も嗜んでいるのを、朱鷺晴は知っている。

そして朱鷺晴はもう一つむらかみの秘密を知っている。

むらかみが金を貰って人を殺す殺し屋で、学園都市の暗部に所属しチーム名「アサシン」のメンバー（アサシンはむらかみ一人だけのチームである。

（メンバーが足りない時は不良能力者やスキルアウトを臨時的に雇う）

エリート風紀委員にして暗部の殺し屋それが村上冬牙なのだ。

そして何故朱鷺晴がそんな事を、知っているのかと言うと、彼が村上の仕事の依頼人だからである。朱鷺晴は村上にある仕事を頼んでいるが、それがなかなか進まないのので、呼びつけたのだ。

村上はほとんど音を立てず歩いていくと、朱鷺晴の座っている所の近くまで来ると、腰を下ろし正座した。

仕込み杖は左側に置いている。

これには理由がある、村上はギッチョつまり左利きなのだ。

これは村上が刀をすぐ抜けない事を意味し彼なりの敵意はないという証なのだ。

村上は正座した後朱鷺晴に向かって深々と頭を下げる。

「遅くなりました。」頭を下げながら、村上は朱鷺晴に謝る。

「本当に遅いぞ！」

おかげでボクチンはお前の分の料理まで食べてしまったぞ」

朱鷺晴は嫌みをたっぷり込めて、むらかみにぶつける。

(豚と食事する趣味はない)と心で思うが、口には出さず、低姿勢で謝る。

「仕事が忙しくなかなか抜けられませんでした。この後もすぐ戻らねばなりません。ですので手短にお願いします。」

むらかみは淡々と答える。

「ふん！口の達者な奴め！…まあいいところで一体いつになったらさいかいするのだ？ もう前の犯行から、一週間空いてるぞ、お前に頼んだのは水木孝一みずきこういちあの忌々しい奴とボクを裏切ったあの女手塚 弓枝てつかゆみえあの二人を始末するように頼んだぞ！」朱鷺晴は語気荒げて、村上に言う。

「正確には二人一緒に殺せです」と先程と同じく淡々と質問に村上は答える。

「それで本番で失敗はできないといい、お前は他のカップルを練習台にした」と朱鷺晴は言う。

「はいそのとおりです。まあ犠牲になったカップルたちには、目眩ましという役目もありますがね。

いくつもカップルが殺される、犯人はいかれた快樂殺人者、このように捜査する者たちは勘違いするでしょう まさかただ一組のカップルだけ殺すのが目的とは誰も気づきません」村上は淡々と感情を全く込めず説明する。

「それは解ってる、お前が最初のカップルを殺したのが三週間前
それから次の一週間までに三組始末して、二週間で計四組殺した。
もう十分目眩ましにも練習台になっただろう？」

水木達はいつやるんだ！

まさかまだ練習したいとか言うんじゃないだろうなあ？

目眩ましのカップル達の始末代も一回百万で払ってるんだぞ、本命
の水木たちの始末代は三百万だ。

まさかまだ練習が足りないとか言うんじゃないだろうなあ？

ボクにこれ以上無意味な殺しに金を出せと言うのか？」

朱鷺晴はイラつきながら、村上に言いたい事をぶつける。

だが村上はどこ吹く風で全く朱鷺晴の怒りなど歯牙にもかけずマイ
ペースで答える。

「これ以上の練習も目眩ましも必要ありません」

(よく言うぜお前が殺したカップルの死体を撮った証拠写真で、シ
コってるのは知ってるんだ！変態豚野郎)

と心の中で村上は悪態をつくが、外には決して漏らさない。

「目眩ましも練習台ももう必要ないんだな？」

再度朱鷺晴は確認する。

「はい必要ありません」

「じゃあ水木達はいつやるんだ？」

あいつらをやるときはちゃんと動画を撮るんだぞ、カメラは後で郵

送るからな？

でもう一度聞くがいつやる？」

「後3日の内には…実はスキルアウトともが無能力者狩りの報復の為、常盤台中学に殴り込みを掛けると言う　情報を掴んでおります。」

キャパシティダウンやパワードスーツや身体能力を高める薬物等を麻薬やチャイルドポルノで稼いだ金を使って闇ルートで、今言った装備を買い集めました。

常盤台への襲撃が成功するとは思いませんが
事が起これば、警備員の殆どがその事件にかかりきりになるでしょう。

その際に片付けますのでご安心を」

そう言つて村上は口元だけ歪ませてわらう　目が笑っていないので不気味だ。

「確かな情報か？」

「自分も暗部の構成員ですよ」

「わかつたそこまで言つなら任せる！

頼んだぞ」

そう言つた後朱鷺晴は手を振つて帰れと指示する。

それを見た村上は、　「では失礼します」　（豚の相手は疲れ
る）

と言つて退出するのだった。

この恐ろしい悪の密談が、自分たちの上で行われた事など、一階の学達は知るよしもなかった。

第二話 放課後の甘い罠 (その5) (後書き)

いかがでしたでしょうか？

ではご意見 ご感想

ポイント お気に入り登録何でも待っております。

最後まで読んで頂きありがとうございます。

第二話 (放課後の甘い罠) その6 (前書き)

遅くなりましたが、更新出来ました。

会話と説明文が多いです。

上手く書けてるか、心配です

第二話 (放課後の甘い饅頭) その6

「美味しかったですね」

「そうだね」

「さすが高級店だけの事はあるな」

一方一階の学たちは、三階の密談など知ることもなく、すでに豪華な食事を終えて満足していた。

「じゃあそろそろ出るか？」

学がそう言うと

「はい」

「わかりました」

二人が返事をしそれを聞いた学は、座敷からでるのだった。(二人はすぐ後をついてくる)

「佐天さんは何が一番美味しかったですか？」

店の入り口まで歩きながら初春が話す。

「あたしは天ぷらかな？」

海老も良かったけど、鯛も良かったなあ

初春は何が良かったの？」

佐天が質問に答えて質問を返す。

「うーん…私はお刺身ですね」平目美味しかったですね。
藤田さんは？」

初春は自分たちより、前を歩いている学にも聞く。

「俺か？うーん…」

学は少し考えてから、答える。

「全部だが…一番は肉だなあの牛のしゃぶしゃぶが良かったな」

「あゝあのしゃぶしゃぶですか？確かに美味しかったですね」

学が言ってるのは、米沢牛のしゃぶしゃぶだ。

肉の量、質も優れており更にタレも絶品だった。

何の味付けなくても、むちゃくちゃ美味しいのにその上絶品のタレがついてくるからたまらない。

そうやって歩きながら、三人が会話しているとレジが見えてきた

「さうしてじゃあ俺がレジで支払いすましてくるから、二人は先に店の外で待っていてくれ。」

「すみません藤田さん」

「いめんね藤田」

と言って二人が謝る。

「気にすんな！俺が奢るって言うてんだから、いいんだよ」

そう言うつとレジの方に歩いていく。

「じゃあ後は藤田に任せて、あたしらは先に外で待つとこか？」

そう言うつと佐天は初春を引っ張って、店の外に出て行く、その時後ろの方で、店員が八万五千円になりますと言ってるのが、聞こえた。

「おう！佐天たちが出てきたな、時間は…二十時三十分かあゝえらくのんびりだったんだな。

それにしてももうすぐ二十一時だな……はあ何やってんだろ…それより健児の奴まだ帰ってこねえな。

まさか買い物行って、満足して帰ったんじゃないだろうなあ」

寒空の下健児に置き去りにされた将真は、人がいいのか？はたまた飯代の為か、学たちが出てくるまで外で待っていた。

この間健児からはメールもなければ電話もない。

「さてどうすつか？後は帰るだけだろうしな、これで終わりにするかな？」

と色々将真が考えていると、突然ポケットが振動した正確に言うつとポケットの中の携帯が振動したのだ。

「うんこの振動の仕方はメールか？」

将真がポケットから携帯を出すと、一件メールが入っていた。

「メールは…健児からか？」

差出人を見た後将真は内容を確認する。

内容は『後三十分で戻る！それまで任せた』だった。

「はあ〜三十分ね」 将真はため息をついた後、はいよ！と一言返事を返す。

「これでよしつと…藤田が出てきたな…はあ〜…後三十分ね…しよ
うがねえな」

学たちが三人揃って、移動し出したのを見た将真はゆっくりと尾行を再開するのだった。

一方。

将真が尾行している学たちは初春の学生寮に向かって歩いていた。

(佐天は初春の寮に泊まるつもりらしい)

「随分遅くなりましたね」

「そうだね。でもまあいいんじゃない？」

明日休みだし」

「そうですね。創立記念日で休みでしたね。

まあ私は風紀委員の仕事ありますけどね」

と目をこすりながら、初春が言う。

そのまま欠伸でもしそうな様子だ。

「初春眠いの？」

佐天が心配そうに聞くと

初春ははあ〜と一つ欠伸をかいてから、答える。

「すみません昨日は家で一時ぐらいまで書類作りとか色々やってましたから、でも私なんかましですよ。

白井さんなんか毎日10時遅かったら12時ぐらいまで夜警、休みの日は訓練所でトレーニングですからね。『これ以上の犠牲は、許しませんの』って言ってましたね。

「最後の白井のセリフを白井の真似して初春が言う。

「初春似てないよ…ふ〜ん白井さん気合入ってるんだね。

その夜警って連続カップル殺人事件の見まわりなんでしょ？」

と佐天が聞く

「はいそうですよ。

捜査は警備員が主体になってやってますけど、風紀委員も夜の見回りによる次の事件の発生を防いだり、警備員の聞き込みのお手伝いとかもやってるんですよ」

と初春が説明する。

「本当ひどい事件だよな。

でも今は事件起こってないんでしょ？」

「はい。最初の事件が起こったのが三週間前です。

それから次の一週間までで更に三組のカップルが殺されています。で最後のカップルが殺されてから一週間たってます。この一週間は犠

犠牲者は出てません。

いずれの四件の犯行も共通してるのは目撃者なし、必ず女性の方から殺す。

凶器は日本刀で突くにしろ斬るにしろ、相手を一撃で仕留めてるですな。

後最初の犠牲者は、常盤台の一年生とその恋人の高校生なんです。実はその常盤台の一年生が白井さんのクラスメイトだったんです。しかも殺されたのが、常盤台寮の間近くの公園内だったんです

白井さんその事で自分をせめて、『風紀委員なのに自分の周りの犯行も防げないなんて…最近学園都市の治安は悪くなっているのは、わかってましたのに』って言ってましたからね

「本当何とかして欲しいよね。」

これじゃカップルじゃなくても怖くて夜出歩けないよ。

あつ！もちろん初春や白井さんや固法先輩が頑張ってるのは知ってるんだよ」

と佐天が初春を気遣う。

「ありがとうございます。」

佐天さんやこの学園都市に住む人々の為にもこの事件早く解決したいです。

でも全く手がかりがないんです。

最初常盤台の学生を殺したと思ったら、次の二軒目はスキルアウト同士のカップルを次の三軒目は教師と科学者のカップルを最後の四件目は大学生のカップルを殺してます。

犯行場所も第七学区 第十学区 第八学区 第五学区とまち

まちでなかなか捜査が進まないんですよ」と初春がつらそうに言う。

「大変だね初春」

と佐天が心配そうに言う。

「はい。でも後悔はしてません。
自分で決めて風紀委員になったんですから」
初春が決意を秘めた強い調子で言う。

「く〜！健気な事言っちゃって〜」

と言いながら佐天は初春に抱きつきその頭を撫でる。

「ちょっと佐天さん！やめて下さい。

人が見てるじゃないですか！」

「気にしない 気にしない親友同士のスキンシップじゃん。
恥ずかしがる事ないって」

と二人がじゃれあつてるところに学が割り込む。

「二人ともそろそろ…うん誰だこんな時間に？」

佐天たちのスキンシップ？をそろそろ止めさせようとした学は、その時前方からやってくる二人の人影に気づいた。
見るからに柄の悪そうな二人組である。

両者とも、左腕と頬にそれぞれタトゥーを彫っている（暗いのでどんな絵かは見えないが）。

学が目を凝らして二人組を見ると頬にタトゥーを彫っている男の手に光る物が見えた。

（…ナイフだ！）

学はそれが何か察知すると、後ろでまだじゃれあってる佐天と初春に注意する。

「佐天！初春！俺から離れてどっかに隠れてろ！」
と大きな声で言う。

その声で前方を見た二人は、ナイフを持ってる男たちを確認しすぐお互いから離れる。

「何！あいつらまさかカップル殺人犯？」　と佐天が言う

「いえ違うと思います！連続カップル殺人犯は単独犯のほずです」
と初春が答える

「とにかく警備員が風紀委員に連絡を」
と佐天が慌てて言う。

「わかりました！」　初春が携帯を急いで取り出そうとした。

（ちっ！さっさと隠れるよ！…しょうがねえな！向こうは二人こっちは一人先に仕掛けるしかねえ）
学は状況を

瞬時に判断するとこっちに向かってくる二人組（片方はナイフ持ってる）向かって突っ込んでいった。

第二話 (放課後の甘い罠) その6 (後書き)

という訳でバトルシーンに突入です。

最後まで読んで頂きありがとうございました。

ではご意見 ご感想 ポイント 何でも待っております
(バトル上手く書けるかなあ? 頑張ります?)

第二話 放課後の甘い罠 (その7) (前書き)

やっと更新できました。

良かったら見ていって下さい？

第二話 放課後の甘い罠 (その7)

(先手必勝！)

突っ込んでいった学は先に頬に刺青の男に(ナイフを持っている)
仕掛けた。

頬に刺青の男は自分が武器を持ち相手が素手しかも子供とわかると
余裕の表情を浮かべながら、突っ込んで来る学に向かって行く。

そして自分のナイフが届く射程距離に入った途端に学の腕目掛けて
ナイフで切りつける。

それを後ろで右腕に刺青のある男が一応手にスタンガンを持って様
子を見ている。

仕掛ける気はないようだ。

恐らく彼は頬に刺青の男だけでいけると判断したのだろう。

しかしその判断が間違이었다のにすぐ気づく事になる。直後に甲
高い音が鳴り右腕に刺青男の目の前で、ナイフを地面に落とし右手
を押さえてる仲間の姿が見えたからだ。

(よし上手くいった) 学は手を押さえているナイフの男を見ている。

その後すかさず、地面に落ちたナイフを蹴っ飛ばして敵から武器を
奪う。

その学の手にはズボンのベルトが握られていた。

学はナイフで切りつけようとした相手に対しパンチを打つように見
せかけ、相手が自分の方が先に届くと油断したのを見ると素早く反
対の手で抜き取ったベルトをスナップを効かせ相手のナイフを持つ

ている右手に叩きつけたのだ。

「さてあと一人」すぐに学がナイフ男の後ろにいる仲間の方に向かおうとするが

ナイフ男は痛みから回復しており、背後から学目掛けてパンチを打ってきた。

手にはメリケンサックまだ武器を隠し持っていたらしい。

しかしせつかくの奇襲も後ろから「クソガキが！」と大声を張り上げたら意味はない。

学ははあくため息をつく、後ろを見もせずベルトを鞭のように振る。

パチンと大きな音が鳴り聞きたくもない下品な男の悲鳴が聞こえてくる。

さらに男の悲鳴が聞こえたと同時に学は反転

驚愕の顔をしている男の顔面に右ストレートを叩きつける。（この時相手の足も同時に踏んづけている）

ガツンと鈍い音が鳴り、男がよろめくが足を踏んでいるので退く事は出来ない。

すかさず学は追撃のベルトの一撃を顔面にお見舞いする。

「グアツ」と叫んだ後両手で男は顔面を抑えて呻く。

（貰った！）

学は心の中で勝利を確信し、左手のベルトを捨てると踏んづけていた足を離してさらに深く踏み込んで、腰の入った左ボディーを撃ち込む。

強烈な一撃を受けた男は顔を抑えていた両手を反射的に腹にまわす。

（今だ！）

それを見た学は、次の瞬間右のフックを顔面に叩き込んだ。

一発だけでは終わらない。

かんぱつ入れずもう一撃右のフックを叩き込む。顎を的確に打ち抜いたその一撃は、相手の脳を強烈に揺らし相手を昏倒させるのだった。

（終わったか？）

相手が崩れ落ちつつぶせに倒れ、ぴくりともしないのを見た学は念の為屈み込み相手が失神しているのを確認する。

更に学は用心深くポケットや懐を探り武器を持ってないかを確認もする。

その後メリケンサックを両手から抜き取り、回収したベルトで両足を縛る。（本当は両手両足を縛りたいが、ベルトが一本しかないため効果的な足を選んだ）

これで敵を完全に無力化した学だが彼は自分の犯した失態に気づいていなかった。

やがて彼が甲高い初春たちの悲鳴を聞いてそれに気づくのはもう少し後の事である。

「もしもアンチスキルですか？私は風紀委員の初春飾利と言います」

学が敵を倒して無力化している頃。

初春はようやくつながった警備員の詰め所に電話を掛けて助けを求めていた。

初春が場所とか詳しく話していた時。

突然佐天が「初春！」と大きな声で叫んだ。かなり切羽詰まった感じがする。

「何ですか佐天さん！今アンチスキルに電…」

初春が佐天に文句を言おうとした時。

初春の視界にスタンガンを左手に持って、自分たちの方に迫ってくる、二人組みの片割れの腕に刺青の男が見えた。

目は血走りスタンガンはバチバチと音を起している。急な敵の出現に思わず通話中の携帯を落とし

初春は「キヤーツ！」と甲高い悲鳴を上げるのだった。

時間は少しさかのぼる

敵の少年（学だが当然名前は知らない）と仲間の三沢（ナイフ男の名前）がやり合おうとしていたのを倉橋（スタンガン男の名前）は黙って見ていた。

三沢はナイフの扱いに慣れてるのを倉橋は知っている。

それに相手は無手だ。ナイフ使いの三沢が遅れをとる筈がなかった。

しかしその予想は裏切られた。

三沢は、少年のベルトの一撃を受け、倉橋の見ている前で、少年にボコられ始めたのだ。（それも一方的に）

（三沢の奴何やってるんだ！）

倉橋は相棒の無様ぶりに心の中でどくづいたがすぐに冷静になって考えだす。

(どうする？三沢に加勢するか？……)
と彼が迷っているのと三沢は抵抗虚しく、右フックの二連発を喰らい
地面に倒れていた。

三沢を倒した少年は、しゃがみこみ念のために三沢の意識を確認し
ている。

どうやら完全に失神しているようだ。

遠目だが少年の様子を見れば大体わかる。

「 使えねえ奴だ 」

思わず小声で倉橋は倒れてる仲間を罵倒する。

(困ったぜ！三沢をあつさりやるような奴だ！ガキだが侮れねえぞ)
三沢を罵倒した倉橋は再び三沢を倒した後用心深く確認を取ってい
る学の様子を見て思案に耽る。

(畜生め！武器をポケットや上着脱がして探し出してやがる、さら
にベルトで両足まで縛ってやがる。)

あれじゃあ意識回復しても役にたたねえぞ……それにしてもえらく
用心深いガキだな？ ……うん今の声は？)

学の様子を見て仕掛けるタイミングを探っていた倉橋の耳に、幼い
少女の鈴玉を転がすような甘ったるい声が聞こえてくる (正し結構
な早口で焦りを感じる声だが)

その声が倉橋に突破口を見いだした。

(うっかりしてたぜついあの小僧の強さにばっかり気がいつちまっ
てたぜ。)

考えてみりゃあの小僧とマトモにやり合う必要はねえんだ。

あの小娘のどつちか人質に取れば、小僧は何も出来ねーそれにそれで時間稼いでたら三沢の馬鹿も起きるだろ！計画と変わっちゃったが、これぐらいは応用が聞く範囲だ……よし奴は三沢に気を取られてるな…やるなら今のうちだ！)

こうして倉橋は右手のスタンガンの電源を入れ初春達を襲うべく

初春達の元に急ぐのだった。

第二話 放課後の甘い罠 (その7) (後書き)

いかがだったでしょうか？

久しぶりにバトルシーンを書いたんですが上手く行きましたでしょうか？

至らぬ事が多々ある未熟者です気になる事はどんどん教えて頂けると非常に助かります。それでは最後まで読んで頂きありがとうございます

第二話 放課後の甘い罠 その8 (前書き)

続けて更新します。

なるべく見直しして、失敗のないように気をつけてますが、何かミスがあつたらご一報頂けると助かります。
では長くなりましたが、読んでいって下さい。

第二話 放課後の甘い罠 その8

「キヤー！」

ベルトで敵を縛る作業を終えた学の耳に甲高い少女の悲鳴が聞こえてきた。

（今の声は…初春か！…しまった！）

己の失態にようやく気づいた学はしゃがみこんだ状態から、すぐさま立ち上がると初春たちの方にダッシュして行った

（頼む間に合ってくれ）

心の中で二人の無事を祈りながら

「ちい小僧が気づいてこつちに来やがる！ だが俺は三沢の馬鹿とは違うたった二人の小娘どうとでもなる！」

学がダッシュで初春たちに向かいだした時
すでに倉橋は初春たちに襲いかかる寸前だった。

右手のスタンガンだけでなく、左手には石を幾つか持っている。

（初春たちに近づく途中で地面から回収）

「さ〜てガキ共狩りの時間だ。

残念だが希望の星の小僧は間に合わないぞ！更に自慢じゃないが、俺は空手三段の腕前だ一撃で終わらせてやるから安心しな」

と声を張り上げて少女を威嚇いかくする無論これで大人しくなるとは思っ

ていない。しかし先入観とは恐ろしいものである。これで相手たちが少しでもびびって動きが鈍くなったらしめたものだ。

一見刺青などして頭の回らない不良に見える倉橋だが、実際は非常に用心深く戦いに関しては僅かの油断もしない。

少女二人に対してスタンガンと石を装備しその上ハツタリまでかますのである。倉橋は逃げられないようにまず髪の高い少女（佐天）に対して石を投げつける。四つ程の石が闇を裂き飛んでいく。

それに対して佐天は反射的に持っていたカバンを顔面の前に掲げ石の攻撃を防いだ。

カバンに石のぶつかった衝撃が二回程伝わってくる。

（良かった…もっと沢山投げたと思ったけど他は外れたんだ…）

佐天が思わずカバンを掲げた時に、瞑っていた目を恐る恐るゆっくり開けると、近くにいた初春にスタンガンが振り下ろされるところだった。

（初春！）

佐天は心の中で叫ぶと持っていたカバンと土産を放り捨てると

（荷物持ちを自ら買って出た。奢ってもらったので）

何も考えず夢中で近くの初春に体当たりしていくのだった。

一方初春は振りかぶられたスタンガンをただ見上げていた。

佐天に石が投げられたのを見た初春は佐天の方に向かおうとしたが

それは出来なかった。その前に物凄い勢いで倉橋が彼女に突っ込んで来たからだ。

「死にやがれ！」
と大声を出しながら

その声の剣幕にただでさえ最初のハツタリで気圧されていた初春は完全に動きを止めてしまっていた。

(しつかりしなくちゃ！白井さんや御坂さんのように強くはないけど…私だって風紀委員なんだから！)

と心を奮い立たせて、立ち直る。しかし残念ながら敵の動きは早い。立ち直り冷静になって相手を見た初春の視界には自分より、三十七センチは高い長身の男が

(初春からはそう見える。実際には百七十半ばぐらいなのでそんなに高くはないが)
目をぎらつかせ血走った形相でスタンガンを振りかぶっているのだ。
った。

「一人目！」

倉橋は叫びながら、初春日掛けてスタンガンを振り下ろす。

狙いは首だ食らえば確実に失神する。

初春は振り下ろされるスタンガンをただ見ている事しか出来なかった。
た。

そして恐怖のあまり初春は思わず目を閉じてしまう。

ドン！

（えっ？）

直後初春の体を強い衝撃が襲い初春は地面に倒れてしまった。

「痛たた！一体何が…」

悲鳴を上げた後慌てて立ち上がった初春に

「大丈夫初春！」

親友の力強い声が聞こえてくるのだった。

（佐天さん）

彼女の親友はチラツと立ち上がった初春を見た後、両手を広げて仁王立ちする。

「佐天さんが助けてくれたんですか？」

「まあね。」

時間なかったらああするしか無かったけど大丈夫怪我してない？
と佐天は初春を気遣う。

佐天は石を防いだ後。初春が襲われているのが見えたので、何も考えず初春に体当たりして初春を倒して、スタンガンを避けさせたのだ。

「いえ大丈夫です。」

佐天さんありがとうございます」初春は佐天に頭を下げ礼を言う。

「いってそんなの 親友なんだから助けるの当然じゃない…それより初春！早くアンチスキルか風紀委員に連絡して」

佐天が前方の敵を鋭く睨みつけながら言う。

「俺がそれをさせるとでも？」

佐天が初春と話していると、低い怒りを抑えた声が割り込んできた。倉橋は不機嫌だった。石を投げて長い髪の少女の動きを封じておきその間に、とろそうな花飾りを付けている少女を片付ける筈だった。

だが実際は長い髪の少女は石をちゃんと防ぎ花飾りの少女を倉橋の一撃から守り、今両手を広げ仁王立ちをし倉橋に対峙している。(てこずらせやがって…げっ！あの小僧がもう近くまで来てるじゃねえか三沢は…駄目だまだ気絶してやがる使えねえ奴)

倉橋は後ろの方から走って近づいて来ている学を見た後。ポケットから残しておいた石を幾つか掴むと学目掛けて投げつけた。

(これで少しは遅くなるだろう…後は)

倉橋は石を投げつけた後。

石の行方を確認もせず前を向く。

「予定変更お前から片付けてやる」

倉橋はそう言うのとポケットから石を取り出しそれを佐天ではなく初春に投げつける。

佐天に頼まれて電話を掛けようとしてる初春に…どこまでも汚い奴である。

「初春伏せて！」

佐天は初春に大声で叫ぶ。

佐天の声を聞いた初春は慌てて地面に伏せて石を避ける。

「良かったあ…あう！」

初春の方を見て安堵したのもつかの間、佐天は戦いの最中に敵から目を逸らすという致命的なミスをし、無防備の背中にスタンガンを当てられてしまうのだった。

「佐天さ〜ん！」

初春の絶叫を聞きながら佐天は前のめりに足をもつれさせながら、倒れるのだった。

「佐天…畜生あのクソ野郎！中学生相手に何て事しやがる」

学は敵の投げつけた石を回避した後走っていた。

走っている途中で学は佐天がスタンガンを背中に浴びせられるのを見て怒りをあらわにして叫んだのだった。

（覚悟しろよ！あのナイフ野郎以上の地獄を見せてやるからな！

それにしても佐天には悪い事しちまつたぜ俺も現場から遠ざかって早三年。

鈍くなっちまつたようだ。

敵が二人いるのに一人に気を取られて一人を忘れるなんてな！
とりあえず二人には後で謝るとして…あのクソ野郎は金玉を踏み潰
してやる！まあ俺は優しいから一個だけで許してやるよ（

空恐ろしい決意をして学は走り続ける。

佐天たちの元に向かって

第二話 放課後の甘い罠 その8 (後書き)

いかがだったでしょうか？

読むのと書くのは全然違いますね？

最近つくづくそう思います。

最後まで読んで頂きありがとうございました？

第二話 放課後の甘い罠

(その9) (前書き)

続けての更新です

今回は先立って注意書きをいたします。

1 佐天ファンと初春ファンの方はご注意ください かなり酷い目にあ
わされています。

2 センスがありません。
なので効果音の描写が下手です。
気になるかたはアドバイス頂けると助かります。

3 初春ファンはご注意くださいキャラ崩壊しております。
一応リミッター外れてる感じで初春書いてますが？
未熟者なので上手くいってません。

以上の点をふまえて読んで頂けると助かります。
それでは長くなりましたが、とある野望の凶刃第二話 放課後の甘
い罠 その九始まりです

勿体つけるんじゃないやねえって…失礼しました。でわ後書きで待ってま
す

第二話 放課後の甘い罠 (その9)

「さてとようやく一人か…はあ〜てこずらせてくれるぜ全く…でどうする？大人しく俺に付いてきてくれると面倒がなくていいんだが…」

佐天をスタンガンで倒した倉橋は面倒くさそうに、気だるい感じで初春に言いながら初春を見ている。

「佐天さん…」

初春は倒れた佐天を心配そうに見て佐天の名を呼ぶ。

「初…春…」

佐天はその呼びかけに答えようと立ち上がるうとするが（ズンッ！）と倉橋が片足で佐天の背中を踏みつける。更にグリグリと足を動かし踏みにじる

「佐天さん！」

思わず初春が悲痛な声で友を呼ぶ

「初…うあ！」

その呼びかけに答えようとする佐天に対し、踏んでいた足を背中からどけながら倉橋は勢いをつけ「チッ」と舌打ちしながらもう一度今度はうつ伏せに倒れている佐天の頭を踏みつける。

佐天は痛みのみならずあまり悲鳴をあげる。

そして当然のごとく再び足をグリグリと動かします。

初春はあまりの佐天への仕打ちに涙を流しながら両手で口元を抑えている。

どうしてこんな酷い事が出来るのか初春には理解できなかった。

倉橋はそんな初春の涙を見ても何も感じず、相変わらず面倒くさい感じで喋りだす（もちろんまだ佐天の頭を足でグリグリしている

鬼だよあんた）

「タフな女だな〜最大出力で背後から叩き込んでやったのに失神しねえとはな…しょうがねえ」

そう言いながら頭を掻いた倉橋は掻き終わると再びスタンガンの電源を入れる

（ここでようやく佐天の頭から足をどける）

そしてしゃがみこんでいき、佐天の髪を非情にも掴んで佐天の首筋を露わにする。

「寝てる手間かけさせるんじゃないよ！」　そう言いながら倉橋

は佐天の首筋にスタンガンを当てるのだった。（ビリビリ）と凄ま

じい電流が佐天の体を襲う。（御坂さんの電撃もらったらこんな感じなのかな？）

薄れゆく意識のなかで佐天はそんなどうでもいい事を思った。

そして霞む視界の中に親友の姿を見た。　「初春…逃げ…」

佐天は最後の力を振り絞って親友に呼びかけようとしたが、倉橋の2度めのスタンガンの一撃を受け遂に失神するのだった。

「ガキが！三文芝居してんじゃねえよ…何だ？うお！」

佐天が失神したのを確認した倉橋は佐天を罵倒した後。

大きな足音と女の叫び声を聞いて首だけ振ってそちらを見る。そして思わず呻いた。

そこには涙を流しながら右手をおもいつきり振りかぶり（とある不幸少年が敵をぶっ飛ばす時みたいな感じで）

「佐天さんの敵〜！」と言って（まだ死んでないが？）走りながら突っ込んでくる初春がいた。

（許さない！よくも佐天さんを！私の親友をよくも！）

突っ込んで行く初春には怒りしかなかった。相手がスタンガン持つてようが何だろうが関係なかった。

初春の頭にあつたのはただ自分の拳を相手の顔面に叩きつけるそれだけだ。

佐天が最後の力で呼びかけるその声を聞いた瞬間彼女はキレていたのだった。

（畜生！こんな事してる場合じゃ）

一方全力疾走で二人の元に向かっている筈の学はまだ合流出来ていなかった。

学の足が遅いわけではない。

じゃあ何故かと言うとそれは倉橋に散々こけ下ろされた、あの役立たず男が復活して背後から学に襲いかかってきたからである。

背後からの敵の奇襲を走りながら感知した学は役立たず男の一撃をかわした後、すぐさま向きを変えて、相手に対峙^{たいじ}して今に至るといふわけである。

しかも敵は学に縛られる時ゴミ箱に捨てられたメリケンサックを回収し「そんなとこに捨てるなよ」おまけに靴の底に隠していた予備のナイフも右手に持っている。

またさつきやられたのが効いたのか妙に慎重でなかなか隙がなく、学は攻めあぐねるといふ次第である。

「このくたばりぞこないが！どうした俺が怖いのか？

不良が中学生にびびってんじゃねえよ」

学は均衡を破ろうと相手を挑発するが、役立たず男は挑発には乗らずジリジリと無言で間合いを詰めてくる。

(ナイフの届く範囲まで仕掛けないつもりか…やけに慎重で参るぜ。

さくてどうしましょうかね？

もう夜だからあれが使えるんだが…こんな不良一匹にあれを使うのもな…でもぐずぐずしてたら二人が危ないし…どうする？)

学は突破口を開こうと考えを巡らせる。

そうしていると突然ヒュンとした風切り音が聞こえナイフが飛んできた。

痺れを切らした敵がナイフを投げつけたのだ。

それと同時に敵は飛び出し学に突撃してくる（両腰に握りしめた拳を添えながら）

「うお！」

学は驚きつつもその刃をかわす。

しかし目の前には両拳を腰に添えてる敵の姿があった。

（危ねえだろこの馬鹿！殺す気かよ…上等だテメエ見たいなクソ野郎にアレはもつたいねえ…それにこんな雑魚にあれを使ったりしたのをあいつらが知ったら笑われちまうしな ……拳で十分だ！）

学は心の中でそう決断すると、眼前に迫る敵に向かってファイティングポーズ（右構えのオーソドックス）に構えると同時に相手目掛けて飛び込んでいく。

学の視界にメリケンサックを着けた両拳が同じ軌道で学の顔面目掛けて放たれる。防御無しのダブル正拳突きだ。

学もそれに対し右足を捻りながら腰の回転で右ストレートを放つ

三つの拳が交差し宵闇に鈍い音が響き渡たりやがて人が倒れて、勝者を電灯の明かりが照らすのだった。

「クソガキが！」

一瞬驚いた倉橋だったがすぐに冷静になるとポケットから（三度いや四度？）石を取り出し初春目掛けて投げつける。

ピュンと空を裂き石が初春目掛けて飛んでいく。

数は三つ。しかし初春の勢いは止まらない。

すでに泣きやんだ初春は倉橋を睨みつけながら、石が足や手に当たろうがお構いなしに右手を振りかぶったまま特攻してくる。

「こんな痛み佐天さんに比べたら…」

初春は歯を食いしばり耐えて見せる。

だが失速は免れないそしてそれが敵の狙いでもある。

倉橋はこの隙にしゃがんだ状態から立ち上がりすでに右手に再び石を持っている。

「残念返り討ちだ」

と言いながら、その石を初春日掛けて投げつける。（汚なすぎるよあんだ）

今度は立った状態で狙って投げたので、正確な投擲とつてきのツブテは初春の顔に真っ直ぐ飛んでいく。

「こんなもの！」

初春は叫びながら、左腕を顔の前に出し石を左腕で受ける。

血が出たり傷を負うが初春は気にしない屈しない。

（佐天さん！白井さん…そして御坂さん！私に力を）

初春は心の中で友に祈りながら遂に敵を射程距離に捉え怒りの剛拳を解き放つ。

「調子こいてんじゃねえぞクソガキが！」

初春を迎えつつべく、倉橋は吠えながらスタンガンで初春に喰らわせる。

倉橋の一撃は初春の腹へ、初春の剛拳は（まあ怒りの度合いを鑑みての比喩です）倉橋の顔面に。

殆ど同時に互いの相手に炸裂する。

同時に鈍い殴った音と電撃の迸る音が辺りに響く。

やがて音が聞こえなくなり辺りが静寂を取り戻した時。

初春は仰け反りながら地面に倒れたのだった。

スタンガンと剛拳のクロスカウンター同士のぶつかり合いはスタンガンに軍配が上がったのだった。

第二話 放課後の甘い罠

(その9) (後書き)

いかがでしたでしょうか？

調子に乗ってしまいましたね。

未熟者なので広い心で見えて頂けると助かります。

それでは最後まで読んで頂きありがとうございます。
？

第二話 放課後の甘い罠

(その10) (前書き)

やっと更新できました少し長くなりましたが読んで頂けるとありがたいです

第二話 放課後の甘い罠 (その10)

「じゃあな、しばらくそこで呻いてな」

そう言っただけは、地面にうずくまって呻いてる敵を放って、先を急いだ。

「それにしても危なかったよな、指を突き指：下手したら骨折してたかもしれねえな。」

まあ美少女二人を助けるためだ、多少のリスクは仕方ないか」

走りながら俺はさっきの際どかった戦闘を思い出す。

最終的に敵は捨て身で突っ込んできた。

普通なら向こうの方が先に攻撃が届き負けていただろう。

だが俺は右ストレートを打ち込む時右足を、バランスが保てるギリギリまで伸ばしたのだこれです少しはパンチが伸びる。

僅かな距離だが、実戦ではその僅かな射程の長さは大きい。でも今回はそれだけでは足りなかった。

そこで俺は右ストレートを手刀に切り替えて相手の喉に打ち込んだのだ。

正直危険な賭けだったもし、骨の固いところ（例えば額）とかに当たっていたら：俺の手が折れていただろう。

だが俺は賭けに勝ち、向こうのダブルパンチが当たる前に俺の喉突きの方が先に当たり、相手は悶絶したという訳だ。

（まったく急がなきゃならねえっていうのにでも：まあいいか勝ったし：さくって後一人さくつと片付けますか）

俺はもう一人を片付けるため初春たちの元へ急いだ。

「やっと片がついたぜ。」

俺としたことがまったくガキ二人になんてざまだ」

倉橋は初春に殴られた頬を撫でながら呟いた。

なお倉橋のまわりには地面に倒れている佐天と初春がいる。

「さて人目につかない前に、こいつらを連れていく車を呼ぶとしますかね」

そう言つて倉橋は携帯を手に取つて電話をかけ始めた。

間もなく電話はつながった

「あ！俺だけどターゲットを仕留めたから運ぶための車用……
悪いまたかけ直すわじゃまたな」

話しの途中なのに倉橋は突然話しを切り上げて電話を切つてしまった。

そして携帯をポケットに入れると怖い目で前方を睨みつける。

そこには彼が電話を切るはめになった原因　　がいるからだ。

それはスタンガンを腹にもろに喰らい気絶していたはずの、初春飾利だった。

もはや満身創痍だがそれでも瞳は強い意志をいまだに宿している。

初春は息も絶え絶えでよく聞き取れにくい声だが、強い意志を込め

て言った己を奮い立たせるために

「私：私だって風紀委員なんです！白井さんみたいに沢山の相手は出来なくても不良の一人や二人ぐらい何とかして見せます。」

「それでも定期的に訓練は受けてるんです！」
初春は気力を振り絞って最後まで言うが、悲しいかな体はついてこなかった。

最後まで言うと同時に初春の両膝は、震えだし耐えきれず地面にっいてしまった。

そこを不機嫌さを隠しもせず、初春に詰め寄った倉橋が無防備な初春の顔目掛けて

「しっつけんだよ！」

クソガキがいちいち手間かけさせんな！

そこで伸びてる長髪と一緒に寝ていやがれ」

非情にもセリフと同時にサッカーボールキックを放つ。

倉橋の放ったサッカーボールキックは正確に初春の顎への軌道を描いて初春に襲いかかるしかし最後の力を振り絞って立ち上がった初春にはもう動く力がない。

初春はただ呆けた表情で迫る足を見ていたがやがて恐怖で目を閉じた。

(……………あれ?)

初春は来るはずの衝撃が全くこないので不思議に思った。すでに一、二分は初春が目を閉じてから経っているだろう。いくら何でもまだ

攻撃をくらっていないのはおかしい

初春は怖いが状況を把握するため、恐る恐る目を開いた。

初春が目を開いた先には大きな背中があった。

「大丈夫かい？君」

その背中を持ち主が初春に声をかける。

（藤田さん？…いや違うじゃあ誰？警備員には一応通報したけど、警備員の格好じゃないし……一体？）

初春はその声の主に心あたりはなかった。
ただ声のトーンで男とわかるくらいだ。

その男が更に話しを続ける。

「酷い怪我だ。

済まないがもう少し待ってくれ。

すぐにコイツは私が倒すから。

あと私は長点上機学園の二年で大原義人よしと
自警団の者だ。

この付近をパトロール中、君たちの悲鳴を聞いたので駆けつけてきた」

そうやって男は初春を安心させようと自分の身分を明かす

なお自警団とは能力の高い生徒のある学校が風紀委員や警備員とは別の組織した自衛組織だ。

最近学園都市は治安が悪く犯罪が絶えない。

そのため腕に覚えのある生徒たちが、学校に頼みその支援を受けて

治安維持活動をしているのだ。

風紀委員と違い全員が高い能力が戦闘技術に優れているものがあり、主にスポーツの名門^{ほくえい}高北影高校や学園都市随一の名門高長点上機学園や学のかつて通っていた蒼天飛翔館中学校のこの三校が中心になって活動している（他の学校もやっつてるところもあるが、せいぜい一学校に一人ぐらいしかいない）

何故このような活動をしているのかと言うと？

治安悪化により警備員はVIPや統括理事たちの警護などが忙しくまた凶悪な事件も後を絶たず続発するため、そちらにかかりきりになってしまい細かいところまで、手が回らないからである。

また風紀委員はどうしても無料奉仕なので人によっては熱心に仕事しないものもいるので、自警団のような組織が出来たのだ。

なお自警団は金の支給はないが次の進学校への優遇や学園都市内の販売店などで使える商品券の支給などの報酬がある。

ただ風紀委員や警備員のように後方支援や武器や装備品の配布が、あまりないため、基本自分が所属する学校内の周りを巡回する程度なのだが、規模の大きな自警団の組織になると巡回コースの規模が大きくなる。

長天上機学園の自警団は大体五十人位で、その五割はレベル四から3で残りの五割がレベル2からレベル0までである。

巡回区域は十八学区と七学区そして二十学区の三つの学区である。

基本は二人一組または三人組で行動するが、腕に覚えのある連中はかりなので、単独行動している者も多い。

「自警団の者だ！」

大人しくした方が身のためだぞ」

初春を助けた自警団の青年は、自分の前方にいる倉橋に警告する

身長は百七十五くらいか自警団に所属するだけあって、細い体だがしつかりと筋肉がついている。

特に腕が太い。

何かの格闘技をやっているのは明らかだ。その自警団の少年が

鋭い目で倉橋を睨みつけている。

その気迫に一瞬たじろいだ倉橋だったが、すぐに不敵な笑みを浮かべると、スタンガンの電源をONにして構える。

なお初春は後ろで急な展開についていけずぼくっとしている。

初春は知らなかったが、自警団の彼は初春が蹴られる直前に飛び込んできて、蹴りを受け止めるといふ抜群のタイミングで駆けつけて今ここにいる。

「一応警告はしたぞ」

倉橋と対峙していた 自警団の少年は、倉橋がスタンガンを構えるのを見ると、両拳を握りしめた。それをまるで合図のように倉橋が突っ込んで来る。

「邪魔するんじゃないよ！」

吠えながら手に持ったスタンガンを相手目掛け突き出してくる。

狙いは胸だ最大出力に設定している。

そしてスタンガンは胸に吸い込まれるように迫っていく。

「無駄な事を」

ため息を一つ吐くと自警団の少年はなんと！スタンガンが無造作に手で掴んだ。

バリバリと電撃が体を流れるが苦悶の表情どころか、むしろ涼しい顔をしている。

「テメエ！能力者か？」

倉橋は必殺の一撃を　あっさり防がれて動揺する。

「まあレベル2だな　」

自警団の少年は涼しい顔で答える。

「まあ安心しろお前みたいな雑魚に能力は使うまでもない…というか勿体ない」

そう言って自警団の少年はニヤリと笑うが目は笑っていない。

「畜生！」

その笑みに恐怖を感じた倉橋は懐からナイフを取り出し　切りつける。

ヒュツと風を切り、　ナイフが少年のスタンガンを掴んでいた腕を切り血が周囲に飛ぶ

「ぐっ」

スタンガンを掴んでも涼しい顔でいた少年がさすがに、苦悶の表情を浮かべ手をスタンガンから離して傷口を抑える。

「女は傷物に出来ないが男なら話しは別だ！」

倉橋はぎらついた目で興奮をあらわに叫ぶ　手はブルブルと震え
切っ先は揺れている。

そしてスタンガンを投げ捨て今度はナイフを両手に持ち変えて

「くたばりやがれ！」

腹目掛けて体当たりで突っ込んでいく。

「往生際の悪い奴だ」

自警団の少年はそう言つと、手から血を流しながら早足で間合いを
詰めていく

そして倉橋の目の前で突然ジャンプする。

「なっ！」

急に相手がジャンプしたので倉橋は慌てて止まり上を見ようとす
るが、勢い余つて前に数歩たたらを踏む。

その背後に自警団の少年が降り立ち背後を取る。

「ここまでだ」

そう言つと同時に自警団の少年の回し蹴りが倉橋の顔面に放たれ
直撃を受けた倉橋は吹っ飛んで地面に転がった。

第二話 放課後の甘い罠

(その10) (後書き)

いかがでしたでしょうか？

小説って難しいですね？

ではご意見 ご感想

何でも待ってます

最後まで読んで頂きありがとうございます

第二話 放課後の甘い罠 (その11) (前書き)

次の更新です

有言実行なんとか出来ました。

ただ今回は今までで一番長いです。

きりのよい所にと想ってたら、長くなってしまいました。

まとめるの苦手です ご了承ください？

第二話 放課後の甘い罠 (その11)

「どうなってるんだ？ 一体」

俺が駆けつけた時には自警団の少年によるとどめの一撃がちょうど決まった瞬間だった。

急にする事のなくなった俺は手持ち無沙汰でぼくっと立ちつくすだけだった。

そして学たちは気づいていないが同じく事態を呆然と見ているものがもう一人いる

学たちをつけてきていた山咲将真だ

長田の戦線離脱後も一応尾行を彼はし続けていた。

ただ一人なのでやる気がほとんどないので、かなり遠くから尾行していた。

本人も携帯でゲームしたりとかなり適当に尾行していた

それでも止めずに帰らなかったのは、健児の奴に飯代昼と晩の食事代1ヶ月保証を取り付けたからだ。

(なおその健児からはあと三十分で戻るとのメールを受けている) まあこんな感じの気の抜けた状態だったので初春たちが襲われた時出遅れた。

健児がいたら間違いなく速攻で駆けつけていただろうが、将真はためらってしまい動かなかった。

またその後すぐ学が不良を返り討ちにしたので、動く必要はないと思っただ。

そしたらもう一人の不良が学の間をついて

初春たちに襲いかかった。

事ここに至ってさすがの将真も動いたが、双眼鏡でギリギリ見えるくらいのところにいたのでなかなか駆けつけられず、駆けつけた時には自警団の少年が初春への蹴りを防いだところだった。それからあつという間に不良を倒してしまった。そのため尾行していた手前もあり将真は気づかれないように、隠れているしか出来なかった。

（参ったな。さてどうしようかな。健児の奴もまだ戻って来ないしかと言つてばつくれる訳にもいかね。しな　とりあえず見つからないようにしとくか。

それにしてもあの自警団の兄ちゃんいい性格してやがる、ギリギリまで待つてから飛び出しやがった。

一体どういふ訳だ？　）

将真は心の中で疑問に思つた事を考え出す。将真は見たのだ。

将真が双眼鏡で初春たちを監視していた時　こつそりと一目につかないところに隠れている人影を…

その時は顔までは見えなかったが、長点上機の制服と身長とかは見えた、そして将真が駆けつけた時には、その潜んでいた人物が不良と戦つていたのだ。

夜だし長点の制服を着ていて、身長や体格もさつき覗き見た人物と一緒に同一人物と考えない方が無理がある。

（大物でも釣れるのを待つていたのか？

それとも奇襲でも仕掛けるつもりだったのか？

あるいは危ないから迂闊うかつに手が出せなかったのか？

それに都合よく絶縁体の手袋とか何で付けてたんだ？

まあいずれにせよ健児が来てからだな

早く来やがれつてんだ全く…はあ帰りにえなあ）

寒空の下ひっそりと隠れながら現在位置をメールで健児に送る、将真だった。

「藤田さん無事だったんですね」

初春が歩いてきて、心配顔で学に声をかける。

（佐天は自警団の少年に喝を入れられている）

学は初春の顔を見ると安堵の表情を浮かべた後すぐさま頭を下げて謝った。

「すまん！俺とした事が一人に気を取られてもう一人の事を忘れるなんて…お前らの怪我は俺のせいだ、この失敗の償いは必ずするだから許して欲しい」そう言ってとうとう土下座までする。

「いってそんなの」

藤田はあたしら守ろうと戦ってくれたんだしさ」

意識を取り戻した佐天がゆっくりと学の方に歩いて来ながら言う。

「そうですねにしないで下さい。」

藤田さんは一般人何だから、しょうがないです。むしろ風紀委員なのに何も出来なかった私の方が謝らないといけませんよ私に白井さん位の力があれば…」

そう言って初春は俯いて黙りこんでしまう。

その初春の頭を土下座から立ち上がった学が撫でる。

「お前は後方支援担当だろ？人間得て不得手はあるもんだ。だから気にするな」

そう言つて初春を慰めながら、佐天の方を見る。

「佐天大丈夫か？」

と今度は佐天を気遣う

「藤田の方こそ大丈夫？」

「俺は大丈夫だ少し指が痛いけどな」

「どっか怪我したの？」

「大した事じゃない　慣れない貫手なんぞしたから、少し痛めただけだ」

「そう。」

あたしの方も大丈夫。もう痺れも大分抜けてきたし
そう言つて佐天は笑顔を見せる。

「私も大丈夫ですよ　ちよつとしたかすり傷です」

そう言いながら初春が話しに割りこんでくる。

3人は少し怪我や酷い目にあつたがとりあえず無事を喜びあつた。

「失礼もういいかな？」

初春たちが喜びあつている所に自警団の少年大原義人が声をかけて
割りこんでくる。

大原は真っ直ぐ学たちのところに歩いてくる

（隙がないな、さすがに能力開発でトップに君臨する長点のエリートだけあるな。

それにあそこは能力開発だけじゃなく、勉強やスポーツや一芸に秀でた生徒も多い。

まして自警団に所属するくらいだから、ただ者じゃないわな）

学は自警団の一員の強さを肌で感じるのだった。

（おっと見てる場合じゃねえ、まずはお礼だお礼）

学は慌てて大原に礼を言う。

「助けてくれてありがとうな。

あんたが来てくれてなかったら俺じゃ間に合わなかった。

ありがとう」

そう言っつて深く頭を下げる

「気にしなくていい

自警団の一員として

当然の事をしたまでだ」

そう言っつて大原は爽やかな笑みを浮かべる

その時背後で物音がした。

音の正体は倉橋だった。

KOされて地面に倒れていた倉橋はいつの間にか意識を取り戻し、彼らが離れた隙に立ち上がり走って逃げ出した。

「待ちやがれ」

学は慌てて追おうとするが、意外に足が早くたちまち学たちからは見えなくなった。

「ちっ逃げ足の早い奴だぜ」

学は舌打ちしながら言う。

「気にしないでいい、逃げた奴は私以外にも近くを巡回している者がいるので、それらに捕まえさせよう後ついでに警備員と風紀委員にも連絡しとこう」

そう言うって大原は携帯を取り出しメールを打って送信する。

「これでよし」

メールを打ち終わった大原は携帯を制服の内ポケットに戻す。

そして再び学たちの方に振り向く。

「さて自己紹介がまだだったね。」

長点上機学園の自警団第七学区巡回担当員の大原義人だ学年は二年でレベルも2だ
宜しく

と言って挨拶する。

「俺は藤田学、今日柵川中学に転校した一年だ。

マジ助かったぜ！

ありがとう」

と学が自己紹介と礼を言うと佐天と初春が続けて自己紹介した。

「さてもうすぐ警備員と風紀委員が来ると思う。」

両方に通報したからね。

間もなく私の同僚もやって来るだろう。

犯人を逃がしてしまったからね。

また襲って来るかもしれない。

そうだ私が送っていこう。

警備員と風紀委員の対応は今から来る同僚に任せたらいいだろう

あいつに送らせてもいいが私の方が腕がたつからな。

藤田君と言ったつけ君には悪いのだが、当事者がいないと風紀委員や警備員に説明するのが大変なので、悪いが残って私の同僚の手伝いをして貰えないかな？私が残ってもいいのだが、彼らより私の方が腕が立つのでね。そ恥ずかしながら犯人たちを逃がしてしまつたから、念には念を入れておきたいのだよ。う頼んでいいかい？」
そう大原が提案する

大原の提案に学は少し考える

（確かに誰かが警備員と風紀委員の対応をしなくちゃ行けねえ

ああいうのは時間かかるからな、面倒いし 初春と佐天の二人に

わざわざ面倒事に巻き込む事もないか。

罪滅ぼしには丁度いいか。

それにいざとなつたらあのジジイの名前でしたら、アンチスキルな
んざ一発で黙らせるしな……何だ？今何か あそこか！）

学は考えてる時何かに気づいた。

それが学の行動を決めた。

（やれやれまた厄介事が増えたな……じゃお言葉に甘えとします
か）

「わかった！俺が残る初春と佐天の二人は大原さんと一緒に帰ってくれ、自警団に守られながらだと安心して帰れるだろ」

それが学の答えだった。

「ちょっと待って下さい」

しかし初春が反論する

「何だ初春？」

「残るなら私が残ります。」

私風紀委員だし顔見知りの私の方が早く済みます」

初春がもつともらしく言う。

「いや初春と佐天は帰ってくれ、俺の失態でこうなったんだ。

それに夜遅いし疲れてるだろう。

明日からまた風紀委員の激務が始まるんだから無理に今日頑張る必要はない。

まあ俺の罪滅ぼしだ、ここは甘えといってくれ」
と学が言う

「彼の言う通りだ。もう夜も遅い、早く家に帰った方がいい
私が責任を持って二人を送り届けよう」

大原も学に賛同する

「あたしもそれがいいと思うな」

「佐天さん！」

「初春あんた、昨日寝たの深夜一時って言ってたじゃん。藤田がいいって言ってるんだしさ」

佐天も賛同する。

三人に言われたら、反論出来ず初春もおれた。

「わかりました。」

藤田さんお願いします。

もし白井さんか固法先輩が来たら私の名前を出して下さい。アンチスキルはヨミカワ先生か鉄装先生なら大丈夫です」

そう初春が気遣って言う。

「わかった」

学はそう言って返事をする。

「二人を送り届けたらすぐにもどる、藤田君すまないが宜しく頼む後私の同僚は兎島と言う高校一年生だ長点の制服を着ているからわかるだろう彼にはさつき君の事はメールで送っているから大丈夫だ。さて待たせたね。行こうか案内してくれるかい？」

「わかりましたあたしは初春の寮に泊まるんで二人とも同じ方向です」

そう言って佐天が先頭に立って移動する。

「藤田さんすみませんがお願いします」

初春が本当にすまなさそうに頭を下げて言う

「気にすんな！俺のせいでごうなっただ。気をつけて帰れよ
佐天もな、じゃまた学校でな」

学はそう言って別れの挨拶をした。

初春はもう一度すみませんと言って頭を下げた後、慌てて佐天たちの後を追っていった。

初春たちが見えなくなるまで、見送った学は初春たちが見えなくなつた後。

大きく息を吸った

そして

「いつまでそこで隠れてるつもりだ！

ととと出てきたらどうだ！」

暗闇にあつて見えにくい自動販売機めがけて大声で吠える。

すると盛大なため息とともに自動販売機の裏側から一人の少年が姿を現した。

少年は山咲将真だった。

「さて質問に答えてもらおうか？」

学は鋭い目で山咲を見ながら問いただし始めるのだった。

同じ頃命からがらと言ったら大袈裟だが、

逃げた不良の一人倉橋はとあるコンビニの駐車場にいた。
コンビニで買ったコーヒーとパンで食事している。（走ってきて
小腹が空いたので）

追われているはずの彼が何故こんな余裕の態度なのか？

答えは簡単だ彼は追われてなどいないからだ。

「ん？」

食事中に彼の携帯がなり出したので倉橋は携帯を慌てて取る（ただし食事はやめないが）

「俺だ何？車の用意はいつだって…ああその事が悪いがなくなつた。」

結局俺たちじゃ手こずると思って義人さんがカタをつけた。

ターゲットと今一緒に行動中…で三沢のバカは？……とりあえず逃げたか全く使えねえやつ……結局いつもと同じ手口になっちゃった目を付けられないように違う手口にしようと思ったが上手いかなかった。

それにしても美形は特だね。

あっさり女の懐に入れる。

で俺たちがここまでやる価値あるんだろうな？」

「……彼……」

「ん？よく聞こえねえぞ！

でそっちはあれか、一人残ってるガキを大人しくさせにいくんだろ？」

「ああ」

「だったら気をつけるんだな、三沢のバ力をあっさり倒した奴だ。能力者のためえも油断してたら危ないぞ」

「わかってる」

「ならいい…さてこっちは義人さんから連絡来たら、狩りといきま
すか。」

まあ俺が言った時には義人さんが二匹とも、大人しくさせてるだろ
うけどな。

しかしあの人も用心深いぜガキ二人犯すのによ。
プロボクサーのライセンス持ってて、長点のエリートだっていうの
にな。

まあ一人のガキはターゲットじゃねえんだが親友みたいだし二人仲
良く、処女喪失の方がいいだろう。

それが終わったら、その弱みを利用してたっぷり稼がせてもらうか。

ターゲットの娘の方にはもう一人のターゲットであるツインテール
のお嬢様をおびき出すエサになってもらうかところでよ話しは変わ
るが、ここまでしてやるのが仲間の入りの条件らしいが、そこまで
して仲間にする価値があるのか？

この仕事を
頼んだ能力者の依頼人はよ「

「彼はレベル4に極めて近いレベル3だまた彼の能力でレベル4に
到達する者は少ない」

「だからって昔捕まえられた風紀委員たち おつと当時まだもう
一人のターゲットは訓練生だったっけ。

まあどうでもいいが それらに復讐するのが条件って…けつの穴

の小さい小悪党にしか思えないがね俺は」

「そろそろ目的地に到着する悪いが話しはここまでだ」

「そうかい。じゃあ気づけてな油断すんなよ兎島。

油断すんのは三沢のバカだけで十分だ」

「お前もな」

最後に兎島がそう言ったのを聞いた後倉橋は電話を切った。

「はあゝ能力者がそんなに必要かね」

路地裏じゃスキルアウトの方が下手な能力者よりよほど強いと、俺は思うがね。

まあその能力者が使えるか使えないかはどうでもいいか。

とりあえずあのガキ特に長髪の方はいい客がつくから金になるか

「

そう一人で倉橋がしゃべってる時倉橋の携帯にメールが届いた。

内容は初春の寮の地図と住所段取りについてだ。

それを見た倉橋はニヤリと笑うと携帯をポケットに入れた。

「さて腹拵えもしたし、食後の運動と行きますか、どうせ運動するなら楽しく気持ちよく汗を掻くのが一番ってね。

義人さん出来たら、長髪の方が好みだから、俺が行くまで置いていてくれるといいんだが…しかしこんな依頼を頼む絶対等速^{イコールスピード}ってどんな奴なんだ？

まあ無能力の俺には能力者って人種は理解出来ないがな」

そう言い終わった後倉橋は食べ終わったゴミをゴミ箱に入れた後
ゆっくりコンビニから離れて目的地へ向かうのだった。

第二話 放課後の甘い罠 (その11) (後書き)

いかがだったでしょうか？

ではご意見 ご感想

ポイント お気に入り登録待ってます

長文最後まで読んで頂きありがとうございます。

次からは気をつけますのでお見捨てなきようふしてお願いいたします。
？

第二話 放課後の甘いわな (その12) (前書き)

やっと更新できましたでも話し進んでねえ〜

第二話 放課後の甘いわな (その12)

倉橋が呼ばれて佐天たちの元に移動する少し前。
学は将真と向かい合って対峙してた。

「確かクラスメートの山咲将真やまざき しょうまだったよな？

一体どういっつもりだ？

狙いは何だ！」

学は最初は軽口みたいな感じだったが、最後の方は語気を荒げて厳しく詰問する。

目は視線だけで射殺す事も出来そうなくらい鋭い。

しかし常人なら、間違いなく怯えるほどの視線なのに将真は気だるげに頭を掻いているだけだ。

そしてしばらくした後大きな欠伸あくびを掻いた。

(めんどい事になったなあ？)

あくびを掻き終わった将真は改めて学をよく見る。(怖い顔しちゃ

てまあ)

さてどう言い訳しましょうかね？

下手な事言っただけに矛盾があったら、間違いなく仕掛けてくるだろっしなあ)

現に将真の言うとおりで、学は構えこそとっていないが両拳は強く握りしめられており、視線は将真の全体を完璧に捉えている。

油断も隙もかけらもないこれでファイティングポーズを取れば、臨戦態勢だ

（しょうがねえ、健児には悪いが洗いざらい喋るか。
考えて見れば俺も被害者みたいなもんだしな）

「答える気はないか：仕方ない気が進まないが無理やり口を割らせてやる！」

少し将真は考えすぎだったらしい。

沈黙の時間に耐えられなくなった学はついに、右足を後ろにひき、左手を手前に出し右手を頬につけ、フットワークを軽快なリズムで踏み出す。

「ちょっと待って待って！話す！話すからもっと穏便に行こうぜ…な」

将真は慌てて胸の前で両手の平を開いた状態で学を宥める。

「……転校初日のクラスメートを付け回すもしくはクラスメートの女子たちをストーキングするような奴に穏便もクソもないと思うが……まあ話しくらいは聞いてやる」

そう言った学はフットワークを止めた。

その後バックステップして将真から少し離れる。

万が一将真が殴りかかってきても、一歩では届かない距離だ。（話しのわかる奴で助かったぜ！健児の奴なら天誅とか叫んで問答無用で襲いかかってきただろうなあ）

学の冷静な対応に安心した将真は学に事情を話し始めた。

「……………本当かそれは」

将真が話し終わった後、ずっと黙って聞いていた学が疲れたような感じでそう言った。その後腕組みして、首を傾げる。

（まあ当然の反応だな…）学の様子を見ながら、将真は一人納得する。将真は要点をまとめて事情を説明した

健児に頼まれて力を貸した事（ただし報酬つき）

健児が学に妄想を抱いている事

そのとうの健児がタイムサービスの為に戦線離脱をした事それで仕方なく自分だけで尾行した事をだ。

「以上なんだが誤解は解けたかい？」

無言になってる学をいつまで見ていても、仕方ないので将真はとりあえず声を掛ける。

「……………解けるには解けたが転校初日でそこまで悪人に見えるというのがな……………善人ですとは言わないがそんなに悪人面してるとも思わないのだが……………」

と言った後、学は難しそうな顔をしてため息を吐く。

（まあ無理もないよな、転校初日でこんなトラブルに巻き込まれてその上変態妄想野郎に追っかけ回されるのオマケ付きだもんな）

将真はクラスメートに心から同情する。

「でこんな事してる場合じゃないんじゃないの？」

将真の言葉に学は我に返ると

「こんな事？ああ警備員への通報の事か！通報なんかしないぞしたとここで役には立たないし、どうせ優秀な警備員のほとんどは連続力ツプル殺人事件にかかりきりだろ、風紀委員は一部を除いて大多数はやる気がないからな普通の業務ならいざ知らず、殺人鬼がうろついているかもしれないこんな物騒な夜に、わざわざ動きたがる、バカはいねえよ。

まあタダ働きでモチベーション維持しろってのが無理な話した。さていつまでもこんなとこにいてもしかたねえ。

誤解は解けたから、もう早く帰って寝るんだな」

学はそう言って話しを切り上げようとした

「いやその事じゃなくて、初春と佐天の事だよ」

と将真が話しを続ける

「はあ？あの二人なら自警団の兄ちゃんが送っていったが…」

「その自警団のお兄さんが問題なんだよ」と将真が言う

「どづいつ事だ？」

「あの兄ちゃん多分不良とグルだ」

と将真は学が信じられない事を言う。

「グルだと！確かに初春たちを助けたタイミングは出来すぎに思えたが……そういう事は無いわけじゃない」

学はまだ信じられないので反論する。

当然だ将真の言ってる事が本当なら自分はまたしてもとんでもない失態をした事になる　何より初春たちが危ない。

「一つだけじゃないんだよな〜これが」

そう言っつて将真は人差し指をたてる

「一つじゃないだと？勿体ぶらずさつさと言え！」

学は将真に先を促す。

「落ち着けっつて、なあ他にも気になる点があるんだよ」

（戦い方見てる限り冷静な奴だと思っつたが　実際は熱い奴なんだな）

将真は心の中でそう思っつ。

「おい聞いてるのか！」

（おっつと、うっつかりしてたぜ）

「まあ待て焦るなよ　俺が気づいた事は言っつからさ」

「だっつたらさつさと言え！」

(ハイハイ)

「まずあの兄ちゃんが不良のスタンガン食らった時なんだが、あの時あの兄ちゃん絶縁体の手袋してたんだよね」

「確かに都合よすぎだなで他には」

「あの兄ちゃん蹴る時に相手の不良に、目配せしてたし……後決定的なのは潜んでタイミングが来てから登場したところかな」

と将真が言う。

「潜んでただと?」

「そうそう。」

潜んで、抜群のタイミングで出てきた訳。状況証拠ばかりだが、これだけ揃ったら疑うには十分だと思いがね。まさかこれだけ揃っても何も気にならない程ノー天気じゃないだろ?」

そう言っつて将真はニヤリと笑う。

「なるほど、お前の言う通りだ。」

偶然は何度も重なるものじゃない。重なると言う事はそれは…必然だ」

「判ってるんなら急いだ方がいいんじゃない?」

「そうだな。」

わかった礼を言う」 学はそう言ってきびすを返そうとする。

「後言い忘れたが多分あの兄ちゃん体付きから見てボクシングやっ
てると思うぞ〜」

と追加で将真が言う。

「わかった…ボクサーか…」

学が振り返らずに返事する

ヒュン

その時空を切り裂いて何か、学と将真に襲いかかった

「どついつ事だ？一人と聞いていたんだが…」

学と将真を襲った物体の先、そこには倉橋の仲間の兎島がいた。

第二話 放課後の甘いわな (その12) (後書き)

いかがでしたでしょうか？

それではご意見 ご感想 ポイント お気に入り何でも待っています
制限なしにしてるので、ユーザーでない人も感想かけますので、

お願いいたします

あくまで強制ではありません

第二話 放課後の甘い罠 (その13) (前書き)

次の更新です。

相変わらず話進みませんが読んでいってけると有り難いです

第二話 放課後の甘い罠 (その13)

「危ねえな」

「何だっただんだ？今の」

突然飛来してきた謎の物体を将真と学はなんとか避けていた。

なおその謎の物体は地面に刺さっている。

先は鋭く尖っており、長さは大体一メートルといったところが、まるで槍のような物体だそれが三本。

「何だこりゃ」

将真はそう言いながら、その物体に触れてみる。

「触って大丈夫なのか？」

学は周りを警戒しながら、将真を心配する。

「ああ大丈夫だ、毒とかは塗ってないな…固いな鉄か何かか？でも鉄とは違うようだ？」

将真はそう言った後、謎の物体から手を離れた。

「それだけか？他にわかった事は」

「ないなこれだけだ」

俺はサイコメトラーじゃないから、これ以上の事はわからねえ。

ただわかってる事は一つだけある。

もうあんたも判ってるとは思いが…これは能力による物だ」

そう言って将真は厳しい顔をする。

「つまり」

学も真剣な声で答える

「ああ、俺たちは今能力者に襲われているって事だ」

将真はそう言った後。物体が飛んで来たと思われる方向を睨むのだった

「ちっ避けたか運のいい奴らだ」

将真が睨んでいる場所からそう遠くない場所に児島は隠れていた。児島の予想では、不意打ちでカタがついてるはずだった。

何より二対一なので、仕留めたかったと言うのが本音だ。(ちくしよう、もう一人仲間がいる何て… どうなってやがる) 児島は隠れつつイライラしている

児島は大原から頼まれてここに来ていた。大原からのメールには一人残っている少年を万が一計画に気づかれたら障害になるので、その前に潰せという事だった。

それで自警団として、近づき油断しているところを隙をついて、攻撃するはずだったのだが、児島が着いた時には敵は二人になっておりまたこちらの計画が見破られていたので、慌てて奇襲をかけたという訳だが奇襲は失敗してしまい今に至る

「このまま隠れてても仕方ねえ、とりあえず見つからないようにし

て一人ずつ片付けていくとするか」

児島はそう決断すると、隠れてる場所から離れて、こっそりと気づかれないようにしながら、学たちに近づいていくのだった。

「で能力者として一体どういう能力なんだ？」

学は辺りを警戒しつつ近くの将真に話しかける。

二人は襲撃された場所から離れて移動している途中だ。

謎の攻撃を行ってきた能力者を探すためだ。二手に別れないのは、いきなり襲ってくるような奴に単独で挑むのは危険だからだ。

「そこまではわかんねえ、ただあの鋭い槍みたいな物で刺されたら、死ぬね」

「敵は殺すつもりと言っわけだな、だったら遠慮はいらないな」

そう言っている二人の背後に児島は回りこんでいた。

夜なのもあり二人はそれに気づいていなかった。

「よし後ろを取った。所詮はガキだな
伸びろ」

児島がそう呟くと彼の両手の爪が伸びだしてきた。

その伸び方は異常だ、僅か数十秒のうちに児島の爪は十本とも三センチ位に伸びてとまった。

児島大紀こしまたいき

彼はメタモルフォーゼの派生系能力

アイアンクロー（鋼鉄の爪）の能力の持ち主だ。

能力判定はレベル3　その能力は自身の爪　（両手足とも）を伸ばしたりその硬さを鉄の硬度まで引き上げる事や形を変える事が出来る限定的なメタモルフオーゼ（肉体変化）だ。長く出来るのは最大半径三十メートルくらいで（実際はもう二十メートル程いけるが、戻るのが大変なためこれにとどめている）

つまり二人を襲った謎の槍みたいな物体は兎島の爪だったのだ。

兎島はある程度伸ばした爪を切りはずした後鉄の硬さにして、やり投げの要領で二人に投げつけたのだ。

なお爪は伸ばすのが自由自在なので、ちょっとへし折ってもすぐに能力で伸ばす事が出来る。

学園都市全体のメタモルフオーゼの能力者たちの中では応用もあまり効かず、メタモルフオーゼの最大の利点　体全体の変化も出来ないが、そのかわり高度な演算は全くいらぬ接近戦ではいちいち武器を持たないでいいので無手をよそえるし、それに実戦ではそんなに伸ばさなくてもほんの数センチ伸ばしただけでナイフのかわりになる。

また兎島はさらに声に出して、イメージを明確にし演算の早さに磨きをかけている。

兎島は元々風紀委員だった。

長点上機学園の一年生で風紀委員は中学一年の時からやっていた長点の中でも能力もそれなりに高くまた格闘技や珍しい技術（手裏剣投げ）もあり風紀委員の中でも優秀な方だった。

しかし、中学三年の時受験のストレスから荒れだし、無能力者狩りや風紀委員の地位を利用して、気に入らない奴を罪に落としたり、挙げ句の果てには、万引きとかの軽犯罪を犯した犯罪者を見逃すかわりに体や金品を要求し、その被害が小学生の少女に至って、ついに風紀委員をクビになり資格を剥奪された（この程度ですんだのは、今までの功績と親が外の有名会社の重役であり、被害者がチャイル

ドエラーや無能力者であったためである)

その後高い戦闘能力を買われ自警団に入隊したのだ。

しかし一度曲がった性根は治っておらず、結局立場は違えども悪の限りを尽くしている。児島とはそういう男だ。

「よし今度はあまり長くしなかったが数は十本。

これだけの数を背後から投げれば一たまりもねえだろ

更に…尖れ！」

児島は折った十本の爪のかけらを今度は尖らせる。

児島は触れていれば、形 硬度 長さ を自在に操る事が出来る
ただし自分の爪だけで他人のは無理だが。

それでも人間凶器に変わりはない。

「これでよし硬度は鋼鉄と同じ硬さに…よし準備OK今度は外さねえ」

児島はそう言うと、狙いを定めて、手の中にある爪手裏剣を投げよ
うと構えた。

「畜生どこにいやがる？」

その少し前将真と学は辺りを探しまわっていた。

しかし見つからず途方にくれていた。

既に背後に周り込まれているとは、二人とも思うはずもなかった。

「仕方ないもと来た場所に戻ってもう一度探しなおすか？逃げたと思いたいがそんなに甘くはあるまい」

学はそう言ってもと来た道に引き返そうと方向を転換する。

「それもそうだな、陰険な野郎のようだし、コソコソどっかに隠れてるかもしれないねえ」

将真も同意して二人とも方向転換をする

方向を変えた学の目がその時暗闇に潜む人影を見つけた。

それは児島が爪手裏剣を構えたとほぼ同時だった（ちなみに学の視力は左右共に2・0である）

この人影を人違いで済ませるほど学はノー天気ではない。

学は相手が武器を投げようとしているのを見ると、すぐさま集中を乱すのと将真に気づかせるために、大声を張り上げつつ指で場所を示す。

「いたあそこだ！山咲あそこにいるぞ！」

学の大声と同時にその指差す方向を将真も見る

「くそ見つかった。
だがもう遅い」

見つかった児島は勢いよく学たちの方目掛けて爪手裏剣を投げるし

かなかった。

更にその後

「伸びるそして硬くなれ」

と言いながら、爪手裏剣の後を追うように走り出す。

手裏剣を避けた場合追撃を加えるためだ。走ってる間にたちまち児島の爪は伸びその長さは六十センチを超えて黒色に染まる（何故か最大限に硬度を高めるとこの色になる）別に声を出さなくてもいいのだが、声を出すことにより、変化スピードは半分以下になるためやっている（声に出さずやった場合、1メートル伸ばすのに大体一分はいる）

「何か投げて来たぞ！ それにその後ろにいる」

学は冷静に状況を判断しつつ、飛んでくる爪手裏剣を避けた。

将真も避けながら、避けられない分はカバンで打ち落としている。

「今度は手裏剣かよ。いくつ武器持ってんだ」

将真は飛来してきた最後の一個を打ち落とす。

「ふう危なかった」

将真は大きく息を吐いた後、爪手裏剣を拾いポケットに入れる。

どうやら武器にするつもりらしい。

しかし将真は気づいていなかった、敵の攻撃はまだ終わっていない事に。

「山咲！伏せろ」と言いつつ突然学が将真の後頭部をつかみ地面に、将真の頭を叩きつけながら自身も地面に倒れ込む。

間一髪！その僅か数センチ上を黒色の爪の槍（そう表現するしかないもの）が二本通り過ぎた。

正体は勿論兎島が伸ばした手の爪だ。

その長さは七メートルに達しており、学たちの背後の木を貫いている。

学が将真を地面に叩きつけていなければ、将真は死んでいただろう。

「痛いなあいきなり何しやがる藤田！つてまじかよ」

学に地面に叩きつけられた将真がおき上がる。

そこには木を貫いている長い爪をはやしている男が見えた

年は十六ぐらいか

身長は健児と同じぐらいで髪は黒髪を短く刈っている。それは今まで暗闇に潜んでいた謎の襲撃者の姿が月明かりに照らされた瞬間だった

時刻は午後9時40分学たちの長い1日はまだ終わりを迎えない。

第二話 放課後の甘い罠 (その13) (後書き)

いかがだったでしょうか？

もうおわかりの通り自分は英語は苦手です

なので敵の能力名おかしいと思ったら、こういつ名前がいいとか教えてくれたら、助かります。

ああ休みがもっと欲しい2日あればもっと話し進むのに…言い訳です
すね失礼しました。

ではご意見 ご感想 何でも待ってます

どうもありがとうございます

第二話放課後の甘い罠その(十四)(前書き)

やっと更新出来ました。
週1の休みだと厳しい！

第二話放課後の甘い罠その(十四)

「すみませんわざわざ送って頂いて」

「いや気にしなくていいよ。」

自警団いや男として当然の事だよ」

学たちが襲われていた同じ頃初春たちは、もう寮（初春の寮）の間近くまで来ていた。
当然初春たちは学たちが襲われているなど、知るよしもない。

「本当にありがとうございます。」

と初春のお礼の後佐天も続いて礼を言う

「あのマンションでいいんだよね？」

そう言つて大原は数十メートル先に見えている、茶色のマンションを指差しながら言う。

「はいそうです」

と初春が答える

「わかった。」

一応家に入るまでは護衛させて、もらつて

と爽やかな笑みを浮かべて大原が言う。
よく見ると目が笑っていないのだが、初春たちは気づかない。

「あの…」

佐天が少しもじもじした感じで緊張しながら大原に話し掛けてくる

「うん何かな？」

大原は柔らかな声で、佐天に聞き返す

それに佐天は意を決して言う。

「良かったら、初春の家でお茶くらいどうですか？後傷の手当ても初春この子こつ見えて風紀委員なんで傷の手当てとか得意だし」

「佐天さん！こつ見えてもはひどいですよ」

と初春が頬を膨らましながら、佐天に言う

「嫌それは悪いよ」

と大原は一応断ろうとするが

「いえ何もしないんじゃないよあたしたちの気がすみません
大したことは出来ませんが、少しでもお礼がしたいんです
ねっ初春」

「はい佐天さんの言う通りです」

お礼させてください

」

と初春も言う

「そこまで言われちゃ断れないな」

他の同僚には悪いけど女性に恥をかかせるわけにはいかないし…じやあお言葉に甘えて」

大原がそう言った時

三人はちょうどマンションの入り口にたどり着いていた。

「ではこっちです」

マンション（初春の寮）についた後初春は先にたち自分の部屋へと案内するのだった。

その後ろに佐天が続く。

だから二人は気づかない。最後尾の大原が携帯でメールをしながら、ほくそ笑んでいるのを

大原はメールをうち終わると携帯を片付けて早足で二人の後を追っていくのだった。

「また外したか？」

本当に運のいい奴らだ…戻れ」

児島がそう言うと、木に刺さった爪がシュルシュルと短くなっていった。

（ただそれでもまだ六十センチくらいの長さだが…）

それを起き上がった将真と学は見ていた

「爪？爪を伸ばしてやがったのか」

将真はそれを見て敵の能力を予想する

「爪を伸ばしたり戻したりするだけじゃないな？木に突き刺さってるところを見ると、硬さも操れるって事かさらに形も変えられるって事は身体強化というより

メタモルフォーゼか？随分癖のある能力のようだが、メタモルフォーゼの亜種って言ったところか？」

将真はあれこれ考えつつ、警戒体勢をとりながら、敵を見る。

（能力だけに頼るってタイプじゃないなあ

服着ててわかりづらいが、かなり鍛えてるな。

能力だけでも厄介なのに体術もあるとなると…厳しいな）

「あの男…間違いない兎島だ！」

将真が考えていると学の声が聞こえてきたので将真は考えを中断して学を見る

「ん知ってる奴なのか？」

将真は学に聞く。

「ああ！といつても名前と顔と主な経歴　それから能力ぐらいだが
な、直接の面識は今日が初めてだ」

「何者なんだ奴は？」

長点の制服着てるから長点の生徒なんだろうけど？」

と将真は首を傾げる

「後付け足すとあれば、自警団用の改造制服だから自警団の人間だ
な。

恐らく大原が足止めに寄越したんだろう。

山咲お前の言った通りだ。

俺は騙されたようだ。この分だと大原の野郎風紀委員や警備員に連
絡はしてないな」

と淡々とした感じで学は喋っているが、大原と呼び捨てにした事や
拳を強く握りしめている事からかなりの怒りを抑えている様子だ。

(何て事だ一度ならず二度までもしくじるとは…初春たちに送り狼
をまんまとつけちまうなんて)

学は己の不甲斐なさを心の中で恥じた。

「オイ藤田！」

将真の声が学を現実に戻す。

「何だ？山咲」

学はやっと気づいて返事をする。

「何だ？じゃねえよ
続きだ続き」

と将真は言っつて続きを催促する。

「ああ児島つまり俺たちの敵の事だな

奴は児島大紀一年前ぐらいまでは風紀委員やっつてた
ただ悪さをして、風紀委員を辞めさせられたがな。

でも腕は立つから特に近接戦闘ならレベル4とも互角以上に戦える
からその能力を買われて自警団に入れたんだろう。

能力はさっき見た通り限定的なメタモルフォーゼ奴の場合自身の爪
だな。

風紀委員の現役の時は戦闘時は爪に痺れ薬を塗って犯人を拘束して
たらしい。

今塗っているのかは知らないが、触れないにこしたことはない。
気をつける」

学が将真に注意しているとバキバキと何かが砕ける音がした。

「飛び上がれ山咲！」

と学が言っつと同時に地面から数本の尖った爪が飛び出してきて、二
人を襲うのだった。

「馬鹿な奴らだ

話しに夢中になるなんて」

下に向けた右手から鋭い爪を三本伸ばしながら、児島は言った。児島の爪は伸びて地面を突き刺している。

児島はコンクリートを突き刺し、地中を爪を通して学たちを攻撃したのだ。

学たちの話しをただ黙って聞いていた訳ではなかったのだ。

「さて急の地面からの奇襲には対応できないとは思うが…念のため死体の確認をしておくか？」

何しろ常盤台襲撃という大仕事が待ってるんだ。

下手はうてない」

「だったらもう下手うつてるな」

「あんたマジで俺ら殺そうとしやがったな！もう許さねえ」

突然2つの声が児島の耳に入ってきた。

一つは間近く、もう一つは頭上からだった。

「何だと！あれをどうやって？避けれるはずがない」

児島が信じられないと呻いている間に、学は既に自分の射程距離まで距離を縮めている

「悪いが耳と目はかなりよくてね！」

そう言いながら学は右ストレートを児島の腹にぶち込む。

身長差を考えると顔面に当てようとすると、上に向かって打たない

といけないため、遅くなるので、腹にうちこんだのだ。

鈍い衝撃音の後

児島は、体を丸めて

呻き声を上げる

「ぐはっ！」

その児島に更に空に浮かんでいる将真が急降下して追撃をかける。

「風力使い（エアロシューター）か？」

急降下して自分に向かってくる将真を見て思わず児島は叫ぶ

「そう思うんならそう思いな！」

将真は勢いを利用してそのまま空中からドロップキックを放つ。

（ガードが間に合わない！）

右手の爪を戻しきれていない児島は将真の攻撃に対応できず、もろに直撃を食らって吹っ飛ぶ

「俺らの勝ちだ！」

ドロップキックを決めた後将真は叫ぶのだった。

第二話放課後の甘い罠その(十四)(後書き)

いかがだったでしょうか？

次の更新は何とか今日中にしたいと思っております

では次の話しの前書きで読んで頂きありがとうございます

第二話放課後の甘い罠その(十五)(前書き)

今晩は難産の上ようやく投稿です

それでは楽しんで頂ける事を祈りつつ？

第二話放課後の甘い罠その（十五）

「やったのか？」

学はドロップキックで吹っ飛んで木の根元に倒れている児島を見て言う。

「もろに食らったはずだけどな？」

そう言ってドロップキックを食らわして地面に着地した将真が、学の方に歩いてくる。

「そうだといいがな」

そう言った学は将真の方に寄っていき合流する。

「しかしさっきは危なかったな」

そう言って将真はさっきの事を思い出す。

学が地中からの爪の音に気づいて慌てて飛んで回避した後。将真は能力を使って空に浮き、学は児島が地面に視線を集中している間に

（地中を掘り進むとかなりの演算がある）

一気に近寄り、それが早かったため児島はいきなり現れたと思った

のだ。

後はボディー一発、将真のとどめである。

「そうだな。

後少し気づくのが遅ければ危なかったな

それにしても風力使い（エアロシューター）とはな」

そう言っつて学は将真と話すが視線は倒れている兎島からは離していない。

「なんだお前もそう思っつてんのか？

残念だが俺は風力使いじゃないぜ。

俺の能力はそんな便利なものじゃない」

と言っつて将真が笑う。

「ほうっじゃあ念動力か？」

と学が聞く

「いやそういうのでもない。

特殊な能力で使い勝手が悪いんだ。

そっちは？」

と将真が聞く

「別に取るにたらん能力だ。

カロリーコントロールと言っつて、いくら食べても太らないという甘い者好きの女性には理想の能力だよ」

（まあそれだけじゃないが…それをわざわざ言っつこともあるまい）

「へ〜カロリーコントロールねメタモルフォーゼの一種か？」

「弱いメタモルフォーゼのな、でそつちの特殊な能力って？」

「あ〜そうだったなそつちの聞いてこつち言わないって訳にもいかなえもんな。

俺の能力は」

「待て！」

と将真が言うのを突然学が止める。

「なんだよそつちが聞きたいんじゃないのか？」

「残念ながらドロップキックじゃ決まらなかったみたいだ」

そう言って学はため息を吐いた。

「まじかよ〜顔面に全体重乗せた蹴りだぞ

」

と将真はうんざりした感じで言う。

「向こうがこつちが思ったより、タフだったようだな」

そう言って学は鋭い視線を向ける。

その視線の先には目を血走らせた児島が立っていた。

「くそやってくれたな」

児島は何とか立ち上がり憎い敵たちを睨む。

「ちくしょう、なんてタフなんだ！」

と将真が毒づく

「くそガキ共が！」

命だけは勘弁してやるつもりだったが：もう容赦はしねえ：殺してやる」

児島は怒り狂った声を上げ能力で爪を伸ばす。

「はあく勘弁してくれよ」

と将真はがっくりと両肩を落とす。

「仕方ない倒れるまでやり合うしかないな」

そう言っただけで学はファイティングポーズを取る

「いや待てこいつは時間稼ぎがしたいだけだ」

と言っただけで将真が学の肩に手を乗せ言う。

「ではどうする？逃げるのも難しいぞ？」

背後からあの爪に貫かれたら、ひとたまりもないぞ」

そう学は言っただけで視線は児島に向けたままだ。

「わかってるよそんな事はだけど初春たちが危ないんだろう?」

と将真は真剣な表情で言う。

「それはわかっているが…」

「だから俺が奴を止める。」

その間にお前は初春たちの寮に向かえ、場所は知ってるか?」

「学校指定の女子寮だろ茶色の、それなら知ってる」

「そこまで知ってるなら大丈夫そうだな?

だったら早く行きな

俺が奴を食い止めておく。

あつ、それと俺と健児が尾行した事はくれぐれも二人には内緒にしようとしてくれよ」

と言って将真は学に拜んで頼む。

「わかってる。」

もとより二人に言うつもりもない…だが大丈夫か? 奴は元風紀委員で近接戦のエキスパートだぞ」

「わかってるよ。」

ただ者じゃねえってことは、でもこつちもレベル3条件は同じだ」

そう言って将真は鋭い視線で兎島を見る

「わかった山咲すまんが奴を食い止めていてくれ、その間に大原は俺が倒す。そして二人の無事を確認したら、すぐに戻る」

と学はすまなさそうに頭を下げる

「気にするな。」

これでも修羅場はくぐり抜けてきてる

それよりさっき言った事忘れてないだろうな大原はボクシングをかなりやってるぞ」

「わかった気をつける時間がない俺はもういくぞ」

そう言っつて学は会話を切り上げ走ろうとする

「待て！」

それを将真が止める

学を呼び止めた将真は学の近くまでより、近くまでよったら、足元にしゃがんだ。

「何だ？ 一体」

学がそう言っつて話かける

しゃがんだ将真は何も言わず学の靴に両手をのせる。

「山咲時間が」

将真の行動が理解出来ない学は声を張り上げて山咲に注意する

将真は靴に両手を置いたまま学を見上げて不敵に笑う

「さっき俺の能力いいそびれちまったな
だから口で言うより、実際に見せてやるよ
これは俺からの餞別だ受け取りな！」

そう将真が言うと将真の手が光ってその光が学の靴を包んだ。

やがて光は収まりその後、将真は両手を離し立ち上がった。

「何をしたんだ？」

学が問うと将真は学の靴を指差す

「言っただる餞別だって、それなら走るより早く着くし、体力もそ
んなに使わない」

将真はそう言うと、再び児島に向き直る

児島は今だ動いていない。

やはりダメージが大きいのだろう

将真たちが話しているのをいい事に回復に専念しているようだ。

一方学は将真に指差された自分の靴を見た

「何だこれは！」

学は靴を見て驚きの声を上げる。

何故なら学の靴はいつの間にか靴底にローラーがついていたからだ。

「これが俺の能力だ」
将真は学にそう答えた。

オプション レベル3

道具や物に別の物の機能を追加することが出来る
これが将真の能力だ

しかし条件がある

1 触れないと能力は使えない

2 生き物や薬品、自然のものには使えない

3 あくまで機能の追加で強化はできない
例手榴弾を核爆弾とかには出来ない。

4 一つの物に対し追加機能は一つだけ

5 追加機能を与えた物は三つまでしか同時に使えない それ以上になると一番古い物から効果が無くなる

レベル3なので色々制限はあるが、将真が追加機能をつけた物はよほど高度な機能でないかぎり、本人が能力を解くか3つ以上の制約による強制解除以外では能力は解けない。

さっき将真が空に浮かんだのは靴に飛行機能を追加したからだ。

ただし追加機能をした物は将真から離れ過ぎるとそれが高度な機能な場合、機能が正常に作動しなかったり、能力が解けてしまう場合もある（演算が難しいためそうなる。単純な機能なら問題はない）

将真自身はこの能力をオプシオンとは呼ばずコストダウンと呼んでいる

理由はその機能付きの道具を買わないですむからだ。

服も数百円単位の服に能力でブランド物並みの長持ちの良さや通気性をつける事も出来る。

能力効果や応用性は高いが制約も多いためレベル3止まりだ。

「そのローラーを使えば体力をあまり減らす事なく、寮にたどりつけるだろう？」

俺も間に合うならこいつ片付けて援護に向かう。

本当は電気で動いたり空飛べるようにしてやりたいが、それだと演算が高度になりすぎて俺から離れたら、効果が切れる恐れがあるだからそれで勘弁してくれ。

それぐらいの機能なら俺が能力を解除するか4つ目作ったりしない限り効果は消えないはずだ。

急ぎな！ヒーローは遅れるのが相場だが間に合わなきゃ意味がない。女の子なんだ命や怪我をしてなくても無事とは言えないぐらいわかってるよな」

そう言っつて将真は学に念を押しす

「もちろんわかっている。

餓別ありがとう礼を言っぞ山咲！」

と学が大きな声で礼を言う。

「礼は初春たちを助けた後いくらでも聞くさ」

「ああ！飯を奢らしてもらっ」

そう言っつて学は将真に手を振る

「じゃあ行ってくる 無事でいろよ」

そう学は言っつと学はローラーブレードと化した。

己の靴で地面を思いつき蹴っつてその場を後にする。

初春たちの寮に向かって全速力で

その後ろ姿を将真は手を振っつて見送つた。

「さて待たせたな、こっからは俺とタイムンだぜ兎島さんよ」

そう言っつて将真は兎島の方を睨む

「ふん二人がかりなら勝てたかもしれないものを…俺も舐められたものだ」

そう言っつた兎島は首をコキコキと振る。

その後、ジャンプを何回かする

軽快な感じから見てもダメージはかなり回復したようだ。

「時間をくれてありがとうな。」

お前らが喋ってる間に大体ダメージは抜けた」

「そうかい？だったら第二ラウンドを始めるとするか」

そう言っただけで将真は懐からさっき拾っておいた兎島の爪手裏剣を取り出す。

「それは俺の」

少し驚いた声で兎島が将真の持っている爪手裏剣を指差す

「ああ自分の武器をくらいな！」

将真はそう言っただけで手に持っている、爪手裏剣を投げつけた。

（藤田に能力を使ってローラーブレードを作ったから、戦闘に作れる武器は二つが限度あいつがいつ到着するかわかるのなら解除出来るが、それを知ることが出来ない以上解除してまだ着いてなかったら大きなロスになる。

仕方ないことは、二つの武器で切り抜けるしかないな）

将真は頭でそう考えながら、爪手裏剣をよけた兎島に飛び込んで行った。

戦いの第二ラウンドは将真の先制攻撃によって幕があいた

「ちよろいものだ。
女なんて特にこう人がいい世間知らずの子供などなおさらだ」

将真が第二라운드의火蓋を切った少し後　初春の寮では、大原が笑みを浮かべタバコを吸っていた。

「さてこのまま犯して撮影して目的を果たしてもいいが、倉橋を呼んでるからな、来た時先に頂いていたらあいつ怒るだろうしな
仕方ない待っても五分だろ。」

十分待つて来なかったら始めるとするか

それにしても常盤台襲撃という大仕事の前にいくら仲間集めのためとはいえ、厄介な仕事持つてきやがる。

そこまですて勧誘する絶対等速役に立つだろうな。
イコールスピード

まあイコールスピードの気が済んだ後はこのお嬢ちゃんたちには、たっぷり稼いでもらおうとするか」

そう言った後大原はタバコを吸い終わる

大原のいる部屋の床には二人の少女が倒れていた。

二人は自分たちに迫る魔の手に気づかず、すやすやと可愛い寝顔で眠っている。

「んつながらんぞ？」

将真の奴どうしたんださつきからメールしても電話しても、全く出やがらねえ」

タイムサービスの生死を賭けた戦いに、勝ち食材という戦利品を手

に入れた健児は、一旦寮に戻って、戦利品を置いた後、将真の居場所がわからないため、将真にメールと電話をしていた。しかし全くつながらず途方にくれていた。

「どうなってんだ全く電話どころかメールも返さんとは？」

健児はまた電話を掛けるがやはり出ない。

「仕方ないしらみ潰しに探すか？」

そう言っただけで健児が携帯を片付けてポケットに入れようとした時

「何だ！あれは？」

健児の視界に物凄いスピードで道を駆けていく人影が見えた。健児のいる反対側の歩道をもうスピードで進んでいる。初春たちの元に向かっている学だ。

その人影の正体に間もなく健児も気づいた。

「あれは藤田ではないか？……間違いない！一体どこに向かっているんだ？」

それに将真はどうしたん……まさか！」

健児は藤田を見ながら考えを巡らせやがて、状況から一つの答えにたどり着く

「いや間違いない、将真が見あたらないし、さっきから連絡はつながらない……なんという事だ将真がやられたというのか？しかし信

じられん。

奴は俺と同じレベル3だし、俺ほどではないが近接戦や武器の扱いにも慣れてもいる。

しかし連絡もつながらないし、やられたなら姿の見えない事も、辻褄が合う」

健児は己の考えを、間違いないと確信する

「しかし初春たちはどこだ？

ん藤田の行く方向は待てよ……なんて事だ初春の寮のある方向ではないか、奴めホテル代をケチって寮で犯るつもりか！

なんて獣だ。

おのれ将真の敵だ。

もうクラスメートでも何でもない、風紀委員警備員いや天に変わってこの長田健児が成敗してくれる。

たとえ神とて邪魔はさせんぞ。

藤田覚悟しろ！」

そう言った後

健児は藤田を親の敵でも見るような目で、見ながらその後ろ姿を全速力で追っていくのだった。

第二話放課後の甘い罠その(十五)(後書き)

いかがでしたでしょうか？

ではご意見 ご感想

ポイント何でも待ってます

最後まで読んで頂きありがとうございます。？

第二話放課後の甘い罠(その16)(前書き)

こんにちはやっと更新できました

途中で説明文が増えてますが、ご了承ください？

第二話放課後の甘い罠（その16）

「はあはあ急がないと」

学は健児が後ろから鬼の形相で追いかけてきている事など、全く気づかずひたすら前を、向いて第七学区を駆け抜けていく。
目指すは初春の寮

「こつちか？道がややこしいな」

一方時を同じくして目的は違えども、同じ場所を倉橋も目指す

「倉橋の奴いつまで待たせるんだ早く来い！」

二人の男が目指す目的地で、一人待つ大原

「逃がさんぞ藤田！」

事情を全く知らず己の勘（というより妄想）で目的地初春の寮を目指す健児

三人の男が向かい
一人の男が待つ

それぞれの思惑を胸に時は流れていく。

激戦の火ぶたが切られるのも近い。

「くそ！昔腕利きの風紀委員って言うだけの事はあるな」

学より一足早く激戦の火ぶたを切っていた将真は苦戦を強いられていた。

場所は第七学区内にあるとある公園。

将真は左手から鮮血を垂らしながら、一人呟く

どうやら敵の攻撃を受け負傷したようだ。

将真の先制攻撃は失敗した。

爪手裏剣を投げつけた後突っ込んだが、児島は避けると同時に爪を伸ばしてきて、それを将真はかわしきれず手の甲に僅かにかすってしまったのだ。

その後二人は交差し、将真は大きく距離をとって今に至る

児島は爪に付いた将真の血を舐めながら、将真を見ている。距離にして十メートルほど離れているが、児島には爪手裏剣と伸びる爪があるので、射程圏内だ。

「血が止まらないな 仕方ない」

将真はポケットからハンカチを取り出し、それを手の甲に乗せる。

(オプシオン追加機能ガーゼ)

将真は能力を使用しハンカチにガーゼの機能を追加して傷口に被せ

る。

(応急処置完了…だがこれで機能付加はあと一つしか出来ないな
寮に帰れば拳銃ぐらいあるが…ないものねだりしても仕方ない
素手で勝てる相手でもないし…参ったな)
将真は何とか活路を開こうと思いを巡らすのだった。

一方いつの間にか血を舐めるのを止めていた児島は携帯片手に電話
をしていた(おいおい)

相手は大原だ

「だからガキがもう一匹そっちに向かったんだ！……何でちゃんと
足止めしとかないって…仕方ないだろ！二人って知らなかったんだ
から…とにかくこっちは一人片付けたらそっち行くから、残りの一
匹は倉橋と二人で何とかしろじゃあな」

そう言っただけで児島は電話を切った。

「全く…倉橋待ってるって妙な遊び心、だしやがって、腕はいいが
あの野郎は全く……そうだ倉橋にも急ぐように言っとくかああいつ
ならメールでいいだろ。」

大原の場合は詳しく教える言ってくるから、電話の方が手っ取り早
いんだがな」

そう言っただけで児島は今度は倉橋にメールを送りだした。

「あれか？もう少しだな」

児島がメールを送ったその頃、倉橋はというと初春の寮に着く寸前だった。

倉橋の所から距離にして約五メートルほどの前方に茶色の建物がある。

それが目指す目的地　初春の寮だ。

「さて、大原さんも待つてる事だし急ぐとしますかね」

そう言つて倉橋が走ろうとすると、携帯がメールの着信をつげた。

「やべ！大原さんからか？」

メールに気づいた倉橋は慌てて、携帯を取り出し確認する

「…なんだ児島かよ」

倉橋は大原ではなかったので安心して、内容を見た

「ガキが一匹こっちに向かつてるね。」

しかし児島の奴が一人しか足止め出来ないとはな。

あの役立たずの三沢はあっさりやられるし、今回はいつもと違って厄介だぜ。

でもまあ大原さんがターゲットを無力化してるし、後少しだ踏ん張るとしますかね」

そう言つて倉橋はため息を吐いた後携帯を片付けた。

倉橋かほひ一雄

児島大紀（だいき）　三沢　栄司（えいじ）　大原義人（よし

と）　この4人は仲間で悪党だ。

倉橋と三沢は元スキルアウトで大原と児島の二人が元風紀委員だ

暗部と言うほどの規模ではないが、レイプや強盗は常習犯という連中だ。

主な手口は大原がイケメンなのを利用して、倉橋や三沢が絡み、それを大原に助けさせるベタなやり方だが、実際怪我をわざと作ると人間血を見たりしたら冷静な判断が出来ないので引つかかる

（その前に倉橋らがターゲットをたっぷり痛めておいてありがたみも増やしておく）

こうやって助けた女たちの自宅とかイケメンの大原ならそのままホテルとかに行つて隠しどりした写真や映像で脅しさんさん楽しんだ後、援交や金持ちに貸し与え金にする。

という女の敵なのだ

ただ今回は商売ではなく、倉橋が知り合いの不良から常盤台襲撃の為にイコールスピードを仲間にしようと誘ったところ、憎い白井黒子の友人初春をいたぶってくれとの要求だったため、倉橋達に依頼がきたのだ。

彼らは暗部ではないが、知り合いのために（もちろん報酬ありで）さながら暗部のように仕事することもある。

なお4人のリーダーは大原でその下に児島がいる。

たまに知り合いのスキルアウトや不良に助っ人を頼むが基本はこの4人である。

倉橋と三沢は無能力で大原はレベル2の異能力（ただしボクシングのB級ライセンスを持つてる凄腕）

児島はレベル3の強能力のため、この二人が上の立場である。

ただ倉橋は児島は能力使われたら勝てないが能力なしなら自分の方

が強いために對等の立場を取っている。
あと三沢は三人のパシリであり4人の中で一番弱い。

それと彼らが常盤台襲撃などという無謀極まりない計画に参加したのは報酬が良かったのと、常盤台の能力者による無能力者狩りで、仲間が大怪我を負わされたからである。

今回の彼らの常盤台襲撃は言わば仲間の敵うちであり、復讐だ。
無論彼らも全ての常盤台の生徒が襲撃をかけてきたとは思っていないが、警備員に何度訴えても、もみ消され取り合ってくれなかったので、彼らの怒りは頂点に達しているという事情もある。

しかし相手は常盤台、勝つ為に手段を選んではいたら負ける。
そのため常盤台に恨みを持つ能力者を金で雇い闇ルートで最新鋭の装備を買い集めた。

でその雇った能力者の一人が出所したばかりのイコールスピードである。

「大原さん怒ってなきやいいんだが」

倉橋は言い訳を考えつつ、初春の寮の建物に入ろうとしたその時

ズザザ!

地面を擦る凄まじい音が背後から聞こえてきた。

音に気づいた倉橋は慌てて振り返り声を上げた。

「なっ！」

振り返った倉橋の眼前そこには握り拳があった。

学の滑走の勢いを利用した右ストレートだ。

ドガッ

倉橋の意識があつたのはその鈍い音を聞いた時までだった。その後数メートルほど吹っ飛んだが、既に意識のない倉橋は知るよしもなかったのは、言うまでもない。

「危なかったな！ 合流する前に片付けられて良かったぜ。くくつたりしなくてもしばらくは寝てるだろいそがねえと」

右ストレート一発で倉橋を沈めた学は、すぐさま険しい顔で初春の寮を見上げた。

ほんの数秒ほど初春の寮を見上げた後、ローラーブレードの車輪を外して普通の靴に戻した。

学は全速力で寮の入り口をくぐり階段を駆け上がっていくのだった。

第二話放課後の甘い罠（その16）（後書き）

いかがだったでしょうか？

今日中に次の話を投稿したいと思っております

最後まで読んで頂きありがとうございます
ご意見 ご感想

ポイント お気に入り登録 いつでも待っております

第三話 決戦初春寮

学？大原 その一

(6月20日

修正)

(前書き)

今晚はご指摘のあった二十二話修正しました
修正して上手く行っていたらしいのですが
良かったら見てみて
下さい

学が寮の階段を全速力で駆け上がっていつている頃

将真はじれていた。

何故なら携帯でメールをしている児島に隙がなく攻撃が仕掛けられないでいるからだ。

倉橋にメールを送った児島は、その事を大原にメールを送って報告していた。

まさかメールを送ってすぐに倉橋が、学にやられたなど、神でない児島は知るよしもない。

大原にメールを送り終わった児島は携帯をしまつと将真の方に、向き直った。

「おやおや随分優しいんだな？せっかくのチャンスに仕掛けてこないとは、隙だらけだったのに」

児島はそう言いながら、ニコニコ笑っている

「けっ！何が隙だらけだ。

隙なんざかけらもないやつが、よく言うぜ」

将真はそう言った後地面に唾を吐く。

「そうか。それは失礼した。

今度からは仕掛けられるだけの隙をあけるようにしよう」

「そんなつもりは欠片もないのに、そう言う事言うんじゃないやねえよ」と児島の一言を否定する

「その通りだから反論も出来ないな。

まあいい、さてお互い仲間が待つてる事だしさっさと決着をつけるとするか…伸びろ」

そう児島が言い終わった後、またしても児島の爪が伸びてきた。

そして伸びた爪を、二本ほど八十センチ位に伸ばし伸びた爪を折る。折った爪の先が鋭く尖り、その爪の剣二本を児島は両手に一本ずつ持った。二刀に持った爪剣を児島は上下に振って素振りする。

一方の将真はそれを見ながら、自身のズボンのベルトを抜き取りそれに能力を付加する

(オプション ベルトにブーメランの追加機能)

将真はベルトにブーメランの機能を能力で付加すると、背後に飛び退くと同時にそれを投げつけた。

そのベルトは真っ直ぐ児島目指して飛んでいく。しかし児島はそれをあっさり首を振って避ける。

「もうしまいか？

では死ね！」

児島は叫びながら、素手の将真に二刀流で切りかかって行くのだっ

た。

それを将真はバックステップで背後に飛びつつ、必死に逃げるのだった。

「ここだ部屋番号は…あった」

初春の寮の階段を全速力で駆け上がり切った藤田は、初春の部屋の前にいた。

今すぐ飛び込んで行きたいところだが、気持ちを抑えて、息が整うまで待つ。

そして息を整え終えた学はバンテージ代わりに手袋をする。

倉橋が寮に来ていたという事は大原は倉橋を待っていた事になる。

まあ確率的に仲間を待っている奴が、仲間の到着を待たずに事をおこすとは思えない。

なので学は入念に準備を整える。

準備の終えた学は、初春の部屋のドアをゆっくり、静かにあけると息を殺して、部屋に侵入していった。

「どうした？ただ逃げてばかりでは、どうにもならんぞ！俺と同じレベル3なんだろう？だったらもう少し楽しませろ」

そう言いながら、兎島は二本の爪剣を振り回して将真に斬りつけてくる。

将真の能力では3つまでしか物に追加機能を付けられない。

次に能力を使うには、3つのうちどれか一つを解除しなければならぬ。

しかし一つは止血のために必要で、一つは学のために使っているの

で解除出来ない。

そして3つ目は勝利の為に必要だ。

だから将真は防戦一方に徹するしかない。
でも決して勝機が無いわけではない。

将真はその時のためにひたすら耐える。

だが耐える将真に兎島はさらなる激しい攻撃を加えてくる。兎島の爪剣は切れ味 硬度ともに真剣と変わらないが、爪である事に変わりないので軽い。

そのため凄まじい斬撃を繰り返しても、真剣ほど疲れないのだ。

その利点を最大限に利用し三連 四連と連撃を休みなしに放つてくる。

しかし将真は耐える、耐えるしかない。
機が熟すまで。

「藤田の奴め！見失った」

親友将真が激戦を繰り広げていた時、健児は学を見失っていた。

学と違い、寮の場所をちゃんと知らない健児は途方にくれていた。

「困ったぞ！さてどうするかこのままでは、初春たちが獣の毒牙に掛かってしまう 何とかそれだけは避けねば」健児は初春たちの無事を祈りつつ、歩きながら考える。

（闇雲に歩いて探しては遅くなってしまふ。
地図を買って見てもいいが…いやだめだ。

滅多に地図など見ないからそれだと時間がかかるし…ええいやむを得ん。

（ここは人に聞くのが手っ取り早い！）

そう決めた健児は周りを見回して人を探す

「知ってそんな奴、知ってそんな奴…ん？
あいつだ！」

周りを見ていた健児は寮の場所を知ってそんな人物を見つけた。

健児は慌ててその人物を追っていく。

「すまん！少し聞きたい事があるんだが、教えてくれ」

そう言っただけ健児はその人物に声をかける。

「はいどういったご用件ですか？ただしナンパだとお断り致します
のであしからず」

健児が声をかけるとその人物がそう言いながら振り返った。

人物の正体は風紀委員の腕章を付け常盤台の制服を着た美少女だった。

（うん？風紀委員なら見回りで知っていると思ったが、よく見たら

常盤台の制服じゃねえか（鈍いよお前）つまりこいつは常盤台の生徒かよ、しかも男に話しかけられたからってナンパと思うなんて…まあ常盤台の生徒はよくナンパされているのは見かけるが）

健児は風紀委員なら知っていると思ひ話しかけた少女が常盤台の生徒と知り戸惑った。

健児は上位能力者が苦手だ。特に名門校の連中は能力至上主義が徹底しているからだ。

まして入学条件にレベルを設定している

常盤台など最たるものだ

（まあ例外もあるが）

（どうする？話しかけたし、とりあえず聞くだけ聞くか？）

と健児が考えていると風紀委員の少女が、話しかけてくる。

「で、私忙しいのですが、他にも回らないといけない場所が沢山ありますの。」

早くご用件がおりならお話しくださいな」

そう言つて健児を風紀委員の少女が急かす。

「ああ悪かった。

実は柵川中学の女子　初春飾利の住む女子寮に行きたいんだが、常盤台のお嬢様

知ってるか？」

風紀委員の少女にせかされた健児は早口で要件を伝える。

それを聞いた少女は少し首を傾げた後

「初春の寮ですの？　　初春の寮に何の「用が？」
と首を傾げる

「え〜つとそれはだな」

（困ったな本当の事を言ってもいいが、言ったらこの常盤台のお嬢様は初春の寮に駆けつけるだろうしな…　そんな事になったら、あの獣の餌食になるのは確実だし、常盤台だから能力は高いだろうが能力に頼るだけの奴などいくらでもつけ入る隙はある。
みすみすあの獣に極上のエサをくれてやるわけにはいかん。
ここは適当に話しをでっち上げるか）

「ああ実はその女子寮に届けなくてはいけないものがあってな」

「はあ？わざわざこんな時間にですの？」
と疑いの眼差しで少女は健児を見る

時刻は午後10時を回っている。

中学生なら就寝しているものもいるだろう。

こんな時間に届けものなど、怪しいのは当たり前だ。

「これには深い訳があつてだな…」

と取り繕うとするが、上手い理由が見つからない。

冷や汗を流しながら、考える健児に更に白井が質問をぶつける

「私、風紀委員の177支部所属の白井黒子と申します。
制服でわかると思いますが、常盤台中学の一年生です。」

ところで遅くなりましたが、あなたはどなたですか？」

と白井黒子が自己紹介をする

(答えなきやまずいよな)

健児はそう思い慌てて自分も自己紹介をする。

「長田健児、柵川中学校の一年生で初春飾利とはクラスメートだと健児は包み隠さず自己紹介をした。

「その初春のクラスメートが夜中に初春の寮に何のご用ですか？まさか夜這いでは！」

黒子は思わず大きな声で夜這いを強調して言う。

それを聞いた、通行人が、健児たちの方を見る。

「違うわ！！それに夜這いなら、道聞いたり何かせんわ」

健児も思わず黒子に負けないぐらいの声で叫んだ。

またしても声に反応して通行人が健児たちの方を見る。

「くっ！目立ちすぎだ場所変えるぞ」

そう言って健児が「こっちだ」と言いながら走ろうとするのを、黒子が健児の服の裾を掴んで止める。

「何だよ？ここで見せ物になってる方がいいのか？」

健児が自分を掴んでいる黒子に言う。

すると黒子は口元に人差し指を持ってきて、静かにとジェスチャーで教える。

「何だよ」

と健児が黒子に聞いた。

「お静かに集中出来ませんわ」

黒子がそう言った、次の瞬間二人の姿は消えたのだった。

黒子が場所変えのためにテレポートしたのである。

通行人たちはしばらく黒子達のいた場所を呆然と見ていたが、やがて移動を開始しだし、その場所を離れたのだった。

一方テレポートした黒子と健児は、とあるコンビニの駐車場にいた。黒子の能力でここに来たのだ。

二人の手にはジュースの缶がある。

コンビニで健児が二人分買ったのだ。

二人はジュースを飲みながら、話しの続きをはじめた。

「それで初春の寮に何のご用がおりますの？」

と黒子を買って貰ったヤシの実サイダーを飲みながら言う。

ちなみに健児は夜遅いので、眠気覚ましのブラックコーヒーである。

なお彼の就寝時間は9時である（小学生かよ）

「だからさっき言った通り届け物があるんだよ！」

と健児が説明するが、白井は全く信じない。
それどころか。

「嘘はいけませんの」「や

「怪しいですわね」などと行って更に追求してくる。

（参ったな〜まあ風紀委員なら疑って当然かあ〜さてどうしようか。
常盤台のお嬢さまだから、金で何とかなるとは思えないし。
かと言って本当の事を言うわけには）

健児は良い考えが思いつかず黙り込んでしまう。

「どうなされましたの？」

やはり怪しいですわね確かこの辺りに風紀委員の詰め所があるので、
そこに来て頂いてお話を聞かせて貰いましょうか？」

白井のその言葉に黙り込んで考えていた、健児は慌てて、弁解する

「だからやましい事は何も無いんだって」

「では何故初春の寮に行きたいのですの？ やましい事がないの
ならばつきりと理由を仰って下さいな？」

と黒子が下から健児を睨みながら言う

「いやそれは…だな　えっと」

（駄目だ上手い言い訳が思いつかん！

仕方ない風紀委員の詰め所なんぞに連れて行かれるなんて、「冗談じゃないし、こうなったらこいつ失神させて他の奴探すか？

いや駄目だ！さっき名乗ったのにそんな事したら、公務執行妨害で拘束されちまう。

困ったぜもうこうなったら本当の事言うか？それにしてもしつこい奴だな、うちの妹もしつこい性格だがここまで…うん…待てよ　…そうだ良いこと思い付いたぞこれなら、怪しまれない）

よい言い訳を思い付いた健児は慌ててそれを告げる

「待てよ待ってくれ、怪しいもんじゃねえよ実は初春の寮には俺の妹がいてよその妹に用事があるんだよ」

「はあ妹ですの？」

「そう妹に用があるんだよ」

「それで初春の寮に妹さんが住んでいると言う訳ですね」

「そうなんだよ」

「それで妹さんにどんな用がおありですか？」
と黒子は今だ追求の手を緩めず質問してくる

（しつこい奴）

健児は心の中で、そう思ったが、顔には出さず、思い付いた言い訳を言う。

「金借りに行くんだよ」

「まあ妹さんにお金を借りるなんて、お恥ずかしい殿方ですの。私呆れましたわ」

白井は盛大なため息を吐き出し、軽蔑の眼差しで健児を見る。

「ほっとけ！それにあいつの方がレベル高いから金持ちなんだよ」

「そうだとしても、兄が妹にお金借りるなんて、でもさっき届け物と言っていました。それがそれは何ですか？」。

(何でそんな事まで覚えてんだよ)

健児はうんざりしながらも白井に答えを返す。

「担保だよ担保！タダで妹の金にたかったりしねえよ」

「妹からお金を借りる事が問題なんですの、今からそんな事では将来甲斐性なしになってしまっただ嫁のきてがなくなってしまうですよ」

と白井が健児を説教する

(何で、知り合っただばかりの奴にここまで言われなきゃならねんだ？でも一応納得はしてくれたみたいだな)
健児は内心の怒りを抑えながら、笑顔で白井に言う

「納得してくれたか、まじ死活問題なんだよあいつから金借りねえと、でも振り込んでもらったりしたら、仕送りしてる親にばれちゃうし、こっそり借りるしかねえんだよ」

健児はそう言って白井に頭を下げる。

白井の質問攻めから逃げたいただその一心で健児は下手に出る。

その切なる思いが通じたのか白井が、

「わかりましたの」

と白井が健児に言う。

「わかってくれたか」

健児は感激のあまり白井の両手を思わず握って、

「ありがとう　ありがとう」

と繰り返す。

「ちょっとお離しになって下さいの、気安く私の体に触れないで欲しいですの

黒子の体に触れていいのはお姉様だけですの」

白井はそう言って健児の手を振りほどく。

「ああすまなかつた。喜びのあまりつい…で初春の寮の場所教えてくれるか」

健児が黒子に詰め寄って聞いてくる。「失礼

「はあゝあまり感心しない理由ですが夜這いや邪な理由とかでもないし、怪しいと思ったのも私の気のせいのようなのでしたの。えっと初春の寮の場所でしたわね。

初春の寮はここから確か…」

と白井が説明しだした時、白井の携帯が突然鳴りだした。

「失礼。電話が掛かって来ましたの、少しお待ちになって下さい」

白井はそう言った後携帯をポケットから取り出す。画面を見ると発信者は固法美偉と表示されている

「固法先輩ですの何の用でしょう」

白井はそう言うってから固法の着信に出て、通話を始め出す。

「はいこちら白井」

固法先輩何かありましたの？

…えっ第七学区内の公園で能力者同士が戦闘を…わかりました。

すぐに向かいます。 ……大丈夫ですの私一人で能力者の一人や

二人料理してみせますのでは、現場にすぐに向かいますの

その公園なら場所は把握しておりますので

では固法先輩、警備員への連絡頼みましたのでお願いします」
そう言つて白井は通話を終えた。

携帯をポケットに入れた後白井は健児の方に振り返る。

「お待たせして申し訳ございません。

後待たせた上に失礼で悪いのですが、私これから現場に駆けつけなくてはなりませんので、これにて失礼させて頂きます

後先ほどの続きですが初春の寮はここから百メートル程行った信号を右に曲がったら、ずっと道なりに直進していくと、銀行が見えますの。

その銀行を左に曲がったらすぐに初春の寮は見えてきますわ。

それでは私はこれで

後あなたも立派な殿方ならば妹にお金をたかる何て恥さらずの真似は以後お慎み、いえお止めになった方が宜しいのです。では私はこれで」

そう言つた後黒子は会釈した。

その後すぐに飛び上がってレポートし、あっという間に健児の視界から消えた。

「疲れた」

健児はそう言つた後大きなアクビを掻いた。そして心に誓つた。

今後女性の風紀委員には極力話しかけないようにしよう。

嵐が過ぎ去つた後しばらく脱力していた健児だったが、本来の目的を思い出し慌て出す

「……はっ！ いかんいかん、場所がわかつたんだ急がなければ

待ってるよ藤田！初春たちの操は俺が守る」
健児は白井に教えてもらった道を全力疾走で初春の寮目指して走っ
ていくのだった。

第三話 決戦初春寮

学？大原 その一

(6月20日

修正)

(後書き)

いかがだったでしょうか？

ではご意見 ご感想

何でも待ってます

それにしても黒子の口調は難しいな

まだまだ力量不足です？

最後まで読んで頂きありがとうございます

第三話 決戦初春寮 学？大原（その2）（前書き）

こんにちは、やっと更新出来ました。

良かったら見て行って下さい。

？

第三話 決戦初春寮 学？大原（その2）

「なっ！」

突然部屋に入った学を衝撃が襲った

凄まじい衝撃に吹っ飛ばされた学は、自分が閉めていた初春の部屋の入り口のドアに叩きつけられる。

ドアに激突し崩れ落ちた学を大原が立って見下ろしている。

「さっきのガキか？」

確か藤田と言っていたな？

なぜここにいる？」

そう言った大原はファイティングポーズを取りつつ、注意深く学を見ていた。

学は口元の血を拭いながら、ゆっくりと立ち上がると、鋭い目で大原を睨みつけた。

（まずいな、今のはかなり効いた。
足が震えてやがる）

現に学の足はガクガク震えており、今にも倒れてしまいそうだ。それを学は気力を振り絞って必死に耐え、相手にダメージを悟らせないようにする。

「いきなり不意打ちとはせこい真似するじゃねえか、自警団てのはみんなそうなのかい、児島つてのも、いきなり攻撃してきやがったぜ」

学はそう言いながら、大原と同じくファイティングポーズをとる互いにオーソドックス（右構えだ）

学の問いに大原は笑いながら答える

「いきなり人の家にノックもせず、入ってきたのだから当然の報いだろ」
と不敵に笑う

「ノックもつてお前の家じゃないだろ？
それで初春たちはどうした？

後何で俺が入って来た時、問答無用で攻撃してきた？」

学は鋭い目で大原を睨みつけながら矢継ぎ早に言う

大原と会話したい訳ではない。

学はダメージが回復するまでの時間を稼いでいるのだ。

それほど大原の一撃は強力だったのだ

（山咲の奴に相手はボクサーだから気をつけろって言われてたんだが、まさか入ってすぐに、攻撃されるとは、思ってたからな
〜）

学は心の中で自分の迂闊さを呪った

「いきなり不意うちが悪かったな、お詫びの代わりに質問に答えよう。」

少女たちなら寝てるよベッドの上でな、ただし両手足を縛られているがな。

後お前に気づいたのは、倉橋にはここに入ってくる時には、教えていた合図があつてな。合図のノックをしなくて入ってくるのは敵という事だからな

そうかお前がここにいるという事は倉橋はやられたと言つ事だな

「

「倉橋？あああの不良か。」

寮の入り口近くにいたから、初春たちの事もあつたから、ぶっ飛ばしといたぜ」

「そうか。倉橋は決して弱くはないから、お前が強いんだな…だが俺には勝てない」

そう言いながら大原は、じりじりとゆっくり学との間合いを詰めていく。

「えらく自信満々だな、一発不意打ち入れたぐらいで」

学も同じように大原の方にちょっとずつ、近づきながら言つ。

その学を見ながら、大原はまたも不敵に笑つ

「その不意打ちが随分効いてるんだろ」
大原が知っているぞと目で語りながら言う

「一発入れたぐらいで 勝ったつもりか？」

学がそう応じて虚勢きみせいを張る

しかし大原は意にかいさず、確信を込めて言う

「効いてるさ。俺の必殺の右ストレートだからな」

(ばれてるな)

大原の言い方にダメージが残っているのを、見破られているのを、学は確信した。

(長びけば不利か)

それに一発であれだけ効くんだ。

何発も耐えられるものじゃない)

学がそう考えている間に、両者の間合いは詰まりどちらの攻撃も届く距離になっていた

(敵に主導権を握られるのは不利だ)

学はそう思つと

「うおー！ー！」

と雄叫びを上げると自分から突進して行くのだった。

同じ頃もう一つの戦いは熾烈を極めていた

「くそ！脇腹をやられた」

将真は斬られた脇腹を抑えながら、呻いた

「どうした？もう終わりか」

脇腹を切った張本人の児島はそう言いながら更に攻撃を続けてくる

さっきまで児島の二刀の斬撃をなんとか避け続けていた将真だったが、顔に突きを放ちながら、腹を切りつけてきた児島の連続技を避けきれず、とうとう脇腹を抉られたのだ。

深い傷ではないが、出血し地面に血が落ちている。

将真は右手で脇腹を抑えながら、必死で逃げている。

（クソ！どうする？）

藤田には悪いが、解除するか？

命に別状がないとは思うが止血しないと）

と将真は考える、既に学が初春の部屋についている事が将真にはわからないので、迷うのは仕方ないことなのだ。

その時

「伸びる!」

という児島の声が聞こえたと同時に児島の爪剣二本が伸びてきた。

「くっ!」

将真はギリギリで顔目掛けて伸びてくる爪剣を避ける。

「それで避けたつもりか?」

しかし児島の攻撃はまだ終わっていない。

何故ならもう一本の爪剣が、将真の腹目掛けて伸びてきているからだ。

狙いは心臓。

このタイミングでは、将真は避けられない。

「ちくしょう!」

将真が叫んで間もなく爪剣が将真の肉体を貫き辺りに鮮血が飛び散った。

「はあはあ」

白井黒子は息を荒げながら目的地を目指して空間移動していた

「全く次から次へと最近事件が多すぎますのなのに本命のカップル殺人事件は一週間なりを潜めたまま、これではせっかく寮監さまと常盤台の校長先生に許可を頂き、門限を免除して頂きましたのに、意味がありませんの」

と白井はレポートしながら、ため息を吐く

白井は連続カップル殺人事件の最初の犠牲になったカップルの女性が白井と同じ一年生で、クラスメートだったので、どうしても犯人が捕まえたかったので、学校と寮に頼んで特別に門限を免除してもらったのだ。

風紀委員は校外の治安維持は越権行為だが、白井はたびたびその越権行為をする。

また犠牲者がクラスメートとなったら、いてもたってもいられなかった。

この白井の行動に対し警備員と風紀委員の上層部は黙認しているというより、上層部はおろか現場にいる、警備員も風紀委員も大多数がビビって尻込みしているのだ。

風紀委員の者たちは

タダ働きで命賭けてられると、一応警備員の要請で夜間の巡回は行いが、警備員が来なければ、時間前にさっさと切り上げてしまう。

警備員も警備員の特別手当が少ない事と、最近の治安悪化で出勤回数が増えて疲弊している事もあり、消極的だ。

無論そんな者たちばかりではない。

熱心に職務を全うしている者たちもいる。　しかし治安悪化の影

響で次々と事件が起こるため、手がとても回らないのだ。そう言う訳で女子中学生が夜中にこういう行動を取っても問題ないのだ。

「はあ確か固法先輩の言ってた公園はこの近くでしたわね」

白井がもうすぐ、通報のあった目的地が見えてきた時、ふと白井の視界に、妙な者が入ってきた。

「あれは！」

白井は慌ててその妙な者を再度確認する。

（間違いありませんの）

白井は急いで携帯で写真を撮る、その後急いで固法に連絡した

コール音がしばらくした後固法が電話に出た

『白井さんどうしたの？もう通報場所についたの？』

電話に出た固法が早口で聞いてくる。

『いえまだ着いておりません。』

それより固法先輩これを見て頂けませんか？』

白井はそう言つて、先ほど撮った映像を送る。

その映像が間もなく固法に届いた。

それを見て固法は驚愕する

『白井さんこれって…』
あまりの映像に固法は絶句する

白井の送ってきた映像には小学生ぐらいの少女が縛られ、猿ぐつわを噛まされて車に乗せられているという内容だったからだ。『
そういう訳ですので、私車を追いかけますの

固法先輩には申し訳ありませんが、私の代わりに現場に行く方を手配して下さいまし、 それでは』

そう言った後白井はレポートした

『ちょっと待ちなさい白井さん』

と固法が言ったが、

既に白井との通話が切れていて、後の祭りだった。

第三話 決戦初春寮 学？大原（その2）（後書き）

いかがでしたでしょうか。

ではご意見 ご感想

など待っています

場面切り替え難しい

第三話（決着 将真？児島）（前書き）

今日は、今回は主人公出番なしです。
将真？児島の決着です

第三話（決着 将真？児島）

ポタポタと地面に鮮血が滴り落ちている
結構な量だ。

加えて先ほどの肉を貫く鈍い手応え。

以上の点から児島は

（勝った）と確信した。

（仮に死んでなかったとしても、この出血ならろくに動けまい。
手こずらせやがって、さて大原さんのところに行くとしますかね）

決着が付いたため。

児島は将真の体に突き刺している、爪剣を引き抜いた。

「戻れ」

そしてその血に塗れた爪剣を元の長さに戻していく。

その時背後で微かな小さな音がしたが、児島はさして気にせず、戻した爪の血を、ハンカチで拭く、一方対する将真は、爪を体から抜かれても、うつむいて片手で腹を抑えたまま立っている。また腹からの出血が、抑えている手の平を真っ赤に染めてもいる。

声も動く気配もない。

将真は完全に沈黙している。

「まだ立ってやがるのか？
それとも立ったまま死んでるのか？」

沈黙している将真を見た、児島が確認のために一応将真に近づいていく。

将真に近づいて行きながら、児島は先ほどから聞こえてくる、風切り音が更に大きくなるのを感じた。

「何の音だ？」

気になった児島がたち止まった時。

「がはっ！！」

突如児島の後頭部に凄まじい衝撃が走った。

その衝撃の凄まじい威力に児島は反射的に片手で後頭部を抑えながら片膝を地面に付ける。

「一体何が？」

「こつも上手くいくとは思ってなかったけど、とりあえず結果オーライでよしとするか」

痛みのみならず片膝を付いていた、児島の上方から、児島の問いに答えるように声が降ってきた。

「お前死んだんじゃ？」

声の正体を知って、児島は驚愕の声を上げる

「弁慶や白ひげじゃあるまいし、立ったまま死んだりしませんよ
ここぞというときまで、息を殺して無駄な体力を使わなかっただ
けですよ」

片手で傷口を抑えながら、将真が答える。

「貴様一体何を？」

と児島が怒りを露わに声を荒げながら立ち上がるうとするが、将真の動きの方が早かった。

（今だ！）

将真は児島が立ち上がるうとした瞬間、その隙を付いて手早くポケットから携帯電話を、（傷口を抑えていない方の手で）取り出し、その携帯電話を握りしめながら、児島の胸にその携帯の先端を押し付けた。

「何の真似だ？」

将真の行動が理解出来ない児島は、将真を見て言う。

「この場合は、はあはあ痺れさせるのがベストかな？」

呼吸を荒げながら、将真が言う。

「お前？何がしたいん？…があゝ！！」

児島が突然悲鳴を上げてエビ反りになる。

全身に強烈な電流が走ったからだ。

「しまっ！」児島が慌てて爪を伸ばそうと演算を開始しようとするが、後頭部のダメージと電撃のダブルで演算が出来ない。

「あんたの負けだ」

エビ反りになった児島の横に周りこんだ将真が、横から首筋に携帯電話を押し付ける

バチィ

再び児島の体を電流が駆け巡る

「ぐあゝ！！」

児島が天に向かって雄叫びのような悲鳴を上げる。

だがまだ児島は意識を失っていない。

児島は手探りで地面の石を掴みそれを投げようとする。

「！」

しかし拾った石を投げようとした児島は、その石を投げる事は叶わなかった。

児島が石を掴んだ時には横から更に背後に回り込んだ将真が、延髄に携帯電話を押し付けていたからだ。今度は片手ではなく、両手で押し付けている

「悪いな、これで終わりだ」

将真は喋り終わると同時に、二度児島の体に電流を流し込んだ。

バチィ

児島は抵抗も悲鳴も上げず、地面に静かに倒れていった。

そうまるでスローモーションのようにゆっくりと。

児島が倒れたのを確認した将真は、気が抜けたのか、思わず両膝が地面に付いた。

「はぁはぁはぁ」

息を荒げながら、将真はもう一度地面に倒れ伏している、児島を見る。

ぴくりともしない。

将真は満面の笑みを浮かべると、児島とは対象的に仰向けに倒れ込んだ。間もなく、勝利の喜びを雄叫びとして空に放った。

勝負が決した瞬間だった。

とある公園近くの道路

「何かしら今の声？　聞こえた方角は確か通報のあった公園の方ね」

同じ頃とある風紀委員の少女は、一人通報のあった公園に向かっていた。

本来なら別のツインテールの風紀委員が向かうはずだったのだが、彼女は向かう途中に事件に遭遇しそつちを追っている。

そのため代わりの人を派遣するように、少女は頼まれたのだがどこもかしこも、先のスキルアウトの反乱やテロリストたちの争い（本当は学園都市の暗部同士の潰し合いだが、情報が隠蔽されてこのような形を取っている）

などにより治安は悪化そのため風紀委員も警備員も人手不足であり、急に人を回す余裕がなかった。

それで仕方なく彼女が一人で通報場所に行くしかなかった。

「能力者同士の争いに私一人が介入して、止められるかわからないけど、この時間帯に非番の人たちを呼ぶ訳にはいかないし仕方ないわね

あまり能力レベルが高くなければいいのだけれど、まあ泣き事言っても仕方ないわ　とにかく急ぎましようはあくこれ今日もまた深夜勤務確定ね。　睡眠不足はお肌の大敵だって言うのに」

ここ最近の治安悪化により学生組織の風紀委員も警備員のように校外の治安維持も行っていた。
それどころか場合によっては、殺人事件の捜査とかもである。
上層部は人員増加のために風紀委員、警備員共に増員をしているが、激務のため耐えられず辞めたりするものがあるため、慢性的な人手不足だ。

風紀委員は更に酷く、やる気のないものや働かないものもいる。
そのため彼女のようにベテランで仕事の出来る風紀委員にしわ寄せが来るのだ。

はあ〜と盛大なため息を固法美偉は吐いた。

「おつといけないわ、先輩の白井さんが頑張ってるのよ。
先輩の私を上げてどうするのよ

さあ〜お仕事 お仕事」

そう言って気合いを入れ直した、風紀委員の固法美偉は将真のいる公園へと走っていった

第三話（決着 将真？児島）（後書き）

いかがだったでしょうか？

ではご意見 ご感想

など待っています

ありがとうございました？

第三話 決戦初春寮

(学?大原その3)

&黒子の危機(前書き)

ふう何とか今日中に次話投稿できました
少し長いです。

注意書き

黒子ファンはご注意を今回ひどい目に合ってます
ご了承下さい?

第三話 決戦初春寮

(学?大原その3)

&黒子の危機

ガッ! ガッ!

狭い室内に肉を打つ鈍い音が響く。

その部屋の中に人影が2つ

一つは身長百八十位の長身で、もう一つは身長百五十そこそこの小さい体

前者は自警団を隠れ蓐にする悪党大原

後者は藤田学

(くそ一発一発が何て重いんだ。
ガードするのでやっとだ)

学は遥か頭上から落ちてくる、大原の乱打にひたすら耐えるしかなかった。

睨み合いから突っ込んで行った学だったが、あっさり大原に攻撃を捌かれた

更に学の攻撃もお構いなしとばかりに大原は強引に間合いを詰め、
今や学は防戦一方となってしまう今に至る

体格差に加え元プロボクサーの技術は本物でジャブの連打ですら、
学の腕を腫れ上がらせ、折れないのが不思議な位だ。

戦いは大原、圧倒的有利で一方的に進んでいく。

（このままじゃまずいどうする？

……仕方ないアレを使うか？

条件は満たしているしまあ初春の部屋をぐちゃぐちゃにしてしまっ
が、自分の操を守る為だ安いもんだろ）

学はガードしながら、考えを纏めると、アレを使う為の演算に入ろ
うとする。

だが学は集中しすぎたためガードが緩んでしまった。
無論それを見逃す大原ではない。

「顔が空いてるぞ」

「えっ？」

ズバァーッ！！

学が大原の声に反応した時には大原の右ストレートが学の顔面を、
ぶち抜いていた。

その凄まじい一撃が学の脳を揺らす。

「ふん！」

続けて大原は左アッパーで無防備な学の顎をかち上げる。

ポキッと鈍い音が鳴り響く。

学は両手をダラリと垂らしたまま顔を上向けている。

続けて右フックが横から学の右のこめかみを打ち抜く。

「クソ！」

学はこれ以上の追撃から逃れようと背後に飛ばうとする。

しかしそれを許す大原ではない。

大原は学がバックステップする前にその制服の袖を掴む。

ガシツとしつかり掴んで離さない。

（しまった！）

そのままの状態から、がら空きの顔面目掛けて大原はジャブを三発

早い。

避ける事も防ぐ事も出来ず学はモロに食らう。

（マズい）

学は苦し紛れの大振りの右フックを打つ

ブンツと唸りを上げ顎を狙うがあっさり避けられてしまう。

大振りで学のバランスが崩れたと同時に大原は学の制服の袖を掴んでいた手を離す。

ただでさえ大振りで崩れていた学のバランスが更に崩れ学は前にた

たらを踏む。

隙だらけの学の腹を大原は左ボディ右ボディを交互に連打してそのまま近くの壁に学を押しつける。

「ぐは！！」

学は口から血を吐いて壁にもたれる。

「逃げ場が無くなったな」

大原は無表情で淡々とそう言う。

壁に寄りかかっている学に小刻みにストレート系の連打を打ち込む学はとっさにガードするが、連打の威力で何度も頭を壁に打ちつける。

そのため、スピード重視の細かいパンチだが威力が跳ね上がる

（チクシヨウ！！ガードするので手一杯だ。

演算なんか出来ねえっていうかそんなことしたらやられる。

だがこのままじゃどっちみちやられるどうする？）

ガードを何とか上げて学はひたすら耐え続けている。

一方大原は冷静だったガード上からでも、淡々と同じスピード同じリズムで攻撃を続ける

（無駄だ、ガードしたところでお前みたいなチビ、ガードの上からでも十分倒せる。

それにガードしててもそのまま壁に後頭部をぶつけるのだから、ダ

メージは変わらない …… それにしてもタフなガキだそのタフネスだけは認めてやるうだからもう……眠れ)
ここで大原は攻撃箇所を顔面から腹に変え、左ボディを連続で二発打ち込む。

「ぐっ！」

学は痛みのため体を九の字に折り曲げ腹を抑える。

「また顔を空けたな」

それを見た大原が静かに言った。

すかさず右のアップパーで顎を跳ね上げる。

「ぐはっ」

学はとうとう踏ん張りが効かず、両膝が地面についてしまう。

(クソ!!!いくら最初にいいの貰ったからってここまで一方的にやられるなんて)

学の心を絶望が満たす

「とどめだ」

絶望に打ちひしがれる学に大原は非情の宣告を放つ。

直後大原の打ち下ろしの右ストレートが学の顔面を貫き、学の後頭部が背後の壁に叩きつけられる。

そのまま学は壁にもたれながら崩れ落ちていった。

「決まったな」

大原はそう言った後打ち終わった右ストレートを戻し、チラツと倒れた学を見た後、そのまま初春たちが眠る部屋に歩いて行った。

とある道路

そこでは人と車の奇妙な追いかっこが行われていた。

「チクシヨウついてないぜ風紀委員に見つかるなんてよ」

いかにも不良という感じの金髪の男が運転しながら声を荒げる。

「お前ら何してるさっさと撃ち殺しちまえ」

運転手の男は後ろの席に座りながら、手持ちの拳銃で追ってくる風紀委員を狙い打っている仲間に怒鳴りつける

「わかってるよ！！でも追って来てる奴消えて銃弾を避けるんだ！多分テレポーターだ」

「何だと！！おい杉本お前何やってる

お前も撃つんだよ」

運転手の男は後ろの席で何もせず、ただ見ているだけの仲間に怒鳴

る。

怒鳴られた杉本という男はにこりと笑ってそれに答える

「慌てるなよリーダー高速で飛び回るテレポーターを撃ち殺す何て芸当俺たちには無理だ」

そう言っつて杉本は背後から追いかけて来ている風紀委員の少女を見る。

杉本の言っつとおり、高速で消えては飛び上がりを繰り返す彼女を捉える事は容易ではない。

「だったらどうするんだ？このまま大人しく捕まれっつてお前は言うのか」

運転手はイライラしながら、話しを続ける

「まさか捕まるなんて冗談じゃない」

杉本はとんでもないという感じでそう言っつ

「だったらどうするんだ？」

「チクシヨウ弾切れだ！」

その後方からの追撃者を撃っていた、もう一人の仲間が、二人の会話に割り込んで来た。

それに、運転手の男が反応する。

「何だと！！俺しか銃持ってないんだぞ。
チクショウこれじゃ捕まっちゃうじゃねえか」

運転手の男は歯ぎしりして呻く。

「やれやれだから言ったじゃないですか？
当たる訳ないって」

杉本は呆れた様子でそう言った

「やかましい！こっちは運転中なんだ。
お前らで何とかしろ」

そう言った運転手の男は会話を止めた後アクセルをさらに踏んでスピードを上げる。

「言われなくてもそうするよ

「

そう言った後杉本は突然後部座席のドアを走行中にも関わらず開けた。
寒風が車の中に入ってくる。

「おい！何やってる
大迫ドア閉める」

運転手のリーダーが 大迫に指示を出す

「心配はいらないリーダー後ろのテレポーターはもう追いかけて来れない」

「何だと？お前どうする気だ」

「何簡単な事さ。
動く相手が仕留められないなら、動きを止めたらいいんだ」

杉本はそう言った後後部座席に手足を縛られて拘束されている獲物の少女を見る。
そして無造作に少女の口の猿ぐつわを外す。

「いい声で泣けよ」

杉本はそう言うと、少女を両手で掴むと開けたドアから車道へと少女を放り投げた。

少し時間は遡る

「撃つてこないですわね。どうやら弾切れのようですよ」

白井は空間移動を繰り返し返しながら、逃走する車を追っていた

通報場所に向かう途中少女を拘束して乗せている車を発見した白井はすぐさま追跡を開始今に至っている

先ほどまで銃弾が次々と飛んで来ていたが、今は無く白井は犯人達を確実に追い詰めていた。

「犯人を確保したら風紀委員か警備員に応援要請をしないとイケないですわね

さてそろそろ無駄な抵抗は諦めて頂くように警告でも致すと…何を」

警告しようとしていた白井は前方の光景に我が目を疑った。何と誘拐犯達が、車のドアを走行中の最中に開けたからだ。

「一体何をまさか車を捨てて逃走を？」

白井は犯人の行動の意味を考えるが、それは白井の予想を裏切ったそれも最悪の形で

「きゃ〜助けて〜！」

突如白井の耳に甲高い悲鳴が聞こえた。

「何と言う事を！」

白井は悲鳴の聞こえた方を見てあまりの事に一言、言った後絶句した

だがすぐに前方を睨みつけると、さっきよりも高く飛び上がった。

「全力ですの」

白井は最大出力で、少女を助けるべく空間移動した。

白井の目の前に地面に落下して行く少女がいる、白井は少女に必死に手を伸ばしてそれを抱き止める。

「重いですの」

白井はそう言う。

二人はそのまま空中から落下していく。

(怪我をさせないように私のテレポートで)

白井は抱きしめてる少女を能力を使って歩道にテレポートさせる。少女はテレポートさせた。

しかし自分がテレポートする前に道路にぶつかってしまつ。

(うっ！でしたらせめて受け身だけでも)

白井は道路を転がりながら、少しでもダメージを減らすため、受け身で衝撃を緩和する

ゴロゴロと物凄い勢いで彼女は転がっていく。

服は破れ顔は汚れ、肌の露出部分は擦り傷だらけになる。

やがて勢いが弱まり白井は止まった。

「痛かったですの

それにしても、人質をドアから放り投げる、何てとんでもない連中ですの」

白井は転がるのを止め痛みに呻きながら、立ち上がる。

「この怪我では追跡は無理ですの

仕方ない人質の少女を救えただけでよしとするしかないですわね

車の番号は覚えてますから、明日にも初春に頼んで調べてもらえばすぐ見つかりますし　ここは不本意ながら　一時撤退ですの」

白井はヨロヨロと歩きながら、歩道に飛ばした少女の方に行く。

その時ガチャン

「?」

突然の左手の違和感に白井は後方を振り返った。

振り返った白井は自分の左手に手錠が嵌められている事に気づく。そして白井の架けられた手錠の先には、誘拐犯の仲間の少年杉本がいた。

「悪いが撤退は無理だ風紀委員のお嬢様」

そう言つて杉本は白井に架けてない方の手錠を引っ張りながら、ボダイブローを打ち込む。

(テレポートで避ける)

白井は演算してテレポートしようとするが、何故かテレポートは発動しない。

そのまま腹にボダイブローを食らう。

ドゴンツッ!!

ボダイへの一撃で白井の身体がくの字に曲がる。

「ぎっ」

痛みのあまり白井は呻く。

「何だ気絶しないのか？」

やっぱ腹を殴つて気絶させるのは難しいか？かといって顔を殴るわ

けにはいかないしな」

杉本は苦痛に呻く白井を見ながら言う。

「どういふ事ですか？テレポートが使えないなんて。あなた私に一体何をしましたの」

白井は苦痛に顔を歪めながら、腹を抑えつつ杉本を睨む

すると杉本はニヤニヤ笑うと

「よく見てみなお嬢様風紀委員。

自分の左手をよ〜」

「左手ですって…これは！」

白井は杉本に言われた通り自分の左手を見て驚愕する

「わかったか？それはただの手錠じゃない 警備員が使う対能力者専用の拘束手錠だ
かけなきゃ効果はないがかけさえすりゃ、その能力者は能力は使えない」

「そんな馬鹿な？」

警備員の装備を何故あなたのような犯罪者が」

白井は理解できないという様子で言う

その白井の様子を見て杉本は大笑いする

「おめでたいなお嬢様は何事にも例外や裏つてのがあるんだよ。武器や装備の横流しなんざ、世界中の軍隊でもやってるんだ。少し学園都市の暗部に関われば大体の欲しい者が手に入れられると言ってもお嬢様にはわからないか？」

そう言いながら、杉本は白井に近づいて行く

「そんな警備員がそこまで腐ってるなんてそれに暗部とは一体？」

白井が考えていると

近づいていた杉本が蹴りを放ってきた。

「くっ」

白井は慌ててガードをするが弾き飛ばされてしまふ。

「あっ！」

吹っ飛ばれた白井は、起き上がろうとするが、杉本は白井の髪の毛を掴んで、持ち上げてもう一発腹にぶち込む。

「くっくっ」

白井は何とか痛みを耐えて逃げようとするが、背後から杉本に首を絞められる。

「うっうっ」

白井は苦悶の表情を浮かべジタバタと手足を動かすが、中学一年生の少女の力では到底外す事は出来ない。

やがて力尽きた白井から力が抜け手足がぶらぶらとなる。

それでも杉本はもう少し絞め続けたのち、絞めるのをやめた。

白井の気絶の有無を確認した後、白井を肩に担いで杉本は、自分たちの車の元に歩いて行った。

第三話 決戦初春寮

(学?大原その3)

&黒子の危機(後書き)

いかがだったでしょうか？

黒子の口調が難しいです

ではご意見 感想などお待ちしております

ありがとうございます

第三話その4

(将真離脱)

(前書き)

今日はやっと更新できました。
では駄文ですが見ていって下さい

第三話その4

(将真離脱)

「ようやく着いたわ」

黒子が捕まってしまった頃、固法は通報のあった公園に着いていた。この時の彼女は黒子が捕まってる事をまだ知らないの、とりあえず職務を行おうと通報のあった能力者二人を探す。

「静かね、能力者同士の戦闘なら、もう少し騒がしいはずなんだけど、それとももう終わったのかしら？」

固法は注意しながら、公園を歩いていく。

「見当たらないわね」

「

公園の中を能力者たちを探して歩いている
その時

「ちくしょう!!」

と前方の方から声が固法の耳に入ってきた

「今の声は？」

向こうの方だわ」

固法は声のした方向へ急いで走っていく。

程なく固法は声のしてきた場所に着いた。

「何を何をしているの!!」
着いて

その光景を見た固法は思わず叫んでいた
無理もない

固法の目の前で一人の少年が殺されかけていたからだ

一人は中学生位の少年腹から血を流しつつ、迫りくるナイフを避けている、もう一人は高校生ぐらい固法より一つ二つ年上かナイフを振り回し少年に切りつけている

腹から血を流しているのが将真で、襲っている方は三沢だ

二人は固法の叫びが聞こえなかったようで、風紀委員の存在に未だ気づかず戦っている。といっても将真はひたすら避けているだけなので、戦いと言うのは微妙だが。

将真は迫りくるナイフを避けながら、心の中で藤田を呪っていた

(あの野郎!もう一人いるなんて聞いてないぞ)

将真は防戦一方のまま、先ほどまでの事を思い出す。

死闘の末何とか児島に勝った将真は、児島を自身の能力を使って、拘束していた。

(ベルトに能力封じの機能をつけて手錠にしたで)

そこに倉橋に散々役立たず扱いされていた 三沢が気絶から復活してきたのだ。

三沢は能力者でもないし徒手空拳は倉橋に遠く及ばないが、物凄くタフなのだ。

学もあそこまで痛めつけた相手がまさかこうも早く回復するとは彼の予想範囲外だったのだろう。

それで今将真が貧乏くじを引いている訳だ。
そして今に至る

（まずいな！目が霞んできた。
ちくしょう藤田の奴死んだら化けて出てやる）

ナイフを避けながら、再び将真は藤田を呪った。

「風紀委員です！！
殺人未遂の疑いで拘束します」

将真が藤田を呪っている時、やっと将真はその大声で風紀委員の存在に気づいた。

「風紀委員だと？」

将真は思わず口に出していた。
将真を襲っていた三沢も釣られて固まる。

（かなり危険な状態のようね）

ようやく自分の存在に気づいてくれた二人の少年を見ながら固法は状況を冷静に観察する

（能力者同士の争いと通報にはあったけど どういう事かしら？
とりあえずナイフを振り回している方を拘束しないと）

固法はそう考えて、再び投降するように警告する。

「もう一度言います　風紀委員です。
武器を捨てて投降しなさい」

将真に釣られて固まっていた三沢はようやく固法の方を見る。

固法の方をちらっと見た三沢はナイフを地面に捨てた。

（あら？大人しく投降してくれるの？
だったら助かるけど）

固法は抵抗を予想していたのだが、どうやら抵抗しないようなので安心した。
しかし一応手錠をかけるまでは油断できないので注意して近づいていく。

三沢の間近くまで来た固法は手錠を取り出す。

「あなたを殺人未遂の疑いで拘束します」
そう言つて固法は三沢に手錠をかけようとすした。
三沢はかけやすいようにと手を突き出してくる。
なので手錠がもう少しで掛かりそうになる。
その時

三沢は伸ばしていく両手のスピードを急に上げた。

「えっ？」

突然の事に固法は対処出来ず、そのまま三沢に胸を突き飛ばされた。
ドンー!!

と吹っ飛ばされ、固法は地面に尻餅をつく。

三沢は尻餅をついた固法目掛けて、踏み潰そうと足を振り上げる。

「しまった!」

固法は急所だけでも守ろうと両手で顔をガードするが衝撃はいつまでたってもこない。

固法がガードを解いて周りを見ると、さっきまで固法を襲っていた三沢がゆっくりと固法の体目掛けて倒れてきていた。

「ちょっと一体なにが?」

固法は下敷きになる前に慌てて起き上がって逃げる。

固法が逃げた後、三沢はそのまま地面にうつ伏せのまま倒れこんだ。

ピクリとも動かない。

念のため固法は近づいて行った後しゃがみこみ、瞳孔等を見て意識の有無を確認する。

固法が見たところ、気絶しているのに間違いないようだ。

「全く風紀委員ならもう少ししっかりしてくれよな!」

固法が確認にし終わった後、頭上から声がふってきた。

固法が見上げると、将真が両肩で息をしながら、手で腹を抑えて立っていた。

「あなたが？」

固法がそう言いながら立ち上がり将真に近づいていく。

「他に誰がいるんだよ？」

「

「それもそうね。

ありがとう助かったわ」

と固法が礼を言う。

「そう思うなら今度からは……けが人を働かせないように気をつけてくれ」

将真はそう言った後、前方に倒れそうになる。

固法は慌てて将真の体を前から支えて倒れないようにする。

「君大丈夫？」

そう言って固法が将真を気づかう。

「まあ大怪我だが、致命傷には至ってないから大丈夫と言えば大丈夫か」
と将真が答える。

「私は177支部の固法美偉よあなたは？
それとここで能力者同士の争いが有ったって通報があつて来たのだけれど？」

固法は申し訳ないと思つたが、事情を聞けるものが他にいないので将真に聞く。

固法の質問に将真は息も絶え絶えにゆっくりと答える。

「柵川中学校の……はあはあ……一年山咲将真だ……通報のあつた争つてた能力者つてのは俺とそこで寝てる奴の仲間だ、俺が倒して、一応能力で手錠かけて地面に転がしてるよ
ここから歩いて二分ぐらいだ」

「そうわかつたわ。

それで君は何でその能力者と戦う事になつたの？」

将真からの答えの後さらに固法は質問を続ける。

「……時間稼ぎのためだ。
藤田が初春と……佐天達の元に駆けつけるまでのな」

そう言つた後将真は目を閉じる呼吸もさつきまでよりあらくなつて
いる。

「初春さんと佐天さんがどうしたの？」

二人の身に何があったの！」

固法は可愛い後輩達の名前が出たので、思わず大きな声を出す。しかし将真は目を閉じたまま沈黙している

「ちょっと聞いてるの君？」

固法は将真を少しだけ揺すってみる。
効果があり

将真ははあはあ息をしながら、ゆっくりと目を開いて固法を見る

「一言いいか？風紀委員のお姉さん」

「何かしら？」

「これは事情聴取だよな？」

「まあそんなものかしら？」

と固法が答える

「だったら……せめて応急手当ぐらいしてくれないか？
後救急車を呼んでくれると助かるんだが」

と切実に将真が訴える。

「……ごめんなさい」

固法は急いで将真を近くのベンチまで運んでいくのだった。

「もうすぐ救急車が来るわ、警備員にも応援は頼んだし大丈夫ね。ところで傷の具合はどう？」

固法はあの後将真をベンチに寝かした後、将真が倒した三沢と児島の二人に改めて手錠をかけて、（将真の能力は意識を失ったら解除してしまうので、児島に手錠をかけ直す必要があった）

拘束しなおした。本来なら目の届く範囲に二人の犯人を置いておきたいが、固法の力では男を運んでくる事は出来ず離れている。児島は手足とも手錠をかけて地面に転がしている。

それから、警備員と救急車の両方に連絡して警備員には応援を頼んで、固法はベンチに横になっている、将真の応急手当をしている。応急手当が一番最後になったのは、もしも二人が起きてきたら、固法ではとても防ぎきれないからだ。

そうなったら将真の命はないので、犯人の無力化が最優先というわけだ。

「まあ応急手当してくれただから、血は止まったな」

将真は疲れきった様子でそう答える

「そう良かったわ」

ところでさっきの話の続きだけど初春さんと佐天さんが危ないってどういう事？」

固法は将真にさっき聞きそびれた事を聞く。

「……その事か？」

実はな……」

将真は固法の質問にゆっくりと答えていった。

全部の事情を聞いた固法は初春たちの聞きを知った。

「大変。じゃあ初春さんたちが危険なのね」

固法は将真に言う

「ああ。だから応援に呼んだ警備員には初春の寮に向かってもらった方がいい」

と将真が提案する

「その通りね。」

すぐに警備員に頼んでみるわ」

固法は携帯を取り出し、警備員に初春の寮に行ってもらおうように要請する。

(とりあえずやれるだけの事はやってやったぜ 藤田。

後は警備員が到着するまで何とかもちこたえるんだな

俺は援護には行けないがお前だって敵がもう一人いるの教えなかったんだから、おあいこだろ。

そっぴや健児の奴結局来なかったな？

……)

固法が警備員に応援要請を見ていた将真だったが、やがて力つき深い眠りについた。

彼が次に目を覚ますのは病院のベッドの上でそれは全てが終わった後日の事だった

第三話その4

(将真離脱)

(後書き)

いかがだったでしょうか？

すみません？まとめるのが下手で妙に長くなってしまい、こんな形になってしまいました。

次は学？大原です

第三話 決戦初春寮 学？大原（その4）（前書き）

次の更新です

話しが進まないのに量は増えていく。

注意書き

今回主人公かなりの外道ぶりを発揮します

卑劣卑怯な振る舞いがお嫌いな方は気をつけて下さい？

第三話 決戦初春寮

学？大原（その4）

ここ初春の部屋で

大原は上機嫌だった。

学を倒した大原は、自分が捕らえた獲物たちを見ている。

獲物とは言わずもがな佐天と初春だ。

二人は大の字になって、両手両足を縛られて一つのベッドに寝ている。

「さて倉橋の奴があのがきにやられたという事はあまりのろのろはしていられないな。

あのがきが警備員に通報してはいないと思うが……倉橋が警備員に捕まって、うつかり喋ってしまう可能性もないとは言えん。

計画が狂ってしまった以上長居は無用だな」

そう言った後大原は携帯をポケットから取り出してカメラ機能を起動させる

「予定ならレイプしてその映像を撮るはずだったんだが……こうなつては仕方ない、とりあえず全裸か下着だけの写真でも撮つといて、後から呼び出すとするか

そうだ絶対等速をその場に呼んでやろう。

それなら依頼を達成出来るし奴も喜ぶから仲間になるのに文句は言うまい。

それに俺も何の反応もない相手を犯しても全然面白くないしな。

どうせ犯すなら処女で泣き叫んで貰った方がずっと面白い。

俺はネクロフィリアじゃないしな（性倒錯の一種死体に性的興奮する者九十%が男性で女性は殆どいない）」

そう言った後大原はまず佐天の服を脱がそうとしたが。

「面倒だ破るか」

とそう考え直すと、ビリビリと佐天の制服を破っていくのだった。

大原が欲望のままに行動している時、学はふらふらよたつきながらも初春の寢室を目指して歩いていた。

「足がガクガクしやがる。

肋も折れたか？

それともひびか？

どっちにしるダメージは深刻だな」

学は大原にとどめの右ストレートをぶち込まれた時。

実は気絶していなかった。

実は最後の―撃を食らった時学はとっさに首を捻ってダメージを軽減していた。

また壁にぶつかる時も首を捻ったのを利用し額から壁にぶつかって頭を守っていたのだ。

そして壁にぶつかった後死んだふりならぬ　　気絶したふりをしたのだ。

幸い暗いのとさつきまで、たこ殴りにしていた大原は彼の気絶を疑わず、そのまま学を放置して初春の寢室に行ったのだ。

「杖が欲しいな？……まあ無い物ねだりしても仕方ないか。

さてとこれからどうする？」

学は寢室に向かいながら対策を練る

（真つ向から行って勝てる相手じゃないな…テクも経験も向こうが遙かに上、その上図体も向こうの方がデカいときてこっちは満身創痍。

長期戦は不利。可能ならば一撃でカタをつけるしかない。だとすると不意を突くしかない。

もちろん不意をつくだけじゃ駄目だ！

急所に一撃ぶち込まいと。

さてどうする？

…山咲は来ないか。まあ二人がかりでも手こずりそうな相手だ

勝てたとしても、ここには来れないだろう。向こうの仲間は俺が倒したから

向こうの援軍は来ないと思うが）

そう考えながら、学は床に座り込む。

回復のためだ。

初春たちには悪いが、少しでも不利な条件は減らしたい。

僅かでも回復するとしらないのでは全然違う。

学は座り込んだまま考えを再開する

（携帯で今からあいつらを呼んでも間に合わないだろうな。

なら俺の切り札を使うか？

あれを使えば俺の力はレベル5クラスになるが…いや駄目だ）

学は首を横に振って その思いつきを否定する。

（ただでさえあれは高度な演算と体力を消耗する。

初春たちがいるってのにミスで繊細なコントロールしくじったら洒落にならん

普通の状態ならコントロールできるが、この疲労と負傷した体じゃ危ない賭だ

何より一番危惧すべき事は手こずっている間に奴が初春か佐天のどつちかを人質に取られる事だ。

こうなったら俺には何も出来ん。

一つだけ確実に奴の不意をつける手が無いことは無いが、あれを実行したら初春たちに恨まれるのは間違いないしな)

学がいう手とは初春たちを餌にして大原の隙を突く事である

人間が最も油断している時

それは寝てる時

排泄してる時などだが男にはもつと決定的に隙だらけの時がある

それは性を放つ時だ　この時なら、いかなる達人でも隙だらけだ。

初春たち二人は美少女だ。

そして犯人は若い男

そういう行為に及んでも仕方ない

レイプの相場は中だしと決まっているので、間違いなく不意をつける

しかし

(本人たちにとつたら見捨てられたのと変わらないから却下だ)

考えてる間に学は大分回復したので、ゆっくり立ち上がり、寝室ドアの前まで音をたてないように足音に気をつけて歩いていく。

ドアの前についた後　学はこっそりとドアの隙間から気づかれないうように注意しながら、中の様子を見る。

学が中の様子を見ると佐天が制服をビリビリに破かれて下着だけになっていた。

(まずいな！このままじゃ犯されちまう。

とりあえず物か何かぶつけて奴の注意を逸らすか？)
学は自分の手元で何かないか探し出す。

(小銭でもぶつけるか？いや小銭投げても当たるかどうか
他に何かないか？

携帯か？

これ投げたら壊れるか。

でも初春たちの操を守れると思ったたら安いもんか……待てよ携帯？

……試して見る価値はあるか。

上手くいきや隙がつけるな。

奴は俺に背中を向けているし、やってみるか！)

学は自分の思いついた策を使うため取り出した携帯のボタンを押した。

「ほうこれはなかなか将来が楽しみだな。

この器量だし、ちよつと守備範囲外だが、たまには悪くない。

……おつとこの黒髪の方はいいだった。

本来のターゲットはこっちの花飾りだ

しかし何で花飾り何かつけてるんだ？

まあいいか。二人揃って記念撮影だ。

次の撮影は処女喪失だがそれは後の楽しみに取っておこう」

そう言つて大原は佐天を下着姿にした後初春の服を破きにかかる。

「まああつちの黒髪には負けるだろうが、どれどれ」

大原はいやらしい笑みを浮かべながら、初春の花飾りを取ろうと手を伸ばしていくと

『響き合う願いが今　目覚めてく〜?』

突然初春の体から音楽が流れてきた。

「何だ！電話か？」

大原は最初無視しようとしたが、うるさかったので切ろうと携帯を探す

携帯は初春のポケットの中にあつた。大原は携帯を取り出し通話ボタンを切った。

「全くこんな時間に誰だ！」

大原は手に持っていた携帯を床に捨てた。

「俺だよ」

ズドン

「がっ」

背後から声が聞こえたと同時に大原の後頭部を凄まじい衝撃が駆け抜けた。

そこにはいつの間にか大原の背後まで来ていた学がいた。

学が大原に不意打ちのラビッドパンチ（後頭部へのパンチ。

ボクシングの反則技）を全力の右ストレートでお見舞いしたのだ。

「今だ！」

学は一気に決しようと追撃をかける。

学は自分の上服を脱ぎながら、その服を大原の顔に被せて視界を奪う。

すかさず左フック

大原はまともに食らってベッドから転げ落ちる。

「くそ！！お前俺の攻撃をあれだけ食らって」

大原は奪われた視界を取り戻そうと、被せられた服を両手で引き裂く。

そこへ学はがら空きになったボディ目掛けてボディブローを打つ。

鋭い角度でボディブローは大原の肝臓を打ち抜く。

続いて左アッパー、大原の顎に命中する、学はさらに左アッパーに続いて左フック。

ボディ、アッパー、フックと左の三連撃を学は大原に浴びせかけた。

「とどめだ！！」

学は大原にとどめの全体重を乗せたストレートを大原の顔面目掛けて放つ。

だが大原もやられっぱなしではない。

大原はとっさに左腕を顔の前に持ってきて、左腕を犠牲にしてとどめの一撃を防いだ。

その後距離を取るため大原は攻撃の勢いを利用して背後に跳んで二人の距離がひらく。

距離を取った

大原はさっきまでのイヤらしい笑みを浮かべていたのが綺麗さっぱりなくなり、親の敵でも見るような目で学を睨んでいる。

そして睨みながら左手をだらりと垂らし、右手だけを顎に乗せた片手だけのファイティングポーズを取った。

「くそ仕留めそこなっただか！」

奇襲をかけたのに仕留めそこなっただ学は歯ぎしりした。

「くそガキがやってくれたな！！！」

大原は怒りをあらわにして叫ぶ

（大分ダメージは与えたがこっちは肋やられてるし、二人の美少女という足枷がある

まだ向こうの方が有利か。

しゃあねえ二人と引き離せただけよしとするか）

学は状況頭の中で整理し終わると、大原を仕留めるべく一気に間合いを詰めた。

大原も迎えうつべく、一気に間合いを詰める

両者の拳が届く距離に至った瞬間

二人は同じタイミングで右ストレートを放った。

ドン！！

激しい衝撃音が部屋中に轟いたが、二人の眠り姫は眠り続けるのだ
った。

第三話 決戦初春寮

学？大原（その4）（後書き）

いかがだったたでしょうか？

外道ですね

まあ、女性は国の宝　初春と佐天のためと思って頂けると助かります

第三話 黒子の危機 その2（救いの手はレベル5？） （前書き）

今晚は何とか今日中に投稿できました

今回は色々チャレンジしたので、上手くいったか不安ですが、見て
いって下さい

第三話 黒子の危機

その2 (救いの手はレベル5?)

(音が聞こえますの)

気絶させられた黒子が目を覚ましたのは、車の中だった。

黒子は知らないが、あの後黒子を気絶させた杉本は黒子を車の中まで運んできて、口にさるぐつわをかまし、目隠しをかぶせた。もちろん手錠は両手にちゃんとかけられている。

また黒子がレポートで逃がした少女も残念ながらもう一人の仲間回収されて、車に黒子と同じように拘束され乗せられている。

当然黒子の持ち物はすべて没収されている。

能力も手錠の機能で使えない。(対能力者用の能力使用を不可能にする手錠 警備員の最新装備)

身動きが全く取れない黒子は何もされていない耳で聞き耳をたてて犯人たちの会話を聞くしかなかった。

「ふう〜風紀委員に見つかった時はヒヤッとしたが、助かったぜ
ありがとな杉本」

運転をしながらリーダーは部下に労いと感謝の言葉を言う。

「大した事ではありませんよ。

風紀委員と言っても中学生いくらでもつけいる隙はありますよ」

て杉本が笑みを浮かべてリーダーに返答する

(言ってくれますわね覚えてなさい。この屈辱、黒子絶対忘れませんの！)

黒子は犯人たちの会話を我慢して聞き続けている

(とりあえずこの野蛮人どもの目的をつかみませんと)

黒子は意識を取り戻した事を気づかれないように、気をつけながら会話を聞く

「それで杉本この風紀委員のガキはどうするんだ？
常盤台に身の代金要求でもするのか？」

「まさかそんな危ない橋渡りませんよ」

「じゃあ俺たちで輪姦するのか？」

ともう一人の仲間が会話に入ってくる。

「それもいいですが、まずは依頼主におまけとして見せてからですね。

気にいったら高く買い取って頂けばいい。

常盤台のお嬢様です　喜びはしても怒りはしないでしょ
「そう杉本が二人を見ながら言う」

(冗談ではありませんわ黒子は生け贄ではありませんの！)

それにあなた方のような獣！絶対お断りですの（

黒子は犯人たちの会話に怒りを覚えながらもチャンスが来るまで耐えるしかなかった。

そしてそのチャンスは黒子が思うよりも早く訪れた。

「おい何だ！ありゃ？」

黒子が耐えに耐えしんでいる時
運転中のリーダーが声を上げた。

「リーダーどうしたんですか？」

杉本がリーダーの呟きに答えて返事する

「前に誰か立ってやがる！」

リーダーはクラクションを鳴らしてどくように促すが前方の影は同じ位置に立ったままで動く気配はない。

「どかねーならひき殺すぞー！」

とリーダーが前方を睨みつけながら言う。

「リーダーお望み通りひき殺してやったらどうです？」

と杉本がリーダーを煽る。

リーダーはニヤリと笑うと

「それもそうだな」 と舌なめずりした後 アクセルを全開で踏んだ。

（何という事をしかし私では何も……どなたか知りませんが、逃げて下さいまし）

黒子は顔も知らない相手の無事を思い祈るのだった。

一方車はどんどん加速していき、前方の人影の姿がはっきり見えて来た。

人影は男のようだ。年は17、8ぐらいか？

旭日旗のTシャツの上から白ランを羽織るといふ独特の派手だが一見古風な格好に身を包んでいる。

その男は両手を組んで仁王立ちしている。

男の事などお構いなしに車はどんどんスピードを上げて迫ってくる。時速にして約八十キロと言ったところか、時速八十キロの車はそのまま、スピードを緩める事なく、仁王たちしている男を轢いてふっ飛ばした。

ドガンと凄い音が当たりに響く。

「馬鹿な奴だぜ！クラクション鳴らしてやっただけだよ」

運転しているリーダーは人を轢いた興奮からか一気に早口でまくし立てる

「さぁリーダー急ぎましょう！」

依頼主が首を長くして待っていますよ」「

杉本が一人死んだと言うのに、何事もなかったかのように、リーダーに急ぐように言う。

（私さえ捕まらず、あの野蛮人共を拘束していれば、こんな事には……また独断で先走って失敗して他者をそれも一般人を巻き込んでしまうなんて……これでは以前の郵便強盗の時と何も変わりませんではありませんか）

黒子は顔も知らない　哀れな犠牲者に黙祷を捧げた。

「何だあれは!!！」

突然運転していたリーダーが叫んだ。

「どうしたんですか？リーダー！」

リーダーの叫び声に驚いた杉本が慌ててリーダーに聞く。

「後ろだ後ろにさっき轢いた奴が走って追いかけて来てんだよ!!！」

リーダーはパニックになってヒステリックに叫ぶ。

杉本は確認のため窓を開けて、後ろを振り向く。

「なっ！」

杉本は後ろを見た後　その信じられない光景に目をみはった。

そこにはリーダーの言うとおり、さつきリーダーがひき殺したはずの男が体中に不思議なオーラを出しながら、走って自分たちの車を追いかけて来ていたからだ。

「根性ッ！！」

走って車を追いかけて来た男はそう叫んだ次の瞬間更にスピードアップして車に追いついて並ぶ

「馬鹿な！いくら能力者と言ってもあの猛スピードでひかれて生きてるのは解るが、無傷ってそんなの並みの能力者じゃないぞ」杉本はあまりのデタラメさに大声を上げる。

「杉本早く何とかしろ！！」

ガキは一人いりや十分ださつき見たいに投げつけてやれ！！」

リーダーはアクセルをベタ踏みして引き離そうとするが。

追いかけて来ている 男の方が動くのが早かった。

男は片手で後部座席のドアを掴むと。

フンツと言うかけ声を言うと同時に、 ドアを片手で車から引きちぎった。

その後そのドアをポイツと捨てる。

あまりの非現実的に犯人グループは声も出せず沈黙する

男は何もしない犯人たちを気にせずドアのなくなった車の中に入ってくる

黒子も激しい音と、 犯人たちの動揺する声を聞いて、
驚く

（何が一体何が起こってますの
警備員でも駆けつけたのですの？）

黒子は何も見えな状態を恨めしく思った。

その時見えない状態の黒子を何かが掴んだ
感触からして人の手のようだ。

（誰ですの？）

黒子は誰か考えるが心当たりはない。

黒子を掴んだ、男は次に黒子と一緒に捕らえられている少女をもう
片方の手で掴んで 二人の少女を両脇に抱える

この間犯人たちは何も出来ずただ見ている 突然現れた規格外の
モンスターのインパクトはそれほど凄まじいものだった。

「凄いジャンプ」 二人の少女を保護したモンスターは、かけ
声と共に飛び上がり、頭で車の天井を貫き空いた穴から黒子と少女
を抱えて天へと脱出していった。

「何だったんだ今のは？」

ようやく呆けた状態から回復した、リーダーは一人呟いた。

しかし少し遅かった

「リーダー前!!」

杉本が叫ぶが間に合わない

呆けてる間に車は電柱目掛けて猛スピードで直進しており

リーダーが慌ててブレーキを踏むが間に合う事はなく車は電柱に正面衝突するのだった。

「終わったなお嬢ちゃんたち大丈夫か？」

黒子たちを無事救出したモンスター男は地面に着地した後二人の無事を確認する。

「おっと忘れてたぜ」そう言って男は黒子のさるぐつわと目隠しを取ってやる。

「ありがとうございますの」

黒子はさるぐつわと目隠しを取って貰った後正体不明の男に礼を言う。

もう一人の少女は黒子が車に乗せられた時点で気絶したままなので反応はない。

「立てるか？」

「大丈夫ですの」

黒子がそう言ったのを聞いた後

モンスター男は抱えていた黒子を降ろして 立たせてやる。

「ありがとうございますの」

「こっちの嬢ちゃんはどうすりゃいい？」

モンスター男は黒子を降ろした後、黒子に聞いてくる。

「とりあえずどこかに横にさせて、意識が回復するまで待つしかないですわね

活を入れて起こしてさし上げてもいいですが

どちらにしても応援を呼ばなくては行けませんし、あの野蛮人共も拘束しなくては行けませんので慌てなくてもいいでしょう」

黒子は瞬時にモンスター男の質問に答える。

「了解わかったぜ」

モンスター男は黒子を降ろした時と同じように丁寧に抱えていた少女を地面に降ろす。

その後自分の羽織っていた白ランを、地面に敷き少女が汚れないようにする。

「さてとこれでいいか？」

少女を降ろした後黒子に確認を取る

「ありがとうございますの。」

ところであなたは携帯を持っておりますかしら？」

黒子は少女を寝かした男に聞く

「持ってるがどうするんだ？」

「それですぐに警備員が近くの風紀委員に連絡を取って応援を呼んで頂きたいですの
177支部の白井黒子からの要請とえば、すぐに対応してくれるはず、悔しいですわこの手錠さえ外れれば、私の手で拘束出来るというのに」

黒子は悔しそうに、言って下を向く。

「わかった！ちょっと待ってる」

男はそういって無造作に黒子を拘束している手錠を掴んだ。

「ちょっと何を？」

黒子が男の突然の予想外の行動に戸惑う

「外しゃいいんだな」

男はそう言った後

「ちょっと凄い気合ーい」

と叫ぶと男の口から出た謎の波動が手錠を壊し黒子の手錠が外れた。

「何を致しましたのあなたは？」

黒子は突然手錠が外れて驚いた後、男を問い詰める

「あれ？あなたどこかであったような……あゝ！！あなたそきいたくんは削板軍覇

ではありませんの」

黒子は近づいて相手の顔をよく見てそれがかつて一度だけ会った
レベル5の男だと気づいた。

黒子はこの削板軍覇に一度だけ会った事があるこのとき黒子は相手の
の正体を知らず、犯罪の容疑者であった削板軍覇を捕らえようとし
た、しかし逃げられその後色々あって削板は黒子が心から敬愛す
る御坂美琴と決闘になったので、うやむやになりそれ以来今まで会
う事はなかったがその圧倒的な存在と変わった格好は忘れようとて
忘れられる者ではない

なお黒子が彼の名前を知っているのは、美琴と削板の決闘後ニユー
スでレベル5同士が喧嘩と言うのを聞いて
ひよっと思ひ 初春に書庫に侵入させ確認したからである。

(美琴と削板の決闘についてはとある科学のレールガン 第五卷
限定版付録儀典レールガン書き下ろし小説 とある自販機ファンの存在
ファール証明参照)

話しを戻そう

「うんお嬢ちゃん俺の事知ってるのか？
どっかで会ったっけ？」

削板は一度会っているはずの美少女の事をすっかり忘れて(けしから
ん奴だ)首を傾げるのだった

同時刻 常盤台女子寮

「黒子遅いわね、いくら特例だからって張り切りすぎじゃないの。授業中に居眠りとかしなきゃいいけど」

消灯時間が過ぎていたがこっそりスタンドライトをつけて後輩の帰りを待っていた御坂美琴は、一人呟いて黒子の身を案じた

「あれか！初春の寮は？」

黒子から教えて貰った道を通りようやく初春の寮が見える所に長田健児は到着した。

「さて初春の部屋は何階だ？
しまったさっきの風紀委員に聞いておけば良かったぜ…まあいいか、
とりあえず片っ端から開けていきゃわかるだろ」

健児はそう考えをまとめると、初春の寮の入り口に向かって走って行くのだった。

第三話 黒子の危機

その2 (救いの手はレベル5?)

(後書き)

いかがだったでしょうか？

またしても話し進まず長くなってしまいました。

まとめるのは本当に難しいです

ではご意見 ご感想

ポイント お気に入り登録お待ちしております

最後までありがとうございます

ございましたか？

第三話 決戦初春寮

(学?大原) その5

死闘終結(前書き)

今日は、やっと更新できました。

今回やっと主人公の戦いが、決着つきました。

そのため長いです。

ご了承下さい?

第三話 決戦初春寮

(学?大原) その5

死闘終結

黒子が削板に助けられた同じ頃

ここ初春の寮では、ついに死闘はクライマックスを迎えようとしていた。

拳と拳がぶつかり合う

学の放った渾身の右ストレートは大原の右拳に、大原の右拳も同じく学の右拳に、拳と拳の相打ち、両者の右拳が悲鳴を上げ拮抗してやがて離れる

「はぁ…はぁ…」

学は息を荒げながら、大原を見る

大原も同じく学を見ている

両者息を荒げ、疲れきっている。

そんな中、学は右拳にゆつくりと左手を乗せる。

「くっ」乗せた右拳から激痛がはしり
学は小さな悲鳴を上げた

(右手はやっぱり…駄目か)

その激痛から学は自分の右手がしばらく使い物にならないのを、理解した

（痛そうだな？当たり前か、俺の全力の右ストレートだったんだからな）

目の前で顔を歪める

学を見て大原は学が負傷したのを確信する

（これで奴は右手が使えなくなった…まあこちらは両手が使えなくなったがな）

大原は痛みに堪えながら、冷静に相手と自分の状態を分析する

（向こうは右手が駄目で肋が何本か折れてる。一方こっちは両手が潰れてる、さてどうする？

この手の状態では、ジャブ一つ打っても激痛が走るな……まあ考えていても仕方ないか。とりあえず、奴を倒す！）

大原はそう決心すると、両手をダラリと垂らしたまま、ダッシュし一気に学に迫っていくのだった。

（来る！！）

学は大原が大胆にも、一気に距離を詰めてくるのを見て、気を引き

締めた。

（恐らく奴の両腕は使い物にならないハズだ。まあこっちも右手が使えない上に肋が折れてて、激痛が走るがな…長期戦は不利、それは奴も同じか？…ん！）

学が思考している時　大原のローキックが、無理やりそれを中断した。

「避けたか」

大原は、自分の放ったローキックをギリギリで避けた学を見ていた。

威力も、早さも問題のない一撃だったが、学がとつさに背後に飛んで事なきを得ていた

「あからさま過ぎたか？もっとコンビネーションを使った方がいいか」

大原はそう言って学の方を見てニヤリと笑うと、再度猛スピードで学に迫っていった

（パンチだけじゃないのかよ！

今の蹴り下手なプロなんかより、よっぽどレベル高いぞ)

学は何とか背後に飛んで避けたが、大原の凄まじい蹴りに寒気が走った。

(あんな蹴り持つてるなら、両腕使えなくても関係ないな)

学が大原の底知れない強さに愕然としている間に、眼前まで大原が迫って来ていた

(ちっ！休みなしかよ！！！)

学は大原が放った蹴りを今度はブロックするのだった。

ドンッ

衝撃が学の腕を駆け抜ける。

大原の蹴りは学の顔面を襲い学は、それを両腕でブロックしていた。

しかし

「はぁ！」

大原は気合いを上げると、力を更に入れて強引にブロックの上から学をふっ飛ばす。

「うわ！」

学は痺れる腕の痛みを耐えながら、ブロックした状態のまま、二メートル程、宙に浮く。

大原は着地の瞬間を狙って、そこにローキックを叩きこむ。

バギン！！

「ぐっ！...」

今度は避けられない、学は激痛に顔を歪めた

（まだだ！）

学は激痛のあまり、崩れそうになりながらも、大原の蹴り足を掴もうとする。

「無駄だ」

大原はそう言うのと片足飛びで、バックステップしつつ、ローキックを低めの高さの踵落としに変えて学に追撃する（学がタックルにいきこうと屈んでいるため、それでも届く）

学は頭を守ろうと、掴みにいていた手を、頭の上に持っていき、踵落としをガードする。

バキィ！！

ガードが間に合い、脳への直撃は防げた。

だが

(折れたな)

学の右腕が折れた
代償は自身の利き腕だった。

(折れたな)

踵落としを決めた大原も、手応えから学の利き腕が折れたのを知っていた。

(これで右手は使い物になるまい。
肋も折れている事だし俺の勝ちが決まったな…なに?)

俺の勝利を確信した、大原が下に屈んでいる学を見て驚いた。

何と学はこの圧倒的不利な状況の中微笑んでいたからだ。

苦し紛れなどではない。

学が心の底から、笑っているのを大原は学の目からそれを読み取った

「捕まえたぜ」

学がそう言つと、学のガードした右手が大原の蹴り足の踵を掴んだ。

「折れてても掴むぐらひは、出来るぜ」

とニヤリと笑う

「くっ」

学の不敵な笑みに、大原は一瞬怯む。

次の瞬間

ブンッ

学の左フックが、大原の蹴り足に炸裂した

「ぐあー！」

大原が痛みに顔をしかめる

「もう一発！」

ブンッ

学がもう一度、連続で左フックを放つ

ドガッ

寸分違わず一発目と同じ場所に突き刺さった二度目の左フックは、大原の右足を破壊する。

「おのれ！」

大原は後先考えず、左足で前蹴りを放つ。

前蹴りは学の目元を掠め、学は反射的にパッと手を放してしまう。

「しまった」

学は再び掴もうとするが、既にそこに足はない。

「やってくれたな」

学の攻撃を、何とか離れて、のがれた大原は右足をひきずりながら立って、苦しげな顔で学を見ていた

「何て奴だ」

学はそう言いながら、屈んだ状態から立ち上がった。

学はうんざりしていた。

大原のあまりの強さにである。

それは先ほどの攻防だ

大原は右足が完全に破壊されるのを防ぐため、屈んでいる学に攻撃が届く左足で学を蹴りとばし、学の拘束を解いた、しかし片足が掴

まれてる状態で、もう片足も蹴りに使ったのだ普通なら、バランスを崩して、転けている。

だが大原は蹴った後すぐに地面に片足着地と同時に、戻しながらの右足で学の手を蹴った。新体操選手レベルのバランス力と強靱極まりない足腰の強さがなければ、出来る芸当ではない。

（右足引きずってる、ところを見ると、あの足じゃさつきみたいな蹴りは無理だな、けどこっちも右手は完全に使いものにならない、それに右目が）

実は学の右目は、現在殆ど見えない状態だ。

理由は大原の脱出の為の蹴りが、学の目元を掠めた時、蹴られた箇所が切れて出血しその血が右目に入ったからだ。

（拭き取れば、見えるようになるんだろうが、生憎それをさせてくれる訳はないよな。

向こうは右足に両手　がダメで
こっちは右目に右腕に肋か…参ったな）

学はせめてハツタリにでもなればと、無理に笑みを浮かべるのだった。

（お互いに限界か

まさかここまでの戦いになるとはな。

……だが勝つのは俺だ！！）

大原は最後の力を振り絞り、学に突撃していった。

「来やがったな」

学も肋の激痛と腕からの痛みに耐えながら、迎えうつ。

死闘にピリオドをうつ瞬間はもう間近にせまっていた。

大原が学に折られかけた右足で上段蹴りを放つ。

ブオン

学は折れた右腕でその一撃をガードする

ドンッ

学の右腕に衝撃と激痛が走る。

「ぐっ」

痛みに顔を歪めながらも学はその右足を掴もうとするが、二度と同じ手は食わないとばかりに、大原は蹴り足を既に戻している。

そして今度は左足でローキック

ヒュン

コンパクトな蹴りが、学の太ももの裏を狙うが、これは学がバックステップで避けるが

ズルッ

「なっ」

学はバックステップして避けたまではいいが、バランスを崩してしまっ。

「今だ」

大原はバランスの崩れた学を掴もうと両手を伸ばす
しかし右足が負傷しているため、その動きは遅い。

(馬鹿な奴！勝負を焦ったな)

学は崩れた体勢を立て直した後両手を伸ばして無防備になっている、
大原目掛けて左アッパーを放とうとしたその時

ヒュー

と風が学の顔を撫でた

その瞬間学を眠気が遅い意識が一瞬遠のく

そのためアッパーの態勢に入っていた学だが、ぐらっとバランスを崩し前方にたたらをトットツと踏む。

「はあ？」

学は一瞬何が起こったのかわからず、パニックになる。

(まさかここにきて疲労か？いやいくら何でも急すぎる……だとすると)

「てめえ何かやったのか！」

学がそう叫んだ時、大原の両手が学の顔を掴んでいた。

「俺も両手を攻撃には使えんが、掴むぐらいは出来るぞ」

大原はニヤリといやらしく笑うと同時に、学の顔面目掛けて、右膝蹴りをぶち込んだ。

「負傷した足は軸にするより、蹴った方が痛くないのでな」

そう言いながら、学の顔面に二発 三発と膝蹴りをぶち込み続けるドガ ドガツと鈍い音が部屋中にこだまする。

「そつださっきの質問に答えてやるっ」

大原は学が何の抵抗もなく、膝蹴りを食らい続けているので、余裕が出来たのか、喋りだす。

「お前の意識が薄れたのは偶然ではない、あれは俺の能力でやったのよ。」

俺の能力は

レベル2のスイートブレス

俺の吐息を浴びた生物を眠りにいざなう。

人それぞれ個人差はあるが、大体数時間は、目覚める事はない。

ただし、耳元数センチ単位ぐらいまで近づかないと駄目と言う、糸

件付きだかな。

さっきの場合、距離が離れていたから、一瞬意識が遠のく程度の効果だったが、それでもその一瞬が戦いでは命取りになるから、効果抜群だったろ？

チンケな能力だが、使い方さえ良ければ、それなりの効果を発揮するもんだ。

ちなみに生物なら、どんな奴でも俺の吐息を数センチ単位で浴びたら強制的な眠りにつく。

科学者が言うには、ゾウとかにも有効だそうだが、俺は試した事はない。

話が長くなったな。

ようするに切り札は最後の最後まで、取っておくのが大事って事よ」

大原はそう笑いながら、今度は膝蹴りを顔面を蹴っていたのを、腹に変えて腹を首相撲の態勢から蹴り出す。

ドス ドスツと学の腹に膝蹴りが突き刺さる。

「このまま肋を更にへし折って心臓か肺に、肋骨を突き刺すまで、蹴ってやる

俺をここまで追いつめたんだ。

悪いがここで死んでもらう」

大原は敢えて残酷な方法で、学を殺そうと膝蹴りを繰り返す

学はまるでサンドバッグにでもなったのか、無抵抗で蹴られ続けている。

「そろそろくたばる、寸前か？

言い残す言葉があるなら聞くぞ?」

大原は膝蹴りを加えつつ学の口元に耳を近づける。

「ほれ何か言ってみろ」

大原は学に早く何か言えとせかしつつ、膝蹴りを今度は蹴り足を変えて続ける。

「ほらほら言い残す事はないのか? ないならこのまま、殺すぞ」

大原はニコニコ笑いながら、学を殺すために蹴って、蹴って蹴り続ける。

その時

学が微かに動いた。

「やっと言う気になったか?

安心しろ俺は記憶力が言い方だから、一字一句間違えないで覚えてやる」

大原はそう言いつつ さっきよりもより近くまで、自分の耳を学の口元に持っていく。

「ほらせめて最後に面白い事でも言え」

大原は優越感に浸りながら、学の最後の言葉を聞こうとする。

「はぁ……………」

「ん何だ？よく聞こえなかったぞ？」

大原はもう一度言えとばかりに、腹に膝蹴りをぶち込む。

「……………」

「ほらどうした？」

それとも力つきて失神でもしたか？」

大原は今度は蹴らず、両手で学の顔を揺さぶる。

「馬」

「ん？馬だと？」

大原は何と言ったか考えるが、その必要はなかった。

学がさつきまでの小さな声とは違い。

大声で叫んだからだ

「馬鹿つて言っただよ！

この間抜け野郎！！」

そう言い終わった後　学は、カパツと口を開いた後

ガブツと一口

大原の耳に噛みついた。

そして次に首を横に振り、耳を噛みちぎる

ブチツと大原の片耳が千切れて血が飛ぶ。

「ぐわっ」

突然の痛みに大原は、首相撲を解いて離れる

「ぺっ」

学は噛みちぎった、耳を床に吐き捨てる

「貴様」

大原は親の敵でも見るような目で、学を睨む。

「とどめも刺してないのに油断するなんて、馬鹿じゃないの？」
学は怒り心頭の大原に馬鹿に、したような口調で言う

「殺す」

当然、火に油を注ぐ結果となり、大原は耳の出血もお構いなしに突っ込んでくる。

しかし突っ込んで来る大原を見ても、学は慌てる事もなく、冷静にそれを見つめている、満身創痍にも関わらずだ

「悪いな、俺の勝ちだあんたは時間をかけすぎたのさ」

学はそう言つと、己の拳を強く爪が食い込むぐらいに、握ると爪が食い込み、ポタポタと拳から血が滴る。

滴った血は何故か床に落ちず、空で固定される

「刃よ」

学がそう一言言つと、学の血が、赤い刀となる。

学はそれを負傷していない左手で持つ。

「何だそれは？」

学が突然刀を生み出したので、大原は啞然として立ち止まる。

「本来武器も使わない奴に能力を使うなんてのは、あまり好きじゃないんだが、あんた強いし初春達の貞操の危機だから仕方ないよな」

学はそう言いながら、片手中段に赤い刀を構える。

「能力者だったのか？何故今まで使わなかった？」

「こいつは言うなら裏の能力でな、色々と条件があるんだわ、まあさっきあんたは能力の説明してくれたし、俺もお返した」

「この能力は血液操作ブラッドコントロール

自分の血で色んな物を作り出せる

能力発動中は体内の特殊遺伝子が増血機能を増やす遺伝子なんだが

な、まあそれが目覚める。

ただしさつきも言った通り条件がある

一つ

陽が完全に沈んだ夜じゃないと使えない。

二つ

演算が複雑

三つ

長時間使用すると暴走してしまう

四つ

昼間に使ったら、反動で体に凄まじいダメージと疲労が襲う
場合によっては死ぬ

つてところだな」

と学は説明する

その学の長い説明を、大原は黙って聞いていた。

何故なら大原には、刀を構える学から凄まじい威圧を感じていたからだ。

冷や汗が流れ、体がブルブルと震える。

だが大原にはどうする事も出来なかった

それほど能力発動した学の強さが自分より、桁違いいや次元が違うのを大原は第六感で、理解していた。

学はそんな大原の様子を哀れみを込めて見る

「運がなかったな、昼間なら絶対あなたの勝ちだったのにな
あとあなたが、俺を膝蹴りで痛めつけてくれてる間に長つたらしい
演算時間もクリアできた。

ついでに言っとくがこの能力は、システムスキャン受けてないんだ
が、おそらくレベル4から5の間になるのは確実なはずだ。

じゃあな、恨むなら、自分の運の無さを恨んでくれ」

そう言い終わった学は、片手中段に構えた赤い刀を、片手袈裟斬りに振り下ろした。

大原は抵抗する事もせず、神に裁かれるかのようにその断罪の刃をその身に受けるのだった。

鮮血を飛び散らせながら大原がゆっくりと、床にうつ伏せに倒れていった。

死闘に終止符がうたれた瞬間だった。

第三話 決戦初春寮

(学?大原) その5

死闘終結(後書き)

いかがだったでしょうか？

今回長くなったので、不安です

ではご意見 ご感想

ポイント等待着っております

ありがとうございます。

第三話黒子の危機 その3 (軍覇の事情) (前書き)

今日は毎日暑いですね

こちらは夏バテです

やっと更新出来たので、良かったら見て下さい？

第三話黒子の危機 その3 (軍覇の事情)

「ああ！思い出した そうか！あの時のテレポートのお嬢ちゃんか」

「やっと思い出して 頂けたんですね」

黒子は、自分の事を やつと思いで出してくれた。
レベル5の男を疲れた表情で見上げるのだった

今、黒子達はとあるバス停にいる。

あれから削板に救出された黒子たちは、 場所を移動した。

敵が他にもいるかも知れないし、電柱に車が直撃したとは いえ、
敵の全滅を確認したわけではないので、念には念というやつだ。

移動中、黒子は自分の事を完全に忘れていた削板にいつどこであっ
たかとか、細かい事を説明した

説明のかいあって、削板はやつと思出したというわけだ。

ちなみに救出した、もう一人の少女は、いまだに意識を取り戻さない
ので、バス停にあるベンチに寝かせている。

「そうか。あの時のテレポートお嬢ちゃんか。

久しぶりだな

そついや？あの根性ある電気使いの嬢ちゃんは元気か？」

「あの根性のある？」

黒子は一瞬首を傾げるが、すぐに答えに 気づく

「ああ！お姉様の事ですわね

お元気にされてますわ」

「おおそうか。そいつは良かった。
相変わらず根性あるのか？」

削板は嬉しそうに、しながら、黒子に言う。
彼に取っては良い思い出のようだ。

(最も黒子に取っては最悪の思い出だが)

「ええありますわ

お一人で無茶ばかり なされて、黒子がどれだけ心配した事か」

「そうなのか。まあ根性があるのは大事だからな！
俺も負けずに頑張らないとな」

そう言った後、削板は、(うんうん 男は根性だ)と言いながら頷
いている。

「はあ？まあ根性が大事なら大事でそれはそれで、宜しいですが。
ところで話しは変わりますが、何故レベル5のあなたが、誘拐犯を

追っかけてましたの？」

黒子はある程度思い出話した後、本題に入る

「ああそれはな」

黒子の質問に削板はゆっくりと答えだした。

「はあまゆちゃんですか？」

「ああそつだ。俺と ヤブはまゆちゃんに頼まれて動いてたってわけだ。

ちなみにヤブは俺のダチだ」

「わかりましたわ」 黒子はげんなりとした様子で頷いた

削板の長く突飛で解りにくい説明を、黒子は頭を使って、要約した簡単に言うと

削板はまゆちゃんと いう少女に依頼され その依頼によると近頃秘密裏に、行われているチャイルドエラーの誘拐事件があり、そのほとんどが大胆にも施設で誘拐されており、それを知ったまゆちゃんが、犯人の思考をプロファイリングした結果、とある2つの施設が、狙われる確率が高いと言う事がわかり、削板とその友人である

原谷やぶみ矢文に施設の密かな警護を依頼した。

二人はそのまゆちゃんに恩があるので、断れず、警護にあたっていたのだが、原谷が敵の陽動作戦にまんまと引っかかり、その間に少女は誘拐されてしまったのだ。

しかしまゆちゃんはこんな事もあるうかと、2つの施設のチャイルドエラー全員に肉眼では判別できない発信機を、付けており、その発信機 から敵の居所を、割り出し、削板たちに 追跡させ、音速の速さで、動ける削板が 先行して、犯人たちと先に遭遇しその後黒子たちを、削板が助けたというわけだ。

なお削板いわく、そのまゆちゃんは風紀委員で、よく削板たちは彼女のお手伝いをして、小遣いをもらっているとの事だ。

またまゆちゃんが言うにはこのけんには 警備員が関わっており学園都市の上層部も関わっているらしい。

（それを聞いた黒子は警備員への応援要請をやめた。代わりに同僚に連絡したが 先輩も相棒もつながらなかったため、とりあえず削板と一緒にいる）

「でもにわかには、信じられせんわね 警備員にそんな不心得者がいるなんて」

黒子は治安維持に携わる者として、その発言にショックを受けていた。

「それで、その犯罪者共はチャイルドエラーの子たちを、どうしておりますの？

身の代金が狙いとは 思えませんが」

黒子は犯人達の目的を考えるが、よく解らない。

そこに削板があっさりと答えを教える

「あゝそれな

臓器売買と児童売春だろうって、まゆちゃんが言ってたぞ」

とあっけらかんとした感じで削板が言う

「何ですって〜!!」

自分の予想を遥かに超える惨い答えを聞いて、黒子は真夜中なのに
大声で叫ぶのだった。

「おう嬢ちゃんよ。俺が言う事でもないが、近所迷惑ぐらい考え
た方がいいぞ」

削板は耳を両手で、抑えながら言う。

「それは、申し訳ないですけど…って何でそんな冷静なんですの?」

「ん?そういう事は学園都市じゃ大なり小なりあるってまゆちゃん
が言ってたぞ。」

俺も学園都市の暗部の争いで死んだ奴とかは、どでかい焼却炉で骨も残さないように 燃やすとか、よく聞くしな」

と削板は言う

「そんな事が……」

そう言った後黒子は黙り込んでしまふ。

「まあ何事も表もありや裏もあるしな 世の中知らない方が
良いこともあるから 気にすんな」

と言つて黒子を慰める。

「だとしても、許せませんの！ そのような事が平然と、行われて
いるなんて」

黒子は拳を握りしめながら、怒りを露わにて言う。

「でその警備員や関わってる上層部の者たちとは、一体誰ですの！」

黒子は強い口調で言う。

「さあそこまでは、まだ解らないな

その可能性が、かなり高いって、まゆちゃんは言ってたが、
具体的な名前までは 知らん」

と削板がそっけない感じで言う。

「そうですね」

そう言った黒子は問い詰めるのを、やめる。

「あゝまあ気落とすな。

じきに探り出すってまゆちゃん言ってたし」

「そうですね。

わかりましたわ」

黒子は渋々納得する

「そういう事だ。 うん？誰だ」

削板は会話中に人の気配を感じたので、周りを見渡す。

「こんな所に居やがったのか。
探したぜ」

そう言いながら、先ほど事故にあって大怪我したはずの、犯人グループの一人 杉本が暗がりから、姿を現すのだった。

第三話黒子の危機 その3 (軍覇の事情) (後書き)

いかがだったでしょうか？

軍覇原作出番少ないから、キャラ掘みにくい

第三話 黒子の危機 その4 (規格外という名の化け物とサイボーグ少女)

こんにちは、連日暑いですね
梅雨明けの後はこれかよ。

では最新話ここにお届けします。
少し本文の量が増えましたが、御了承ください？

第三話 黒子の危機

その4（規格外という名の化け物とサイボーグ少女）

「なっ！あなたは」

黒子はその敵に恐怖した。

何故なら暗がりから現れた、杉本は普通な状態ではなかったからだ。

服はところどころ、破れているし、あちこち擦り傷だらけだ。だが彼らは、車が猛スピードで電柱に激突したのである。

普通なら骨が折れ、下手したら、死んでるはずだ。

なのに目の前の男は、傷こそあるがとても大怪我とは思えない、軽傷である。

そしてその男は、黒子たちを親の敵でも、見るような憎しみに満ちた目で見ている。

「やってくれたな！ いつの間に援軍を、呼んだんだ？……まあいい。」

とりあえず商品を返して貰おうか」

そう言いながら、杉本は黒子たちに近づいていく。

「私は商品ではありませんの！無論あそこで眠っている少女も、あなた方の薄汚い欲望を満たして差し上げる気は毛頭ありませんの。それよりあの事故で、何故動ける程度の、怪我ですんだのか、知りませんが大人しく捕まった方が、身のためですわよ」

と黒子は警告し、半身に構える。
ダーツなどの武器を没収された黒子には、他の選択肢はない。

そんな黒子の姿を見た、杉本は憎しみに満ちた顔を歪ませ、突然
大声で笑い出した。

「ハーハツハツ！　くつくく…笑わせてくれるぜ。さっき俺に
ボコボコにやられたくせによ　二人がかりなら、勝てると思っ
て　んのか？」

「二人がかりではありませんわ。
先ほどは油断してましたが今度は、そうはいきませんの」

「常盤台のお嬢様よ。油断大敵って言葉知ってるか？
まあいい笑わしてくれた礼に、俺がどうして助かったか教えてやる。

実はこう見えて能力者でな、能力レベルは2　名前はエスケープ
(緊急脱出)

簡単に説明すると、危機的状況における　自動転移ってやつだ　俺
は死にそうな目に合うと、自動で空間転移してその状況を回避する
んだ。

自分の意志で発動させられないのが欠点だが、利点もある　ま
ず高度な演算がほとんどいらぬい。

次に飛距離は最大で　数キロ単位で飛べる事もある。

まあ飛ぶ場所も距離もランダムだがな。　学者たちは完全に制御出

来れば、空間転移能力の更なる発展になるとか言ってるが、何故自分で飛べるのか？

何故演算が要らないのか？

全く不明だから、開発のしようがない、不便な能力さ、でもたまにこうして役にたつから、無能力よりはましか」

と杉本は笑いながら言う。

「なるほどあなたが、無事な理由はよくわかりましたわ。空間転移にそんな能力者がいたとは知りませんでしたの」

「まあ一応俺の能力は空間転移とは認識されてないからな

」

「そうですわね。

自分を飛ばせると、言ってもそれが自由に使えないのなら、それは当然ですわね。つまりあなたは、無能力者と変わらないと言う事ですわね。なら覚悟なさい。

先ほどの屈辱何倍にして返して差し上げますわ。

ところであなたの仲間たちも、あなたのように無事ですか？」

「さあな。

一応事故があつたって言って、救急車は呼んでやったがその後は知らん」

と杉本は素っ気なく言う。

そこに仲間への心配は欠片も見えない。その非情さに、黒子は恐怖を覚えるが、耐える。そんな黒子を削板は、腕を組んで黙って見ている。

「お喋りはここまでですの。」

大人しく捕まるか、抵抗の末に捕まるか どちらがお好みですか？」

黒子はそう言った後 ゆっくりと距離を、詰めていく。

（飛び込むと、見せかけて、背後か真上に空間転移して、全体重を乗せた蹴り、これで私の勝ちですの）

黒子は瞬時に自分の勝利までの方式を、頭の中で瞬時に組み立てる。

（今ですの！）

黒子は足に力を込め、飛ぼうとした黒子の耳に

「ああお喋りは終わりだ」

杉本の邪悪に満ちたが聞こえた。

瞬間。

黒子の耳に耳障りな音が聞こえてきた。

その音は黒子の脳内を、駆け回って脳に激痛が走る。

あまりの激痛に黒子は地面にうずくまり
こめかみを抑える。

「これは…まさか」

黒子は自分に起こっている、状況を理解し一つの可能性に思い当たる。

（この感じはキャパシティダウン。

何度も食らったので 間違いありません。

しかしそんな装置一体どこに？）

黒子は辺りを見回すが、そんな装置はどこにもない。

「油断大敵ってさっき言っただろ。」

おかしいと思わなかったのか？

どこの世界に敵の前で呑気に喋ってる、馬鹿がいる。

まあそんなだけ、便利な能力があれば、力に依存するのは当然か。

教えておいてやる。戦いは単純な力同士のぶつかり合いが全てじゃない。

相手が近接戦が得意なら、遠距離で戦えばいい。相手に全力出されたら負けるなら、全力出させなければいい。

こういうのを、戦術って言うんだよ。

まあお子様には、解らないだろうがな。

はあ〜ついつい、教えてしまっぜ。

まあこういう小細工はお嬢様はお気に召さないだろうが、戦場では、こういう小細工は結構有効だぜ。

さてと敵に塩を、送るのはこれくらいにしとくか。

最後にサービスで、教えてやる。

お前を苦しめてるのは、キャパシティダウンって機械でな
で能力者の演算を、邪魔して能力を使用出来なくさせるんだ」

音

と杉本は得意気に言う。

「知ってますの」

黒子は苦しそうな、感じてそう言う。

「そうか。まあ風紀委員だから、そういう事も詳しいか？」

と頭を掻きながら、言う。

「ですが…キャパシティダウンは大きい装置だったはずですよ。
そんな大きい装置、一人で用意出来るはずは」

と黒子が言う。

現に彼女の視界に、彼女の見覚えのある キャパシティダウンの装
置はない。

そんな黒子を、杉本は憐れみの目で見る

「残念だったな。

技術ってのは発達するんだぜ」

そう言つて、杉本はポケットから、四角い物体を取り出す。

「携帯型キャパシティダウン。

まだ試作型だがな。従来型と違い、広範囲や長時間の使用は無理だが、短時間なら、大型のキャパシティダウンと同じ効果があるんだぜ。知ってるか？このキャパシティダウンの前じゃレベル5も、無力なんだぜ。

時間にして大体十五分だが、それだけあれば充分だ」

と言つてからうずくまつてる黒子に、近づいて、黒子の頭を踏んづける。

黒子の頭が地面に、ぶつかり額から血が出るが、容赦なくそのままグリグリと、黒子の頭を踏み続ける。

「全く予想外の事が起きるから、切り札まで使う事になっちまったぜ。

こいつを使うと能力者である、俺も頭痛に悩まされるんだがな。まあお嬢様ほどじゃないけどな。気が変わった。

捕獲するのは無理そうだし、生かしてもしつこそうだし……」

そう言つて杉本が、踏んづけていた足を頭から離し、上に高々と上げる。

「というわけで死ね。

化けて出るなよ」

と言つて足を振り下ろそうとした。

その時

「おうテレポートの お嬢ちゃん。

調子の悪い時にタイムマンするのは無謀だぞ。

1対1の戦いにちよっかい出すのは、俺の流儀じゃないが、 助太刀させてもらうぜ」

今まで様子を見ていた削板軍覇が、普通に二人の戦いに割り込んできた。

「馬鹿な」

「有り得ないですよ」

二人は同時に叫んだ。

（私の頭はまだ頭痛がある。

つまりまだキャパシティダウンの効果は続いているはず。

なのに普通に立っているなんて、お姉様でも不可能でしたのに、まああの方も、お姉様と同じレベル5ですが、お姉様よりは格下のはず、まあお姉様より格上の レベル5ならどうかは知りませんが）

と黒子はこの有り得ない状況を理解しようと頭を働かせるが さっぱり解らなかった。

「お前！何で動ける？キャパシティダウンが聞こえてないのか！！」

一方、杉本は黒子ほど冷静ではなかった。
当然だろう。

自分にも痛手がある 最後の切り札が全く効かないのだから

現に削板は涼しい顔をしている。

「うんキャパシティダウン？ …… ああ、このかん高い音が。少しうるさいけど、これがどうかしたか？」

削板は相変わらず涼しい顔で答える

「そんなはずは…… レベル5だって、こいつの前では無力なんだ。なのにどうして、まさかあれだけの力があってレベル0なのか？ いやそんなはずはない」

杉本は混乱状態に陥っていた。

彼はキャパシティダウンを手に入れた時ちゃんと効果を調べていた。

その例の中には、レベル5の第三位ですら、頭を抑えて動く事は出来なかったとあったのだ。

なのにその、対能力者用の最高の切り札が、目の前の男には効かない。
とても信じられない

（これは悪夢か？ まさか偽物掴まされ、いやそんなはずはない！
現に、あのレポート風紀委員には、効いてるじゃねえか。 そう
だ。
何かの間違いだ）

「キャパシテイダウンが効かない能力者が、いるはずがないんだ」

杉本は錯乱した状態のまま、懐からナイフを取り出し、削板に捨て
身で突っ込んでいく。

削板はそれを、ちらつと見た後、右拳を 腰だめに構え、空手で言
う正拳突き、態勢に入る。

そしてまだ、拳の届く距離ではないのに
その拳を解き放つ。

「すごいパンチ」
その根性を込めた、叫びの後、謎の波動が彼の拳から出て、錯乱
した狂人をふっ飛ばす。ふっ飛ばされた、狂人は十メートルほど、
吹っ飛ばされた後、地面に叩きつけられる（まあすごいパンチ

の波動で狂人はすでに失神しているから痛みを感じなかったのは救いか)

削板の規格外の強さの前では、さすがのキャパシティダウンも無意味だった。

「さてとお〜いお嬢ちゃん大丈夫か」

削板は狂人を倒した後、黒子の心配をして、彼女に駆け寄る。

「うう……大丈夫ですよ。」

どうやらキャパシティダウンも止まったようですのね
助かりましたの」

黒子は立ち上がり、ながら服についたホコリを払う。

(キャパシティダウンはすごいパンチで吹っ飛ばされた時に、一緒に壊れてる)

「おう無事で良かったぜ。」

でも調子が悪いのに 無理しちゃだめだぜ 勇気と無謀は違うんだ
ぜ」

と削板は心配と忠告をする。

「大丈夫ですの。
キャパシティダウンのせいで、少し頭が痛いだけですから
じきに治まりますわ」

「そうか。
まあ大丈夫ならいいが、とりあえずあの気絶した 子も起きてるか
もしれないし、
戻るか」

「そうですね。
戻りましょう」

そう言った後二人は、気絶している少女 のいるベンチに戻って
いった。

がそこには、先客がいた。

先客は二人
一人は削板軍覇の友人と言うより、腐れ縁の、見た目普通の学生の
原谷矢文
そしてもう一人は

「あなたは？」

黒子は二人目の先客を知っていた。

それは少女だった。黒子はその少女に、一度だけ会った事がある。削板軍覇と同じように。

自分と同じツインテールの髪型。

ただし色は金髪

そして今はないが、いつもは小学生であるため、ランドセルを背負っている。

「お久しぶりですね先輩。

ポルターガイスト事件の時は絆理お姉ちゃんたちを助けて、くれ
てありがとう」

そう言っって少女は頭を下げる。

「何故あなたが、ここにいるのですの？」

黒子は目の前の少女に質問する

「削板軍覇の携帯をGPS機能で調べたら、ここだったから、来
たんだよ。

先輩

後削板軍覇に依頼したのは、私だから」

「あなたがですの」

「そう私だよ」

そう言って少女は、微笑む。

少女の名前は

なゆた
木原那由他

木原一族の一員にして

第四十九支部所属の 小学生の風紀委員

にして、狂った木原

一族の中で唯一の良心と言える存在。

それが彼女木原那由他という少女だった。

その先客として、現れた少女から、とてつもない黒幕の正体を聞いて、黒子に戦慄が走るのだった。

第三話 黒子の危機

その4（規格外という名の化け物とサイボーグ少女）

いかがだったで、しょうか。

わかる人はわかると思いますが、木原那由他はレールガン五巻（限定版）の付録 儀典レールガンの書き下ろし小説に出てくるキャラです。

この書き下ろし小説では、軍覇君が活躍するので参考にしたら、彼女を出したくなったので、登場とあいなりました。 補足説明
です

ではまたありがとうございました？

第三話 黒子の反撃 1 (学園都市の間と黒子の正義) (前書き)

今晚は？

遅くなりましたが、最新話投稿します

今回は長いです。

ご了承下さい

第三話 黒子の反撃1（学園都市の闇と黒子の正義）

「甥おい…甥おいといましたの？」

その甥が首謀者なのですね…間違いではなく」

木原那由他なゆたの告げた黒幕が、信じられない、黒子は再度那由他に確認を取った。

しかし那由他の、答えは変わらず、那由他はさっき告げたのと同じ黒幕の名前を 繰り返す。

「間違いないよ。

先輩にはシヨックだろうけどね。

首謀者の名前は、瀧河大我たきがわたいが

年は三十三歳、統括理事の一人瀧河天竜（てんりゅう）の甥で、現警備員で三人いる剣道師範の一人 剣だけではなく、大抵の武道に精通している。

警備員になりたての頃、誘拐事件を起こした、学生五名を皆殺しにして、誘拐事件を解決した事もある。

その時5人中三人はレベル3の能力者にも関わらず。

資料によると、全員一太刀で、仕留めたとある。

誘拐犯とはいえ、学生を斬り殺したので、出世はないけど、統括理事の叔父の名を出して、やりたい放題しているそうよ まあ瀧河理事本人は多忙のため気づいてないみたいだけど」

「警備員の身でありながら、何という事を」

黒子は怒りのあまり、拳を握りしめる

「残念だけど、ちゃんと仕事している、警備員や風紀委員の方が少ないの」

とため息を吐きながら、那由他が言う

「わかりましたの。ところで、話は変わりますが、どうして、あなたがこの誘拐事件を追っておりますの？風紀委員の管轄ではないはずですよ」

と黒子が納得した後、気になっていた事を聞く。

「越権行為をよくする先輩がそれを言う？」

那由他の鋭い突っ込みに、黒子はたじろぐ。

「うっ！それは。」

しかし私はそれが、必要だと思ったからしていますの、決して考えなしで動いている訳では、ありませんの」

「まあその結果助かる人たちもいるし、問題ないかあ」

「そうですね」

と返事した後、黒子がこの話はこれまでとばかりに、再び話題を変
える。

「それで、話は変わりますが、あなたと削板軍覇とはいつ知り合い
になりましたの？」

後そこにいる、削板軍覇の友人の方とも」

と言つて黒子は、自分たちの会話を聞きながら、
捕らえて、バス停のベンチの近くに転がしている

（那由他が手錠を持っていたので、すごいパーンチで吹っ飛ばした、
杉本を拘束した。まあすごいパーンチを喰らったのだから、数時間
は目を覚まさない、思うが念のため）

話を戻そう。

那由他は、黒子の質問にすらすらと答える

「初めて会ったのは、あなたのところの第三位と削板軍覇が決闘し
た時。

その後、私が寄付をしている、チャイルドエラーの施設の子供が、
虐められているのを、削板とその友人の原谷矢文の二人が助けてく
れて、その現場に駆けつけた私と再会して、それから、私が頼んだ
ら二人とも、手伝ってくれるようになったの」

那由他が言う。

「まあたまに小遣いくれるしな」

と削板が言う。

「あなた！小学生にたかるなんて、恥ずかしくないのですの」

と黒子が問題発言に鋭く突っ込むが、那由他が弁護する。

「たかつてない。

私は労働に見合った 対価を払っているだけ。

現に彼には、無理なお願ひも結構聞いて貰っている。

今日も野蛮な無能力者狩りを取り締まって貰っていたし」

と言う。

「野蛮な無能力者狩り？

そんな話聞いた事ありませんわよ」

「それは当然だが、黙認しているから、能力者の中には、自分たちが特別な、存在だと思い、無能力者達を、クズとかにしか見ない能力者が、結構いるの。

名門の生徒や、高レベル能力者は、学園都市にとっては、大事だから、役に立たない無能力者を、いくら狩っても、よほどの事がない限り、取り締まらない。

もつと酷いケースだつてある。

高位能力者を守るために、身代わりを学校が用意する場合もある。私が見つたところでは、長点上機学園とか、後他にも名のある学校が幾つか拳がつてる

ちよつと前に、主に無能力者狩りを、していた能力者達の大半は何者かの襲撃を受けて、再起不能か病院送りになつたんだけど、全滅させられたわけじゃないからまた前ほどじゃ、ないけど増えて来たの。

それで二人に頼んで、肅清して貰つてたの」

と那由他が言う

「そんな…事が」

黒子はショックのあまり、それだけ言つた後沈黙してしまつた。

「先輩が思う以上に学園都市の闇は深いの。

そしてその闇に大体私たち木原一族の者が、関わつてる」

と那由他が悲しげな、表情で言う。

しばらく沈黙していた黒子だが、気を取り直して会話を再開する。

「わかりましたの。
ところで、話しは戻りますが、誘拐事件にどうしてあなた達が関わっていますの」

と黒子が言う。

「先輩私たちは、実は誘拐事件を捜査しているわけじゃないの」

「それは一体どういう事ですか？」

「実は私は幾つかのチャイルドエラーの施設にお金を寄付しているの」

「寄付って…あなたは子供ではありませんか？」

黒子は不思議そうに、首を傾げている。

「私はこう見えても、能力レベルは先輩と同じレベル4だし、後実験の被献体になれば、報酬を貰えるの、私はそのお金をチャイルドエラーの施設に寄付している。」

今回その寄付している施設の内の二つが、狙われている情報を掴んだの。

それで、二人に施設の警護をして貰っていたの」

「で二つ施設があったから、俺とヤブが二手に分かれて、見張ってたら、ヤブの方に現れて、さらわれて、俺がまゆちゃんからの情報をたよりに追跡して、嬢ちゃん助けて今に至るってわけさ」

と途中から会話に、割り込んできた、削板がまくしたてる。

「なるほど。」

それで犯人を調べたら、統括理事の甥にいきついたと」

と黒子は言う。

「そついう事。」

元々黒い噂の絶えない人だったから、思ったより簡単につかめた」

「それで彼はチャイルドエラーをさらって何をしていますの？」

と黒子が聞く。

すると那由他はつらそうな顔を一瞬したが、すぐに無表情に戻り続きを話す。

「さらわれたチャイルドエラー達は、1に臓器売買のドナーに二に

児童売買春の為の性奴隷に、学園都市の教師やVIPの中にペドフィリア、うっんチャイルドモレスターが結構いるの」

「ペドフィリアは大体わかりますが、チャイルドモレスターと言うのは何ですか？」

黒子は那由他の言ったことばかりの意味がわからず、質問する。

那由他はそれに丁寧に答える。

「チャイルドモレスターと言うのは、ペドフィリアのパワーアップ版てやつかな。

ペドフィリアと言うのは、十二歳以下の子供を性的対象にする、人たちの事を指すの。

チャイルドモレスターは、その子供に対して性的行為を強要する者の事を指すの。

人間には色々な性癖があるの。

特に金持ちや社会的地位の高い人たちは、なまじ金や権力でどんな美女も抱けるから、普通でない趣味を持つ者が多いの。

そんな変態どもの欲を満たし、そのかわりに学園都市の為に便宜や援助をして貰うの」

と言って那由他が説明し終わる。

それを聞いた黒子は、怒りのままに叫ぶ。

「許せませんの！
統括理事の甥か何か知りませんが、風紀委員の白井黒子が成敗致しますの」

黒子の決意が空に響く。

怒る黒子を見ながら、那由他は冷静に言って確認を取る。

「いいの？相手は凄腕の警備員だし、護衛も多いよ。
装備だつて、いい物を持つてる。」

あんな不良に小型のキャパシタードウンとか、与えられる連中何だよ。

おまけにこっちは、他の風紀委員や警備員にも援軍は呼べないんだよ」

「うっ…それは」

那由他の言うとおりなので、黒子は黙り込んでしまつた。

警備員はこんだけ誘拐とか堂々とやっているのに警備員が動かないか尻尾掴めないと言うのは、つまり警備員の捜査情報などを掴んで、その裏をかいているのだらう。

また風紀委員も無理だ。

現在風紀委員のトップ、筆頭風紀委員は 瀧河 志^し遂^{すい}統括理事、瀧河天竜理事の次男だからだ。

筆頭風紀委員が、あからさまに敵に荷担するとは思えないが、筆頭補佐にはその弟道春みちはるなどもおり、従兄である彼なら、楽々情報を掴む事が出来るだろう。

こちらの動きをつかまれたら、相手は警備員、自分たち風紀委員より上位である。風紀委員の資格剥奪や事故に見せかけて、消すなど簡単だろう。

つまり今仕掛けて、相手が、こちらの正体に気づく前に叩くしか活路はないのだ。

たった4人で、襲撃さらわれた、チャイルドエラー達を救い出す、無謀と言つより悪夢としか言いようのない作戦だ。

しかし黒子は恐れず、己の思いを那由他に告げる。

「覚悟は出来ておりますの。

例えいかなる敵が現れようとも、己の信念に従い、己の正義は決して曲げませんの」

そう言つて那由他を黒子は力強い視線で見る。

それをしばらく那由他は見ていたが、やがて喋り出す。

「ここには、ポルターガイスト事件の時みたいにレールガンのお姉ちゃんはいないよ？
それとも今から呼ぶ？

どっちにしても、気絶している女の子を、施設まで送らないと行けないから、救出はそのあとになるし、どうする先輩？」

と那由他が言うがすかさず黒子が返す。

「お姉様は呼びませんの。」

私とて風紀委員で少しは名の知られてる 常盤台のレベル4のテレポーターですの げすの相手は、私だけで、充分ですの」

「まあ私たちも戦うけどね。」

わかったじゃあ、一緒に子供たちを助けよう。

改めて宜しく先輩」

と言って那由他が握手を求めてくる。

「こちらこそですの それで子供たちのいる場所は？」

黒子は那由他の手を握って握手をしながら、言う。

那由他はしばらくしてから、質問に答えた。

「第七学区にある、 学びやの園内にある 第一超能力特殊訓練所
そこを瀧河大我は私物化しているの」

「何ですって〜!〜!」

黒子は目と鼻の先に、犯罪者達のアジトがあるのを知り、再び絶叫するのだった。

場所は変わって敵の アジト。

第一超能力特殊訓練所である。

ここは、警備員が対能力者戦闘の訓練を行う施設である。学びやの園内にあるのは、学びやの園内の高レベル能力者に、協力してもらいやすいためだ。

しかしこの学校も保守的で、学校協力による訓練は年二、三回しかなく、数人常駐しているだけで、訓練所と言うのは、名ばかりだけになっていおり、この施設を金と統括理事の権力を持って、瀧河大我は支配している。

警備員なので、セキュリティに干渉でき、それによって、客たちを密かに招き入れている。

やりたい放題だが、統括理事の中でも、上位の勢力を誇る瀧河理事の甥で、警備員の影の支配者に、迂闊に手を出す馬鹿はまずいない。

怪しいと思っても、黙っておくのが、賢い選択だ。

現在訓練所内には、今日売りに出される 商品五組が監禁されてい

る。

そしてそれを監視する影が三つ

「それで西山たちかはまだ帰ってきてないのだな？」

声を荒げて言うのは

、首謀者である。

瀧河大我である。

身長185ありかなりの迫力がある。

それに答えるのは、彼の弟子である

我孫子^{あぐい}

である。

「携帯に連絡しているのですが、繋がりません。捕まったものと、思われるかと」

とあびこは、感情を込めず事実を淡々と言う。

しかし内心は冷や冷やものである。

彼は知っているからだ、目の前にいる己が師が、大した理由もなく、人を斬るのを、スキルアウト狩りと言っては、わざと一撃くらい、正当防衛の名の下に、斬殺してきたことを。

「使えん奴らだ。」

まあいい、今回は質のいい良品ばかりだからな。

多少商品が、少なくとも、問題あるまいだが役立たずどもには、後でお仕置きしないとな」

そう言いながら、手元にある刀を少し抜いた後、すぐに納刀する。

「そうですね。」

一応鬼川（きせん）（）たちに、探させましょうか？」

とあびこが言うが、

「必要ない！役立たずを探すのに、貴重な戦力を動かすな」

と即座に一括される。

「申し訳ございません」

と二人が話していると、一人の男がノックもせず、いきなりドアを開けて入ってきた。

さらにその後、もう一人男がいる

「鬼川ノックぐらいしたらどうだ」

とあびこが注意する。

「悪い、悪い、今度から気をつけるよ」

と謝る、まあ口だけで心はこもってないが。

最初に入ってきたのが鬼川翔角しゅうかく

次に入ってきたのが一学いちがくりょうけん了見である。

二人は、大我の部下ではなく、別に主がいて、その主の命で大我の手助けをしている

もう一人外げがい界塵期じんきという仲間がいるのだが、部屋に入ってきたのはこの二人だ。

共にレベル4の能力者で武術にも優れている、外界も同様だ。

「それで、二人共何の用だ」

鬼川の失礼な態度を、気にせず大我が、用件を聞く。

「ああ大我さん。あんたに客が来てるぜ、村上って言えばわかるって言ったな、下で待ってるけどどうする？（ちなみにここは二階である）」

と鬼川が言う。

それを聞いた大我はニヤリと笑みを浮かべると、一言

「すぐにここに連れて来い」

と言った。

五分後

風紀委員の腕章をつけた高校生ぐらいの少年が大我の前にたっていた。

「ここに来たという事は何か掴んだんだな、冬牙^{とうが}」

と言っ。

それに冬牙と、呼ばれた、少年が答える。

「はい先生。

先生の睨んだ通り、誘拐事件を探っている者がいました」

少年の名は村上冬牙（とうが）

学たちが飯を食べていた同時刻に、同じ店で密談していた、連続力
ツプル殺害事件の犯人である。

そしてこの、極悪警備員、瀧河大我の弟子でもある。

「誰だ俺にたてつく身の程知らずは」

と大我が先を促す。

それに冬牙が答える。

「風紀委員の木原那由他です。

彼女には削板軍覇と その友人でレベル3の念動力サイコキネシスがついておりま
す

、ここに来る途中で、交通事故がありまして、聞いてみたところ、
西山たちが事故を起こしたみたいです。

さらに車の後部座席のドアが、何か強力な力で引き裂かれていたよ
うです。

おそらく木原那由他達に襲撃されたのでしょう。

ただ事故にあつたのは二人だけで、もう一人の杉本は行方不明です。
連中に捕まったとしたら、ここもばれた可能性がありますね」

と自分の推測も、交えて冬牙が言う。

「なるほどな、仕掛けてくると、思つか？」

と大我が聞く。

「まず間違いない」

「俺もそう思う…我孫子」

大我は急に我孫子に話しかける

「はい師匠」

「いつも以上に警戒しろ、改良型キャパシティダウンもいつも以上に用意しろ

それから、鬼川に一学お前たちにも、警護についてももう外界にも、そう伝えておけ」

と指示を出す

「あゝそれ無理」

鬼川が軽い感じで言う。

「ふざけるな！警護は仕事の内容に、入ってないとしても、言つつもりか」

師をないがしろに、された我孫子は、怒りの声をあげ、鬼川を睨みつける。

それに今まで黙っていた一学が、答える

「翔角、説明不足だ。

我孫子さん我々が無理と言ったのは、三人で警護は無理と言っ事です。

外界は今出掛けていてここにはいません」

「何だと！大事な取引の日に一体何を考えてる」

我孫子が、鬼川の代わりに答えた、一学に詰め寄りながら、大きな声で言う。

それに一学は丁寧にゆっくり喋って答える。

「何でも友人のスキルアウトから、ギャラ出すから、手伝ってくれと、言われて
それで手伝いに行きました」

と言う。

「勝手な事を、一言ぐらい言ったらどうなんだ！」

と我孫子は怒る。

「それは塵期に言うてください」

と悪びれずに、一学は言う

「まあいいじゃねえか、二人に三人分働いてもらえばいいだけだ。出来るよな」

と大我が我孫子を、抑えた後、二人に念を押す。

「まあ敵は数人なんだろう。

だったら楽勝だ」

と鬼川が言う。

「だったら、一人足りない分、自分が働きますよ」

と冬牙が言う。

この村上の助勢に、大我が驚きながら、言う。

「おいおいどういう風の吹き回しだ？

いつもはこっちが頼んでも、断るくせによ」

と笑いながら大我が言う。

「たまには師匠と兄弟子のお役に立ちたいんですよ。それに斬りごたえありそうじゃないですか？ レベル5とサイボーグ何て」

と笑みを浮かべて言う

「この人斬り魔が」

と大我も笑いながら言う。

「先生にはまけますよ」

「ふんどうだか。
まあそういうわけだ 俺の予想じゃ、襲撃は深夜だ。
お前ら気を抜くなよ それじゃ持ち場につけ、我孫子は客たちの迎
えの準備だ」

大我がそう言った後、 皆すぐさま解散し部屋を出ていった。

その頃

敵に襲撃に備えられてるとも知らず、黒子達は、戦闘準備をしていた。

（お姉様。黒子に力を）

那由他が手配した、移動中の車の中で黒子は敬愛するお姉様に祈りを捧げるのだった。

学園都市の誰にも知られる事のない、表沙汰にならない。闇の戦いがもうすぐ始まるうつとしていた。

第三話 黒子の反撃1（学園都市の間と黒子の正義）（後書き）

いかがだったでしょうか？

引っ張った感じになってしまいました。次は削板や黒子達のバトルとなります。

第三話 黒子の反撃 その2（軍霸の死闘と電撃姫雷臨）

深夜 0時30分

常盤台中学女子寮

「黒子ったら、何やってるのよ？
いくら何でも遅すぎよ」

日付変更線をだいぶ超えても、御坂美琴は眠りにつけずにいた。

理由は簡単黒子が、今だ帰ってきてないからである。

おまけに連絡なし

当の黒子は命がけの、決戦に赴こうとしてるのだが神たる美琴は知るよしもない。

なので彼女は不機嫌である。

「いくら特例だからって、女子中学生が、深夜うろろろしてどうすんのよ。」

襲われても知らないわよ」

と独り言を喋る

「はあく本当に何かあっても知らないわよ……黒子」
言葉はひどいが、心底自分を慕う後輩を、美琴は心配するのだった。

その時

(大丈夫〜元気だして〜?)

美琴の携帯が着信を告げた。

「黒子！」

美琴は着信を告げる携帯を慌てて、掴んで電話に出る

「黒子！！今何時だと思ってるのよ？」

いくら風紀委員の仕事だからって

あんたまだ中学生なのよ、どこで何してるの？」

と美琴が勢いこんで 怒鳴りつける

「ちょっと何かいいなさいよ？」

電話から返事がないので、美琴は返事を催促する

「黒子？」

変名した覚えはないと、 御坂はお姉様に言います「

答えは返ってきた だがそれは美琴が、予想していた後輩からの者
ではなかった。

「あんた。何で？」

それは妹からの電話だった。

「……………」

「お姉様？聞いていますかと御坂は言います」

「……………」

「お姉様？聞いてますかと御坂は再度呼びかけて見ます」

「……………えっ何？」

あまりに予想外の相手からの電話であったので、美琴はしばらくぼくっとしていたが、御坂妹の何回目かの呼びかけで、やっと気づいて返事を返した。

「ようやく、聞こえたんですねと御坂はいいいます」

「ごめん悪かったわ。

で何の用なの？

っていうかあなたに私の携帯の番号教えただっけ？」

と美琴が不思議になって聞く

「いえお姉様からは、直接聞いてはいません。でも前に上条当麻という少年から、聞きましたと御坂は正直に告白します」

妹は姉の質問に答える

「あいつから聞いたの？」

「いけなかつたですか？と御坂はお姉様に聞いてみます」

「別にいけなくは、ないけど。それで私に一体何の用なの？」

「ふう、やっと本題に入れますと御坂は 安心しながら言います…
…実はお恥ずかしい話なのですが 私たち学園都市に残っている
数少ない

シスターズの一人

シリアルナンバー

御坂19090号が誘拐されました。と御坂はお姉様に驚愕の事実をお伝えます」

と御坂妹は姉にさらっと理由をつげる。

「何ですって？でもあんたたちは病院から、あまり出なかつたんじ

「やなかったの？」

「最初の頃はそうでしたが、現在は違います。みなそれぞれ個性を持ってきておりますと御坂はお姉様に説明します」

「ふ〜んそうなの？」

「ところで攫われたってどういう事なの？」

「はい実は御坂19090号は、他の御坂たちに内緒で汚い真似ダイエットをしていただけでは、飽きたらまず悪行まで（ジム通い）初めていたのですと御坂は19090号の悪行の数々をお姉様に告げ口します」

それを聞いた美琴は驚きの声を上げる。

「悪行ってちょっとどどういう事よ？」

「あんたたち！ひょっとして何かの悪事に手を染めてるの？19090号は一体何やったのよ！」

「悪行ですと御坂は繰り返します」

「だから悪行って何なのよ」

「ジム通いと御坂はお姉様にわかりやすいように言います」

「は……い?……」

それを聞いた御坂は一瞬固まったが、
やがて

「そのどこが悪行じゃあ〜!」

と電話越しの妹に突っ込むのだった。

「なるほど事情はわかったわ」

十分後、美琴は妹に詳しく事情を聞いてようやく事態を把握していた。

一つ御坂19090号がジムの帰りに誘拐された事。

二つ

上条当麻に救援を頼みに行ったが、留守であり調べた結果海外に行ったと言ったことが判明した事

三つ御坂19090号は学舎の園内に連れてこられたという事

四つ他の学園都市内にいるシスターズ達は、調整の都合上動けない

事

五つ犯人たちから身の代金などの要求は一切来てないと言つことなどである

「わかったわ。全く肝心な時に何でいないのよあいつは!」

美琴は、ここにいない上条当麻を罵った。

「まあ十中八九どこかの女性を助けに行つたと思いますと、御坂は呆れながら言います」

「まああいつの場合毎度の事なだけどね…で話しは戻るけど御坂19090号は学舎の園のどこにいるの?」

美琴は妹に聞く

「はい。それは学舎の園内にある第一特殊能力訓練所ですと御坂は答えます」

「わかったわ……であんたは今どこにいるの?」

「御坂はお姉様の寮の入り口近くに立っていますと御坂は懇切丁寧

に説明します」

「了解じゃ今から行くから、少し待っててね」

そう言った後美琴は電話を切った。

「誰だか知らないけど私の妹に手を出して、ただですむと思ったら大間違いよ」

御坂美琴の参戦が決まった瞬間だった。

「ここが、第一特殊能力訓練所ですよ？」

車から降りた黒子は、三階建てのその建物を見ていた。

時間は美琴が、準備に入る十分前に遡る（さかのぼる）。

その頃黒子たちは、第一特殊能力訓練所に着いていて、突入の時を待っていた。なおここまで車を運転してきた運転手はすでに車で帰っている。なのでここにいるのは4人

黒子 軍覇 那由他

原谷である。

皆その建物を険しい顔で見ている。

「でまゆちゃんどうするんだ？」

と腕を組んで建物を見ていた削板が、那由他に話しかける。

「支部の仲間たちに、訓練所のセキリユティ―を無効化するように頼んでいるから、それが出来たら作戦通りに突入だよ。だから連絡が来るまで待機」

と那由他が言う

（最初は軍覇の間違いを指摘してた彼女だったが、一向に治らなかつたので今は注意しない事になっている）

「訓練所のセキリユティ―無効化ってそんな事出来るんですか那由他ちゃん？」

と原谷矢文が言う。

彼は那由他に能力開発のアドバイスと訓練に付き合ってもらい、レベル0からレベル3までレベルアップできた事に恩を感じているため、彼女に丁寧に接し時には軍覇以上に彼女の手助けをする。

「大丈夫だと思う。
一人じゃ守護神ゴールキーパーには及ばないけど、4人一組で事に当たってもらうから、大丈夫。
でもセキリユティーを無効化出来るのは、一時間位だから、その間に全ての敵を無力化しないと、いけないから、かなりハードな任務になるわ」

と那由他が厳しい目つきで皆を見ながら言う。

「全部を倒さないといけないのか？」

と那由他に軍覇が質問する。

「それがベストだと私は思う。
何故なら犯人たちを捕まえた後、さらわれたチャイルドエラーの子たちも、救出しないといけないから。
連れて移動してる時、万が一生き残りに背後から攻撃されたら、ひと溜まりもないわ。
皆殺しにしろとは、言わないけど、向かって来る敵は、徹底的に叩いて……ちょっと待って連絡がきたわ」

那由他はマナーモードにしていた携帯をポケットから、取り出して確認する。

「セキリュティーの無効化は完了。

これより作戦を開始するよ。

何より避ける事は、子供たちを人質に取られないようにすること。やむを得ない場合は犯人たちを殺してもいいわ。

金と欲のために、罪のない子供たちを、殺した奴らなんだからじゃあみんな死なないように気をつけてね。

先に言った作戦通り私と削板軍覇は単独行動。

先輩と矢文は二人で一緒に行動して」

「わかったよ那由他ちゃん、白井黒子嬢は俺が守るよ」

「お願い」

「俺は暴れまわったらいいんやな」

削板が腕を組んだまま那由他に言う。

「ええその間に私たちの誰かが子供たちを救出する」

「わかった」

そう言った後。

削板は思いきり地面を蹴った。

直後赤青黄色のカラフルな爆煙を撒き散らしつつ、削板は第一特殊能力訓練所に跳んで行くのだった。

削板が跳んでいったのを、固まって見ていた三人だったが、やがて原谷が口を開いた。

「何やってんだ！あいつ。」

作戦じゃ先に特殊音響閃光手榴弾ブチ込んでその混乱に乗じてだろ
スタン・グレネード
うが」

「聞いてなかったようですわね」

黒子も呆れた感じで削板が、行った後の方向を見ながら呟いた。

「仕方ないわ、多少予定が狂ったけど、作戦通りに行きましょう。
先輩のレポートで訓練所内へ移動。」

その後スタン グレネード発射で散開
子供たちの捜索にあたるよ」

「スタン グレネードブチ込んでいいのかよ削板がいるぜ」

と原谷が言うが、那由他はあっさりと

「大丈夫でしょう。銃弾心臓に食らっても平気だし」

言う。

「それもそうだな」

とこつちもすんなり納得する。

「お話はもういいのです？ではテレポートしますわよ」

黒子はそう言ってテレポートしようとするが、それを那由他の声が止める。

「待つて先輩それに矢文にも、これを渡しておくわ」

そう言って那由他は懐から二つの腕輪を取り出す。

「何ですのこれは？」

黒子は腕輪を指差して言う。

「私がテレ姉のパソコンにある、キャパシティブダウンのデータを見て開発した　キャパシティブダウンを無効化する装置よ。　これがあればキャパシティブダウン発動中でも、頭が痛くなる事もないし能力も使えるわ。」

ただ、向こうが使ってるのは、テレ姉の物を改良した物だから出力は高いはず、だから能力が使用出来ても、場合によってはレベルが下がってしまう状態になると思う。

後その腕輪は腕輪型　スタンガンと催涙ガスを出せる機能と、一回きりだけど自爆機能も付いてるわ」

「随分物騒な装備ですわね、必要ですか？」

黒子が那由他に、そう言っていると那由他は、きつい口調ときつい目つきでそれに答える

「油断してたら、死ぬよ先輩。それに用心に越した事はないわ何故ならここは……」

突然。

那由他が喋っている時凄まじい爆音が聞こえた。

慌てて黒子と原谷は耳をふさぐ。

でも那由他だけは、耳をふさぐが、その爆音の聞こえた方向を鋭い目で見ながら、話しの続きをする

「常識も倫理もない 弱い者から死んでいく戦場だからよ」

那由他は煙の上がっている爆心地を見ながら、そう告げた。

「やったぜ！いくら何でもグレネードランチャー食らったら、おしまいだろ〜ざまあみやがれ！！」

その頃那由他が、見ていた爆心地では、一人の男が叫んでいた。

その周りには、彼の部下である者十四名倒れている。

爆煙が上がり、銃弾の跡、倒れている多くの怪我人たち

那由他の言つとおり、規模は違えどそこは間違いない戦場だった。

一人立っている男は、グレネードランチャーを片手で、持ちながら、先ほどまでの悪夢を思い出す。

（全く敵が来るからもしれないから、嚴重に警備しろと言われて警備していたが まさかこんなとんでもない奴が来るとはな）

まさに悪夢だった。警備員程の装備はしていなかったが、全員耐刃防弾用のベストを着て、拳銃及びスタン警棒装備で数は自分を

入れて、十五名いた。
それに対し敵はたった一人で無手の少年 普通なら戦いにすらならなかったはずだ。

マニユアル通り警備隊はキャパシティダウンを作動させた。超高速で動いているのは、恐らく能力だろうという判断からだ。

だがキャパシティダウンを発動させても、少年は止まらなかった。そのままの超スピードで突っ込んでくる 慌てて銃で攻撃するが止まらない、弾が当たっても何事もないかのように、突っ込んでくる。

そして少年は重武装している、屈強な大人十五人を蹂躪した。

少年の気合いで5人は吹き飛ばされ、少年の放つ、パンチの衝撃波で4人が吹き飛んでいく。

残った六人で、弾がきれるまで、至近距離から銃弾を叩き込んだが、少年は何事もなく、前進してきて右手を横なぎに振るうすると、打った銃弾が衝撃波と共に 返ってきて、六人を吹き飛ばす。ただ部下たちの後方から、攻撃していた隊長だけは直撃を免れ隙を突いて、グレネードランチャーをぶち込み今に至る。

もうもうと煙が上がるのを見ながら、 隊長の男はほくそ笑む

「とんでもない奴だったが、死んでしまったら哀れな者だな どれ、肉片ぐらい残っているなら、埋葬ぐらいはしてやろう」

隊長はいまだ立ち昇る煙の方に歩いていく。

「さて、バラバラ死体か？それとも、上半身が千切れたか？」

隊長はそう言いながら、煙の中を目を凝らして見る。

「うん死体がないなあ？遠くに吹っ飛んだか？」

隊長はさらに確認しようと覗きこむ。

その時ドーンと激しい音がなり、立ち込める、煙が跡形もなくかき消された。

後には赤青黄色の爆煙を体から撒き散らしている。

隊長が殺したはずの少年削板軍覇が、立っていた。服とかすす汚れたりしているが、無傷と言っていい状態で。

「あゝ痛かったぜえゝ今のは、でもあの電気使いの嬢ちゃんの一撃よりは、痛くないけどな、さてと」

そう言いながら削板は、体の埃を払いながら、歩き出して
訓
練所の入り口目指して進んでいく。

削板が暴れていたのは訓練所の敷地内だが、建物に入るまでに通り道があり、まだ建物には到着していない。

歩いて訓練所の入り口に向かっていた、削板だが、ふと歩みを止めて足元を見る。

「悪いんだが、通してくれないか？
俺は先を急いでいるんだ」

そこにはぶるぶる震えながら、失禁して鼻水と涙を流して
怯えている、男がいた。

さっき削板の死亡を確認しようとした
隊長である。

削板の生存を知って慌ててここまで、逃げてきたが、けつまずいて、
こけてしまい削板が近づいて来るのを見て、恐怖のあまり腰を抜か
してしまい、動けないで足元に転がっているのだ。

「ひゃくつ化け物！！」

隊長は削板に声をかけられた後、おきられないので、匍匐前進で逃
げようとする。

「おいおい根性の足りねえおっさんだな。
未成年見て小便ちびるなんてよ」

削板は、匍匐前進している、隊長を見ながら言う。

「まあ人間それぞれ違うから仕方ねえか」

削板がボリボリ頭を 掻いていると。

突然空に大きな物体が現れた。

「うん？」

削板がその物体に気づいた。

その物体は一直線に、落下していく。

匍匐前進している、隊長目掛けて。

やがて削板はその物体の正体に気づいた

それは大きな岩だった。

「おっさん避けるー！」

岩に気づいた削板は、慌てて叫びながら駆け出すが
時すでに遅し

削板の目の前で、空から降ってきた岩は、隊長の上半身をグシヤ
と潰した。

「……………」

それを見た削板は言葉もなく、立ちつくしている
生死の確認の必要もない。
完全な即死だ。

そこへ、コツコツとゆっくりと一人の人間が歩いてくる。

身長は180ぐらいだろうか。

黒いジャンパーに

短く切った金髪の髪で耳にピアスをつけている。

一見ただのチンピラに見えるが、その動作に隙は見当たらない。何らかの格闘技を会得していると見て、間違いないだろう。

男は鬼川翔角だった。

翔角は岩に潰された死体のとこまで行くと、歩みを止め削板の方を見る。

顎を片手で触りながら、ニヤニヤしながら削板を見る。

そして、足元の岩をチラツと見た後、それを蹴り飛ばす。

削板の顔面目掛けてだ。

ゴォーと勢いよく飛んできた岩を、削板は微動だにせず、顔面で受け止める。

砕けた岩の先には、無傷の削板の顔があった。

そして彼にしては、珍しくその顔は怒り鬼の形相と化していた。

その形相のまま、削板は右拳を握り込んで、正拳突きの際勢に構える。

「何で殺した。仲間じゃなかったのか？」
構えたまま、鬼川に 問いただす。

「仲間？関係ないね。俺は見苦しいものや醜いものは嫌いだね」

それにニヤニヤ笑いながら、答える。

「そうか。腐ってるなお前、その腐った根性叩き直してやるぜ」

削板がそう言った瞬間右腕を、謎の波動が包み込み、背中から赤青黄色の爆煙が吹き上がる。

それを見た、翔角は 好戦的な笑みで微笑む。

「それが、レベル5の本気ってわけか
面白いなあ。

武者震いがしてぞくぞくするぜ。

俺の根性叩き直せれるなら、叩き直してみな。

俺の名は鬼川翔角

誰に殺されたかわからないと成仏出来ねえだろうから、教えといてやるぜ。

では見せてもらおうか削板軍覇、レベル5の力を、学園都市の頂点に君臨するその力をよ！

「

そう言った後、どこからかやってきた石が翔角の周りを漂う。その中には先ほど、削板にぶつかって砕けた石の破片もある。そしてこれらの石は、翔角の両腕に付着して翔角の両腕を覆う。翔角の両腕は岩石の腕と化す。

「俺の能力は石を操る。石使い（ストーンマスター）のレベル4

石しか操れないが、その代わり石に関して言えば、変幻自在だでは行くぞ削板軍覇。簡単に死んでくれるなよ」

そう言った後

猛スピードで両腕を腰に構えながら、削板目掛けて、翔角は突っ込んでいく。

削板は構えたまま、それを待ち構える。

射程圏内に入った、翔角は無言で、腰の回転を入れて、ダブルパンチを削板の顔面目掛けて、打ち込む。

それに対して削板はギリギリまで、待ってから、迎えうつ。

「凄いパンチ！」

翔角とは正反対に、大声で叫びながら、必殺技を放つ。

翔角の両拳と削板の右拳がぶつかり合い凄まじい轟音と衝撃波が発生する。

しばらく拮抗した後両者は、同時に後方に吹っ飛ぶ。

初手は互角。

死闘の第一ラウンドが始まったのだった。

「遅いですと御坂はお姉様に対して、腰に両手を当てながら、文句を言います」
時刻は深夜一時

寮の門前で姉を待っていた妹は、やっと来た姉に苦情を言う

その妹の苦情に姉は、ばつが悪そうに答える。

「しょうがないじゃない。

うちの寮には鬼より怖い寮監がいるんだから。

おまけに私が以前施設ぶつ壊すのに、夜間外出してた時に比べて警戒が厳しいのよ
はあく黒子がいたなら、テレポートですぐなんだけどね」

と美琴は疲れた声で言う。

「お姉様の事情はわかりました。
ですが、とりあえず遅れた分を取り戻すため、急ぎましようとお坂はお姉様をせかします」

御坂妹は美琴の腕をつかみながら、慌てて走り出そうとする。

「ちよつとまって
それを美琴は止める

「この非常時に、何をゆっくりなと御坂はお姉様に対して怒りのま
まに罵倒します」

と御坂妹が叫ぶが、それを美琴は、口をふさいで黙らされる
直後美琴は御坂妹をお姫様抱っこする。

「ぶはっ、お姉様いつの間にか力持ちになったんですかと、御坂は驚
きながら言います」

「一時的に、電気力で肉体を強化してんのよ。長くは持たないけどね」

ああそれから、ちょっと間喋らない方がいいわよ

「

そう言った後美琴は 御坂妹をお姫様抱っこしたままでジャンプする。

そのジャンプ力は凄まじく、ひとつとびで数十メートルは高く飛ぶ。

「お姉様一体何を？」

「喋らないでって、言ったでしょ、本当に舌嚙むわよ」

美琴はそう言った後 高度が下がって地面に落下しそうになるが、タイミングよく足元にスパークが激しく閃いた。

すると美琴は空中で 何かを蹴ったかのように、跳ね飛んで、美琴は再び天高く舞う。

「これは！空中に同極面を触れあわせた 電磁場を形成し、斥力を使って跳ね飛んでいるんですねと、御坂はお姉様のとんでもない技術に驚愕します」

レベルは及ばないが、同じ電気使いである御坂妹は、その技術の凄まじい難度を 理解出来た。

電磁場が弱ければ、跳べないだろうし、逆に強すぎれば、跳ぶ距離やスピードをコントロール出来ないだろう。

「まあ長くは持たないけどね。
でも走っていくより 早いでしょう」

美琴はそう言いながら、天を翔る。

「でこっちの方向であってんのよね」

美琴は腕に抱えている、妹に言う。

「はい。そうですと御坂は言います…あっ！見えてきましたと御坂は指でその方向を差してお姉様に教えます」

御坂妹が差す方向に、目指す目的地はあった。
煙が立ち上っており、見えにくい人が人も複数倒れているようだ

「何かとんでもない事になってるわね」

「どうやら敵はかなり過激な連中だと、御坂は推測します」

「まあ銃ぶつ放そうが、ミサイル打つてこようが、あたしの敵じゃないけどね」「御坂も全力で、サポートしますと御坂はお姉様に誓います」

「じゃあ私はあなたと19090号を、助け出し、守り抜く事を誓うわ。」

さてと、もうちょっとで敷地内に入るわ。

気合い入れなさい

さあ行くわよ！！」

美琴は、今までで一番大きな電磁場を形成すると、それを思いっきり蹴って、地面目掛けて高速落下するのだった。

数分後

戦場に電撃姫が妹とともに降臨した

第三話 黒子の反撃 その2 (軍覇の死闘と電撃姫雷臨) (後書き)

誤字や重複した文章や抜け字があったので、修正しました。
ここにお詫びいたします？

第三話番外編（健児の災難と暴走警備員）（前書き）

修正しました

第三話番外編（健児の災難と暴走警備員）

「はあはあ…逃げないで下さい」

「逃げないと捕まえるだろうが」

深夜

とある道を二人の男女が追いかけてっことをしている。
追いかけているのは女性で、追われているのは男子である

（くそ！何でこんなことに）

追われている本人である長田健児けんじは、己の不幸を呪いながら全力で走っていた。
すでに追いかけてっことをして十分は経っている。

健児がハードな追いかけてっことをするはめになったのには、もちろん訳がある。

その訳は三十分前の騒動にある。

三十分前健児は、パトロール中の風紀委員（白井黒子）に聞いた道順通りに移動し、初春の住む寮に着いていた。
寮に着いた彼は早速初春の部屋に向かおうとした。

しかしそこで彼は、ふと気づいた

自分が重要な情報を持っていない事を、彼は知らなかった
初春の部屋の番号を 知らなかったのだ。

本来なら、寮の管理人なりに聞けばよいのだろうが、切羽詰まっていた彼はそんな冷静な判断は出来なかった。

それにわざわざ表札など付けている部屋もなかった。

また夜遅くすでに就寝についている者もいる。

結果彼は最も単純な方法を取った。

住人に聞くという方法を。

彼は早速行動に移した。

とりあえず目に付く部屋のインターホンを押した。

しかし夜10時まわっているのです、その部屋の住人は眠っていた。

それでも彼は何度も押した。

だが住人は起きない 仕方なく彼は、ドアを壊して部屋に入った。

結果彼は通報された。

(はあゝ何でこんな事に)

全力で前方を逃げる 健児を追いかけながら、鉄装綴り(てっそうつづり)も立場は違えど健児と同じく不幸を呪った。

彼女、鉄装綴りは学園都市の治安組織
アンチスキル
警備員の一人だ。

彼女は初春の寮の住人達から、変質者が現れたという通報を聞いて、
駆けつけたのだ
ただし一人で。

これには理由がある 現在警備員 風紀委員ともに人員不足である。

ただでさえ人不足なところに、学園都市のVIP達が、治安の悪化のため怯え、腕利きの警備員などを自身や自身の家族の護衛に連れで行ったのだ。

護衛を受けた者には、報酬が出るので、一応特別手当が、付くものの基本タダ働きである警備員たちはこれに食いついた。

また上層部たちも、学園都市のVIP達に面と向かって文句はいえず黙認という形を取った。

そのためただでさえ人不足なのがさらに拍車がかかってしまった、また警備員の支援をするための、風紀委員も凶悪事件の多発のため、ビビって辞職するものや、

ちよつとヤバい事件だと尻込みするものもいるというより、サボる者もいる

新人募集を風紀委員、警備員も行っているが志願者は少ない。なので変質者が出た程度の事件に本来出勤するはずの、風紀委員が集まらなかったのが警備員の出勤となった。

だが警備員も人員不足であるのは変わらないので、一人での出勤となった。

「はあはあ…このままだと逃げられちゃう」

鉄装綴りは、走りながら嘆いていた。

（もし逃がしちゃったら始末書を書く事に、ただでさえ忙しいのにそんな事になったら、ああどうしよう…でも応援は頼めないし、向こうの方が足早いし…こうなったら！）

鉄装は心の中で、最終手段を使う事を、決意し、懐から拳銃を取り出した

「うん？足音が聞こえなくなってきたな」
一方逃げていた健児は、後ろからの足音があまり、聞こえなくなってきたので、スピードを落とした

「全くとんだ回り道をしちゃったぜ。
それにしても、学園都市の治安を守るために日夜頑張っている俺を
変質者とは
さて急いで初春たちの寮に戻らないとな」

そう言った後、健児は寮に戻ろうと方向転換をした
その時
ヒュンと何かが空を切り裂いて飛んでいった。

「うん今の音は
銃声か？」
健児は音の聞こえた 方向を見た
そしてうんざりした

「はあく何だつて俺がこんなめに」

そこには銃を構えたまま、ぶるぶる震えている鉄装がいた。

「動かないで下さい

さっきのは威嚇です

次は当てます」

鉄装は銃口を健児に 向けながら言う。

健児はそれを見てため息を吐いた。

そこには銃を構えたまま、ぶるぶる震えている鉄装がいた。

「動かないで下さい

動くとは今度は威嚇いかくでなく本当に当てます」

そう言った後銃口を健児に向けながら、彼女は健児の方に近づいていく。

(参ったな)

健児は自分に向けられている銃口を忌々しそうに見ている

(警備員や風紀委員は人員不足では
本当だな

たかが変質者一人捕まえるのに発砲とは、正気か？
とんでもない警備員がいるもんだ)

「そうです。そのままです。大人しくしているなら、手荒な真似は
しません」

そう言いながら、さらに鉄装は近づいてくる

(すでに銃ぶつ放しておいて、手荒な真似はしないも何も無いと思
うが、警備員てのはみんなこんな、物騒な奴らばかりなのか？
まあいい、それよりもどうする？

見たところ警備員と言ってもそんなに戦闘が得意そうではないな。
それに俺が本気を出せば、警備員が束になっても負けはせんが、後
々の事を考えるとな。

変質者程度なら、一晚説教聞けば、それで済むだろうし… ん？あ
れは！)

それを見た瞬間

今まで無抵抗に立っていた健児が、鉄装の方に向かって駆け出した

彼が見たもの、それは不気味な黒煙だった。
その黒煙は初春の寮の方から上がっていた。

「え？そんな動かないでって言ったのに」

鉄装は突然の健児の態度の変化に、すぐに対応できなかった

そうこうしている、うちに健児は鉄装の目の前で、

迫っている

「邪魔だどけえー！！」

健児は叫びながら、鉄装にどくように、促す。

だがちよつとした、パニック状態になっている、鉄装は冷静に判断
出来ない。

切羽詰まった形相で、突っ込んでくる健児に恐怖を覚えた。
恐怖を払拭ふっしょくするため彼女は再び発砲する。

タン タン！銃声がいくつも木霊する。

女性用の小さな銃だが、それでも至近距離から撃たれたら、死ぬ事に変わりはない。

銃弾の軌道は健児の頭と胸めがけて飛んでいった。

しかし次の瞬間信じられない事が起こった。

「はぁ！」

健児がそう一声気合を上げただけで、飛んできた銃弾は空で何かにぶつかった見たいに、弾け飛ぶと同時に鉄装の拳銃が壊れて砕けた。

「えっええ？」

突然手元にあつた銃が砕け散った鉄装は首を右に左にふつておろす。

その横を健児が走り抜ける

ビシッ

と鈍い音がり、鉄装が地面に倒れ、そのまま動かなくなる

「ふう。このキチガイ警備員が俺を殺す気か？」

鉄装の横をすり抜けた健児が、戻ってきて、地面に倒れている鉄装を見る。

鉄装は彼が気絶させた。

健児は横をすり抜けると同時に、鉄装の後頭部に手刀を浴びせたのだ。

「やれやれこれで、完全に犯罪者だな。
いやこの場合正当防衛が適用されるのか？まあいいそれより 急がないと」

健児はそう言ってから、鉄装の腰に装着している、スタン警棒を抜き取って自分の手に持つ、さらに懐も探り、予備の拳銃と弾を取り出して、自分の懐に入れる。

「すまん。悪いが借りていくぞ。
嫌な予感がするのな。

まあ忘れてなかったら返しにくる。
警備員が装備盗まれたなんて、格好悪くて言えないから問題はないな。

暴行の件については 助けた佐天と初春に 弁明してもらおう
恩人のためなら、それぐらいしてくれるだろう
初春は風紀委員だから、上手く口利きしてくれるはずだ。
さてと」

そう言っただけで装備を充実させた健児は、黒煙の上がっている、方向を見る

「あの煙は火事だな 藤田が火をつけたのか？
いくらレイプ魔でも そこまではないとは、思うが。
将真とも全然連絡が 取れんし、どうなってるんだ？
おっとこうしてる場合じゃない。

急がないと」

そう言つて健児は、走り出そうとするが、止めてもう一度倒れている鉄装を見る。

そして慌てて、鉄装の懐を探り携帯を取り出す。

「危ない 危ない

応援を呼ばれたら、厄介だからな。

壊してもいいが、

後で弁償と言われても、かなわんし持つて行くか。

ようは、携帯で連絡さえとられなきゃ、いいんだしな。これで完璧だ。

では行くか」

そう言つた後、健児は鉄装を置き去りにして、火の手の上がった初春の寮目指して走っていくのだった。

「はあ、初春には悪い事しちゃったな」

炎に焼かれる、初春の部屋を見上げながら、学は両脇に抱えている、初春と佐天を地面に下ろした。

「ちくしょう！あの野郎。

いきなり現れたと思つたら、火を放ちやがって、何とか二人抱えて脱出は出来たが、あの威力から見てレベル3から4の パイロキネシスと言つたところか。

まあ3でもかなり上の方だろうがな」

学は先ほど現れた、新たな敵の来襲を思い出した。

大原を苦戦の末に何とか倒した学は、

その大原を腕の関節を外した後初春の部屋にあった予備の手錠で拘束した。

その作業が終わった後、学は初春たちを 起こそうとしたが、全く起きなかった。 仕方ないので、風邪を引かないように服を着せ替えた

初春はちよつと上服が破かれていたので、タンスにあった予備の制服を

佐天は下着姿なので、初春のパジャマを パジャマにしたのは、多少伸びるのでサイズの問題をクリアー出来るからだ
断じて彼の趣味ではない。

その後二人の着替えを終えた学の耳に、入り口の方から物音が聞こえた。

「何の音だ？」

大きな音だったので、学は気になり入り口まで見にいった。

「誰だお前？」

入り口の前には一人の男が立っていた

身長は175ぐらいか

短い茶髪をして、ズボンのポケットに手をつ突っ込んでいる。

その男の後ろには、入り口のドアが斜めに2つに切られて、転がっている

どうやらその男が真つ二つにしたようだ。

「大原を倒したのは お前か？」

茶髪の男は、学にそう話しかけてきた。

(何て威圧感だ)

学は冷や汗を流してその茶髪の男を見た 両手をポケットに突っ込んでいて、隙だらけであるその男に、学は大原以上の強さを感じていた

万全な状態であっても勝てるかどうか 目の前の男はそれほど桁違いだった。

密かに攻撃のタイミングを学は計っているが、そのきを学は どうしても掴めないでいた。

「おい聞いているのか？大原を倒したのは お前なのかって聞いてんだけどよ」

茶髪の男は、近寄りながら、再度話しかけてくる。

学は仕掛けようとするが、どうしてもタイミングがつかめないでいる

学の頑なな態度を見て、茶髪の男は諦めたのか、ため息を吐いた。

「はあくだんまりかよ。じゃあいいわ

否定しないって事だからお前犯人決定な！」

そう言った直後

男は学の視界から消えた。

「なっ！」

学は追いきれないので、急いで己の周りを能力で作った血の盾でガードする。

盾が出来た瞬間

その盾を凄まじい打撃が襲う。

茶髪の男の体重を乗せたパンチだ。

パンチは血の盾のガードを吹き飛ばし、そのまま学の顔面を殴る。

「なっ？」

学はガードする事も出来ず、吹き飛ばされて壁に激突する。

茶髪の男はそれを見た後、ニヤリと笑う。

「ふん血を操る能力か。

なかなか面白い能力だったが、俺の敵じゃなかったな」

茶髪の男はそう言った後、再びポケットに手を突っ込み、部屋の奥へと歩いていった。

「それにしても今のガキにやられたのか？大原のやつはてんで手応えなかったが…あそうか大原が 弱らしてたのか。まあいいか。」

どうせしばらく、おねんねだしな。

さて大原のやつを探して回収するか。

さて大原はどこだ？」

そう言つて茶髪の男が探しだす。

そしてほどなく見つける。

「おうおうこれまた酷くやられたな」

茶髪の男は大原の状態を見て驚く。

腕が折れたり顔が酷く腫れ上がったりしているが、一番酷いのは袈裟がけに切られた傷だ。

何か鋭利な刃物で切られたような感じで ある。

「この傷だと、起こして動いてもらうのは無理か。じゃあねえ担ぐか」

そう言つた茶髪の男は、地面に寝転んでいる大原を持ち上げ 左肩に担ぐ

その時まるでタイミングをはかったように三本の赤い矢が男めがけて飛んできた。

「よし上手くいった！」

学は己の飛ばした矢を見ながら、勝利を確信していた。

学はパンチで吹っ飛ばされた時、壁に能力で血のクッションを作りダメージを抑えたのだ。

強烈な一撃をくらった学は、とても真っ向からでは勝ち目がない
と思い、奇襲チャンスはずっとうかがっていたのだ。

前回は隙は出来なかったが今回は出来た　しかも片手がふさがる才
マケ付きで

学はすぐさま能力で創った弓で矢を放ち奇襲をかけた

矢は足　腹　頭の3ヶ所目指して飛んでいく。

（我ながら完璧

これならよほどの、手練でも、防げはしない。

よしんば防げて怪我はする。

この一撃で仕留められなくても、チャンスは生まれる

まあこれで決まるのが、一番いいんだが）

と学が放った矢を見ている

茶髪の男は飛んでくる矢を見ていたが、ニヤリと学の方を見て笑
うと同時に矢を下から蹴り上げた。早い学には蹴り足の軌道が
見えなかった。

茶髪の蹴り上げた矢は、そのまま腹めがけて飛んできた矢にぶつか
り2つはあさつての方向に飛んでいき壁に突き刺さる。

そして最後の一本を 歯で噛んで受け止める。
噛んで受け止めた矢を口から出すと、空いている方の右手でそれを握りつぶした。
それから学の方を睨む。

「危ねえ危ねえ。」

奇襲とはびっくりらせてくれるじゃねえか。

今の奇襲に賭けてたみたいだが残念だったな」

学の必殺の攻撃をあっさり凌いだ、茶髪の男は首をコキコキとならす。

（くそつたれが、手練とか達人なんてレベルじゃねえ…こいつは化け物だ）

学は心の中でそう思った。

「本当参ったぜ」

心の中で思った諦めの思いが思わず口から出る。

「何だ諦めたのか？ つまんねえな。」

他に芸はねえのかよ」

茶髪の男はがっかりした様子を隠しもせずと言う

「そいつは悪かったな。
でもこっちは、満身創痍なんだよ。
あんたが担いでる奴との一戦でな」

学は弓を解除して血に戻し体内に吸収する。

「そうかそいつは悪かったな。
だが現実てのは、無情なものさ、運がなかったと思って諦めるんだ
な」

そう言った後茶髪の男は、右手を上にかかげて手のひらを開く。

間もなくその手のひらが赤くなり周囲の温度が上昇する。

茶髪の男は発火能力者パイロキネシストだったのだ。
手のひらの炎はどんどん大きくなり、やがて五十センチぐらいの球
体になる。

その球体はゴォゴォと勢いよく燃えている。

「てめえ能力者だったのか」

学は男の持つ球体を見ながら言う。

「別に驚く程でもないだろ。」

パイロキネシスなど ありふれた能力の一つだ。
まあ本来頼まれたのは、こいつの回収なんだが、さっきの奇襲のお
礼をしないとな！」

そう言うと同時に、 男は炎の球体を投げつける。
投げつけた球体は途中でいくつかに別れ、飛び火する。

突然の出来事に学はよう対応できなかった。

「じゃあな！生きてたらまた遊んでやるよ」

男はそう言った後

駆け足で窓まで走ると窓から飛び出すのだった。

「ちくしょうが！」

学は慌てていまだ眠る初春と佐天を助けにいくのだった。

そして今に至る

無事に佐天と初春を 能力で運んで脱出した学たちは、寮の外の道
端にいる。

佐天と初春たちは道路に寝かされている。
普通は寒くて起きるはずなのだが、二人は眠ったままだ。
お寮はいまだに燃え続けている。
な

「佐天はともかく初春は起きてもまた寝込みそうだな」

あの火の勢いなら、初春の部屋は全焼だろう。

「まあ俺に責任がないとはいえないし、保険で補えない分ぐらいは、弁償してやるか」

学は燃える初春の寮を見ながら、思っのだった。

パチ、パチ、パチ、パチ

学の耳に場違いな拍手の音が響いた。

学が振り返るとそこには、この火災を引き起こした張本人が笑いながら、拍手をしていた。

その横には、茶髪の男が抱えていた大原を背中に背負っている男がいた。

どうやら仲間のようだ。

「ほう、あの状態で二人助けて脱出するとはな。まだまだ元気なようだなにより」

ニコニコしながら、学に言う。

もう拍手は止めている。

「なにが元気で何よりだ。

人を殺しかけといて良くいうぜ」

学は敵の男を鋭い目で睨む。

「うんうんその意気だ。

じゃあ第二ラウンドといくか」

と言つて両拳を握り込む。

それにより両拳に再び炎が灯る。

「クソが！やるしかないみたいだな」

そう言つて学も対抗するように、能力で血の槍を一本生み出す。
それを持つ。

「まだ目は死んでないみたいだな。

じゃあもう少し楽しませて貰おうか

おつと言い忘れてた 俺の名は外界塵期

(げかいじんご)

冥土の土産に覚えとけ」

茶髪の男、外界は己の名を名乗る

「ありがとよ。

俺の名は藤田学いや

冥土の土産だからな

特別に父方の姓を名乗

ってやる。

瀧河…瀧河学だ〜!!」

そう言った後学は、決死の覚悟で突撃していくのだった。再び死闘のゴングが鳴った。

第三話 黒子の反撃

その3 (超絶 超人達の力 危うしレベル5) (前書き

今晩は、やっと投稿出来ました。

？

今回敵はチートなので、そういうの苦手な方は気をつけて下さい。

第三話 黒子の反撃

その3 (超絶 超人達の力 危うしレベル5)

「ぐわぁー」

削板軍覇はふっ飛ばされた。

空を漂いやがて、地面に叩きつけられる。

そんな無様な削板を 見ながら馬鹿にする男。

「おいおい。ただ突っ込むだけしか出来ないのか？

学園都市最強のレベル5何だろう？

最下位でもよ。

ちったあ、楽しませてくれよ。期待してんだからさ」

体の周りに無数の石のかけらを浮遊させながら、鬼川翔角は 言う。

するとそれに応えるかのように

「根性お〜!」

と言いながら、削板軍覇は立ち上がる。

「そうそう根性、根性。その根性で俺を楽しませてくれ」

鬼川は嗤いながら、自分の周りを浮遊している、石のかけらを高速で削板に叩きつける。

その石の散弾銃を削板は両腕にオーラを纏まといガードする。

「ぐっ」

削板軍覇は苦戦を強いられていた。

一方外の激戦とは、うって変わって

「ふあゝ」

建物内一階の見張りたちは だらけきっていた

外の喧騒の音は、彼ら三人にも聞こえてきてはいた。

しかし情報では侵入者はたった4人

それに対して、こっちは、完全武装の警備員20人にエリート風紀委員一人

不良が10人に大能力者二人（武装あり）である。

一応彼らは外からの侵入者に備えるための見張りとしてここにいるが、はつきり言ってみ張り失格である。

床には缶ビールの空き缶とタバコの吸い殻が。
そして今も酒を二人が飲み一人が 煙草を吸っている

「あゝついてないぜ。全く夜中に侵入者何か来るなよな。
来なきや今頃客に売り飛ばす前に、味見出来たのによ。
常盤台の制服着てた あの茶髪の娘狙ってたのによ」

と見張りの一人である柄の悪い少年が煙草を吹かしながら言う。

「しょうがないだろ。形だけの見張りとは言え、瀧河さんに頼まれ
たんだ。

もしサボったりしてるの見つかったら、 斬り殺されるぞ。
あの人は統括理事の甥なんだ。俺らみたいな不良殺したところで、
いくらでももみ消せるんだ。

現にこの人身売買だって、警備員上層部の中には知ってるやつもい
る。

でも警備員のクビなんかいつでもすり替えられるし、消す事も出来
るあの人に誰も逆らえないんだ。 触らぬ神に祟り無しだ」

ともう一人の不良が答える。

「そついう事だ。

あの人には逆らわない方が身の為さ。

何せ人を殺す事を何とも思わない人だからな」

「あゝ全くだ。」

警備員上層部でも手が出せないってのに、侵入者達は馬鹿だよな」

「本当、本当」

と言った後、三人の見張り達はガハハと馬鹿笑いをしだす。

その時、

「油断大敵ですの」と少女が少年と小学生と一緒に空から、降ってきた。

数十秒後

「はあゝ酒とそれにヤニ臭いのですの」

仲間たちと一緒に見張りを沈黙させた
黒子は酒とタバコの匂いに辟易へきえきした

「でもそれのおかげで簡単に侵入出来たよ」

と那由他が答える。

「特殊音響閃光手りゅう弾スタン・グレネードも温存出来たしな」

と原谷が会話に加わる。

「で、これからどうしますの?」

黒子が聞く

「とりあえず二手に 別れましょう。

私が単独行動。

あなたたちは二人で 行動。

矢文、温存したスタン グレネードは二人で分けて持つといて。

何かの役には立つと思う」

「了解。で那由他ちゃんは どうするんだ?」

「私は他の敵を片づけられるだけ、片づけておく。

さらわれたチャイルドエラー達を守りながら、敵の襲撃を受けるのは避けたい」

と那由他が言う。

「ちょっと待って下さいの。

あなた一人で大丈夫なのですか?

さっき聞いた限りではかなりの人数が、 いるのですのよ」

と黒子が心配して言う。

それに那由他は笑顔で答える

「大丈夫。削板ほどじゃないけど、私も頑丈だから。

じゃ時間をもつたいないから先にいくね矢文、先輩をお願いね。

それと発信機によると

子供たちは地下に捕らわれているわ」

そう言った後、那由他は他の敵を掃討するため、更に奥に進んで行った。

「行ってしまいましたの」

黒子は那由他が去って行った方をしばらく心配そうに見ていたが、いつまでも見ているも仕方ないのでやめる。

「大丈夫だよ。那由他ちゃんなら。

それより」

「ええわかってますわ、急ぎましよう原谷さん」

黒子は決意を秘めた 強い言葉で原谷に答えるのだった。

「参ったわね」

黒子たちが、子供たち救出に向かっている、その頃美琴は危機に瀕していた。

「あの子とも、離れ離れになっちゃったし、それにこの攻撃を何とかしないと　もう！また来た」

そう言つて美琴は空を睨む。

そこには凄まじい勢いで急降下してくる　一本の矢があつた。美琴は慌ててその矢を飛び跳ねてかわす。

「ふう〜雷撃が効かない以上、よけるしかないのよね」

美琴は地面に突き刺さつてる矢を忌々しげに見た。

この矢は美琴と御坂妹が、地面に着いた後すぐに襲いかかってきた。

地面をえぐる程の威力と何故か美琴の電撃が効かない。

数億ボルトの雷撃の槍を食らわせても、　矢は壊れる事なく、　降り注ぐ。

この矢をかわし逃げている間に美琴は御坂妹と離れてしまった。御坂妹の安否は不明だ。

「あゝもう！腹たつわね。こそこそしてないで、面と向かって勝負しなさいよ！」と美琴は地団駄踏んで叫ぶ。

「はいはい。しょうがないから、リクエストに答えてやるよ」

まるで美琴の叫びに答えるかのように、一人の男が姿を現した。

「誰よあんだ！」

美琴は敵意を込めた視線でその男を見据える。

「初めましてレールガン 俺はいちがくりょうけん一学了見
レベル4の大能力者だ」

男はそう言って丁寧にお辞儀し、自己紹介する。

「あんたが、狙撃手ってわけね。

さつきはよくも好き勝手やってくれたわね。

おかげで連れと離れ離れになっちゃったじゃない。

それにあたしの電撃で壊せない矢なんて どころから手に入れたのよ
と美琴は語気を荒げて、敵に詰問する

一学はそれに嗔いながら答える。
敵が目の前にいるのに緊迫感が全くない
だから美琴は油断してしまった。

「矢ね。矢ってこれの事かい？」

そう言った、一学の手に一本の矢があった。
一学はそれを殺気ひとつ出さず、手首の力でヒョイと投げる
投げた矢は美琴の心臓めがけて飛んでいく。

「えっうそ？」

全く殺意もなく、最小限の動作で投げられた矢に美琴は、反応出来
なかった。

避ける事も防ぐ事も出来ない。
ただパニックになっている美琴の心臓を

矢は

決らなかった。
信じられない事に、美琴の心臓に当たる寸前にふっと消えて無くなつたのだ。

美琴は呆けた感じで 自分の胸元を見ていたが、慌てて矢を投げた張本人に叫ぶ。

「何、何したのよ？ あんた！」

美琴の疑問に一学は 素直に答える。

「幻術。俺の能力は 幻術使い（イリュージョニスト）

有視界内に幻を見せる事が出来る。
人間の頭に働きかける事だな。

幻覚にある程度痛覚や感触も与える事も出来る

ただ死に至る程の幻覚を与える事は出来ないし複雑な幻覚も無理だ。
でも見るだけで発動するし、見える範囲全てが射程圏内だから、結構便利なんだよ。

お前が撃ち落とそうとしてたのは、俺が作った幻の存在しない矢だ。

そんなものに攻撃したところで無意味なのさ。

ついでに言うと幻の矢に混ぜて、本物の矢も放ってたんだ。地面に突き刺さってる矢は本物ってわけだ。

これで納得したかい？」

一学は嗤いながら美琴に種明かしをする。

その一学に美琴は不機嫌さを隠さずに答える。

「ええわかったわ。幻覚能力者、厄介な相手だわ。でもいいの自分の戦術バラして、これじゃもう意表はつけないわよ」

と美琴が言う。

するとそれを聞いた一学は突然ゲラゲラと嗤いだす。

美琴はその態度に怒りを覚える。

「ちょっとどうしたのよ？急に噛み出したりして、私何か変な事言っただ？」

美琴がそう聞くと、笑うのを一学はやめた。

そして侮蔑しきった 口調で美琴の質問に答える。

「いや変な事は言っていないさ、ただ余りに無知だからつい可笑しくて笑っちゃった」

そこで一旦言葉をきり、次の瞬間馬鹿にしきった口調で再び喋りだす。

「戦術つてのはなお嬢ちゃん。

実力差が圧倒的にある場合は必要ないんだよ。

それにネタを明かしたからと言って、俺の幻術を君が見破れるわけでもないし、俺が能力を使えなくなるわけでもない。ようするに現状はあまり変わらない

まあこの情報を得てお嬢ちゃんが少しは有利になるかも知れんがね」

「じゃあだったら、何でそれを私に教えるのよ」

と美琴が不思議そうに聞く。

すると一学はニヤリと笑って一言。

「だってそれの方が面白いじゃん」

「は？」

美琴の一言を無視して、一学は会話を続ける

「俺は弓術は得意だから、確かにあのまま攻撃し続けてれば、俺の勝ちだ。」

でもそれじゃつまらないじゃん？」

「つまらない？」

「だってそうだろ。せっかく学園都市が誇るレベル5第三位と、

戦えるんだから楽しい戦いしないと、損じゃない」

「損だ」

美琴は拳をぶるぶると震わしながら、
つぶやく

しかしそんな美琴の態度にお構いなしに一学は喋り続ける

「そう損。戦いの基本的な事を知らない お前に俺が本気で挑めば
勝負はあっという間に終わってしまう。

それではつまらない 退屈な仕事にやっと潤いが来たんだ。
最大限にいかさないとな。

姿を現したのも、それが理由だ。

姿を見せないままだったら、アリと象の戦いだ。

せめて猫と象いやネズミと象ぐらいの戦いはしないと、リフレッシュ
ユにはならないからな」

と得意気になって、一学は言う。

一方それを美琴は静かにただ静かに、聴いていた。

ただし両拳を小刻みに揺らしながら、うつむいて、凄まじい電流を
纏っているが。

そしてついに

キレた。

「死ねえー!!」

叫びと同時に美琴は最大出力でレールガンを放った。

ドゴン!!

ドゴン!!

ドゴン!!

合計三発を間断なく 打ち込む。

辺りにホコリが舞い散り、煙が漂う。

その煙を見ながら、美琴は腕を組んでいる。

「ぎつとこんなもんよ。

あたしをなめんじゃないわよ
けど、死んじやないわよね」

でもつい勢いでやりすぎちゃった

美琴は冷静になつて

周りを見て様子をうかがう。

しかし人影は見えない。

その時

「三回は殺せてたかな」

空から声が聞こえた。

慌てて美琴が空を見上げると、翼を生やした一学了見が、浮いていた。

「はっ！それも幻覚なの。」

これ見よがしに現れて、気をとらわれてる隙に攻撃しようってわけだろうけど、そうはいかないわよ」

そう言った美琴は、自分の周りに強力な電気のバリアーを作り結界をはる。

「どうよ。これでそう簡単に私に攻撃は届かないわよ」

と美琴は得意気に言う。

だが美琴の強力なバリアーを見ても一学は動じなかった。

「レールガン。」

悪いがこの翼は本物だ

「

そう言った後、突然、一学了見の羽がさらに大きくなり、足も鳥のような、鋭い爪となる。

あっという間に一学は鳥人間になった。

美琴はその変身をくいいるように見つづけた。

「鳥人化、これが俺の持つもう一つの能力だ」

翼をはためかせて、一学は言う。

美琴はその姿に唾然とするが、すぐに正気に戻って問いただす。

「はぁ？どういう事よ。学園都市の能力者は一人につき一つしか能力はないはずよ。」

あんたが木山春生みたいに多才能力者とも、思えないし」

と天に向かって叫んで言う。

「確かに、学園都市の能力者は一人につき一つの能力だ。

細かい事は省いて、簡単に説明しよう。

俺が学園都市で得たのは、幻術使いの能力だけだ。

この鳥人化の能力は生まれながら、持っている能力だ。能力者に

は天然の能力者、学園都市では 原石と言つらしいが と、人工能力者の二つがある。

天然能力者が能力開発を受けた場合たいていは、天然能力だけが残り、能力開発を受けても効果なしか、あるいは天然能力が無くなり、能力開発で得た能力だけになるかのどつちかだが、稀に俺たちのように、天然能力と 人工能力の相性がよければ、二つの能力を得られる者が出てくるのだ。

俺が知る限り八人。 更に俺はその八人の中でも更に特殊！
見るがいい、生まれながらにして人を 超えている超人たる 我が力を」

そう言つた後、美琴の見ている一学が一人増え二人増えと、
どん増え続け最終的に五十体になる

「なっ！嘘もしかしてパワーアップしているの？」

美琴は信じられない とばかりに吠える。

しかし空から無情な 答えが返ってくる

「正解だ。 鳥人化する事によって俺は身体能力、五感などが 軒並み上昇するが、それだけではない。 レベルも上がるのだ。 まあ外界のやつみたいになつてもレベルアップしないが、一つはアップする。

つまり今の俺は、レベル5だ」

「レベル5ですって？」

美琴が驚愕して言う

「そうだ。お前もレベル5ならば、わかるだろ」

と空から美琴の疑問に答える。

「確かにはったりじゃないわね」

美琴は冷や汗をかきながら、認める。

「では、そろそろ勝敗を決めるか。

幻術で作った分身は 本体と合わせて五十体。

この五十体から、放たれる無数の矢を浴び続けていつまで、バリア
ーを保っていられるかな？

ああそれと、本物の矢には毒を塗ってあるからな。

強力な痺れ薬だから かすただけでも、 確実に痺れて動けなく
なる。

動けなくなったら、 矢に蜂の巣にされてあの世いきだな。 せ

いぜい俺を楽しませて逝ってくれよ」

そう言ってから、すぐさま五十体の一学達が美琴めがけて一斉に矢を放った。

ヒュン ヒュン

上空からいくつもの、線となって美琴に襲いかかる

「こんな。へろへろ矢で私が死ぬかゝ!!」

美琴はバリアーを二重に再構成して、防御するのだった。

「ネットワークからの情報だと、この地面の下に19090号がいると判明しました。」

「どうやら地下室みたいな所に監禁されていると御坂は思います」

姉と離れ離れになってしまった妹は一人単独で建物内に入っていた。

美琴と合流しようと思ったが、ネットワークから拾い上げた情報で、美琴がかなりの高レベル能力者と戦っているのがわかり、行っても足手まといになると判断。

救出を優先した

「まあお姉様ならば　そう簡単にやられたりは、しないでしょ」と
御坂は信じ祈ります」

そう言っつて御坂妹は　姉の無事を願い、天に祈りを捧げた。

「……誰ですか？」

御坂は背後に突然現れた、気配に警戒しながら振り向きます」

言ったとおり、御坂妹は背後を振り返る。

そこには、風紀委員の腕章をつけて、天狗のお面をかぶり、　右手
に刀を持っている男がいた。

「誰ですかあなたは？と御坂は正体を問いたたしますが、　顔を隠
している時点で無駄だと判断し追及を諦めます」

と御坂妹はそう言っつた後距離をとる

それを見た、天狗面の男は今までの沈黙を破り口を開いた。

「うん？侵入者は4人と聞いていたんだが、増えたのか？
まあいい、それでどうする？
抵抗するなら、殺す事になるが」

と天狗面の男は片手で刀を鐔なりさせながら喋る。

その天狗面の男の声から禍々しい気配を感じた、御坂妹は身の危険を感じ、シオルダーホルスターの拳銃を懐から取り出して発砲する。

タン タン 軍隊の戦闘マニュアル通りに御坂妹は二発、頭と腹めがけて撃った。

しかし御坂妹の見事な射撃を天狗面の男は、弾丸が見えているように、ヒョイト あっさり避ける。

弾丸は虚しく壁に着弾する。

「そんな！御坂は何故外れたのか理解出来ないとヒステリックに叫びます」

御坂妹が驚愕に驚いている御坂妹に、銃弾を避けた、天狗面の男はゆっくりと近づいていく。

御坂妹がよく見ると、いつの間にか天狗面の男の刀は抜かれていた。

どうやら避ける間に抜刀していたらしい。

「さて今度は、こっちの番だな、ふん！」

天狗面の男は無造作に抜き身の刀を、片手突きに突いてきた。

シユンと高速の突きが御坂妹を襲う

しかし御坂妹も、迎え撃つべく、発砲する。

タァンと一つの銃声が鳴り響き辺りは、 静寂に包まれた。

第三話 黒子の反撃

その3 (超絶

超人達の力

危うしレベル5)

(後書き

いかがだったでしょうか？

原作で否定されているデュアルスキル、何とか出来ないかと 思
い考えてみました。

ではご意見 ご感想 等待着っております
ありがとうございました？

第四話 奮戦美琴 (予期せぬ援軍 その名は上条当麻) (前書き)

今回は長くなったので

二回に分けます

第四話 奮戦美琴（予期せぬ援軍 その名は上条当麻）

刃先が迫ってくる

それは一見スローモーションに見えたが、御坂妹はただ見ている事しか出来なかった。

（もうすぐ刀が御坂の喉を貫くでしょうと御坂は自分の最期を冷静に想像します）

刃先が喉を後数秒後には貫くのを悟った御坂妹は思わず目を閉じた。

しかし

御坂妹に死は訪れなかった。

痛みも訪れず、血も噴き出さない。

代わりにキーンと言う甲高い音が鳴っただけだった。

（一体何が？）

音の正体を確かめようと御坂妹が恐る恐る閉じた瞳を開くとそこには

半分程欠けて短くなった刀を持つ天狗面の男と、その後方から片手を前に突き出して、荒い息を吐いている少年がいた。

「大丈夫か？助けに来たぞ」

少年は原谷矢文（はらたに一やぶみ）

だった。

（ふう〜間一髪だったな）

間に合うかどうか、わからないタイミングだったので、少女が無事なのを見て、原谷は安堵した。

（黒子ちゃん探したら、銃声が聞こえて来たんで慌てて駆けつけたら これだもんな。）

那由他がいなくなった後、黒子も原谷が止めるのも聞かず、テレポートしてしまった。

原谷が黒子を探してたのは、そういう理由からである。

(それにしても、あの子どもっかで見たとような気がするんだけど……
気のせいだよな。常盤台であんな可愛い子なら忘れるわけないしな)

原谷は自分が助けた御坂妹を見る(原谷は名前は知らない)

銃声を聞いて駆けつけた原谷が見たのは 御坂妹に迫る刃だった。

それを見た原谷は、御坂妹を助けるべく 自分の能力である
レベル3の念動力サイコキネシスを使い御坂妹に迫る刃を へし折ったのだ。

御坂妹が聞いた音は、刀が念動力でへし折られ飛んでいく音だった
のである。

「ありがとうございますと、御坂は名も知らない命の恩人にお礼を
言いながら、頭を下げます」

御坂妹はそう言いながら、本当に頭を下げる。

「いやそんな丁寧に頭下げなくてもいいぜ。とにかく無事で良かった。
ええと御坂ちゃんていいの？」

「はい御坂の名前は御坂です。」

と御坂は自分の命の恩人に自己紹介します」

と御坂妹は淡々と言う

「御坂ちゃんか宜しく。」

俺は原谷矢文だ。

ある風紀委員の助手やってる」

と原谷は御坂妹に自分の自己紹介をする

(御坂?どっかで聞いたような気がするが……気のせいかな?)

原谷は自分が助けた常盤台の少女の名前が気になったが、結局思いだせなかった。

その時

「いつまで無視してやがる!」

強烈な怒気いや殺気を込めた声が聞こえてきた。

声の主は天狗面の男だった。

「御坂ちゃん君は早く逃げるんだ。

すぐに仲間に連絡して迎えに来て……」

と原谷が自分の携帯を、ポケットから取り出してメールしようとした時

ヒュンと高速の突きが原谷を襲った。

「うお」

原谷は後方にジャンプしてその突きを避ける。

しかし思いつきり背後に飛んだので、原谷は着地の時バランスを崩して、グラツとよろめいてしまう。

原谷は何とか、片足で踏ん張って転けるのだけは防ぐ。

（危ねえ。あやつく殺されるとこだった それにしても何て突きを放つんだ。

刀が折れて短かくなってたから、回避が間に合ったが元の長さだったら……)

原谷は自分が下手したら死んでいたかも しれなかったのを思い戦慄するのだった。

同じ頃もう一人の御坂は

苦戦していた。

「このままじゃ」

雨霰あられの如く降りそそぐ矢を美琴は防ぐの精一杯だった。

(せめて、本物と幻術の区別が出来れば)

だが幻術のレベルは高く、美琴が電磁波で空間把握するが、区別は出来ない。

ゆえにひたすらバリアーを張り続けるしかない。

(そろそろか)

そんな防戦一方の美琴を一学は冷静に観察していた。

(よくもった。さすがはレベル5だが、それももう限界。

後は崩れるのを待つて、矢が当たって動けなくなったら、直接とどめを刺しておわりだ。

このままでも勝てるが、外界がない今は、もう一人分働かんといかんからな。ペースを上げるか)

そう決めた、一学は さらに力の出力を上げる

すると一学の数が五十から七十に増えた。

「そんな……」

一学の数がさらに増えたのを見た、美琴は絶句した。

膝から崩れそうになるが、気力を振り絞って耐える。

(まだ全力じゃなかったの？
さらに数が増えるなんて)

美琴は数が増えた一学たちを見る。

地面から空を見上げる美琴を、空から見下ろす一学は余裕の笑みを浮かべて言った

「息もかなり荒い、足元もふらふら、
もう限界が近いなレールガン」

と指を差しながら、言う。

「限界？限界なんていくらでも超えられるのよ。
少なくとも私は今までそうだったわ。
だから勝った気になってんじゃないわよ！」

美琴はそう叫び、バリアーの範囲をさらに広げる。

電気のバリアーが半径百メートルぐらいを包む。

その中心に立つのは 学園都市のレベル5 第三位、御坂美琴。

その体はぼろぼろだったが、瞳だけは闘志に燃え輝いていた。

（こうなったら、賭けに出るしかない。 幻術と本物の区別がつかないなら、全部このバリアーで弾き飛ばす。これなら幻術も本物も関係ない。

奴の攻撃を防いだら、全力で落雷をぶち込む。

向こうが態勢を整える前に、外したら後がないけど、このままギリ貧よりましよ）

美琴は賭けに出ることを決意し、その決意を上空に告げる

「来るなら来なさい 私の首取れるもんなら……」

ここで一旦止めて、力を蓄える

そして

吠える

「取って見ろー！ー！」

美琴の雌叫び（こんな言葉あるのか？）が大気を震わした

（いい気迫だ）

一般人なら震えいや 失神してもおかしくない、美琴の叫びを聞いた一学はとても嬉しそうな笑みを浮かべた。

戦う事が心底楽しい そんな好戦的な笑みだ。

（途中失望しかけたが、今の気合いで帳消しだ）

一学は美琴の気合いに全身全霊で答える

「見事だ御坂美琴

今の気合、万の兵でも竦み上がらせるだろう。

もはや常盤台の世間知らずのお嬢様とは 思わん。

殺すに値する戦士として、この一学了見がお前を葬ろう
ではいくぞ御坂美琴。

これが俺の能力幻術使いの、全力だあ！」

一学がそう吠えると 七十体がさらに百体になった。

「そんな……さらに増えるなんて」

美琴がその光景を有り得ないと思いながら見る

しかし残念ながら現実だ。

「終わりだ御坂美琴 先程まで何とか防いでいたが、今度は防げんぞ」

そう言って、弓を取り出し、矢を引き絞る

「顔は傷つけないでおいてやるぞ。」

だから安心して逃げ」

百人の一学が一斉に美琴目掛けて矢を放った。

矢が降ってくる、さっきも凄まじい数だったが、それをも上回る数

だ。

「こんなのどうしろって……うっん諦めてる場合じゃないわ 防御が駄目なら攻撃よ。
全部届く前に吹き飛ばす。」

防御が無理と悟った美琴はバリアーを解いて、両手に集められるだけの電気を集める、たちまち集めた電気は美琴の最大出力十億ボルトに達する

「はあはあ……私の最大出力ですべて吹き飛ばす」

美琴は自分に降りそそぐ矢目掛けて、雷撃を解き放った。

バチバチと迸る雷撃が、矢を破壊しそのまま百体の一学を襲う。

「くっ」

百人の一学達は、全員両手でかおをガードした。

ピカッと眩い閃光と轟音が辺りを包んだ。

「はあはあ……やったの？」

美琴はそれだけ言った後、地面にがつくりと両膝をついた。体ごと倒れそつになるが、両手を付いてそれは防ぐ。

空を見上げると、そこにはさっきまで、空を埋めていた、百人の一学了見はいなくなっていた。

「いなくなってるけど……私勝ったの？」

美琴は空をくまなく見たが、影も形もない。

「やっぱりいないわね。」

まあいいわ。倒したかどうかはわからないけど、とりあえず退けたみたいだし、あの子を探さないと」

美琴は何とか立ち上がって、歩き出そうとする

「敵に背を向けるなんて、死にたいのか」と馬鹿にしたような声が後ろから聞こえる

美琴が声に反応して振り向くと
「なんで」

そこには一学了見が立っていた。

美琴は背後に立っている、一学をよく見る

煤けたり、服が破れたりしているが、目に見えるような、怪我はしていない。ただ鳥人化は解けており、元に戻っている。

（仕留めたとはさすがに思ってたけど、怪我の一つもないなんてね）

美琴は最後の賭も敗れて、途方にくれるのだった。

「驚いているようだな」

「まさか私の渾身の一撃が無傷なんてね」

美琴は後じさりながら、言う。

「いい一撃だったぜ 正直まともに食らってたら、危なかったな」

一学がゆっくり美琴の方に歩いていきながら、言う。

「よく言うわよ」

無傷で済ましたくせに」

美琴は言いながら、額から電撃を出そうとするが、パチッと電気がはじけるだけで、電撃が撃てなかった。

(駄目やっぱり電池切れだわ)

それを見た一学が、ニヤリと笑う

「やっぱりな。レールガン三発に、バリアーを使い、最後には最大出力の電撃。もうレールガンどころか、電撃を撃つ事も出来まい。こっちもダメージを結構受けて鳥人化は出来ないが、それでも幻術は使える。」

そう言ったと同時に 一学は三人に増える。

三人は全員がナイフを持っている。

三体の一学は美琴の周りを囲む

疲れ果てて、今にも倒れそうな美琴は、それを黙って見ている事しか出来ない。

(電撃が使えないなら……どつけばいいのよ)

美琴はそう決断して 殴りかかる

「11のー!」

しかし美琴決死の一撃を一学はあっさりと避ける。

「まだ、まだ」

美琴は今度は、蹴りを放ついつも自販機を蹴っ飛ばしている、上段回し蹴りだ

ブンツと勢いに乗った上段回し蹴りを

「残念だがそれじゃ 隙だらけだな」

そう言いながら、頭をかがめて、避けた 一学は美琴の懐に入り込んでローキックを蹴る。

「ぐっ」

強烈なローキックを受けた美琴は苦悶の 声を上げる。

「残念だが、肉弾戦ならお前に勝ち目はない」

一学はもう一度ローキックを正確に全く同じ場所に叩きこむ。

「うっ……」

正確無比なローキックに、美琴は地面に膝をつく。

「終わりだ」

とどめを刺すべく、一学がひざまずいた。美琴の頭を踏みつけようとする。

(せめて相討ちに)

美琴は電撃を撃とうとするが出ない

その時

「美琴ー！」

という叫びとともに 走り込んで来た
とある少年が一学を 殴り飛ばした。

「何だと！」

突然現れた援軍に、一学は対応出来ずそのまま殴り飛ばされる。

だが、空中で一回転して地面に着地する 思ったより攻撃力はなかつたようだ。

「あなた何で？」

美琴は自分を助けてくれた少年に聞く

少年は美琴のよく知っている人物、上条当麻だった。

「うん？コンビニの帰りに、空跳んでくお前見えたからな
気になって追っかけて来たんだ」

「あなた、あれが見えたの？」

美琴は空を跳んでくのを当麻に見られたのを知り赤くなる

「ああ。でもお前力持ちだったんだな」

「力持ちじゃないわよ。

一時的に電気操って一時的に筋力上げただけよ」

と美琴が当麻に説明する。

「そうか。そんな事も出来たのか」

と当麻が納得する

「まあめつたにやんないけどね。

御坂クッキングヒーターと同じぐらい、神経使うから疲れるしね」

と美琴が言う

「御坂クッキングヒーター？
お前家電製品だったのか？」

と当麻が突っ込む

「誰が家電製品よ！ 以前みんなでカレー作ろうとした時
ご飯炊くの火がつかなくて、それで私が先輩に頼まれて、
でご飯炊いたのよ」

能力

「ふうん便利だな」

と当麻が誉める

「そんなに便利じゃないわよ
加減が微妙ですごく疲れるんだから」

「そうか。」

まあ無能力者の俺にはわかんないが。

ところで、美琴」

「何よっ」

急に名前を呼ばれたので、ついきつい口調で返してしまっ。

当麻はそれに静かに答える

「お前。まだ戦えるか？」

当麻が前方を指差して言う。

そこには鬼の形相をした一学了見が腕組して立っていた。

「もういいか

バカップル。

まあもう良くななくても、攻撃はするがな」

「カツ、カップルじゃないわよ！」

美琴が顔を赤くしながら否定する

その後「まだ」と小声で言ったがそれは 誰にも聞こえなかった

しかしそんな美琴の否定を一学は気にせず話す

「そうなのか？」

まあでも道連れが出来て、良かったじゃねえか。

あの世に行っても寂しくないだろう？」

一学は歩きながら、腕組みを解く

「時間をかけ過ぎた 今度こそ終わりにする」

そう言った一学は、 さっき当麻に殴られたひょうしに、 つい 消
してしまった自分の幻を再び作るうとする。

(……どういう事だ？
幻術が使えない)

一学の心の中を、まるで読んだかのように当麻が疑問に答える。

「ああ悪いけど、能力は使えないぞ

俺の能力は幻想殺し(イマジンプレイカー)

異能の力を無効にする能力だ。

さっきお前ぶっ飛ばした時、幻想殺しの宿ってる右手でぶっ飛ばしたから、お前の能力は封印されてるんだ」

当麻がそう説明する

「あんたそんな事出来たの？」

美琴が不思議に思って聞く

「まあ今回はいつもと違うとでも、思ってくれ」

「それってどういう事？」

とさらに質問を重ねる。

「美琴……悪いが 説明するだけの時間はくれないみたいだ。
伏せる」

当麻がそう言って美琴を地面に伏せさせ、自らも一緒に伏せる

その上を一学が投げていたナイフが通る。

だが攻撃はまだ終わらない。

続いて今度は本体自ら突っ込んでくる。

「本当に腹の立つバカップルだ。

そんなに、いちやつきたいなら自分の部屋でやっている」

そう言った一学が、当麻目掛けてパンチを繰り出す。

ところが、そこで不思議な事が起こった。

なんと一学のパンチが当麻の体の中を通り抜けたのだ。

「何だと!」

不思議な現象に一学の動きが止まる。

美琴も啞然として、言葉もない。

「驚くのはまだ早いぜ」

いつの間にか当麻が一学の背後にまわっていた。

「馬鹿な!」

後ろにまわった当麻は、すかさず右ストレートを一学にブチ込んだ

「ぐはっ!」

一学は当麻のパンチで吹っ飛ばされて、地面を転がっていく。

やがて止まり動かなくなる。

「やったの？」

さっきまで唾然として見ていた美琴だったが、当麻が一学を殴り飛ばしてる間に 近くまでやってきていた。

「いや残念だが、俺のパンチじゃあいつは倒せない」

当麻は拳を握りしめながら言う。

「倒せないって、あいつがタフって事？」

「まあそんなとこだな」

「じゃあどつすんのよっ？」

と美琴がイライラした様子で言う

それに当麻は丁寧に答える

「今の俺に出来るのは、お前の盾になつて攻撃防いでやるか、全く効かない弱いパンチを嫌がらせてぶち込むだけだ」

「でもさっき、パンチすり抜けてたわよね。

あれは何新技？」

美琴が気になつて聞いてくる。

「あれはまあそんなとこだ。
何もお前だけが、成長しているわけじゃない」

「それもそうね。
でどうするの？」

美琴は当麻に作戦を聞く。

「美琴、俺さっき言ったよな。戦えるかって？」

もう一度言つぞ、

戦えるか美琴？悪いが今の俺には、奴を倒す力はない俺が奴を引きつける その隙について、奴に電撃を浴びせてくれどうだ出来るか？」

と当麻は優しい口調で聞いてくる

「もし私が出来ないって言ったら、どうすんのよ？」

美琴が、恐る恐る聞いてみる。

「その時は仕方ねえ 俺がこいつを抑えてるから、その間に先に行け。」

事情はよく知らないが、さっきから向こうにある建物気にしてるだろ」

当麻は美琴がちらちら、訓練所の建物を何度も見ていたのを知っていた

「確かに私は先を急いでるわ、でもあんたを置いてなんていけないわ」

「美琴お前」

美琴は己に喝を入れて奮い立たせる

（電池切れが何だ。 限界が何だ。

あいつが当麻が私に助けを求めてんのよ。

しっかりしなさい御坂美琴！

当麻を助けんのよ）

己に喝を入れて美琴は復活する。

「さっさと片付けるわよ当麻。

ご希望通り

特大の電撃叩きこんでやるわ」

美琴は当麻を見ながら、力強い口調で言った

それに当麻も力強く応える

「わかった二人で奴を倒そう。
行くぞ美琴」

と言って、美琴の手を握る。

「もういいか？」

当麻と美琴が、声がした方を見ると、そこには満面の笑みを浮かべて立っている。一学がいた。

どうやら美琴と当麻が話しこんでいる間に立ち上がっていたらしい。

当麻と美琴はその笑顔を見て寒気に襲われた。

一学は満面の笑みを浮かべているが、目は全く笑っていなかったのだ。

「戦闘中にこれほど殺意を覚えたのは、久しぶりだ。
もう殺すだけじゃすまさない。

じわじわとなぶり殺しにしてやる。

男の方の首を切り取って、その首を枕元に置きながら、レールガン

てめえを犯してやる。
覚悟しろ」

その言葉を最後に一学はさっきより大きいナイフを持ち、
当麻たち目掛けて
突っ込んでいった。

第四話 奮戦美琴 (予期せぬ援軍 その名は上条当麻) (後書き)

いかがだったでしょうか？

長くなったので、2つに分けます。

続きはすぐに投稿しますので、しばらくお待ち下さい？

第四話 奮戦美琴その2 (影の功労者は心理掌握?) (前書き)

やっと書けました
続きです

第四話 奮戦美琴その2 (影の功労者は心理掌握?)

「来るぞ美琴。

俺が突っ込む援護は任せた」

そう言っつて当麻は、一学を迎えうつべく突撃する

「OK特大のぶちかましてやるわ。
あんたこそへますんじゃないわよ」

美琴は当麻を信頼しきった様子で、見ながら言った。

最後の激突が始まった。

「死ねえ〜!」

一学はそう言いながら、突撃してくる当麻に走り込みながら、ナイフを振るう

当麻はそれを避けつつ、一学の懐に飛び込む。

「何度も入り込ませるか!」

一学は当麻の首筋目掛けてナイフを横一直線に振るう

まともに当たれば、当麻の首が切られていたが、そのナイフに電撃が当たりはじき飛ばす。

「ぐわっ」

一学は痛みあまりナイフを持っていた方の手を抑える

「今よ！」

美琴は電撃を放った態勢のまま、当麻に叫ぶ。

「サンキュー美琴」

当麻はそう言いながら、呻く一学の両足を掴む。

「うお〜」

当麻はその足を両脇に抱え込み自身は、独楽のように回転します。

「美琴〜！」

の叫びを合図に、当麻はジャイアントスイングで、一学を美琴の方
目掛けて、投げ飛ばす。

ブーンと投げ飛ばされた一学は美琴の方に一直線に飛んでいく。

(くっ……だがこの程度で俺は倒せん)

一学は空中で一回転して着地しようとした時

「はい？」

着地点に拳に電撃を纏った、にっこり笑っている美琴がいた

「馬鹿な！電撃は使えなかったは……」

一学が着地し終わる前に、美琴のアップアが一学の顔面を捉えた。

バゴツと拳が顔面にめり込む。

さらに美琴が体内の電気を操り、筋力を増強しながら、拳を押し込む。

美琴渾身の電撃アッパーを食らった一学は吹っ飛ばされ、宙を飛びやがて、地面に叩きつけられる。

渾身の一撃を決めた美琴だが、彼女の攻撃はまだ終わらない

「特大のお見舞いするって言ったわよね」

地面に叩きつけられバウンドする一学目掛けて、美琴の雷撃の槍が一瞬で十メートルの距離を詰めて、標的を貫いた。ズドンという豪音のが辺りに響いた後にはびくりとも動かない、一学了見がうつ伏せに倒れているだけだった。

「どうよ。今度は立てないでしょうが
レールガンの底力なめんじゃないわよ」

愛の力で限界を超え勝利を掴んだ少女は 天に向かってガッツポーズするのだった。

「やったな美琴」

そこへ当麻がゆっくり歩いてやってきた。

「ありがとうあなたのおかげで助かったわ」

美琴は自分を助けてくれた当麻に礼を言う。

「いいって気にすんな。」

お前が無事ならそれでいい」

当麻は自然と齒の浮くようなくさいセリフを吐く

「何、何言ってるのよあなたは、そう言うセリフを私以外の女の子にいつも言ってるの?」

美琴は顔を真っ赤にさせながら、言う。

「知り合いが無事で良かったって思うのは普通じゃないか 何怒ってんだお前？」

と当麻が怪訝な顔をしながら言う。

「うるさい。別に怒ってないわよ。」

ああ！もういいわよ 鈍感男に聞いた私が馬鹿だったわ」

「鈍感男ってのは

私、上条当麻の事ですか？」

「あなた以外に誰がいるのよ」

「ああそれもそうか。」

ところでこんなところで、油売ってていいのか？
急いでるんだらう？」

と当麻が美琴に指摘する。

それを聞いた美琴は 慌てだす。

「そうだったわ。あんたとここでもめてる場合じゃなかったわ」

「いやお前から振ってきたんだろ」と当麻が突っ込むが美琴は無視する

「急がないと、じゃあ私は先行くわ。

助けてくれてありがとう。

この借りはいつか返すわ」

美琴はそう言って走り去って行った。

それを見送った当麻は

「行ったか。

何にせよ危なかったな。

もう……限界だったわ」

そう言った後、突然当麻は消えていなくなってしまった。

後に残されたのは、うつ伏せに倒れている一学了見だけだった。

「はあ…はあ…はあ」

一方同じ頃、学舎の園内にある、もう一つの常盤台女子寮で一人の少女が息も絶え絶えにベッドうつ伏せになっていた。

美少女だが、どこか冷たい印象を与える少女だ。

「水を」

少女はよろよろ、しながらベッドから、起き上がると、冷蔵庫の方に歩いて行く

冷蔵庫に到着した少女は、中に冷やしてあるミネラルウォーターを出し、ラッパ飲みする。

普段はコップに入れ替えるが、今は一刻も早く飲みたいので、入れ替えない。

少女がガブガブお嬢様らしからぬ飲み方をしている時。

コンコンとドアをノックされた。

「どなたかしら？」

少女は飲みかけの、ペットボトルを冷蔵庫に入れ直してから ドアに向かう。

それからドアの外側を見る、カメラを起動させる。

そこには一人の茶髪のお淑やかそうな、おっとりした雰囲気の少女がいた。

マイクを起動させ、話しかける

「こんな夜更けに何の用かしら？」

確かあなたは、婚后光子とよくいる水泳部の一年生よね

「

少女の答えに、水泳部の少女が答える。

「はい。湾内絹保と申します。」

未無様」

湾内絹保は部屋の主に自己紹介した。

部屋の主の名は未無^{みなしなき}凧

常盤台が誇る、二人のレベル5の一人、
第五位、^{メンタルアウト}心理掌握その人である

「それで湾内さんあなたは、私何の用かしら」

未無は少し警戒しながら聞く

(いつもなら、心を読むのだけど、今は大技使った後だから とて
もそんな事は出来ないわ)

「はい。突然訪ねて申し訳ありません
実は私のルームメイトが未無様の呻き声をテレパシーで探知しまし
て、それで私が頼まれて様子を」

湾内は申し訳なさそうに、お辞儀をした 後理由を説明した。

「そう。心配してくれてありがとう。

大丈夫私は何ともないわ。

ルームメートのその子にも心配してくれてありがとうと言っておいで」

「わかりました。

とにかくごく無事で良かったです」

「湾内さんね。

今度お茶でも一緒にどう？

もちろん今日のお礼に奢らせてもらおうわ」

「いえ。私など未無様とご一緒出来るような身分ではありません。

光栄ですがご辞退させて頂きます」

と湾内は何度もドアの前で頭を下げる

「そう。わかったわ また気が変わったら いつでも言っただい。

じゃあ湾内さんもう寝なさい消灯時間は 過ぎてるわ
寮監は私が催眠ヒュプで眠らしておくから安心して」

「わかりました。

ありがとうございます未無様。

ではこれで失礼します」

湾内がもう一度丁寧に頭を下げる

「それじゃ気をつけてね。

後お休みなさい湾内さん」

と未無が挨拶する

「はい。おやすみなさいませ未無様」

そう言って、湾内は自分の部屋に戻っていった。

「ふう。どうやら疲れて、普段は漏れないようにしている、
思考
が漏れてたみたいね。

でも仕方ないわ、レールガンを救うために大技を連発しまくったの
だから」

湾内との会話を終えた未無はベッドに倒れ込んだ。

正直無茶をしすぎた。

そう会話からわかる通り、美琴を助けたのは当麻ではないこの未無である

（ちなみに当麻本人は補習プリントを徹夜でやってたりしてる）

未無は偶然空を跳んでいく美琴を見かけ 何をしているのか気になり、その心を覗き見た。

それで事情を知った 未無はテレパシーで様子をこっそり見ていたのだ。

しばらくは暇つぶしに観戦していたのだが、

美琴が殺られそうになるのを見て、見捨てる事も出来ず、助ける事にした。

「でも幻影の実体化、心理掌握による 敵の幻術封じ。さらに御坂美琴の能波弄って、アルファ波発生による、能力の向上、

どれも大技ばかり、近距離でも難しいのに、遠距離　だもの参ったわ」

未無は一人呟きながら、仰向けになる。

（特に幻影実体化は　参ったわ。

途中、維持出来なくなって消えそうになるし、ジャイアントスイングは今まで以上の実体化がいったから骨が折れたわ

（当麻（幻）がパンチをすり抜けられたのは、それが原因である）

精神系能力封じは、　何度かやった事はあるけど、同じレベル5相手に使った事なかったけどまあうまくいったわ。

相手はレベル5と言っても一時的なものだったから、制御が甘くてコントロールが　雑だったから、何とかなかったけど

アルファ波のコントロールはそんなに難しくなかったのは　唯一の救いか）

彼女はさっきやった自分の大技を思い返し、よく成功したなあと自分を褒めたくなる。

（それにしても上条当麻の幻影使ったのは大成功だったわ
私を嫌ってるあの御坂があんなに素直になるなんて

まさにデレデレ御坂だったわね。

私がテレパシーでアドバイスしても、私が幻影で現れてもどっちにしても、食ってかかってくるだけだからと思って、あの子の心の中を覗いた時に最も占めていたのが上条当麻だったから、私よりましだと思ったのだけど あんなものが見れるなんてね。
タダ働きに思わぬ報酬がついたわ)

未無は美琴のデレっぷりを思い出し、一人微笑む。

やがて笑い終わった未無は部屋の電気を 消す。

「さて私はもう寝るわ。私が手助けしてあげられるのは、ここまでよ。

後は自分で何とかする事ね

幸い削板軍覇もいたから、何とかなるでしょう

「ご武運をお人好しのレールガンさん」

そう言った後、学園都市のレベル5心理掌握は眠りにつくのだった。

このお人好しの女王様の行動は本人しか 知るものはいなかった。

心理掌握が眠りについた同時刻

とある学生寮で

「不幸だー」

と叫びながら、補習プリントを片付けるツンツン頭の少年がいた

しかし彼の真の不幸はこれからだった

数分後安らかな眠りを妨げられたとあるシスターが、ツンツン頭の不幸少年の頭にかじりつき、

不幸を与えるのだった。

第四話 奮戦美琴その2 (影の功労者は心理掌握?) (後書き)

いかがだったでしょうか？

ちなみに判る方は判ると思いますが、今回出てきた心理掌握は狂月さんの作品

とある科学のレベル変動に出てくる半オリキャラ未無風です

狂月さんのとある科学のレベル変動と

最新作フェタリティ クレセントも宜しく願います。

第四話、第二章（漲る根性、不死身の男それがナンバーセブン）（前書き）

今晚はやっと投稿できました

軍覇の戦い決着の

全ページ軍覇づくしでお送りします

第四話、第二章（漲る根性、不死身の男それがナンバーセブン）

「はあはあ……くそ きりがねえな」

空中に漂う、無数の石のかけらと三つの石の甲冑を見て削板はうんざりする

美琴が助っ人得て、勝利していた頃
削板は苦戦を強いられていた

削板に助っ人などという、都合の良いものは現れず、削板は どんどん追い詰められていた。

「チクシヨウ、さつきから堂々巡りでらちがあかねえ。

だがあの時のとんでもない力を使った金髪兄ちゃんとの戦いよりは
ましだ」

削板は自分が今までで一番きつかった戦いを思い出す

文字通り手も足も出なかった

敵の攻撃を回避も防御も出来ず、こちらの攻撃は全く効かない

あの戦いに比べれば まだはるかにましである

(とりあえず何とかあの甲冑と破片をどうにかしないと)

甲冑とは鬼川翔角が 被っている石の甲冑である。

これを鬼川は自身と 遠隔操作で中身のない甲冑を作り出し、 操
っている。

これらは削板が攻撃すれば、身代わりに攻撃を受け砕け、破片は石
礫つぶてとなって削板に降り注ぎダメージを与えた後再生して、 再び甲
冑となる

そしてまた削板の攻撃を受けたら、砕け 石礫となって攻撃する

これの繰り返しである

削板の超人的なスタミナとタフネスがあるからまだ、勝負は続いて
いるが、並の能力者ならば、とっくに勝負は終わっている

折れそうになる心を 持ち前の根性でふんばる。

(とにかく本体に攻撃するしかない)

削板はそう決断すると真っ向から、突っ込んでいく。

「また馬鹿の一つ覚えの突撃か

芸のないやつめ

まあいい好きなだけ無駄なあがきをするがいい」

そう言った後、鬼川が手を上に掲げ振り下ろす。

それを合図に空中を漂っていた、破片が 削板の背後から降り注ぎ、削板の背中を 襲う

同時に鬼川本体を覗く2つの石の甲冑が 削板に突っ込んでくる

2体とも、石の斧を持っている。

削板は背中からの礫を背中にオーラを纏う事で、ダメージを軽減し、背中に礫を浴びたまま直進する。

あっという間に石の甲冑たちとの距離が 縮んでいく

削板は両拳を腰に構え、それから石の甲冑たちを、見据える

そして

「ダブルすごいパンチ」

削板軍覇が放った

ダブルすごいパンチが、衝撃波をまきおこし石の甲冑を砕く。
だが削板はそれに目もくれず音速の二倍の速さで鬼川本体に突っ込
んでいく、
早い！

後ろから迫ってくる礫をあっさり置き去りにする

その超スピードのまま、天高くジャンプする

そして落下しながら

「すごいキック」

削板の跳び蹴りは、

鬼川本体に炸裂しなかった。

突然甲冑が砕け、削板の蹴りは空をきつたからだ

その砕けた甲冑の破片は、蹴りを外した 後見事に着地した後の、
削板の背後に再生する

「残念だったな、俺は石を操るだけではなく、自身の体を石に出来るのだ」

再生し終わった鬼川は、着地して片膝立ちになっている、削板に右腕の石の拳を 叩きつける」

「凄いガード！」

削板はオーラを両腕に纏い、防御する
しかし鬼川の攻撃力は凄まじく、防御もろとも削板は吹っ飛ばされ、
数十メートルを飛ぶのだった

「痛てて……こりゃ派手にぶっ飛ばされたぜ」

削板軍覇は数十メートルほど飛ばされた後地面に背中から、落ちたが、ちゃんと受け身を取っていたので落下のダメージはない。

削板は立ち上がって辺りを見渡した後

自分の左腕を見る

「折れてるな。まあ些細な事だけどな根性でどうにかなる」

何と削板軍覇の左腕は折れてしまっていた。

鬼川のパンチをガードした時である。

しかし削板は大して気にしない。

(確かに強いがやっぱりあの兄ちゃんほどじゃねえ)

と削板は思う。

「うん何だ？」

削板がふと空を見上げるとそこには、無数の石のかけらが漂っていた

その石のかけらから 声が聞こえてくる

「その左腕どうやら 折れたようだな。

そろそろ超頑丈なナンバーセブンも限界かあ？」

しゃべる石のかけらが地面に落ちて、やがて人の形を形成する。

石のかけらは鬼川だった。

鬼川は今度は石の甲冑となって、削板に近づいていく。

途中鬼川石のかけらを集め今度は石の犬を五匹作り出す

それを削板は微動だにせず見る。

そんな削板を見ながら鬼川が不敵に笑う

「さうしてその痩せ我慢がいつまで持つか見物だな、片手じゃ一分持たないかな？」

「ふん。やけに俺の左腕を壊したのが、嬉しいみたいだが、片腕の骨折など、俺の漲る根性の前じゃ些細な事だ〜！！」

削板は根性の入った叫びを上げる。

その叫びを聞きながら、鬼川は笑いながら石犬をけしかける

「では見せてみる

ゆけ！削板の喉笛を食い破れ」

その合図とともに、石犬が削板に跳びかかっていった。

「犬ごときで、俺の根性は止められねえぜ〜！」

削板、片腕だけの連打で、襲いかかる犬たちを迎え打つ

しかし石の甲冑より 小型の石犬は再生速度が早く、数も多い、捌ききれない、石犬は削板の体に噛みつき離れない。

削板はそんな噛みついてしがみついている 石犬たちを気にもせず、ひたすら迎撃し続ける。

しかし小さな振りから繰り出すパンチでは強力な衝撃波は生まれず、迎撃で精一杯である。

「意外に粘るな」

そんな軍覇の戦いぶりを冷静に鬼川は観察していた。

「本当に嫌になるくらいタフな奴だ。けど、これには耐えられまい」

そう言いながら、鬼川巨大な岩を作り出す。

先ほど、人間を潰した岩と同じ大きさだ

「そら！ 犬たちの攻撃受けながらこれが避けられるか？」

削板めがけて鬼川は岩を投げつけた

「はあ…はあまだまだ」

削板は身体中から血を流しながらも、まだ戦っていた。

防げない攻撃は、折れた左腕を犠牲にして防ぎしのいでいる

そんな満身創痍の削板の頭上から岩が降ってきた。

ゴォーと勢いよく岩が落ちてくる。

「ぬおおー」

それを見た削板は避けようとするが、足とかに噛みついていて、石犬たちが離れないので動けない

やむなく削板は未だ無事な右拳を強く握り締めて、空から降ってくる岩に

「凄いパンチ」

を放つ

ドーンと岩と凄いパーンチがぶつかり、その激突の余波で、削板に噛み付いている石犬以外の石犬は、吹っ飛ばされる

「くそ……」

削板は空中で自分の、すごいパーンチと拮抗している岩を、悔しげに見た

疲労の極みに達し、普通の人間なら即入院になるくらいのダメージを受けている。削板には目の前の岩を破壊しうるだけの力が残っていないかった

やがて岩を削板のパンチでは、空に留めておくことが、出来なくなり、徐々に岩の重みで削板の足が、地面にめり込んでいく。

（こんな馬鹿な！

俺は岩なんか押し潰されて死ぬのか？
）

岩の重みを右手一本で支えながら、削板は心の中で弱音を吐く

(俺はここで終わるのか……)

力尽き地面に膝がつきそうになった削板の脳裏にかつて戦った最強の敵の言葉が かけめぐる

『ここは素直に倒れておけ。根性如きでどうにかなる問題じゃない』

その言葉を思い出した瞬間

力尽き倒れそうになった体に力がよみがえる

「思い出したぜ……ここで倒れたら、あの時と何も変わらねえじゃねえかあ!!」

それだとあの時から 何も成長してない事になるじゃねえかあ。

俺は誓ったはずだ。もっと強くなると

あの時見せれなかった本物の根性ってやつを、今見せてやるぜ!

折れてても使えるんだあゝ!

すごいパンチ」

そう言つて削板は、折れてる左腕で何の躊躇もせず、全力のパンチを岩に叩きつけた。

「ぐっ！」

痛みが全身を走るが、それでも削板は力を込めるのをやめない、その間に削板は無意識で己の体を纏っているオーラが、左拳一点に集まってい

「根性〜！」

左拳にオーラを纏つた削板の左パンチは、一つのかげらを残さず岩を消滅させた。

「はあ…はあ俺の根性は無限のエネルギーだ。
岩如きには止められねえぜ」

岩を消滅させた

削板はよろよろ歩きながら鬼川のいる元へと向かっていく。

歩きながら削板は先程の凄まじい破壊力を生み出した一撃を思い出す

そして彼は一つの戦術を閃いた。

「やっと攻略法が思いついたぜ」

笑みを浮かべながら

削板は満身創痍の体に鞭打ち、決着をつけるため、鬼川の元に急ぐのだった。

その目は自身に満ち溢れていた。

「岩が無くなったかどうかという事だ？」

ちっ仕方ない、飛び道具で仕留めようとしたのが失敗かかくなる上は、俺のこの手で首を切り落としてやる

これなら不死身の化け物もジエンドだ」

鬼川が体を石のかげらにして移動しようとした時、目の前に 全身血だらけの削板軍覇が現れた。

「ほう？そっちから来てくれるとは好都合だ。

今からお前の首を切り落とすに移動しようと、思っていたところだ」

そう言いながら、鬼川は石の甲冑を作り出して自分はその後ろに隠れる

しかしそれを削板は 満面の笑みで見送る

それを鬼川は不思議に思ったが、気でも狂ったと思い、気にせず、甲冑たちを操作する

「いけ！ナンバーセブンの首を切り落とせ！」

甲冑たちはその合図とともに背中に吊ってる石斧を取り出し 削板に襲いかかった

しかし削板はゆっくり、歩いて近づいていき。

全身のオーラを、今度は右拳に集中させる。

そして大きく振りかぶり、その光る右拳を石の甲冑に叩き込む。

ズガン

次の瞬間削板の右拳から赤青黄色のカラフルな爆煙がほとばしり、

跡形もなく石の甲冑を消し去った

「ふう〜砕けて、欠片になって襲ってくるのなら、欠片を残さないように、消滅させりゃ再生も分裂攻撃もない。」

漲る俺の根性という エネルギーを拳に一点集中させて叩き込む

これぞ俺の新必殺技 名付けて真すごいパンチ」

削板は拳を握り締めながら叫ぶ。そこに 石の甲冑の最後の一体が斧を振りかぶって切りつけてくる。それを削板は避け、今度は左手で

「真すごいパンチ」

と叫び、石の甲冑に拳を叩き込む

またも甲冑は跡形もなく消えてしまった

「お前左手折れてたんじゃなかったのか？」

削板の圧倒的強さを見ながら、鬼川は呆れながら言う

そんな鬼川の皮肉を 削板は笑い飛ばす

「確かに痛いけど、そんなもん俺の根性で 痛みなんざふつとんだぜ」

削板は腕を組みながら、大きな声で豪快に笑う

それを見ながら、鬼川は、己と石の甲冑を解き、再構成を行う

そして石の甲冑を

大剣に変え、その大剣を両手で持ち、上段に構える

すると構えている鬼川の体から突然毛が生えてきて、あっという間に鬼川は、巨大な熊に変身した

「うお！」

それを見た削板は驚く

「驚いたか。」

俺もお前と同じ原石なのだ生まれながらに、獣化能力を持つな。石使いの能力は、学園都市の能力開発で後から得た能力だ

では行くぞ削板軍覇、この大剣は俺の能力で一時的にダイヤモンド並みの硬度を 与えてる
それをこの熊の怪力で振るったらどうなるか、想像ぐらいは つく
だろっ。

首だけじゃなく体を頭から股間まで真っ二つにしてやる。
ああ安心しろ、獣化したら腹が減るから その醜い死体は人目につ
かない前に、骨も残さず喰ってやるからな安心して逝けっ!!」

そう言っただけで会話を途中でやめた鬼川は大上段に大剣を構えたまま、
突進してくる

それを削板は見ながら、右拳に体を纏うオーラを一点集中させる。

強く右拳を握りしめ 構えもせず、鬼川をただ見つめる

「ドリヤアア！」

大剣の届く間合いに入った瞬間、鬼川が
その熊の剛力を最大限に発揮し大剣を叩きつけてくる、斬るのでは
なく、重さで削板を叩き潰そうというつもりのようにだ

その剛剣を削板は、 光る右拳で迎える

「ダイヤモンドだろうが例えオリハルコンでも消しとばーす

くらえ究極の根性の一撃、真すごいパンチ!!!」

削板が光る右拳を、根性込めた叫びを上げながら、頭上から叩きつけてくる大剣 にぶち込む

有言実行

削板の真すごいパンチが激突した瞬間赤青黄色の爆煙が削板の右拳から溢れ

大剣を跡形もなく消し去る

まさに究極の破壊の一撃だ。

「馬鹿な!」

大剣が消し飛ばされたのを見た、鬼川は慌てて両手で殴ろうとするが、その時には削板は鬼川の懐に潜り込んでいた

そのまま、大剣を消しとばした勢いのまま、鬼川の腹にボディストリートを叩き込む。

ズドン

「ぐはっ」

その一撃で鬼川は、意識がとぶが、それに気づかない削板は「すごいアツパー！」

と根性を込めた叫びを上げて、折れた左腕でアツパーを鬼川の顎にぶち込み、上空にかち上げる。

十メートルほどたかだかと打ち上げられた、鬼川はやがて落下し、地面に背中から叩きつけられ、あたりに埃と土砂を撒き散らした。

大の字に倒れピクリとも動かない鬼川を見ながら削板は

「見たかこれが本物の根性の力だ！」

根性を込めた叫びを 上げその叫びは辺りの大気を震わせた。

第四話、第二章（漲る根性、不死身の男それがナンバーセブン）（後書き）

いかがだったたでしょうか？

では感想など待っております

最後まで読んで頂きありがとうございました

次回は影の薄い原谷君にがんばって貰う予定です？

第四話第三章 (煌めく凶刃危うし原谷矢文と白井黒子その1) (前書き)

今晚は最新話やっと 投稿です

予告通り原谷のバトルです。

第四話第三章 (煌めく凶刃危うし原谷矢文と白井黒子その1)

「ここが地下の入り口ですわね」

黒子は先ほど尋問した不良から聞いた通りに進み地下への階段を見つけていた

「全く警備員の施設で、人身売買など呆れてものも言えませんわ
さらわれた人たちを助けたら、こんな施設ぶっ壊してやりますの

黒子は物騒な事を言いながら、地下への階段を下りていった

「はあ……はあ」

原谷は左腕から血を流しながら、荒い呼吸をした

床にしたたる血がその傷が深手であることを証明する

「どうしたもう終わりか？
弱いなお前」

天狗面の男が血に濡れた半分欠けた刀で指さして言う

「くそ」

原谷は悔しそうに、 相手を見た

天狗面の力は原谷の想像以上だった

視界の狭いお面をつけているのに、原谷の攻撃の予備動作から狙いを予測し、 原谷の攻撃はかすりもしない。

逆に相手の攻撃は、 欠けた刀でも衰える事はなく、 ついに原谷は左腕に一太刀浴びてしまったのだ

（左腕は使えないな）

やられ方は違えど、 削板と同じく原谷も、 左腕を潰されてしまったのだ

「さて、そろそろとどめを刺すとするか その後はあの女を見つけ
て殺す

まあ先に死ぬお前には関係ないがな」

天狗面の男は刀を振りながら、 原谷に近づいてくる

あの女とは原谷の警告に従いこの場を離れた、 御坂妹の事である。

原谷はゆっくりと自分に近づいてくる、 天狗面の男を見た

(チクシヨウ。

とんでもない奴だぜ だが、 負けたわけじゃない)

原谷は諦めてはいなかった。

何故なら彼には切り札があったからだ

だから彼は表面上は怯えたふりを装い心の中では、 冷静に切り札を

使うタイミングをはかっていた

(まだだもつと近づいてこい)

コツコツと天狗面の男はどんどん近づいてくる、原谷はポケットに入れていた切り札をつかむ

(チャンスは一度きりだ。よく見極めるんだ)

原谷は目をしっかりと見開き、天狗面の男を見る

「怖いな。そんなに睨むなよ心配しなくても苦しまないように送ってやるぞ」

歩みをとめず、天狗面の男がそう言う。

コツコツ

そしてついに、天狗面の男が自分の刀が届く距離にはいった

(今だ！)

原谷はまるでスイッチが切り替わったように、突然動き出す

ドンっと

天高く空に飛び上がる

念動力の衝撃波を足元に放ちその推進力で飛び上がったのだ

そして念動力の衝撃波で天狗面の男を攻撃する

ドンドンドン

原谷の攻撃で床に穴があき、砕け破片が舞い散るが、信じられない事に天狗面の男には一発もあたらなかった

「馬鹿な奴だな。空に逃げるとは、浮く事は出来ても自由には飛び回れねえだろ」

天狗面の男は上空を 見ながら、刀を下段に構える。

空中から落ちてきたところを斬るつもりのようなようだ。

天狗面の言とおおり、原谷はゆっくりと落下してくる。

「動く必要はないな このまま切り上げたら真っ二つだ」

天狗面は刀を構えながら、楽しそうに言う。

落下しながら、原谷はぎゅっと目を瞑る

「いい覚悟だ」

原谷が目を瞑るのを見て、天狗面が面の下でほくそ笑みとどめを刺すべく刀を振り上げようとスツと持ち上げる

その時目を瞑りながら原谷がニヤリと笑った

「ふっ死ぬ前に笑うとは、その笑い恐怖に引きつる顔にしてくれるわ」

ピッ

上に漂う獲物を仕留めようとした天狗面はその小さな電子音を聞いた

(何の音だ)

天狗面の男が謎の電子音を聞いてからすぐ

ドオオオン、ドオオオンという鼓膜を痺れさせるような破裂音が連続して 響き、その後眩い光が辺りを照らした

「はあはあ上手くいったな」

能力で空中からゆっくり降りた原谷が、 片膝を着きながら言った

スタン グレネード

那由他からもらったそれを原谷はここで使ったのだ。

空中からの攻撃は、 地面に放っておいた 時限式のスタン グレネードに気づかせないようにするための罠だったのだ

敵は弱っていた原谷を侮っていたので、 まんまと引っかかってく

れたのだ。

「さてこのまま逃げてもいいんだが、後ろから追撃されてもかなわないんで、ぶっ倒させて貰うぜ」

そう言った原谷は

目を開き、困惑して よたつきながら、目を抑えている、天狗面の男目掛けて
念動力による衝撃波を放った

「ぐっ……一体なにが」

いまだ天狗面を付けている男が見えない 目で辺りを見まわす

（やはり見えんな……それに耳もよく聞こえない……そうか スタングレネードか用意のいい事……ん殺気！）

思考中に殺気を感じた天狗面の男は急いで顔面をガードし頭部を守る

すぐにドーンと轟音が鳴り響き、衝撃波が天狗面の男を襲った

「ぐわあぁ」

天狗面の男は無様な声を上げて、ガツシヤンと窓を突き破り下に落ちていった。

「よしこれで大丈夫だろ。」

ううやつと聴力が戻ってきたせ、奴に気づかれないように、
ため目だけ守って聴力は犠牲にしたからな。　　する

でもそうしなきゃ勝てなかったから仕方ないか
さて急いで那由ちゃんたちに合流するか」

原谷はそう言った後、天狗面の落ちていった窓をちらっと見た後

「成仏しろよ」と一言残して走り去った。

「まさかたった一人で倒すとは御坂は驚きながら言います」

原谷が去った後一人の少女がひょっこりと現れた。

御坂妹である。

実は御坂妹は、逃げるように言われた時、逃げ出したと見せかけて密かに舞い戻り隠れていたのである。

銃弾をも避ける相手に真つ向から挑んでも勝ち目がないと、判断した御坂妹、苦肉の策である。原谷との戦いに集中し隙を見せた瞬間攻撃する予定だったが、原谷の秘策スタングレネードが炸裂し、結局原谷が倒してしまったので、出番はなかった。

「敵の戦線離脱を確認。

多少時間は食いましたが、御坂は予定どおり地下にいる、捕らわれた少女たちを助けに行きますと御坂は言います。

お姉様はいまだ行方がわかりませんが、御坂も無事なので大丈夫でしょうと御坂はお姉様を信じていますという訳なので先に行ってますお姉様」

御坂妹はそう言った後、ミサカネットワークで掴んだ地下の監禁所目掛けて走って行くのだった。

原谷と御坂妹が地下に向かっていている頃

白井黒子はすでに地下に到着していた。

すでに見張りを沈黙させている黒子は

監禁されている少女たちを出すための鍵を探している。

「ありましたの」

黒子はぶっ倒した見張りの懐から鍵を見つけた

「今開けますの」

黒子は鍵で檻の錠を外そうと檻に向かう

どつやら皆意識がないようだ

（気絶いえそれにしては長すぎますの

薬か何かで眠らされたといったところでしょうか。

仕方ありません。檻から出してちよつとずつテレポートで脱出させるしか）

キーン

黒子が檻に向かっていている時、突然甲高い音が鳴り響いた。

その音が聞こえた瞬間黒子は思わず頭を片手で抑えながら、
両膝を地面につける

「これは！」

散々苦しめられたこの音の正体をすぐに看破する

「キャパシテイダウン」

「そうだ」

黒子の呟きに答えるように、一人の男が足音をほとんどたてずに現れた

警備員の出勤時の服装に、日本刀を腰にぶら下げている、大人の男である

黒子はその雰囲気と立ち姿から、相手がただ者ではないのを悟った。

「あなたが瀧河大我ですか？」

黒子は痛む頭を抑えながら、小さな声で言う。

警備員の格好をした 男は黒子の質問を聞いてからしばらく黙る。
それから黒子の方に歩き出し、歩きながら話します

「違う俺は師匠じゃない。俺の名は我孫子常寿（あびこつねひさ）
年は23歳警備員で 瀧河大我の一番弟子でもある」

我孫子はゆっくりと歩きながら言う。

「あら随分とあっさり名を教えますのね 名を名乗った以上、
もう言い逃れはできないですよ。」

それに仲間がいるの
によく平然とキャパシテイダウンがつかえますわね」

頭痛に耐えながら、 黒子は立ち上がって言う

苦しそうな様子で喋る黒子の質問に、 我孫子は的確に答える

「俺の部下たちは、戦闘力はさっぱりだが、それなりに優秀でお前にやられながらも、メールで危機を知らせて来たのさ。それで俺が返信しても返事が返ってこなかったの、やられたと判断しキャパシティダウンを使ったと言っわけさ。」

まあこいつらは無能力だから、キャパシティダウンは関係ないけどな。

他に何か聞きたいことは」

我孫子は笑いながら、次の質問をうながす

「うっ……随分サービスが宜しいですね。」

ではお言葉に甘えて、何故こんな事をしますの、学園都市の治安を守るのが警備員の仕事ではないのですの？」

黒子が頭を抑え、我孫子を睨みつけて言う

我孫子はその黒子の睨みを、気にせず言う

「お嬢ちゃんは正義のために風紀委員に入ったみたいだな」

「当たり前ですの」

黒子はきっぱり断言する

「そうか。だが俺は違う俺は自分が修行末に手に入れた力を思う存分ふるいたかった。

それが理由だ、お嬢ちゃんには解らないだろうが、戦つてのはすげえ楽しいんだよ。

下手に女抱くよりずっとな」

「なっ」

黒子はあまりのとんでも発言に二の句が続かなかった

我孫子の理由は黒子の予想外にして、最悪のものだったからだ。

「これで満足したかい」

黒子の驚いた様子を見ながら、我孫子はニヤニヤ笑いながら言つ。

「ええあなたは最低　ゲス野郎だと、よくわかりましたの。」

風紀委員としてあなたを拘束いたしますの」

黒子は強い意志を込めて断言する

「ふっふっ……そいつは面白い。」

可哀想にキャパシティダウンで頭がいかれちゃったみたいだな。

能力しか戦う術を知らないお嬢様が能力なしでどう戦うんだ？」

「こっやってですの」

黒子は那由他に貰った腕輪で催涙ガスを発射しようと思腕を前に突き出し狙いをつける

するん

ドン

と言う音が響いたかと思うと同時に目の前に我孫子が現れた

「そんなまさかテレポート？」

「ハハハツ、違う俺はそんな能力持ってない。
俺は剣術を習っている流派は示現流、この流派の達人は一瞬で七、
八メートルの間合いを詰める事が出来るのだ。
といつても、お嬢様が剣術など知らんわな。」

まあ長い説明になったが、これで納得出来ただろう
俺の名と共に冥土の土産にするがいい

チエストーオー!!!」

そう言つて我孫子は 白井黒子に容赦ない 一太刀を浴びせる、
それを白井はまともを受け後方に吹っ飛ばされてしまうのだった。

「お姉様……」

黒子が小さな声で、 敬愛する先輩の名を呼んだがそれは黒子以外
には聞こえなかった。

「黒子？」

満身創痍ながら、何とか建物内に入っていた美琴は、黒子の悲鳴が
聞こえた感じがして、辺りを見まわした。

「気のせいよね。」

黒子はまだ帰ってきてないけど、ここにいるってわけでもないし、気にはなるけど今は捕らわれたシスターズを助けるために、妹と合流するのが先ね。

何してるかは知らないけど、あんまり危ない事に首突っ込むんじゃないわよ……黒子」

そう言っつて美琴は、自分の事を棚に上げて後輩を心配した後、御坂妹を探すために、歩きだした。

第四話第三章 (煌めく凶刃危うし原谷矢文と白井黒子その1) (後書き)

いかがだったでしょうか。

ではご意見 ご感想

ポイント お気に入り登録何でも待ってます。

ありがとうございます。

それにしても暑いなあ読者の皆様体に気をつけてくださいね

第四話第四章 (満身創痍、非情な決断) (前書き)

こんにちは、最新話やっと投稿です。

今回は黒子のキャラがちょっと壊れているので、黒子ファンの方はお気をつけ下さい。？

第四話第四章（満身創痍、非情な決断）

（生きておりますの？）

壁に叩きつけられた黒子はよろよろと、立ち上がるも、自分が生きていたのが信じられなかった。

避けるはおろか防御もできず、まともに斬撃を浴びたのだ。

まして相手は示現流体が真つ二つになっただけでもおかしくはない。

だが黒子は腹部に激痛はあれども、鋭利な斬り口もなければ、血も出ていなかった。

だがこの結果は黒子の運が良いのでも、敵が間抜けだったわけでもない

「ほう感心感心。

刃引きの刀とはいえ俺の斬撃を受けて気絶しないと、まあ気絶されちゃ面白くないんだがな」

ニヤニヤしながら、刀を肩に担いで我孫子が近づいて来た。

黒子が無事だったのは純粹な悪意ゆえだった。

黒子にある程度近づいた我孫子は、歩みを止めた。

止めた位置は自分の刀は届くが、黒子が殴っても届かない距離、絶妙な間合いである。

歩みを止めた我孫子は、何とか立っている黒子を見る。

「おうおう痛々しいね。」

「油汗滲ませちゃって肋骨がへし折れたか？」

我孫子が満身創痍の黒子を見ながら言う

「さあどうでしょうか？」

黒子が腹を抑えながら、不敵な笑みを浮かべる。

そんな黒子のやせ我慢を我孫子は、褒める

「隠しても無駄だ。手応えでわかる

でもこの状況で泣いたり悲鳴を上げないとは、やるじゃねえか」

「それはどうも。

でもあなたに言われても嫌味にしか聞こえせんわね

」

黒子はそう言いながら、腕輪をつけている方の手を天に向けて伸ばす。

「何だ？降参なら両手を上げるんだぞ」

その様子を見た我孫子が馬鹿にしながら言う、セリフには余裕が見えた。

その様子からもはや黒子は、自分を脅かす敵とは思っていないよ
うだ。

だがそんな我孫子の余裕いや油断を黒子がつく

「降参？ おめでたい方ですわね

たかが一撃入れたぐらいでもう勝ったつもりですよ」

黒子がキツとした、目つきで我孫子を睨む

まだまだこれから

ですの。という黒子の思いがその目から、伝わってくる。

「……言いたい事はそれだけか？

そつだ忘れてたぜ、もう一つ冥土の土産だ。

俺にこの刃引きの刀で殴り殺される方が いいか……それとも」

我孫子はそう言つて話を区切つた後、肩に担いでいた刀を肩から下ろし、胸の前に持つてくる。

それから「ヤツ」と一声上げて片手突きに空を突く。

突き終わった我孫子は、再び刀を肩に戻して担ぐ。

「今の突きで苦しまずに逝く方がいいかだ。

俺としちゃあ突きで逝く方がいいと思うがな、痛みもそんなにな
いし、腹を突きゃあ、顔に傷がつかないから、死体も綺麗なままだ。

まあぐちゃぐちゃに 頭つぶされた死体つてのも見せしめには、
ちようどいいいで そつちでも構わねえがな」

我孫子は刀を、持っていない方の手を顎にあて、覗き込むよう
に黒子を見ながら言う。

「もう宜しいですか？」

黒子が片手を上にのぼしながら、心底馬鹿にしたような、感
じで言う。

「何？」

その言い方が神経に触ったのだろうか。

我孫子が少しトーンが落ちた低い声で 答える。

「ですから戯言はもう宜しいのですかと 言ったのです。

先ほども言いましたが、一撃入れただけで勝ったつもりとは、
本当におめでたい方です事。

…… 黒子を甘く見ないで頂きたいですわね！」

黒子は最後まで強い口調で言う、まだ負けてないとアピールして
いるようだ。

一方我孫子はそんな黒子の虚勢を見て鼻で笑う。

「はっ、甘く見ないでと言われてもな。

そんなぼろぼろの体で、何が出来るんだ？」

我孫子はそう言った後あくびを掻く

退屈だと言わんばかりだ。

そんな我孫子の様子を見ても黒子は怒る事なく静かに言う

「わかりましたの。では論より証拠。まずはあなたが絶対の自信を持っている キャパシティダウンを破って差し上げますの。」

この上へのばした手は、降参ではなく……こうするためですの」

黒子はそう言いながら上にのばした腕に付けてる腕輪を、腹を抑えているもう片方の手で触れる

正確には腕輪についているボタンを

ポチツと黒子はそのボタンを、押すと辺りに不思議な音が鳴り響いた。

「何だ？」

我孫子はその妙な音を不思議に思った間に、いつの間にか黒子が消えていた。

「消えただと」

慌てて我孫子が辺りを見回す

「あなた方がキャパシティダウンを使ってくるのはわかっています」

すると背後から声が聞こえてくる。

我孫子がまさかと思い後ろを振り向くと、そこには黒子が立っていた。

「相手の手の内がわかっているのに、何の対策も打ってこないと思いましたが？」
それともキャパシティダウンが無敵だとも思っていたのですの？」

黒子は振り向いた我孫子に不敵に笑いながら言う

「無効化だと？」

我孫子が驚きながら言う。そんな馬鹿なとその顔が言っている。

「ええそうですの！」

そう言いながら、黒子が踏み込む、ダンッと床を踏む音が鳴り、そのまま腰を落とすにつつ ボディストレートを叩き込む。

「ぐっ」

そのボディストレートを食らった我孫子が一瞬揺らぎ、苦痛に呻くがすぐに何事もなかったように、笑う。

「ふふっ……こんなものか。所詮は子供のパンチだな」

我孫子が馬鹿にしたような口調で言う

しかし黒子は我孫子のそんな様子を全く気にせずに言う

「効かないのはわかってましたわ。」

でもあなたをどうしても一発殴りたかったから、そうしたままですの」

そう言いながら黒子は、テレポートで腕に付けていた腕輪を手元に転移させる。

「こつちが本命ですよ」

黒子はそう言うと、腕輪にあるさつき押したのとは違う、ボタンを押す。

ボタンを押した腕輪を黒子はテレポートで再び転移させる。

「本命だと……」

一体何をした！」

黒子の行動の意味がわからない我孫子が聞く。

「はあ〜」

黒子はそれにため息を一つ吐いてから答える。

「教えて恐怖に怯えてもらうのは、趣味ではないのですが、いいですよ、冥土の土産にお教えしますの。」

実はあの腕輪には、四つの機能がありますの。

一つはお見せしましたキャパシティダウンの無効化、それと催涙ガスを発射する機能と腕輪型スタンガンですの。

そして最後の機能が……」

黒子は一旦そこで言葉をきる

「自爆機能ですの」と黒子が告げる

それを聞いた我孫子は体温が数度下がった

その後恐怖に怯えながら恐る恐る言う

「まさか……消えた腕輪は……」

「ええ転移させましたの……あなたの体内に」

黒子が怯える我孫子を見ながら言う

「ついでに言いますと自爆可能な状態にしていますの。後は私の一声で爆発しますの」

黒子が言う。それを聞いた我孫子は慌てて黒子の両肩を掴む、そして恥も外聞もなくわめく

「待てここにいる 子供たちは返す。」

なんなら師匠に言って金を払ってもいい。

だから頼む体内の爆弾を取り除いてくれ！」

とうとう黒子に両膝ついてすがりついて 哀願する。

だが黒子はそれを見下ろしながら、左手を我孫子の肩に置く。

「待て待ってくれ、金が嫌なら男か？ だったら美形からアレのデカいやつから、色んなタイプを用意できるぞ」

我孫子が早口で言うが、黒子は無言で聞いている。

我孫子の命乞いは続く。

「男が駄目なら、そうか女か！…… うっかりしてたぜ。

わかった美少女から何でも用意できるぜ、何ならそこにいる奴どれか一つでも」

と嫌らしい笑みを浮かべながら言う

「一つ聞かせて下さいな」

黒子がやっとならして口を開く

「あなたは今まで、そうやって命乞いした人間を何人殺してきましたの」

黒子が有無を言わさぬ口調で聞いてくる

その迫力におされ、我孫子は正直に答える。

「10人は殺した。でも半分は警備員の仕事でだ」

「では残りの半分は何ですの」

黒子が冷たい声で聞いてくる。

「……試し斬りだ、修行のためだ。 武道には殺戮の果てにしか到達できない境地があるんだ。」

それに俺が殺したのはレベル0とチャイルドエラーだ。

死んだところで、代わりはいくらでもやってくる。能力者になりたくて来るやつは毎年くるし、子を捨てる親だって後を絶たない、
だか」

「……もういいですの」

黒子が一切の感情を消した声で言って話を中断させる。

小さな声なのに、我孫子には、はっきり聞こえ我孫子は思わず喋るのをやめる

「大分喋りましたわね。

これで思い残す事もないですわね。
ではお別れです。

起爆開始」

「待つ……」

黒子はそう言うと、我孫子がまだ言うのを無視し我孫子を転移させる

数秒後。

上の階で凄まじい爆音が鳴り響く

しばらくすると音はやんで、静寂が訪れる。

「終わりましたわね。」

やりすぎた気がいたしますが何とか正当防衛でしょう」「

黒子はしばらく地下室の天井を見ていたが、すぐに鍵を懐から取り出し、眠らされている少女たちの、檻に向かうのだった。

第四話第四章 (満身創痍、非情な決断) (後書き)

いかがだったでしょうか。

まあ命懸けの死闘なのでやむを得ないと思って頂けたら幸いです。
ではご意見ご感想何でも待ってます。

ありがとうございます

第五話 第一章（学の死闘 助っ人は健児）（前書き）

遅くなりましたが、最新話投稿です

今回は久しぶりに主人公パートです。

第五話 第一章（学の死闘 助っ人は健児）

「ありがとな場所も変えてくれて、おまけに初春と佐天を近くの風紀委員支部に、預けるのも待ってくれて、助かったぜ」

学は対峙してる、一人の男に礼を言う

「気にするな。」

俺が倒したいのは、大原を倒したお前だけだからな。

それ以外に興味はない。

それにこつちも、倉橋の奴に大原を安全な場所まで運ばせてもらえたしな。後はお前を倒したら、

依頼完了ってわけだ」

559

好戦的な笑みを浮かべ、胸の前で腕を組みながら、敵である少年^{げかいしん}外界塵期が言う

「さうてそう簡単に行くかな。ここなら周りを気にせず思いつきり出来るから、さっきみたいにはいかないぜ」

と学が不敵に笑う

二人が現在いるのは第七学区内にある、とある空き地だ。深夜という時間なので、当然人影はない。

場所替えしたのは、火事によって、野次馬たちや風紀委員などが、やって来て戦いの邪魔になったからだ。

そこで学が提案し、外界が了解したのだ。

学は佐天と初春を近くの風紀委員支部に預けに行き、外界は学が付いていく前に、倉橋に大原を安全な場所まで運ぶように頼んでから、学の後を付いて行った。

初春と佐天を預け終えた二人は、誰もいないこの場所にて、再び死闘の幕を開けようとしていた。

お互いに睨み合い、しばし時が流れる。

夜風が吹き二人の肌を撫でる。

「どうした？ さっきまでの威勢はどこにいった。

睨んでいても戦いには勝てんぞ」

腕組みを解き、ほれほれと外界が、手招きして誘う。

「ぬかせ！ すぐに大技ブチ込んで、終わりにしてやる」

と学が言いながら、手を動かし、ファックユーのジェスチャーを取る。

お互いに相手を挑発して、仕掛けさせようとしているみたいだ。

「ほう。俺の炎から命からがら、逃げる事しか、出来なかった

奴が、言ってるくれるな。

だったらその大技って奴を俺に見せてみるやー!!」

そう言っただけ

外界が、足元で爆発を起こして空中に、飛び上がった。

地面がはぜ、砂ぼこりが舞上がる。

学はとっさに、片手で目の周りを覆い、砂ぼこりから目を守る。

そこに空中で火の玉を作った外界が、次々と投げつけてくる。

「クソが!!」

学は能力を使って、血で二振りの刀を作ると、降りそそぐ、火の玉を刀で、弾きときには切り払い、または避けて防ぎきる。

「はあはあ……」

わずか一、二分の攻防だったが、学の頬を汗が流れ、息も乱すほど彼は疲労してしまった。

折れている右腕を使ったので、激痛もある。

（まずいな。

疲労が限界に来てやがる、このままじゃ負ける。
仕方ないーか八かだまあ毎回そうなんだが）

学は覚悟を決めると、能力を全力で使うべく、集中するのだっ
た。

「何かするつもりだな」

足元から炎を放射し続け空に浮きながら、外界は学の様子をじ
つくり観察する。学からただならぬ、気配を感じたので、
様子見に入ったのだ。

「集中している、ようだな。」

さつき大技をぶちかますとか言ってたが、はったりじゃなかつ
たのか。

面白れー、ならその大技とやら、見せて貰おうじゃねえか」

外界はそう決めると得意な地上戦で、迎え討つべく、炎の噴射を
止めて、地面に降りていくのだった

「ん？ 降りてきた」

演算に集中していた 学は空中から降りてくる外界を訝しげに見
た

（どういつつもりだ 空中ならこっちの攻撃は殆ど届かないのに、
何で地上に、まあどうでもいいか、それより時間がいつも以上

にかかってやがる。

重傷の今の状態でこいつを使うのは無理があったか。

だがこれしか奴に、効く攻撃はない」

学はボロボロの体に命令して自身の、能力の最大出力を引き出す

「おおおー！」

学が気合いの声を上げると同時に学の体から血が噴き出し、その血は空中で巨大な球を作り、その球に徐々に亀裂が入り、亀裂の中から赤色の竜が、キシヤアア！！と凶声を上げながら、飛び出した。

「ほう 血で竜を作ったのか。

面白いなそれ」

地面に降り立った、外界がニヤニヤ笑いながら、学の前に漂う竜を見る

「お気に召して頂いて何よりだ。

ただこいつは、普段の状態でも制御が難しいんだ。

今の状態の俺が使って制御出来るかわからないんで、死んでも恨むなよ」

学は外界を見て、不敵に笑う

「そいつは楽しみだ。 わざわざ待ったかいがあったぜ。では
ご自慢の切り札楽しませてもらうか」

そう言いながら、外界は舌なめずりして、炎を両腕に纏う。

「ああたつぷり楽しみな、代金は命だけだな」

学は左手を前方に伸ばして、竜に標的を教える。

「では、お言葉に
甘えさせてもらおう。

ただし俺はケチだから、代金は踏み倒させて貰う」

外界はレスラーのように、両手を大きく横に広げて、構える
両腕に纏っている、炎が赤々と燃えている。

さあこいと言わんばかりの堂々とした構えだ。

「踏み倒させねえよ……喰らい尽くせ！」 学が竜に命じる
竜は再び凶声を上げた後、外界に襲いかかった。

「ふははは。

なら意地でも踏み倒させてもらうぞ」

そう笑いながら、外界は自分に襲いかかってきた竜を両手で受け止めるのだった。

「ぐぐっ」

（俺に両手で受け止めさせるとはな）

外界は学の放った竜を掴みながら、喜びに満たされていた。

（だが少しパワーが足りないな）

外界は、両手で竜を掴んだまま、そのまま一步一步前進しだした。

両手の炎もさらに燃え上がる

「嘘だろ。押し戻して来やがる」

学は外界の底知れぬ力を見せつけられ、恐怖した。

「畜生これが、俺に出来る最後の攻撃だ。
何が何でもこれで決める」

学が能力を使い、血の竜の頭を増やして外界の腕に噛みつかせる。

噛みつかれた腕から血が流れ、竜を掴んでいる力が弱まる。

「今だ」

学は竜にさらに力を注ぎ押し返す。

「うお！」

竜におされ、外界が呻き声を上げる。

「とどめだ」

学はそのまま竜で、外界を空高く持ち上げた後、地面に叩きつけた。

ドーンと辺りに轟音が轟いた。

地面に大きなクレーターが出来上がり、そこに外界が大の字に倒れている。

「はあはあ…… 終わったな」

外界が動かないのを見て、学は勝利を 実感した。

「探したぞ、藤田」

背後から大声が聞こえたので、振り返るとそこには、息を荒げてこつちを睨んでいる、長田健二がいた

「確かクラスメートの長田健二だったっけ」

学はクラスメートになったばかりの男のフルネームを正確に言

う

「そうだ。 ところでそこに倒れている奴は誰だ」

長田は穴底に倒れている、外界を指差して言う

「初春の寮に火を放ったパイロキネシストだよ」

それを聞いて、健二が驚きの声を上げる

「何だと！ 寮に火を放つとは、とんでもない奴だ。早速警備員か風紀委員に連絡を」

健二は携帯を出して、連絡しようとする

「ちよつと待て、連絡するのは俺がここから離れてからにしてくれ

それより何で、お前がここにいるんだ？」

突然現れたクラスメートに、学は質問する

「ああその事が、

ちよつとしたトラブルで、警備員に追っかけられてる時に、初春の寮から火の手が上がるのが見えてな。

警備員のした後慌てて駆けつけたんだ。そこで聞き込みしたら、お前が初春たちを風紀委員の支部に連れて行ったとわかったんでその支部に行ったんだ」

「警備員のしたって、大丈夫かよそんな事して」

健二のとんでも発言に学は、説明を遮り突っ込んでしまった

「まあ緊急事態だったから、仕方ないさ　それにあの警備員は俺に向かって発砲してきたから、おあいこだ」

健二は学の心配に対し平気な様子で答える

(学生一人捕まえるのに、発砲ってどんな警備員だよ)

学は心の中で思うが、話が脱線するので、やめといた

「まあ警備員のした事はそれでいいとして、支部に行った後どうしたんだ？」

と学が続きをつながす。

「支部に行った後ね。

俺が支部に行ったら、初春が目を覚ましていてな。それで事情を聞いたんだ」

「そうか初春は目覚めたのか、佐天の方は」

「佐天は、俺が支部を後にするときは、まだ目覚めてなかったな」

「そうか。でも初春が目覚めたんだから、佐天も大丈夫だろう」

学は二人の無事を知って安心した。

「それから、初春が藤田さんは、どこですかと聞いてきてな。そしたら支部にいた風紀委員が剣呑な雰囲気、出て行ったのを見たって言っつてな。

その風紀委員が、聴覚がコウモリ並みの能力者で、お前たちの会話をバッチリ聞いていたんだ。

それを聞いた初春が、俺に藤田さんを助けてあげて下さいって頼まれて、この場所に駆けつけたって訳だ」

健二がにっこりと笑って言う。

「そうか。 初春には大きなかりが出来ちまったな」

学はここにいない初春に感謝した

学はまだ知らないが後日初春から、自分を変態レイプ魔と誤解している、健二に 心を込めて一から懇切丁寧に初春が説明して、その誤解を解いてもらったのを知り、 愕然とするが、今の学は知るはずもなかった

(ちなみに佐天は、親友が極めて疑り深い健二相手に、目を潤ませながら説得しているのを、寝ながら見て、すぐさま狸寝入りを決めたらしい)

「長田もありがとな」

学がにっこり笑って言う。

「ま、気にするな 初春に頼まれたから来ただけだ」

健二は学に素直に礼を言われたので、照れてながら、ぶっきらぼうに答えた。

「まあそれでも、助かったぜ。 じゃあ俺はそろそろ行くわ」

学は健二との、話しを切り上げて、手を振って別れようとする

「待て！ 行ってくてどこにだ？」

健二が後ろから、声をかけてくる。

「知り合いに人の傷を治せる、能力者がいるんだよ。そいつに治してもらいにいって来る」

学は健二を見ないでそう答えた。

「そうかそんな便利 な能力者がいるんだな。わかった怪我人は、早く治療に専念しろ、あの穴底のやつは風紀委員か警備員呼んで逮捕してもらおう」

「すまねえな」

学が健二に詫びる

「いや謝るのは俺の方だ。色々とすまなかつたな」

健二が学の背中に頭を下げる

「うん？ 何でお前が謝るんだ」

学が不思議になつて聞く

「謝りたかつたんだ。

色々お前の事を誤解してたその詫びだ」

「そうか。」

まあいいよ助けに来てくれたから、気にしない、チャラだ」

「そうか、ありがとう。

後は任せてくれ」

健二が胸を叩いて、豪語する

「頼むわ長田」

そう言つて手を振つて学は、知り合いの治癒能力者のもとに、向かうのだった。

「一体どうなってるんだ」

学と別れた後、穴から外界を引きずり出そうと穴底を見た健二はさつき確認した大の字の外界が、居なくなっていたので唾

然としていた。

「まさかこんな大穴あける程のスピードで地面に叩きつけられたのに意識があつたのか。」

くそ会話してる、間にまんまと逃げられちゃった、藤田に何て言えばいいんだ」

敵に逃げられたのを、悟り健二は頭を抱えるのだった。

「やれやれ参ったぜ、まさかあそこで援軍がくるとはな。少し遊びすぎたか」

健二が穴底を見て頭を抱えてる時、まんまと逃げ出すのに、成功した外界が、足を引きずりながら、近くの人気のない道を歩いていた。

「それにしても、藤田と言ったかあの中学生、結構楽しめたな。」

次が楽しみだぜ」

外界がニタニタ笑いながら、歩く

「今回見逃してやったんだ。」

次に殺りあう時は、もっと強くなつててくれよ。

今度は俺のもう一つの能力を見せてやる かな。はーはっはっはっ
はっ
はっ

外界は楽しそうに高笑いしながら、歩いていくのだった。

こうして、学と外界の戦いは幕を閉じた

第五話 第一章（学の死闘 助っ人は健児）（後書き）

いかがだったでしょうか。

ではご意見ご感想など待っております

ありがとうございました

？

第五話第二章（サイボーグ少女と悪徳警備員）その1（前書き）

遅くなりましたが、最新話投稿です

今回は儀典超電磁砲に出てきた那由他ちゃんの戦闘です

第五話第二章（サイボーグ少女と悪徳警備員）その1

「何今の爆発音は？」

那由他はさっき聞こえてきた凄まじい爆発音に耳をふさぎながら呻いた。

（矢文が先輩が自爆機能をつかったのね。 あれをいきなり使うなんてやはり相手は強敵ね、確か地下に子供たちは監禁されているよね）

矢文が先輩かはわからないけど、救出は二人に任せても大丈夫ね、その間に私は敵の頭を叩く）

那由他は仲間を信じ、敵の頭を叩くべく上の階を目指し、階段の近くまで行った、すぐに階段を上ろうとしたが階段の上から、足音が聞こえて来たので 登らないで、身構え戦闘態勢をとる

当然の処置だ、敵の方が数が多い、つまり敵に会う確率の方が高いからだ

ごくくと那由他は緊張しつつ唾を飲み込み階段を見上げる、やがてコツコツと足音が近づいてきて、一人の男が姿を現す

身長百八十を超える長身に、右手に日本刀を持っている

髪は短く切っておりいかにもやり手といった雰囲気纏っている。

服装はYシャツにGパンというラフな格好 だが、那由他はその

僅かな違和感を見逃さなかった

（左肩が下がっている。拳銃をショルダーホルスターで持っているわね）

那由他は冷静に相手の戦力を見極める

那由他が険しい視線で相手を見ているのをよそに、敵はゆっくりと階段を下りきると、そこでやっと那由他に視線を向けた

まるで今気づいたといった感じで何気なく振り向いて、那由他を見た敵は、刀を持ってない方の手を顎の下に持って行き、顎を撫でる

「随分派手にやってくれたな木原那由他」

男がニコリと笑って言う、ただし目は笑っていない

その酷薄な笑みを見て那由他は冷や汗を掻く

（凄い威圧感……でも）

那由他は気圧されそうになるが、それに耐え相手を睨みつける

「こちらの情報は筒抜けと言うわけね 瀧河大我武道指南

」

那由他が口だけ笑って相手の名を言う

那由他が対峙した敵は、首謀者の瀧河大我だった。

「ここまで侵入されるとはな。

鬼川と一学では、抑えきれなかったか？

村上と我孫子も定期連絡がない以上やられたか」

大我は顎を撫でながら言う。

「まあ死んでるとは思わんが戦闘不能にはなっているだろう。

やれやれお前たちのせいだ。せつかくの取引も台無しになってしまった」

大我はため息を一つ吐く。

「計画だけでなく、人生も台無しになるんだよ、おじさん」

那由他が皮肉たつぷりに言う

「そいつは困るな俺には夢があるのでね、ここで倒れるわけにはいかないな」

顎に手を当てながら、ちよつとずつ大我は那由他に近づいてくる。

「自業自得だから諦めて」

那由他が警戒して、バックステップし距離をとり、構える

「そうか。見逃してくれないのなら、仕方ない」

そこで距離を縮めるのをやめた大我は、顎に手を置いたまま立ち止まる

「排除させてもらおう」

突如大我の体から凄まじい殺気がほとばしったと同時に

顎を触っていた手が、刀の柄を握る

速い握ったのが那由他に見えた時には、もう抜刀していた。居合い腰にもならず立ったままの状態で大我は抜きつけの一刀を那由他めがけて放つ

この奇襲に対し那由他はなんとその刀を左手で掴みにいった

「馬鹿め」

那由他が掴みに行くのを見た、大我は刀の軌道を変え、切り返し、那由他の首を横なぎに狙う

（貰った）

大我は勝利を確信し那由他の首が落ちる様を脳裏に浮かべたが、そうは問屋がおりさない

那由他に残った右腕を縦にして片手ガードで横なぎの斬撃を防ぐ。

ガツと刀がめり込みそのまま那由他の右腕を斬りとばす。

だが、那由他は斬り飛ばされた、右腕が空を舞うのを気にもとめず、そのまま腰を沈め飛び込み、掴みにいった左手を、大我のから空きになったボディに正拳突きを叩き込む。

グリッとえぐるように入った那由他の腹への一撃を食らった大我は後方にふわりと飛んで着地する

当たった瞬間、後ろに飛び威力を軽減したのだ。

着地し終わった大我は、殴られた箇所を左手で撫でる（なお刀は空中で納刀している）

（大したことはないな）

ダメージの有無を確認し終わった大我は自分を殴った那由他を見る

「片腕とばされたって言うのに、無視して飛び込んでくるとはな。

ついで一発貰っちゃったぜ」

大我はニヤリと笑い相手を誉める

「私の腕はもうずっと前になくなって、というより体の七割

は生身じゃない　一度失ったものをもう一度失ったところでどう
ということはない」

那由他は斬りとばされた右腕をちらつと見た後、大我の方を見る、
切り口からは血の一滴も流れておらず、腕一本なくなったというの
に、顔色一つ彼女は変わっていないかった。

やせ我慢というわけではないらしい。

「そうだったな、　確かチャイルドエラー達を実験体にさせ
るのを極力減らすために自ら、色んな実験体になつていったんだつた
な」

大我は事前に手に入れていた那由他の情報を確認する

「……」

自身の秘密を語られるのを那由他は黙って聞く

「数多が言っていたぞ、身内に困った奴がいる。

優秀なのに、甘い性格が祟って壁を超えられないでいると、

まあ最後に精神が病んでいるテレステーナよりはマシだがなと付
け足していたがな

自分が様々な実験の実験体モルモットとなればその分だけ犠牲になる子供た
ちがいなくなる。

子供じみた考えだが、出来る人間はそうはいない。

おまけにその実験で得た報酬は全て置き去りの施設に寄付してい
るんだって？

泣かせる話じゃないか。

脚本書いてドラマにすれば、大ヒット間違いなしだ、お涙頂戴の
話しを好きな奴らは結構いるからな」

八八八ツと大我は笑う

那由他は怒りを抑えながら黙って大我の話しを聞き続ける。

「それにしても、君の事を知った時はちよつと信じられなかったぞ、あのマッドサイエンティストの集まり木原一族の中に良心なんてものがあるとはな。

数多とテレスティーナは知っているが、あの二人には良心のかけらもなかったな　　そうそう数多には世話になった、あいつには能力者の力の流れを読んでその隙をつくつていう、　　木原一族の対能力者戦闘の技術を教えてもらった。

おかげで警備員の中でもずば抜けた活躍が出来た。

まあその数多も死んでしまったがな。

自分が開発に関わった能力者に殺されるとは随分間抜けな死に方をしたものだ」

大我はそう言いながら居合い腰に構え、刀の鯉口をきり、抜刀態勢に入る

「さておしゃべりが過ぎた。

そろそろ終わらせてもらおう。

他に片付けないといけない者たちがいるのでね。

君たちさえ片付ければ、警備員は俺に逆らえない。

風紀委員たちは気づいてない。

つい先だって暗部同士で殺しあいをした暗部は弱体化している。

誰も俺を止められんのだ」

大我は自身がいかに強大かを誇示する

「他の人たちには頼らない。
私があるのを止める」

那由他は金髪のツインテールをなびかせ毅然と言う

「出来るかな、義体の強度は先の一撃でわかった。
俺の斬撃でも十分斬る事が出来る

今度は首だ、いかにサイボーグでも首を斬られては動けまい」

じりじりと大我が足をすりながら間合いを詰める。

「木原の戦闘術を木原の者に使うことになるうとはな。
最も俺のはそれに剣術を融合させた改良版だがな」

「その戦闘技術は私も数多おじさんに習っていた。
だから手の内は読める」

那由他は残った左手を手刀の形にして 前方に伸ばし肩の高
さに構える

「ぬかせ！ 小娘が 我が斬撃見切れるものではないわ」

大我はさつき先制攻撃を仕掛けた時とは比べものにならない殺
気を那由他に叩きつけ、吠えた。

勝つのは非情なる 警備員か、それとも 心優しきサイボー

グが、緊迫状態のまま両者は対峙する

「がはっ……くそあのメスガキが、俺が肉体再生のレベル2の自動再生でなかったら、死んでいたぞ」

師匠が命がけてサイボーグと死闘を繰り広げていたところ、弟子は地面にうずくまりながら、怨さの声を上げていた

黒子に爆弾を体内に転移させられ、地下から一階にとばされた我孫子は、そこで爆発した、普通ならそこで死んでいるのだが、彼には肉体再生のレベル2自動再生があつたので助かつた。

自動再生とはある一定のダメージを受けた場合、本人の意志に関係なく勝手に再生する能力である。再生力は致命傷を受けてもたちどころに治すほどだが、自動名の通り、自分の意志では使えない、うえに1日三回のみという制限つきである

(それ以上やると、細胞がそれに耐えきれず老化するため)

ゆえに再生力に比しレベル判定は低い

しかし剣の達人である我孫子はこの不便な能力を戦闘で発動させる事は、全くと言っていいほどなかつた

屈辱である。

もはや我孫子には、当初の目的など、脳裏になくあるは、黒子への怒りだけだつた

「体力は回復せんが傷口は完全にふさがつたな。

自分の意志では使えんが、たまには役にたつんだな

さてここは一階の道場の近くだな。

だったら道場には、刀が何本かと木刀があったな。

待ってるよ武器の補充を終えたらすぐに、地下に戻ってやる

その可愛い顔をぐちゃぐちゃに潰して誰かわからないようにして、

体をバラバラに切り分けて、一パーツずつ野犬か豚の餌にしてやる

ぜ
ー

ギャハハッ 我孫子は狂った笑い声を上げると、立ち上がり道場
を目指した。

第五話第二章（サイボーグ少女と悪徳警備員）その1（後書き）

いかがだったでしょうか？

後 二話か三話ぐらいで黒子編は終了の予定です

ではご意見 ご感想 何でも待ってます

厳しい批評も全然OKです

ただし下手くそ、おもしろないとか何の参考に出来ない批評はやめて下さいね

ありがとうございました

第五話第二章（サイボーグ少女と悪徳警備員）その2（前書き）

すみません更新が遅れてしまいました
週一ペース守れなかった

第五話第二章（サイボーグ少女と悪徳警備員）その2

「ふうやっとな。怪我人の俺には遠い道のりだったぜ」

健児と別れた学は 何とか目的地に着いていた。

途中倒れそうになったりしたが、ふんばった。

苦労して到着した 目的地を感慨深げに 学は見ている

だがいつまでもそうしているわけには、 いかない。来るのが目的ではない、ここにいる、女性に会うのが目的だからだ

「さて早く行って この怪我治してもらおうとしますか」

学はそう言った後、さっきまで見上げていた建物に侵入していくのだった。

そこは第七学区内にあるとある教員の寮だった

「はあはあ」

那由他の口から荒い息がもれる

「どうしたもう終わりか？」

大我があざ笑いながら容赦ない連撃を浴びせてくる

戦いは那由他不利で続いていた

那由他の身体のあちこちには刀傷が、無数にある

普通ならば出血多量で死ぬか意識が朦朧としてるのだろうが、身体の七割が生体義肢のサイボーグである彼女は血を流す事もなかった。

だが決して不死身と言うわけではない

強力な攻撃を受ければ、当然壊れてしまう。

そして今那由他が、片手で何とか捌いている斬撃はその強力な攻撃なのだ

(このままじゃ、やられる何とかしないと)

那由他は敵の攻撃を左腕で捌きながら、隙を見いだそうとする。

那由他の腕は某レベル5の電撃使いのビリビリアタックも、ある程度なら耐えられる代物だ。

その特注の生体義肢をここまで傷つける

那由他の体から冷や汗がでる。

「ちっ!」

膠着状態にじれた、大我が攻撃をやめ、バックステップする
「ふう」

攻撃が止み距離が離れた事に安心した那由他が安堵の息をついたと同時に、大我がドーンと地面を思いっきり強く踏み込んだ。

直後大我は弾丸のごとく一直線に飛び出し諸手突きを放つ

、狙いは那由他の腹

「えっ？」敵の急な仕掛けに対し、緊張感の解けていた那由他は反応が

遅れた。

時間にして数秒ぐらいだがその数秒が、那由他にとっては命取りとなる。

「タア！！」

気合いを上げた大我の諸手突きが那由他の腹をぶち抜いた
刀は背まで突き抜けてやっと止まる

「俺の勝ちだ」

那由他の腹まで鏢もとをめり込ませたまま、大我はニヤリとほくそ笑んだ。

「さてと」

しばらく会心の一撃の余韻に浸っていた、大我だったがいつまでもそうしても仕方ないので、刀を腹から抜こうとする

綱引きで綱を引くように力を込めて、刀を後ろに引くが抜けな
い。

「ちっ腕の力だけじゃ抜けないか、だつたら」

そう言って大我は片足を那由他の胸に乗せ足で那由他の胸を押す、
その勢いを利用してズボツと刺さっていた刀がやっとなげた。 押

されたせいで、那由他が地面に倒れたが、大我は気にせず、抜いた刀の刃の部分を目を凝らして見る

「刃こぼれが結構あるな、後で修復して貰わないとな、それでも使いものになるかわからんがな、まあ斬れないなら、刃引きにしてもらってもいいか俺が一番得意なのは突きだから刃引きでも、 困らないしな」

大我は刃の部分の損傷を確認した後、一応その部分を倒れた那由他の服で拭う

その間も貫かれた時と同じで那由他はピクリとも動かなかった。

大我は拭き終わった後の刀を鞘に納刀する。

カチンと鏗もとで音がなり納刀される

「思ったより手こずったが、所詮俺の敵ではなかったな、あっさりフェイントに引っかけたって気を抜くとはな、俺が攻め倦ねいて休憩するとも思ったか馬鹿め」

地面に倒れている那由他を見ながら、大我は勝ち誇る

大我が言っているフェイントとは、バックステップの事である。

大我は一旦ひいたと見せかけて、那由他の緊張がきれたのと同時に仕掛けたのだ。しかし緊張がきれた那由他をせめる事は出来まい、ただでさえすでに隻腕であった那由他が那由他だったのだ、片手で攻撃を捌き続けたのも僥倖だ。

緊張が解けたのは無理からぬ事である

ここは素直に相手が一枚も二枚も上だったと言わざる得まい

「まあお前はよくやったよ、そこでゆっくり休んでいるんだな

」

那由他から視線を外した大我は向きをかえる

だから彼は気づかなかった、那由他の指が、微かに上下した事に

「さて深手は負わなかったが、時間をかけ過ぎたな。

全く使えない部下を持つと苦労するぜ

奴らの狙いは商品の救出だ、なら地下の保管所にいるだろう
急ぐか」

大我は保管所目指して走ろうとする

「おっと。死体を片付けるのを忘れてたぜ」

那由他の死体を目立たないところに、片付けようと思って振り向いた、その行動が大我の命を救った

「何い」

振り向いた大我は思わず驚きの声を上げた。

死んだと思っていた 那由他が、上半身だけ起こしていたからだ
その体勢から那由他は左腕を持ち上げて拳を作る

上半身だけおこし、片腕を持ち上げてる 那由他を怪訝な表情
で大我は見る

「とつておき……」那由他は自分にしか聞こえないくらいの小さな声で呟く

呟いた後、那由他の片腕がロケットパンチとなつて、大我を襲つた

巨大な轟音が鳴り響き、その音が大我に聞こえた時には、那由他のロケットパンチは、目の前にまで迫っていた。

「くっ」

このタイミングでは 避ける事は間に合わない。

大我は刀を抜刀するとその勢いのままに抜き上げながら、空中で両手持ちになり 刀を思いっきり下に振りおろしロケットパンチに叩きつけた。

ガキーンと金属同士がぶつかり合う鈍い音が鳴り、火花が散る

だが拮抗もそこまで、ロケットパンチの力に押し負け、刀が根元から、古い枝がパキッと割れるように、

あっさり折れる

「チクシヨウー!!」

折れた刀を持ったまま、大我は慌てて衝撃に備えるため、顔面をガードする

那由他のロケットパンチは刀をへし折っても勢いとまらず、そのままガードの上から大我を吹っ飛ばし、大我を壁に叩きつけた。

だが、その光景を那由他は見れなかった。最後の力を振り絞り、ロケットパンチを打った那由他は、発射直後に気を失っていたからである。

轟音が鳴り、地面が揺れたが、那由他の深い眠りを覚ますまでには、到らなかつた。

「何でしょう？今の音はとミサカは耳をふさぎながら、考えます」

地下の監禁所目指した進んでいた、御坂妹は突如聞こえてきた轟音に立ち止まる

やがて音は消え、夜の静寂が戻ってくる

「気になりますとミサカは自分の気持ちを正直に告げます」

御坂妹はそう言った後考え込む

やがて考え終わった、御坂妹は今まで来た道を引き帰しだす

「気になって仕方ありません、ミサカは音の発信源に向かうため予定を変更します」

そう言いながら、御坂妹は歩きから走りに移行して行くのだった

第五話第二章（サイボーグ少女と悪徳警備員）その2（後書き）

いかがだったでしょうか。

ではご意見、ご感想何でも待っています

ありがとうございます？

第五話第三章（超電磁砲？？悪徳警備員）（前書き）

ご無沙汰してます

遅くなつてすみません

やっと最新話投稿です？

第五話第三章（超電磁砲？？悪徳警備員）

「ここですかと、ミサカは現場に着いたので、探索します」

そう言いながら、御坂妹は辺りを歩きながら見る。

御坂妹が今いるのは先ほどまで那由他　　が敵の親玉と死闘を繰り広げていた一階の階段付近だ。

幸か不幸かわからないが、彼女が到着した時には既に戦いは終わっていた。

なので彼女は状況把握のため探索する事にしたのだ。
やがて彼女はうつ伏せに倒れている那由他を発見する。

「あれは！　倒れてる幼子にミサカは慌てて駆け寄ります」

ミサカは早口でそう言いながら、那由他のもとに走っていく。

那由他のもとに着いた御坂妹は早速那由他の、容態をチェックする

「お腹を何か鋭利な物で刺されていますとミサカは倒れてる少女の怪我の具合を確認します」

御坂妹はそう言いながら、那由他の体全体に視線を走らす。

やがて一通り那由他を見終わった御坂妹は、命に別状がないのを確認して安堵する。

「さてこれからどうしましょうか？」

ミサカは思案にふけります」

御坂妹は少しうんと首をひねって考えこんだ。

その時背後で微かな気配を御坂妹は、感じた。

「誰ですか？ミサカはうるんな気配を感じて警告します」

後ろを振り向いた御坂妹が、声を放ったその先には右手に刀を持っている瀧河大我がいたのだった

大我は右手にぶらんと刀を持って立っていた、ところどころ体が煤けて汚れている。

だがそんな事よりも、御坂妹の目をひいたのは普通では有り得ない方向に、曲がっている大我の左腕だった。

それは誰が見ても折れているとわかる骨折だった。

しかもただの骨折ではない、よほど強い力が働いたのか、腕はぐちゃぐちゃになっており、腕の骨が一部皮膚から突き抜けていた。

そんな無惨な状態の左腕をしているのに、激痛に声を上げる事もなく平然と立つ瀧河大我を見た、

御坂妹は鳥肌がたつほどの恐怖を感じた

(無論御坂妹は瀧河大我の名を知らない)

「痛くはないのですか？ ミサカは気になって聞いてみます」

御坂妹は不気味な男に怯えながらも、好奇心には勝てず、話しかけた。

しかし大我はそんな御坂妹の勇氣に答えず沈黙を選んだ
やがて五分程が経つただろうか、沈黙状態に耐えきれなくなつた、御坂妹が再び口を開く

「無視ですか？
いかに初対面の赤の他人とはいえ、そりゃ失礼だとミサカは厳しく突っ込みます」
事実御坂妹はきつい眼差しで相手を睨みつけている。

御坂妹のきつい視線に耐えられなかったと言つわけではないのだろうが、大我が沈黙を破つた

「なるほどどうりであいつらが、あっさり突破されるわけだ。
まさか常盤台の超電磁砲が相手だったとはな、荷が重すぎたな」

納得したという感じで大我が何度も頷きながら言った

(……ん?)

御坂妹は一瞬何を言われたのか解らず思考が停止する

(だんまりか……まあこっちもだが、さてどうするべきか)

表向きは仁王立ちで厳しく相手を睨みながら、心の中では頭をフル回転させ、大我は次の手を考えていた

(怪我は痛覚を遮断する俺の能力で問題ないが、手負いであることには変わりない1対1とはいえ相手は超電磁砲

向こうの攻撃は届くが、
こちらは届かないかと言って、近づくのは容易ではない さて
どうする?)

大我は超電磁砲の力を恐れて慎重にならざる得なかった
実際は超電磁砲の脅威などないのだが、 怪我を負いなおかつ、
追い詰められている彼は気付かなかった。

一方御坂妹も、敵の妙な発言が気になり考えているので、
闘いは自然と膠着状態に入っていくのだった。

第五話第三章（超電磁砲？？悪徳警備員）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ではご意見、ご感想 何でも待っています

ありがとうございました

第五話第三章（超電磁砲？？悪徳警備員）その2御坂妹の閃き（前書き）

ご無沙汰しています とりあえず見ていって頂ける事を祈りつつ

第五話第三章（超電磁砲？？悪徳警備員）その2 御坂妹の閃き

五分か、はたまた数時間か。

御坂妹は背後に那由他がいるため迂闊に動けなく、一方大我は勘違いから慎重になり、結果両者が望まない膠着状態が生まれ、今なおそれが続いていた

その膠着状態が御坂妹にプレッシャーとなつてのしかかってくる

（耐えられませんこの空気とミサカは心の中でばやきます）

ミサカはそう思いながら、自分の背後でどこか満足そうな表情で力尽き眠りにについている那由他を、チラッと見て溜め息をつくのだった

「木原那由他がそんなに気になるか？」

ミサカが那由他の方をチラッと見た時 背後から声が聞こえて来た

声は大我の声だ

「木原那由他…… それがこの倒れている少女の名前ですか？とミサカはあなたの質問に質問で返します」

ミサカは首だけ振り向いて、大我を見ながら言う

「ああそうだ。」

木原一族の一員さ まあ落ちこぼれだな。

木原一族、あの有名な狂科学者の、知らない訳ではあるまい
超電磁砲」

大我は値踏みするような目つきで、ミサカを見る

「！」

その大我のセリフを聞いて、ミサカは一つの謎が説けた

（そういうことだったのですか。

ミサカは敵の異常な慎重さの理由を理解します。

それにしてもお姉様に、間違えられるのは良くありますが、戦闘中は初めてです……さてこの勘違いを上手く利用しなければとミサカは、作戦を練り出します）

敵の勘違いにミサカが気づいたのが、
幸か不幸になるかは、
まだわからない。

「これで武器の補充は終わったな」

そう言つて一人の男が腰に刀を背中に木刀を背負いながら呟いた

男の正体は黒子に倒された我孫子である。

何とか自分の能力で窮地を脱した彼は、その後武器を保管している、この部屋まで戻ってきて、体制を立て直していたのだ。同じ階の階段付近で自分の師匠が、御坂妹と戦っているのはもちろん知らない、まあ仮に知っていたとしても、今の我孫子は気にしないだろうが

「くつくく刀に痺れ薬は塗ったキャパシティダウンも用意した。

これで準備は完了だ。

あの常盤台のツインテールが絶望に怯えながら、命乞いするのが
今から楽しみだぜ。

大人の恐ろしさを たっぷり思い知らせてやるぜ、お嬢ちゃん

復讐に狂った大人気ない一人の男が、
叫ぶのであった。

その大人気ない我孫子の様子を、憐れむような視線で見ている
男がいた。完全に気配を消して、我孫子からは見えない位置に
居たため我孫子は気づかなかつた。

（師兄も相変わらずだな。

怒ると周りが見えなくなる悪い癖は

それにしてもいくらレベル4とはいえ、13歳の小娘に後れをと
るとはな。

といつても俺も後れを取ったから人の事は言えんな。

まあただ働きだし、じゅうぶん義理は果たしただろ。

さてレベル5が二人もいる戦場にこれ以上いたら命がいくつあつ
てもたりやしねえ。

とつとと退散させてもらいますか

あばよ師兄に師匠 死なねえように祈ってるぜ

最後にもう一度だけ馬鹿笑いしている 兄弟子を見た後、薄
情な弟弟子は一人逃走していくのだった。

第五話第三章（超電磁砲？悪徳警備員）その2御坂妹の閃き（後書き）

いかがだったでしょうか。

最近小説って難しいってつくづく思います。ではご意見等待ってます。

批判でも結構ですので待ってます

（でもただ下手だつまらないってのは勘弁して下さい。

参考にもできないし。ただ謝るしか対処のしようがないので）

最後に読んで頂きありがとうございます

第五話間章（その頃学は？彼が主人公です）（前書き）

ご無沙汰してます

まあ今回はバトル続きだったので、息抜きみたいなものです
少々長いですが読んで頂けたら嬉しいです

少

第五話間章（その頃学は？彼が主人公です）

「いつも思うんだが、相変わらず見事な 手際だよな先生」

そう言つて学は自分の傷を治癒してくれた恩人に礼を言う。

「別にいいわ、ただ 今度からは、くる前に連絡いれなさい。
最初強盗かと思つてびつくりしたから」

そう言つて学が先生と呼んだその部屋の主が答える

「強盗にびつくりするほど柔じゃないでしょ先生は」

学が苦笑いをしながら言う。

そう言つた学のはじめは、先生と生徒と言つより友達または年の離れた姉弟のような感じであり、会話の雰囲気から親しい間柄であることが伺える。

黒子たちが死闘を繰りひろげている頃、学は傷の治療という目的を果たしていた。今は治療を終えて、

治療してくれた部屋の主と雑談にふけつてるといわけた。

学が言うとおり、部屋の主は先生つまり教師であった。

まあ教員寮に侵入していったのだから、教師がいてるのは当然だが

「まあひどいわね。 私だつてか弱い女性なのよ、強盗は怖いわ」

そう言って部屋の主の女教師は身をくねらせながら、体をふるわして言う。

(どこかだよ)

学は激しくツッコミたいのを我慢して、
曖昧な笑みを浮かべた。

学の言つとおりだ。

部屋の主の女教師はとても襲われて怯えるか弱い女性には見えなかった。

まず長身で鋭い目をしている。

身長は学より30センチは高い180はある。

髪は茶髪で短く、肌は小麦色に焼けている、またブラとパンティーだけという姿だから、鍛え抜かれた体であることはすぐにわかる。腹筋も割れていて腕や足もひじょうに引き締まっている。

まあアマゾネスみたいな感じと言ったらわかりやすいか。

この猛女が弱い女性と言われても、信じられないと思うのは学だけではあるまい。

この女性の名は牛窪麟子うしくぼりんこ

年は26歳で警備員でまた学の元担任教師でもある

警備員の中では数少ない能力開発を受けた能力者でヒーリングのレベル3の実力者だ。

「さてと傷も治してもらったし、俺はそろそろ帰るとするか
じゃあ先生治療ありがとうな」

傷を治してもらった 手前ツッコミを入れることの出来ない学は、
会話が妙な方向になってきたのを、 感じそそくさと帰れること
し、別れの挨拶を元担任にしたが
そうは問屋がおろさなかった
学が部屋を出ようとした瞬間、にゅっと手が延びてきて学の腕を
掴んで離さなかったからだ

「先生？ 何の冗談ですか」

学が引きつった笑みを浮かべて問う

「まだ治療代を頂いていないわよ」

学の問いに舌舐めずりしながら、獲物を見る女豹のような、鋭い
目つきで学を

見ながら淡々と告げた。

「はあ」

学は肩を落としながら盛大なため息を吐いた。

そして諦めたような表情をしながら 無駄とわかっているが
女豹に交渉をした。

「手持ちは五万しかないんですけど、それで治療代になりませ
んか」

学は懇願するように 両手で拝み頼み込む
そんな学の殊勝な様子を女豹はじっと見据えた。

しばらく無言で時が流れる。

やがて学はチラッと 女豹を盗み見る、その視線に気づいた女豹が、学に満面の笑みを浮かべる

(やっぱり駄目か)

学はその笑みを見て 最後の抵抗が失敗に終わったのを悟った。

案の定数秒後に彼の耳に届いたのは、ダメの一言だった。

そしてダメの後にはこう続いた

「治療代は体で払ってもらおうわ。」

中学生にたかるほど落ちぶれてはいないわよ」

女豹は笑いながら言った。

(……中学生とセックスしようってところですか、大人としてどうかと思うんだがな。

それにしても今日は厄日か？

不良どもと喧嘩、喧嘩の後はボクサーと命がけのタイマン、タイマンにやっと勝ったと思ったら、高位能力者と死闘と来やがる、そして最後の締めくくりが…… 絶倫女の夜のお相手かよ)

学は己の不運に泣きそうになるが、何とか耐える

(確か先輩の話によると最低でも四回は やらないと満足しないっていつてたな。 傷は治してもらったが体力は回復してないんだよな。

この年で腹上死とか 勘弁してもらいたいぜ。
……人間諦めが肝心か)

そう心の中で想いながら、疲れきった目で部屋の天井を学は見上げる

(こうなったらヤケ だ。

先にいかせていかせまくって、ずらかるか。

まあ夜だから能力で逃げる事ぐらい訳ないんだが、逃げたら後が怖いしな。

四回かもつかな)

学は悲愴な決意をすると、着ている上着を、脱ぎだす

「そうそう子供は素直が一番よ。

それに童貞じゃないんだから緊張もしないでしょ」

学が服を脱いでいく様を、好色な笑みを浮かべながら見る

「先生もしかして俺が、ふった事まだ根に持つてるんですか」

学が脱ぐのを中断して聞く

実は学はまだ蒼天飛翔館にいた頃、担任であつた麟子に付き合つてくれと言われたのだ、ただしセフレとしてだが

学は訴えようかと悩んだ末に、担任が警備員であるのを理由に事を荒立てるのを好まず、結局断る事にしたのだ

「そんなわけないじゃない。

私そんなに執念深くないわよ」

女豹は笑いながら否定するがその眼は笑っていない

(やっぱ根に持ってるな)

学は見抜くがそれがわかったところで、どうしようもない。

すでに彼はまな板の上の鯉なのだから

学は再び脱ぎだす。やがて上着を脱ぎ終えて、ズボンのベルトに手をかける

白黒つけましょう？ 限界の

まるで学の脱衣をやめさせるように携帯電話から着信をつけるメロディーが鳴った

「こんな夜更けに一体誰よ！」

女豹は親の仇を見るような凄まじい憎悪をあらわにして部屋の床に無造作に転がっている自分の携帯を睨む

「ちよっ、何で」

携帯を睨んでいた彼女が携帯画面に見えた着信相手を知り慌てて携帯に飛びつき通話ボタンを押して、電話に出る。

「もしもし兄さん？ こんな夜更けに一体何の用よ！ー！今いいとこ、じゃない寝てたのにいくら兄でも、妹の睡眠叩き起こす権利は

ないわよ」

女豹は八つ当たり気味に話相手の兄にわめき散らす。

(兄って事は範正さんか。 地獄に仏とはこの事か)

学はこの場にいない女豹の兄に心からの感謝の祈りを捧げた

牛窪範正うしくほのりまさは女豹の兄で女豹と同じ警備員だ。

長身な妹と同じく長身で199センチと巨体で体重も115キロある この女豹が頭の上から数少ない人物だ。

ちなみに学とは剣道の試合をした事があり学はこの試合で失神させられるという苦い経験を持つ。

仕事一筋の超堅物で妥協は絶対しない。 学園都市随一の名門長点上機学園の教師で警備員の中でも屈指の腕利きである

仕事の為ならプライベートなどいくらでも削り、非番でも自分の意志でしょっちゅう出勤する。

また学生に銃が使えるかというポリシーがあり、銃の携帯はしないそのかわり出勤時は背中に三メートルの木刀を背負い、腰に刃引きの刀を差して出勤する

社会人 教師や警備員としては極めて優秀だが、人 個人としては駄目人間と言う仕事馬鹿である

そのため36という年齢なのに嫁のきてがない残念な人である

(そんな仕事馬鹿が夜更けに電話してくる。 教師の仕事に妹引っ張りだすわけないから、警備員としてだな、何か事件でもあったのか? まあいい聴けばわかる)

学は気になったので兄妹の会話を盗み聞きすることにした

(善はいそげだ)

学は先ほどまでの、悲愴な決意から一変好奇心いっぱい表情を浮かべながら、もっと聞き取りやすいように、女豹の近くまで行くのだった

部屋に女豹の罵声が飛び交う

「それで一体何の用よ？ お金の無心何でもいいから早く用件を言って」

(うわぁ相当お怒りだな。 まあせつかくのお楽しみを邪魔されただんだ怒るわな おかげで俺は助かったが)

学は怒る女豹の後ろにこっそり周り聞き耳をたてている
先ほど学が逃げるのを察知した女豹だが、今は電話に夢中になっているので気づかないでいる

頭をかきむしりながら、兄の返答を妹はまった。

兄の返答が返ってくる兄はゆっくりと、大きな声で返してきた、電話ごしなのに学はその声に威厳を感じた

「緊急事態だ麟子。 至急風紀委員49支部に向かわないと行けなくなつた、場合によっては戦闘もありうる。
だからお前も出勤しろわかつたな」

兄は用件を一方的に言う

「ちよつと兄さん、こんな夜更けに寝てるところ叩き起こされて出勤なんて、冗談じゃないわよ。」

それに風紀委員の支部に急行？こんな夜更けに穏やかじゃないわよ。

一体何があつたのよ」

妹も負けていない、兄の一方的な会話に徹底的に反論する

普段の彼女は兄に対して、ここまで強気ではないのだが、目の前でお預けを食らつたその怒りは凄まじく、彼女は一歩もひかなかつた。

だが所詮兄にはかなわなかつた。

何故ならこの兄に常識は通用しないからだ

「質問はもういいか？」

兄は妹の言い分を聞いた後、最後の確認をする。

「ええ言いたい事は言つたわ」

「わかつた じゃあ質問の答えだ。」

まず何かあつたかについてだが、風紀委員活動49支部が、第七学区にある警備員の施設それも、

学舎の園内にある施設の警備システムにハッキングしている事がわかつた 何故そんな事をしたか理由は不明だが、施設に何かあつたら事だ。

というわけで現場に行きやめさせる事になつた、メンツは俺と

俺の部下三人とお前の計五人だ　　麟子学園都市の平和のため、ひいては正義のためだ。　　後五分程で着く出勤の準備をして待っている以上だ」

と言いつつと　　同時に電話を切り兄妹の会話は終わった

「ちょっと兄さん、　　兄さん……もう言うだけ言ってくるんだから」

呼びかけて応答がないので、仕方なく　　麟子は携帯を片付けた

「早く着替えた方がいいんじゃないの　　範正さんの事だからきつかり五分でこの寮の入り口のドアまで来るよ」

学は電話が終わつ　　後すぐさま麟子を急かした

「そうねあの兄さんならちょっとまたただで部屋のドアぶつ壊して入って来るわ」

麟子が学と会話しながら、慌てて服を着だす。

「じゃあ先生も忙しいみたいだし、俺はもう帰るね。お休み」

学はいけしゃあしゃあと、別れの挨拶をかつての担任教師にして窓際に行き窓を開けた

「はあ〜せっかく　　楽しい夜になるはずだったのに……ん窓から出るつもりなの？」

麟子が窓際にいる学を見て、不思議に思う

「傷を治してもらったし、夜だからね」

「そうだったわね　夜は君レベル5クラス的能力者だものね
三階ぐらいから、飛び降りるのなんてへっちゃらね」

「まあそれもあるけど」

そこで一旦学は話を切って大きな溜め息を吐く

「はあゝ。　顔あわせたくないんだよ範正さんとはどうも苦手
でね」

学は首をすくめて　苦い顔をして言う

「わかるわかる、　もうあの仕事馬鹿ぶりと自己中ぶりは病
気よね

実の妹とはいえ、付き合うのは辛いわ　　まったくさっさと
結婚しないから仕事しかすることがないのよ」

麟子が学に同意して、悪態をつく

「兄妹をそんなに悪く言うのは感心しないよ先生」

兄をけなす麟子に学が釘をさす

「あら、君にそんな事いえる資格があるのかしら。
お兄さんたちとは仲上手くいってないんでしょ　お父様にいたっ
ては、もう何年もあってないんでしょ」

釘をさされた麟子が、強烈なしっぺ返しを学にした
学が一番痛いところをついたのだ

途端に学の表情が変わり、ひどく悲しそうな表情になる、捨てら
れた子犬のような目をしている

「親父殿は忙しいし、二番目の兄貴や　四番目や五番目は
ともかく三番めがね」

学は小さな声でぽつりぽつりと言う

「三番目って道晴　（みちはる）君の事？」

麟子が学に確認を取ってくる

「あいつは俺を殺したいからね」

学は窓の外の遠くの景色を見ながら、ひどく疲れた感じで言う

「殺したがってるって穏やかじゃないわね」

麟子が驚いた様子で　言う

「殺したがってる　さ現に、三年前あいつは俺を殺そうとし

た
」

学が暗い目をしてきっぱりと断言する

「三年前って君が風紀委員やってた時？」

「そう俺が風紀委員として最後に関わったあの事件の時だよ」

「それってレベル3の能力者が三人

レベル4の能力者が 一人の計四人の能力者が学生を誘拐して
都市外逃亡しようとしたあの事件？」

麟子が興味津々といった感じで学に聞く

「そうその誘拐事件だよ。

俺が犯人皆殺しにして解決した事件だよ」

途中か細い声になりながら学は言った

「えっ？ ごめんちょっと途中聞き取れなかった、もう一回言
って」

麟子が聞こえなかったのもう一回言ってくれるように頼む

その時

「麟子 準備は出来てるかー！」

深夜だというのに周りの事一切お構いなしの大声が轟いた
声の主はもちろん 彼らのよく知ってる人物である

「大変もう来た」

麟子が慌てて、化粧を始める

(ちなみに服は会話中に着替え終わってる)

「お迎えも来たようだし、今度こそお休み先生」

そう言っただけで会話を中断した学は、窓に手をかけると勢いをつけてそのまま飛び出した

「あつちよつと、治療代は後で必ず払ってもらうからね」

学が飛び出した後方でシヨタコン教師がたわごとを言っていたが、空中落下している学には当然聞こえなかった

(風が気持ちいいな)

学は空中で夜風を感じてふとそう思った

その間ぐんぐんと地面に近づいていく

(今日は本当に疲れた。)

転校初日からこんな災難にあうなんて　そんな不幸なやつ
俺ぐらいしかないかな？　いや世の中広いからもつと不幸な
やつはいるか

まあとりあえずさっさと寮に帰って寝よう

学はそんな事を考えながら、地面に激突する直前に自身の能力
で血の翼を生み出し、寮に向かって飛んでいった

翌朝起きて登校した彼は大事件が起きた事を知るのだが、
当然睡眠を求め飛ぶ彼は知るよしもない　親切なクラスメートが
病院送りになつてる事も当然知らない　のだった

第五話間章（その頃学は？彼が主人公です）（後書き）

いかがだったでしょうか。

ではご意見 ご感想ポイント お気に入り登録なんでも待ってま
す ありがとうございます

第五話第四章その一（御坂妹逃亡 軍覇合流 美琴活躍）（前書き）

三連休だったので 何とか久しぶりの一週間おき更新です
良かったら見ていって下さい

第五話第四章その一（御坂妹逃亡 軍霸合流 美琴活躍）

時は流れ、場所は再び学舎の園内第一特殊能力訓練所へと戻る

正確な時間にしたら学が窓から飛び降りて空の散歩をさせた
10分後だ

「はあはあ…… 重いですとミサカは少女を担ぎながら己の非
力をのろいます」

気絶した那由他を肩に担ぎながら、御坂妹が走りながらつぶやく。

御坂妹は現在逃亡中だ。

あの後、御坂妹はハツタリを効かしながらポケットからコインを
取り出すと、見せかけ、すかさず煙幕を投げつけ、敵が混乱してい
る際に、気絶した那由他を担いで逃げ出したのだ

敵である大我が御坂妹をレールガンであると勘違いし、警戒して
距離を取っていたので、大我の追撃が遅くなったのも、ミサカに
味方した 　しかし油断は出来ない　ミサカは走りながら時々振
り返りながら追撃の有無を確認し続けている

（お姉様と合流するまでは気を抜けませんとミサカは疲労困憊
の体に活を入れてひたすら逃亡します）

御坂妹は那由他を肩に担ぎながら、改めて気合いを入れると走
るスピードを少しあげるのだった

「逃げられたか……」

既に姿が完全に見えなくなった事で御坂妹を（大我はレールガンだと思ってる）

完全に取り逃がした事を大我は納得した

「それにしても、まさかレールガンがあもためらいなく、逃げの一手を打つとはな。しかし情報と違うな……いや成長期だ利口になったところで おかしくないか」

大我は御坂妹が走り去った方向を忌々しそうに見ながら一人呟く。

まあ別人なんだから 情報と食い違うのは 当たり前なのだが、見た目そっくりなのだ。

よほど勘がいいか、付き合いが深いかしないと見分けがつかないのは仕方ない事だろう。

恐らくお姉様命の 常盤台のツインテールテレポーターでもぱっと見わからないだろうから彼を一概に攻めるのは酷と言うものだ（原作12巻参照）

話を戻そう、大我は何時までも、逃げられたのを悔やんでも仕方ないので、対策をねる事にする

（仕方ない状況を整理しよう）

大我は片手だけで手こずりながら刀を自分の服につけて、汚れ等を拭き取り、再び手こずりながら、 鞘に納めた。

なおこれら一連の動作をしながらも思考は止めていない

（レールガンが侵入してると言う事は、鬼川も一学もやられたもしくは、逃げただろうからあいつらはあてにならんな。

かといって出かけた 外界が戻ってくると思っただけで楽観的にはなれん。

我孫子と冬牙はわからんがもし先ほどの爆発に巻き込まれていたら、下手したら戦闘不能になってるか……スキルアウトの不良共などいくら数がいても仕方ない。

……やむを得ん。

暑苦しいのと俺の趣味ではないがあれを使うか。

多少この施設がぶっ壊れる事になるが、叔父上様の権力を使えば変わりの施設はすぐ手に入る

あれを俺が使えば鎧袖一触、一挙にカタがつく。

ライフラインの時みたいに勝てるかなレールガン（

大我は考えをまとめ終わるとほくそ笑みながら、御坂妹が逃げた反対方向へゆっくりと歩いていった その背中からは獯猛な肉食獣そのものの 気配が漂っていた暑苦しいのと俺の趣味ではないがあれを使うか。

多少この施設がぶっ壊れる事になるが、叔父上様の権力を使えば変わりの施設はすぐ手に入る

あれを俺が使えば鎧袖一触、一挙にカタがつく。ライフラインの時みたいに勝てるかなレールガン（

大我は考えをまとめ終わると、御坂妹が逃げたのとは逆方向にゆっくりと歩いて行った。

その顔に獰猛な肉食獣みたいな笑みを浮かべながら

「はあくこりや間違いない徹夜ね」

妹が絶賛逃亡中の 最中、姉の方は壁に寄りかかって座り込んでいた。

急きたい気持ちはある。

しかしあれほどの強敵が現れたのだ。

少しでも回復しておくのに越した事はない

そう自分に言い聞かせ美琴は休憩をとっている。

といても外で休憩をとらず、わざわざ 敵のアジトまで入ってきているあたり やはり御坂美琴である。

どうしても優しい性格上無理をしてしまう。

どこかの不幸少年そっくりだと言ったら彼女は顔を真っ赤にして否定するだろうが

とにかく御坂美琴は 休憩いや充電中である。

眠い目をこすりながら美琴は自分の体の状態を把握する

（大体四割から五割と言ったところかな）

徹夜なんて前に散々やったけど、久しぶりだと辛いわね）

美琴は以前のたった一人で絶望的な戦いを思い出す

（あの時は私一人の力じゃどうにもならなかった……あいつがい

なかったら、どうなってたか想像もつかないわ。
私も妹たちも、ほんとあいつにはかなわないわ)

美琴は思い出しながらふっふふと、可愛らしい笑みを浮かべる。
それからゆっくりと立ち上がった。

どうやら休憩は終わりのようだ

立ち上がった美琴は両頬を叩きながら、首を振り振りコキコキならず

「さうて少しは回復したし、一丁ばばんと片付けるとしますか。
待ってなさいよ妹たち」

美琴はそう言つて動き出そうとした
が耳に聞くに耐えない暴言が聞こえて一瞬固まる

「待つてるよあの常盤台のクソガキが 手足を切断した後前
も後ろも犯して犯しまくつてやる、そしてなかだしながら首を絞
めて殺してやったあと、豚のエサにしてやる、いや生きたままエサ
にしてやる方がいいか」

ギャハハと狂人とか言いよつのない笑いを浮かべて我孫子が地下
室目指して歩いていたらその時

「はあーい」

突然戦場には似つかわしくない、明るい少女の声が聞こえた

「ん？」

我孫子が声の聞こえてきた自分の頭上を見上げると

そこには口元にだけにこやかな笑みを浮かべ、目は笑ってない

御坂美琴がいた

もちろん我孫子は御坂美琴の名を知らない

「お前誰」

我孫子が御坂美琴に 問いただそうとしたが、直後凄まじい衝撃が我孫子の脳を襲い

我孫子は為すすべもなく意識を闇の底に手放すのだった

ちなみに美琴が電撃を纏った拳で顔面を思いっきりど突いたのだが、

トリップして狂人と化してた彼は気づかなかった

こうしてお姉様の活躍により、黒子は狂人の魔の手から逃れられたのだがそれは神があるいは逆男しか恐らく知らないだろう

「あちゃ〜常盤台とか言ってたから、 つかぁーとなってぶっ飛ばしちやたわ これ……起きないわよね」

美琴は死んでいると錯覚するほど見事に気絶してる、 我孫子を指で突っつきながら激しく後悔したのだった。

短気は損気とは昔の人は上手い事を言ったものである

村上冬牙は既に建物の外に出ていた

美琴が我孫子を倒したのとほぼ同じ頃である。

冬牙は鋭い目で背後にある訓練所を一瞥した後、前方に目を向けた。

「無事だったようだな。」

で瀧河のボスと我孫子さんは？」

視線を向けられた先客である、鬼川翔角は冬牙の無事を確認した後すぐに状況を報告させようとする。ちなみに先客は鬼川の背後にもう一人。一学が見がいた

二人ともレールガンと削板軍覇の戦いに共に敗北したあとちゃっかり逃げてきて、先ほど合流したのだ。そこに冬牙が出てくるのが見えた一学が、鬼川と一緒に迎えたのである（鳥の獣化能力を持つ一学は、獣化しなくても目がいいのだ）

残念ながら巨乳風紀委員みたいに透かし見る事は出来ないが

冬牙は鬼川の矢継ぎ早の質問に対しゆっくりぽつぽつと語り始める

「無事だよすこし思わぬ反撃があつて、怪我はしたがな

我孫子さんは頭がおかしくなつて暴走したから見捨てた

大我さんは確認してないが多分大丈夫だろう」

「我孫子さんは頭がおかしくなつたか、それで見捨てるとは冷たい弟子だな」

鬼川は呆れたといった表情で冬牙を見ながらいう。

口は出さないが後ろにいる一学もつんつんと頷いている

「うるせー使えない奴を助けてやるほどお人好しじゃねえんだ。

どっかの王子様みたいに殺さないだけましだろ」

冬牙は二人のなじりを意に介さず、話を続ける

「お前らは知らないだろうがな。

あの施設は大我師匠が拠点にするほどの場所なんだ。備えあれば憂いなし あそこには大我さんの切り札があるんだよ たとえ腕利きの風紀委員やレベル5がいてもどうとでもなるな」

そう言ってニヤニヤ笑う

「ほう俺たちが知らないボスの切り札ね 興味がある教える」

鬼川が冬牙に先を促す

一学も後ろから移動し鬼川の横に並んで 聞きやすい位置に立つ
興味津々なようだ

「俺も聞きたいね」

そこに三人の声とは違う別の声が割り込んだ

三人は声の聞こえた方向に一斉に振り向いた

そして安堵する

知り合いだつたからだ、一応警戒態勢をとって刀の柄に手をかけてた、冬牙がふつと力を抜いて柄から手を離す

他の二人は無警戒だった、どうやら声で仲間とわかってたらしい

（だったら一声かけやがれ。

人が悪いぜまったく）

冬牙は心の中で毒ついたが、表情など面には一切出さず完璧なポーカーフェイスをする

その仲間外界塵期は　うす汚れていた服は埃がつき、ところどころ千切れたりしている。

髪にも泥とか血がついていた

（戦ってきたあとが　手酷くやられたみたいだな）

冬牙は外界の全体を見ながら冷静に分析した

そんな外界に今度は鬼川が声をかける

「どうやらお前も手負いのようだな。

珍しい事もあるもんだ」

「そつちも痛い目にあつたようだな。

翔角、了見

「こっちはレールガンとその仲間が相手だった、鬼川は第七位でお前は？」

さっきまで黙っていた一学が二人の会話に入ってくる

一学の問いに外界はとても嬉しそうな笑みを浮かべ答える

「ちよつと面白い能力を使う奴が相手だったんだ。
血を操る能力で結構楽しめた」

外界が空を見ながら言う

「それは珍しい能力だ。
だがお前が負ける相手とは思えんが……まさかお前」

外界の話からある推測を立てた鬼川が外界をやれやれと言った感じで見る

「ああ見逃した、大原と闘ったあとで弱ってたし、それにあれはもつと強くなると思ってたな。
それにその方が面白い」

といたずらっ子のような無邪気な笑みを浮かべて外界は鬼川の推測を肯定したのだった

「でよ。」

まあ逃げてきたってわけだ、援軍がちょうど到着したしな
さて詳しい話は後でまたゆっくり聞かせてやる
それよりあんたは？」

そう言っつて外界は冬牙に指をさす。

外界は出かけていたから冬牙とは初対面だと言っつのに無礼な態度だ

「俺は風紀委員の村上冬牙、瀧河大我師匠の弟子だよ」

なのに冬牙は指をさされた失礼な態度をまるで無かった事のように
自己紹介をする

それは冬牙があつたばかりの外界の力量を見抜いたからだ

自分ではどうやつたつて勝てる相手ではないとだから耐える
下手に突つかかったら何をされるかわからない。

強者とは傲慢な者である事を知っている 冬牙らしい判断だつた

「ふ〜ん風紀委員ね 随分血生臭い風紀委員がいたものだ。

俺は外界塵期だ宜しく。

で聞きたいんだが大我さんの切り札つて一体なんだ？」

外界は一応自己紹介を返した後、気になっている大我の切り札に
ついて促す

促された冬牙は切り札について外界たちに説明した

五分後切り札の正体を知つた三人は三者三様に驚いた

「グハハツそりゃ傑作だ瀧河のボスも大したもんだ。

流石統括理事の甥　　警備員の影の支配者だけあるぜ」
と鬼川が嗤いながら言い

「それは凄い、逃げようと思ってたけど、それを使って追い回すとなると面白い見せ物だ。
見物して行こうよ」

と一学が仲間を誘う

「そうだな。たまには高みの見物つても悪くないな。
翔角　了見　村上だっけいいよな」

「「わかった」「っと鬼川と一学が言い

「仕方ないな」

と冬牙が渋々同意した

「それにしてもそれを使ったら、レールガンもナンバーセブンも
ぺしゃんこになっちまうな。
同情するぜ」

そう言った外界がその場に座り込もうとする。

するとどこからか石で出来た椅子が現れる　椅子は次々と地面か
ら出てきて計四つの椅子が出る

「気が利いてるな流石翔角」

っと石の椅子に座りながら、外界が翔角を褒める

「気にするなせつかくの高みの見物だ。　　立ち見はしんどかる

う

そう言いながら鬼川が自分の作った椅子に座る。
残りの二人も慌ててその椅子に座る

「さうしてお手並み拝見だ。

ボス頑張っていていいショー見せてくれよ」

そう言つて外界が理不尽なエールを大我に送る

抜け目なく逃げ出した4人は訓練所を見ていまかいまかとはやるの
だった

罰当たりな連中である

「まゆちやーん

ヤブー テレポートの嬢ちゃん無事かー」

4人の逃亡者が高みの見物を決めこんだ頃 訓練所内のある
一階を走り回る派手な男がいた、言わずもがな削板軍覇である。
新必殺技で敵を蹴散らした軍覇はその勢いのまま、訓練所内に突
入。

最上階まで大ジャンプで飛んで侵入した後、他の仲間を探しまわり
やっと一階まで降りてきたのだ

敵も未成年ばかりの集まりがまさか、上から侵入する術があると
思わず、手薄だったのだ。

そうでなければ敵地で大声張り上げて馬鹿が包囲されたりしな
いわけがない

まあ最もこの男なら その包囲網もあっさりぶち破るだろうが
何にせよナンバーセブンもやっとな死闘の中心地にやって来たので

ある

「うんあれは？」

「やぶー！」

軍覇の視界に先ほど別れた仲間がはいる
その仲間はずつ伏せになって倒れていた

「やぶー大丈夫かぁ今行くぞー！」

軍覇は気合いの入った声で叫ぶと猛スピードで矢文に突っ込んで
行くのだった

「何よ今の叫び声は」

突然聞こえてきた大声に気づいた、美琴は、思わず立ち止まって
辺りを見渡す

「随分大きな声だったわね。」

気になるけど……まあいいわ今はあの子と合流する方が先ね」

そう言っつて美琴は気になるのを我慢し 再び歩き出す。

少しは回復したとはいえ、無理をした疲労はそう簡単には治らない

まだ何かあるかわからない。

力を温存するべきと美琴は判断したからだ

焦りたい気持ちを抑え美琴は歩き続ける

「ん？」

突如何か異変を感じたのか美琴が急に立ち止まって耳を澄ます

コツコツというゆっくりだが力強い足音が美琴の耳に聞こえて

きた

「間違いない誰か来る美琴は慌てて隠れる事にした」

コツコツ先ほどよりも足音が大きくなっている。

美琴は天井に張り付いたまま下を歩く男を見た

大胆不敵な美琴は自分の能力で天井に張り付いたのだ。

上空は人の死角とはいえ見上げられたら 一発でアウトである
だが隠れる場所が見つからなかった美琴はこうするしかなかった
幸い敵に気づかれる事はなかったが

(一応気づかれた時のため美琴は隠し持っていたゲゴタのお面を
被ってばれないようにしている)

(いい服着てるし、つけてる装飾品も高そうだから、1909
0号を攫った一味の親玉ね。

刀は高いかどうかは 解らないけど)

と美琴は自身の勘を信じてそう予測する

一方美琴に上から見られてるとも、知らず大我は切り札の保管
場所へと歩いていた

「ふう。とりあえず敵とは遭遇しなかったな

さてさっさと起動させるか、俺をここまで追い詰めるとは

流石は数多の姪だと 誉めてやる木原那由他」

そう言った後、大我は急に壁に近づくとそこに手をピタッと当

てる

するとまるですり抜けるように大我の姿が消えた

「どういう事？」

その一連の動作を天井から見てたゲコタ仮面もとい御坂美琴は首を傾げた

「能力ですり抜けたというわけじゃないわね。

電気を感じたから

」

美琴はそう言いながら能力を解除し、天井から離れ、両足で着地しつつ 左手を地面に付ける。その着地態勢からすぐに立ち上がった美琴は大我が触れていた壁の付近まで行き壁を見てから自分もそれに触れる

「なるほど結構高度なシステムのようだけどあたしには無意味よ！」

美琴はあっさり能力でシステムに介入し大我しか通れないようにしてるロックを外す。

「これでよし

じゃあさっさと締め上げて、洗いざらい吐いてもらうとしますか」

美琴はロックを解除した後壁に手を触れた

たちまち美琴の体はすり抜けるように壁の中に入っていく

辺りに人影はなく静寂が訪れた

第五話第四章その一（御坂妹逃亡 軍覇合流 美琴活躍）（後書き）

いかがだったでしょうか では感想 ご意見 ポイント お気に入りに登録何でも待ってます

非才の身にはアドバイスは何よりの宝です
読んで頂きありがとうございます？

第五話第四章その2 (軍覇合流とミサカの決意) (前書き)

今晩は更新しました 良かったら読んでみて下さい

第五話第四章その2（軍霸合流とミサカの決意）

「やぶ、やぶ！大丈夫かしっかりしろ」

やっとの思いで合流した仲間が倒れているのを見た削板軍霸は矢も立てもたまらず、その仲間原谷矢文の下に駆け寄り、抱き起こし体を揺さぶった。

「駄目か……」

軍霸の必死の呼びかけも空しく原谷矢文は目を覚まさない、ただ軍霸の体に触れている肌が温かい事から、死んではいけない事がわかった軍霸は、落胆半分安堵半分の微妙な気持ちで、目を覚まさない友人を見た

その時軍霸は何か閃いたらしく、自信満々の笑みを浮かべた

「うん我ながら名案だ待ってるよ、やぶ今起こしてやるからな」

訳のわからない事を言いながら本人は至って真剣な様子で、人工呼吸いや根性注入のために唇を矢文に近づけていった

（何だうるせえな 敵が来たのか？）

いつの間にか力尽きて眠ってしまった原谷矢文は、突然耳元に聞こえてきた

大声で目を覚ました まだ朦朧とする意識で矢文は眠る前の事を

思い出す

（確か天狗面の奴が窓から落ちていくのを見た後、走って移動中に出血のせいかフラついて倒れちまって、一応応急手当してたんだが、そのまま寝ちまったのか）

矢文が眠る前の事を思い出して、意識が目覚め始めると、さっきから聞こえてきていた雑音の音がはつきりと聞こえ、その内容を把握した

声は

「根性注入」と叫んでいた

「うるせえんだよ、さっきから」

完全に目覚めた矢文は、うるさい声にイライラしながら、声の聞こえる方を見る

瞬間金縛りにでも、あつたように矢文は固まった

無理もない寝覚めの最初に入ってきた景色が、野郎がキスしようとして目を瞑って迫ってきているのだ

ゲイでもない限り、目覚めの光景のなかでは最悪の部類にはいる。

しかもその野郎は 根性ーなどと、訳のわからない叫びを上げているのだ

気の弱い者なら悲鳴の一つを上げるのは間違いないだろう

だが矢文は気の弱い者でもなければ、ましてゲイでもない
彼は固まっていたが、そこから回復すると、右手に自身の能力で
エネルギーを集め、軍覇にも負けないうぐらいの叫びを上げな
から

「俺はノーマルだぁー!!」

念動力による衝撃波を目を瞑ってキスしようと迫ってくる、
軍覇の顔面に叩きつけた。

「おうやぶ。」

俺の根性注入を」

矢文の叫び声を聞いて目をあけた軍覇は、仲間の無事を確認す
る間もなく、天高く吹っ飛ばされ錐揉み回転しながら、壁に叩きつ
けられたのだった。

それからしばらくの間軍覇をホモと思い矢文が警戒したのだがそ
れは別の話である

原谷矢文が最悪の目覚めをしていた頃、今まで眠りについてい
た少女が目を覚ました

木原那由他である

その彼女が最初に起きて感じたのは、振動と女性の激しい呼吸音だ
った

「ん……うんは」

那由他は起きて目をあけ、自分の周りを見る。
どうやら誰かに背負われているようだ

「誰あの時のお姉さん？」

那由他は以前も気絶した後背負われた事があつた事を思い出す
「違うあのお姉さんじゃない……じゃあ一体」

那由他は自分を背負っている人物をよく見た

常盤台の制服に、胸に何かペンダントかネックレスのような物
をつけている

髪は短い茶髪

息が荒いのは、自分を背負いながら走っているからだ

自分を背負っている人物が誰かわかり、 那由他は思わずその
少女の名前を大声で呼んだ

「超電磁砲のお姉さん！」

と

その那由他の声が聞こえたのか、背負っている少女はピタリと立
ち止まり背負っている那由他の方に首だけで振り向いた

「お目覚めのようで 安心しましたとミサカは、このまま背負い
続けるのは正直きついという本心を隠しながら、無事に目覚めた少
女を笑顔で迎えます」

本心を全く隠していないが、御坂妹は宣言通り、那由他に満面の笑顔を向けるのだった

「超電磁砲のお姉さん？」

那由他は自分を背負ってくれている、少女を再びよく見た何か引つかかる

超電磁砲とは一度会った事がある資料も飽きるほど見た。だから違和感を感じた

（似ているけど違うの？

でも超電磁砲に姉妹や兄弟はいないはず 待つて今何か引つかかった）

那由他は自分の記憶の中にある情報を思いだそうと更に深い思考に入る

そして答えに行きついた

その答えを口にした

「あなたは超電磁砲のお姉さんじゃない もしかしてレディオノイズ計画で造られたシスターズなの？」

「はい。 ミサカは10032号通称御坂妹ですと少女に自己紹介します」

御坂妹は那由他の疑問にあっさりと正直に答え自己紹介するのだ

った

「木原那由他さんですかとミサカは自己紹介された少女の名前を復唱します」

その後自己紹介した那由他はすぐに御坂妹の背中から降り床に座り込んだ。

それを見た御坂妹は何故か体育座りで那由他の隣に座った

現在那由他は失った腕や自身の損傷をチェックしている

「怪我の方はとりあえず命に別状はなし 動けないほどの疲労もなし、厄介なのは片手を失った事によるバランスが上手く取れない事。」

まあ戦えない事はないかな。

シスターズのお姉ちゃんありがとう」

那由他は隣に座る御坂妹に礼を言う

「いえ気にしないで下さい。」

困った人を助けるは当たり前だと、 あの少年が言ってましたとミサカは言います

だから気にしないで下さいとミサカは会ったばかりの少女を気遣います」

御坂妹はそう言いながら、那由他の左肩を見る肩から先がないその肩を

「話は変わりますが痛くないのですかと　ミサカは片腕のない小学生の痛々しい姿に胸が痛みます」

心配気な表情を御坂妹は浮かべる

そんな御坂妹に那由他は安心してとばかりに、ぱつと立ち上がり笑みを浮かべる　その笑みに痛そうな　様子はない

「ありがとうシスターズのお姉ちゃんでも大丈夫、一度失った物をまた失っても　痛くないよ片腕を失ってバランス感覚は狂ったけど平気」

そう言って那由他は　ぴよんぴよんとその場でジャンプする

「義手だったと言う事ですかとミサカは　自分の考えを述べます」

「んゝ半分正解かな　確かに左腕は義手だよ。

正確に言つと私の体は約七割が生身じゃないのつまり生体義肢いわゆるサイボーグってやつなの」

那由他は自分の暗い過去をあつさりと話す

その那由他の言葉が御坂妹に衝撃を与える

こんな衝撃を前にも受けた事がある

とある少年が自分たちの存在を大事だと言った時だ

「あなたは何故ここにいるんですかと、ミサカは質問します」

「私はここにさらわれた子供たちを救いに来たの私は風紀委員だからね」

「そんな子供なのにですか」

「関係ないよ私は、見たくないのこの街の闇に犠牲になる子供たちを見たくないの」

凜とした様子で那由他は決意を込めて言う

その那由他の声から強い断固たる意志をミサカは感じた

それはあの少年や彼女の姉が見せるものだった

「というわけだから 私は行くね。」

シスターズのお姉ちゃんが何でいるか知らないけど、早くここを離れた方がいいよ。

他の敵はどんなのか知らないけど、私を気絶させた瀧河大我は女子供でも容赦ないから」

そう言って忠告した 後那由他は再び戦場に戻ろうと歩きだす
そしてどんどん御坂妹から離れていく

「待って下さいとミサカは叫びます」

ミサカの声に気づいた那由他は御坂妹を見る

「まだ何か用があるの？
シスターズのお姉ちゃん」

那由他は御坂妹の大声にびっくりしたのか、面食らった様子である

そんな那由他を見ながら、今度は御坂妹がりんとした声で決意を告げる

「ミサカはここにさらわれた同じシスターズ19990号を助けに来ましたちなみにお姉様も来てます

だからお姉様と合流しようと思ったのですが」

とそこで御坂妹は、話を一旦止め、胸に手を当ててから再び話だす

「ミサカは敵の正体とか詳しい状況は知りません
あなたは詳しいようですねとミサカは判断します
それに他にも被害者がいるなら捨てては置けないとミサカは思います」

「だったらどうするの？」

那由他がそこで御坂妹の会話に割り込む

「あなたに協力しますとミサカははっきり告げます」

御坂妹は強い意志のこもった鋭い視線で　　那由他を見ながら、りんとした声で決意をあらわにした

御坂妹の鋭い視線を正面からしばらく受けていた、那由他はやがて小さなため息をひとつ吐いた後

ゆっくりと御坂妹に近づいて行く、そして目の前まで行くと

残った右腕を前に出し握手を求めてくる　その右腕を御坂妹は両手で握った

「説得しても聞きそうにないね。

シスターズのお姉ちゃん」

「ミサカに二言はないとミサカは更に力を込めてあなたの手を握りながら言います」

呆れた感じで言った那由他に御坂妹はてこでも動かない様子を見せる

「私は自分を守るので精一杯、通信機であった腕輪を無くしたから、仲間と連絡も取れないの

だから自分の身は自分で守ってね」

那由他が御坂妹を睨み返ししながら、覚悟を促す

「大きなお世話です　ミサカは自分の身ぐらい自分で守れると自信を持って言います」

御坂妹はきっぱりと言い、右手を那由他から離し、胸をドーンと叩く、任せるとばかりに

「シスターズのお姉ちゃんの気持ちはわかったよ。

じゃあ一緒に戦かって子供たちを助け出そう。

付いて来て」

もうこれ以上の会話は不要と思った那由他が、駆け足で走って
く

「先頭はミサカに任せて下さいと、ミサカは言いながら、あの少女
追いかけていきます」

御坂妹は走っていく 那由他を慌てて追いかけていった

こうして二人の少年と二人の少女が合流したのだった

第五話第四章その2 (軍覇合流とミサカの決意) (後書き)

いかがだったでしょうか

ではご意見 ご感想何でも待ってます

特にスランプになりやすいので、アドバイスは喉から手が出る程欲しいです

お手数ですが宜しくお願いします？

第五話第四章その3 (単独行動の黒子と美琴) (前書き)

今晚はとある野望の凶刃最新話投稿です

今回は前回出番のなかった黒子と美琴が

登場します

第五話第四章その3（単独行動の黒子と美琴）

一方その頃、仲間と合流していない白井黒子は一人

途方にくれていた

「まずいですわね」

黒子は顎の下に指をのせたポーズで考え込む。

考える事はここに眠らされて監禁されている被害者たちの移送についてだ

「私の能力では一度　に二人一緒にテレ
ポートするのが
限界ですの対し
て救出者は七名
困りましたわ」

「腹立たしいですわ　腕輪が壊れたので　連絡も取れない
ですし。　探しに行くわけに
も行きませんの。
といつてもいつまでもここにいて、敵に
包囲されたら凌げ
ませんし。」

携帯は木原さんと原谷さんは番号知らないと言うか、聞き

忘れてましたし
外に応援をと初春に 電話しても繋が
りませんし、全く私が 困っているとい
うのに、頼りにならない
相棒ですわ」

と言った後、黒子
はため息を吐き
背後にある壁にもた れる

「はあ………違い
ますわね。

初春にあたっても
仕方ないですよ、

一番悪いのは無力な 自分自身ですの。
あの陰険シヨタコンテレポーターなら
7人どころか10人 以上でも余裕で運んで
いますの。あれほどの
力があってもレベル4全
く前々から知っては
いますが、レベル5
の頂の何と高い事か
挫けそうになりま
すわ」

黒子はそう言いながら、もたれている
壁をズルズルと滑り 座り込む

しばらく無言に
なつた黒子はぼくと天井を見上げる

しばらく無言で

天井を見上げて

いた黒子は急に

勢いを付けてピョン

と跳び跳ねて立ち上がる

「つてたそがれ

てる場合ではない

ですの。

無い物ねだりを

しても仕方ないですの

気が進みませんが

数は力、眠っている 子供たちを起こして

能力者がいるなら協

力をお願いするしかないですわね」

黒子はそう結論付けると、早速行動に

移るのだった。

黒子が一人苦悩している時、もう一人

の単独行動を取って いる御坂美琴は

物陰に隠れながら

尾行の真っ最中だった。

「こういうのは、

あんまり得意じゃ

ないのよね」

美琴は疲れた表情

で前をゆっくり歩いている瀧河大我を、

監視している

(一体何するつもり よ)

美琴は、よく見ようとして無意識のうちに、前のめりになっ
た

パン

そんな無防備な

状態の美琴の耳に 一つの銃声が聞こえた

(何！)

不吉な予感を感じた 美琴は咄嗟に地面に 倒れ込む、銃弾は
ほんの数秒前に美琴の頭があった空間を 通りすぎていく

いかにレベル5と

いえど、もし直撃してたら今ごろ頭は割れたスイカのように真っ
赤な火花を咲かせていただろう

弾丸はそのまま

直進しやがて背後の壁にめり込んで止まった

が美琴はそんな事を 気にしている暇がなかった

銃弾を避けた美琴 に更なる追撃が目前 に迫っていたから

だ

「銃弾！ 気づかれ た」

自身を襲った弾丸 を何とか避けた美琴 は、反撃のために
すかさず体のバネを 活かして立ち上がる
しかし悲しいかな

14才の少女には
それが愚策だという 事がわからない
戦闘中に倒れたら、 迂闊に立ち上がらない方がいいのだ
立ち上がる時の隙を 狙われやすいのだ
案の定狙われた
立ち上がった美琴を 待ってましたと出迎えたのは、瀧河大我
の跳び膝蹴りだった

ゴッ

瀧河大我の渾身の 一撃が美琴の顎を
撃ち抜く

「しまっ……」

衝撃が頭を揺さぶり、美琴の意識は一瞬遠のき、そのまま
闇に落ちていかなかった

「まだよ」

美琴は自分の顎に めり込んでいる
大我の右膝を両手で 掴みそのまま放電 一瞬で美琴の両手
から人一人軽く失神させても、お釣りが来るほどの電撃が大我の右
膝をつたい全身に電撃が走る

バチバチイと放電 音が辺りに鳴り響く

しかし大我は電撃 を浴びているのに

涼しい顔で笑みを
浮かべている

「効かん」

そう言いながら大我は膝蹴りしてない方の左足で美琴の腹を蹴
った

「ぐっ」

たまらず美琴は両手を右膝から離し、
バックステップして
距離を取る

「嘘電撃が効かない？」

美琴は蹴られた箇所を左手で、撫でながら信じられない
という
思いで大我を 見た

その大我は美琴に 手を離された後
見事に着地し、平然と立っている。

「下手な尾行お疲れ様超電磁砲。

けど尾行は下手だったが、銃声に反応
してギリギリで避けたのは見事と誉めてやる。

正面からやりあっても勝てないから、逃げ出したと見せかけて、
不意打ちを狙ったとは随分姑息じゃねえかでも嫌いじゃねえぜ。

そういつなりふり構わずってのはよ」

大我は余裕を見せながら、美琴に不用意に近づいていく

むろんその接近を許す美琴ではない

「っの」

美琴の声が終わる

と同時に雷撃が地面を高速で走り大我を

襲う

「ん」

だが最強の電撃使いの雷撃にも先ほどと同じく大我は全く動揺しない

懐から何かを取り出すとそれを地を這う雷撃に投げつける

大我が投げつけた物体が雷撃にぶつかり雷撃を防ぐ

「避雷針！」

美琴は大我が放り投げた物体を見てその正体を正確に把握した

大我の投げつけた物体は大我が先ほどの戦闘で折れた自分の刀だった

大我は折れた刀を

避雷針代わりに使ったのだ

「どこを見てる」

避雷針に気を取られた美琴の隙をついていつの間にか、大我が触れるほどにまで接近していた。

大我は右拳を握りしめながら、脇を締め 右肘を後ろに引き

膝を曲げながら、 美琴の顎をめがけ 前に突き出す

ひざのバネに肩と腰の回転力も加えた

大我の右アッパーが 一直線に急上昇し 美琴の顎めがけて

突き進む

「そう何度もやられてたまるかー」

美琴は下からの猛追を上から真っ向から迎えうつた

右拳に電撃を纏い その雷拳による撃ち 下ろしの右ストレ

ートが、大我の右アッパーと空中で激しく ぶつかる

雷撃の光が辺りを眩く照らす

「まだまだ」

美琴は右拳の電撃の威力をさらに高めて 強引に押し切ろうとする

ぐぐつと徐々にだが 美琴の拳が大我の拳を押ししていく

レベル5の桁違いの 電力が体重と筋力差という圧倒的な不利を覆す

「どう痺れてたまらないでしょ」

美琴はぐいぐいと　そのまま電撃と体重　を加えていく

「効かんな超電磁砲」

美琴に押されているのにも関わらず
大我には何故か余裕があった

「そうやって余裕ぶっこいてられるのも　今のうちよ」

美琴はここが正念場　とばかりに力を振り絞る

（電流操作を極めて繊細に行い肉体を強化厳しいけど長期戦
になったらこっちが　負ける）

「チェックメイトよ」

電気信号を操作した　美琴の拳の威力は跳ね上がりさつきまで
僅かにぐいぐい押していたのが嘘のように上からの美琴の拳が均
衡を破り一気に　大我の拳を押し返す

なのに大我は余裕の　表情を崩さずこう言った

「お前がな超電磁砲」

次の瞬間大我は力を　ふっと抜いた

「えっ」

全身の力を込めていた美琴が勢いつきすぎて前のめりになり　　バ
ランスを崩す

大我はそんな美琴を　しり目に背後に跳びながら空中で懐に手を
入れて拳銃を取り出し美琴に狙いをつける

「まずい」

美琴は倒れながらも　右拳に纏っている電撃を咄嗟に雷撃の槍に
して拳銃に叩きつける

バチィと狙い通り雷撃は拳銃に辺り、大我は思わず拳銃から
手を離してしまい

拳銃は地面を転がり　カランツと乾いた音をたてる

（危なかった　でも　凌いだわ）

美琴はトドメの一撃を凌げたので安心し　　思わず一瞬気を抜い
てしまう

その直後背後から凄まじい轟音が聞こえ　　てきた

（後ろ？）

美琴が音に気づいて　振り返った視界一杯に写ったのは巨大な斧
の先端とそれを振り下ろす黒い鉄の巨人の姿だった

ブォーンと勢いよく振り下ろされた斧を　ただぼー然と美琴は
見ている事しか出来なかった

直後凄まじい衝撃と震動が美琴を襲うのだった

やがて震動と轟音が収まった後

そこには巨大なクレーターと瓦礫などの残骸があるだけで

美琴の姿はどこにも　見当たらなかった

そんなクレーターの近くに一つの人影があつた言わずもがな

瀧河大我である

「切り札は最後まで　取っておくそれが勝利の秘訣だぜ超電磁砲

しかしステルス機能付きの巨大駆動鎧

遠隔装置付きなんて　試作品がよく上手く動いてくれたぜ。いく
ら超電磁砲とは　いえこの騙し打ちは一たまりもないだろう本命の
攻撃をギリギリまで悟らせないとはいえ、素手で超電磁砲の相手は
疲れたぜ、遠距離から銃を撃ってたら、向こうに超電磁砲を撃たれ
ちまうからなそれに冷静に周りを見る時間を与えたら、敏感な電気
センサーで　ステルス機能で密かに近づく駆動鎧に　気づか
れる恐れが　あつたからな。

そうならないように　するには、近距離で　接近戦で攻めるしか
ない幸い俺には痛覚遮断の能力があるからな電撃の槍ぐらいなら耐
えられる

だがまだ油断は出来ないそこで拳銃だ。

これをギリギリで出すことによって、

向こうはこれが俺の　切り札と錯覚したわけだ。

そこにトドメの一撃　我ながら完璧な作戦だったな完全にレベル

5を手玉に取っていたぜ

剣士だけではなく軍師の才能も俺は持つてるいるのかもな」

そう言つて瓦礫の山の中で一人大我は悦に浸り続ける

大我は斧を地面に叩きつけた状態のまま　沈黙している全身黒色
の五メートル程の　巨大駆動鎧を見上げる

「さて先ほどの震動　に気づいて残りの敵　もやってくるだろう
出来れば超電磁砲の死体でも見つけて　駆動鎧に持たせてや
つたら敵の志気を砕いて、有利に事が運ぶのだが、この有り様では
探すのは無理か

まあいいさつさと　こいつに乗り込んで　残りの敵を片付け
るか次は木原那由他だ　」

ハ―ハツハ八と大我　は笑う。

「へ〜随分余裕じゃない敵に背を向けて
大笑いしてる何て　私にはとても真似出来ないわ」

そこへ冷水どころか頭に氷塊でも叩きつけるような心胆　を
凍てつかせる声が　大我の耳の中に入ってきた

「は？」

一瞬大我は空耳かと　思い首をぶんぶんと振る有り得ないと
ばかりに

「ほんと余裕ね。」

このまま後ろから

電撃叩きこんじ

やっていいのかしら」

空耳であるのを否定 するかのよう
に
再び凍てつかせる声が聞こえてくる

さすがに空耳とは

思えず壊れたマネキンのようにゆっくり

首だけ振り向いた

その先には、死ん

だはずの御坂美琴

が青白い電撃を全身 から放電しながら

片手を腰にあてて

立っていた

ボロボロの両袖や あちこち破れた制服を着ながら

しかしそんなものは 大我の目の先にはなかった

彼はまるで美琴を鬼か悪魔でも思ったのか、恐怖に満ちた表情で
見まもなく、大

の男とは思えない 女のような高い声で 絶叫を放つのだっ
た

第五話第四章その3（単独行動の黒子と美琴）（後書き）

いかがだったでしょうか 美琴が無事だった説明は次の話で明らかにしたいと思います

ありがとうございました？

第五話第四章その4（美琴失態取り逃がした警備員）（前書き）

今回はちょっと長いですが読んで頂けると嬉しいです

第五話第四章その4（美琴失態取り逃がした警備員）

「やっと収まったみたいですね。

それにしても今の轟音と震動は一体？

」

その頃地下室で孤軍奮闘している白井黒子は、眠らされている子供たちの中から頼りになりそうなものを起こそうと一人の少年を揺り動かしていた

美琴が奇跡の復活を成したのとほぼ同じ頃だ。

無論黒子はお姉様が同じ施設内にいる事は知らない

「不吉な予感がしますわね。

皆無事だといいいのですけど……」

黒子はいまだ合流できずに仲間たちを心配した

「おっと時間がないですね。

もしすみません起きてくださいます」

黒子は仲間たちの心配をするのを一旦止め、先ほどまで起こそうとしていた少年を起こそうと再び 肩を両手でゆすりだす

「うん」

少年は揺すられたのが嫌だったのか、唸り声を上げた後、寝返り
をうって黒子の腕から逃れた

「もういいですわ」

黒子是一向に起きない少年の様子を見て 諦めて空中に止まっ
ていた手を戻した

それから片手で額を 抑えた

「いけませんわね 私とした事が弱気になつてますの。
仲間とはぐれ、一人 おまけに外に連絡は つかないまずい状況
ですわ」

黒子はちらつとはまだ眠る少年の方を見る

「手助けしてもらおうとは少しむしが良すぎですわ。
でも私一人で皆を抱えて逃げられない以上起きて自分の足で
逃げてもらうしか
うん？あれはうちの制服！」

黒子は眠る少年の後方にうつ伏せに眠る自分と同じ制服を着る少
女に気づいて声を荒げる

そしてよく目を凝らしてその少女を見て　あまりのことに体が
おこりにかかったように震えだし口をパクパクと開く

「そ……そ、そんな　馬鹿な事がどうして　お姉様が」

黒子は信じられないとばかりに驚愕な顔で見ていたが、すぐにテ
レポートし少女の下に着き、慌てて抱き起こす

「信じられませんわ　お姉様が捕まえられるなんて、お姉様一体
何があつたんですの？　お姉様ー！」

敬愛する先輩が捕まるという信じられない光景を見た黒子はとう
とう絶叫したのだった

「くそ」

眩い青白い光に目を背けそうになつたが、大我は我慢して
その光を見続けた

ここは隠し部屋である巨大駆動鎧の保管室である
現在2人の人間がこの部屋で対峙していた

一人は悪徳警備員に　して警備員の中でも　近接戦闘に関しては
五指に入る使い手に　して統括理事の甥
瀧河大我

そしてもう一人は

「ほんとやってくれたわね。

気づくのが後数秒遅かつたら死んでたわよ」

怒れる学園都市第三位御坂美琴だった

美琴の啖呵に大我は一瞬たじろぐが、
冷静さを何とか取り戻して言い返す

「死んでたわだと、死んでるはずだ
あれだけ完璧に不意を突かれ対応する間などなかったはずだ」

大我は虚勢を張って美琴に有り得ないとばかりに怒鳴る

そんな大我を美琴は 憐れみを込めた目で見る

「確かに死ぬかと思ったわよ。まったく女の子相手に駆動鎧で背後から不意打ちって汚すぎるわよ、ギリギリで あんたが追撃してこないのを変に思ったら悪寒が走ったから 後ろを見たら斧が 眼前何だもん

とつさに斧に触れて 電撃を思いっきり放つてその反動で何とか逃げれたけど、避けるので精一杯で、 着地にの事考えられなかったら、勢いつきすぎておもいつきり壁にぶつかったから、まだ頭がガンガンするのよね

そう言いながら、痛いとはかりに美琴が自分の頭を撫でる

そう説明しながら美琴は腕組みする

「それじゃ私が無事なのを理解したところで、今からあんたの顔

面に思いつきり一発ぶち込むから
歯をくいしばれー」

美琴は限界とばかりに怒りをあらわにすると、腕組みを解きながら
突進しつつ　右拳を握りしめる　握りしめた拳に青白い光の
雷が纏う

「おのれ小娘が、調子に乗るんじゃねえ」

完璧な作戦を破られた大我は憎い憎悪を宿した目で超電磁砲を見
ながら、飛びかかっていく

「これで終わりよ」

とびかかってくる自分よりも数十センチも大きい男を見ても
美琴は恐れず右拳を　高速移動の勢いを利用して叩きつける
美琴はとびかかってくる上空の大我に、斜め一直線に打ち上げ
るように雷光を纏った右ストレートを　大我はとびかかってき
ながらの状態で　顔面にダブルパンチを

顔面に迫るパンチに怯まず美琴は防御も気にせず突き上げる
この勇気が美琴のパンチに勢いをつけ
下から上がっていく　パンチが上から叩きつけるパンチに速さで
わずかにまさり、　大我の土手っ腹に　美琴の拳が突き刺さ
った。

そのまま拳から電撃が流れ、電流が大我の体を駆けめぐる

「ぐっー」

いかに痛覚を遮断しても電気が流れている事に変わりはない

大我は強烈な電撃を 浴びて呻き声を上げる

「今度こそ吹っ飛べー」

美琴は両足からも電気を発電しジャンプしようと、両脚に力を込める

足に力を集中した

「甘いわ！」

その瞬間大我がかっつと目を見開き、片足で美琴を突き飛ばすように蹴る

ガツつと鈍い音をたて蹴りは美琴の左肩に当たる

「そんなもの」

美琴は大我の苦し紛れの蹴りを意にも介さず、右ストレートをさらに押し込む、その勢いに耐えきれず大我は吹っ飛ばされて、沈黙する巨大駆動鎧の足元に叩きつけられる

ダンつと背中から叩きつけられた大我は 一回ほどバウンドした後横に転がった後止まった

「がは！」

大我は口から血を吐きながら、よろよると立ち上がる。

かなりのダメージを受けたようだが目は死んでいない。その目は飢えた狼のようにぎらついている。

大我は口元に笑みを浮かべながら、右手で口元の血を拭う

「痛みを感じないこの能力がなかったら間違いなく気絶してたな。

少々ダメージを食らいすぎたが、計算通りだ」

大我はそう言いながら、目の前にある巨大駆動鎧に近づいていく

それを見た美琴が慌てだす

「しまった！ 駆動鎧に乗り込むのが、こいつの狙い」

(カじゃ私にかなわないのを知って)

「そうだ。力でごり押しすれば勝てると思ったんだが、お前はどうかやら筋力とかを自分の能力で上げられるみたいだから、生身ではかなわないと思ってな

こちらら戦闘のプロだお前に強大な能力という才があるなら俺には修羅場をくぐり抜けて得た知恵と経験がある、超能力者と言えど簡単に倒せると思うな」

大我は外から内部に入るためのスイッチを押すとそのまま滑り込むように巨大駆動鎧の中に入り込んでいく

「させるか」

美琴は電撃を大我に向けて放つが、僅かに大我が中に入り込むのが早かった

電撃は巨大駆動鎧の 装甲にあたりはじけて消える

「はあはあ……危なかったぜ」

駆動鎧の中に入った大我は、早速起動準備に入る自動操縦から、人の操縦にモードを切り替える

「故障箇所はなし 動かすのに支障は ……ん？ どういうことだ」

大我は操縦席の周りにあるモニターや計器類を見て異変に気づく

「バッテリーが残り電力が殆どないと ちよつと動かしただけで何故残量がこんなに少ないんだ ……まさか」

大我は巨大駆動鎧のカメラ越しに外にいる美琴を驚愕の眼差しで見ると

「そういうことか」

あの攻撃から逃れた後妙に電力がアップしていたのはこういうわけか、おのれ 超電磁砲キサマ電気を盗んだのか！

大我がコクピット内で声を上げそれをスピーカーが増幅させて美琴に聞こえる

その喚きを聞いた美琴が不敵な笑みを浮かべる

「一瞬触れただけだったからあんまり取れなかったけどね」

そう言っつて美琴は左手から電気を出す

バチィと電気が美琴の手のひらではじけて踊る

「この化け物が！」

巨大駆動鎧が持っている斧を美琴目掛けて投げつける

投げた斧が縦回転でくるくる回り美琴に 飛んでいく

「悪あがきを」

美琴の体から雷撃の槍を放ち斧にぶつける

雷撃を受けた斧は美琴の雷撃に打ち上げられて舞い上がった後、
地面に落ちる

ドンと大きな音が鳴り美琴の足元を揺らす

「まったく悪あがきにも程があるわよ。 テレスティーナでも
こんなにしつこくは っつて、いない！」

美琴は辺りを見渡すが、巨大駆動鎧の姿はどこにも見えなかった

「嘘逃げられた

まずい早く追わないと」

美琴は巨大駆動鎧の後を追うべく走り出そうとするが、足に力が入らず両膝を地面に付き倒れそうになるが両手を付いてそれを防ぐ

「フーフー……電気は補充出来ても疲労してるのに変わりはないか」

しばらく荒い息を

美琴は吐き続けるがだんだんと呼吸が落ちついてくる呼吸が落ちついて来た美琴はゆっくりと立ち上がる

「電気の補充は出来ても体力は回復しない以前超電磁砲は撃てて後一発ね」

立ち上がった美琴はコキコキと首を振り体をほぐす

「ほんと小狡い奴よね大方さらったシスターズを人質にとか考えてるんでしょうけど、そう簡単に私から逃げられるかしら」

そう言った後美琴は目を閉じる

しばらくした後ゆっくりと美琴はゆっくりと目を開いた

「つかまえた。

あつちから大きな電気の流れを感じたわ
すぐにおいつくから首洗って待ってなさい」

美琴はそう言った後 全力で駆け出した

その頃大我は巨大駆動鎧で地下室目指して移動中だった

「今度は俺が逃げ出す方が、さすがはレベル5だけの事はあるか」

大我は自動操縦に切り替え、地下室に付くまで休む事にした

「ふうう 一刻も 早く人質を取って 超電磁砲を仕

留めん とな木原那由他達と合流されたら厄介だ

我孫子の奴からの連絡はなし、こちらから返しても反応なし
やられたか。

冬牙は逃げたな
相変わらずちゃっかりしてやがる」

大我は不甲斐ない弟子たちを罵る

「まあいい。とにかく人質だ超電磁砲さえ何とかすれば後はど
うとでも」

大我が今後の作戦 練っていると駆動鎧のモニターに人影が
見えた

「那由他の仲間か」

大我は確認すると　　なんの感情も持たずに引き金を引いて
ロケットパンチを発射した

時は数分遡る

一階の廊下を二人しての少年が走っている、合流した削板軍覇と
原谷矢文だ

「おい削板こつちで　あつてんのか」

先行する軍覇の
背中を見ながら、原谷が言う

「間違いないさっきの轟音はこつちから聞こえた」

そう軍覇が答える

合流した後轟音聞いた軍覇が嫌な予感がすると言ったので現在二人は、音の発信源目指して走っているのだ

「それならいいんだけどよ。」

あのデカイ音を聞く限り何か爆発したとかあるいは崩れたりした
んだらうから、　もし那由ちゃんとか　白井ちゃんが巻き込まれ
てたら怪我下手したら重傷を負ってるかもしれない」

原谷は青ざめた顔で 心配気と言う

それを軍覇は黙って 聞く

その時何か風を引き裂くような轟音が 二人の耳に聞こえてくる

「何の音だ」

矢文が耳をすまして 正体を知ろうとした 瞬間、前を走っていた軍覇が急に方向 転換し後ろにいる 矢文に抱きついてくる

「だから俺にそんな 趣味はないって」

迫る友に言い知れぬ 恐怖を感じた矢文は とっさに念動力で 攻撃してしまう

だが軍覇は矢文の放った衝撃波を食らっても、痛がるそぶりも見せず抱きつくと そのまま

「すごいジャンプ」

と言う根性が入った 叫びを上げて大ジャンプする

その直後一つの巨 大な鉄の拳が原谷 を抱える軍覇の

真下 を通過し壁に大穴を あけた。

あけた大穴から外の 寒い夜風が入り込み 原谷は体をぶるつとふるわせた

友の様子の変化に全く気づかない軍覇は鋭い目をある一点に向けている。

「すごいパンチ」

その一点目掛けて軍覇は必殺すごいパンチを放つ。

謎の波動が軍覇の拳から出て、なにもないはずの空間を風ぐ

すると金属か何かの 甲高い音が鳴り響いた後謎の波動は消えた

すごいパンチを 打った後、天井を 蹴りとばし、そ

の反動で矢文を抱えたまま軍覇は地上に飛び降りた

ズンと結構な衝撃が 足を伝わるが、軍覇 は平然として何もな
い空間に指を差す

「出てこい！ 隠れているのがわかってる以上、不意打ちは効
かんぞ」

軍覇の大声が辺りに 響くがすぐに静かに なる

一分程静寂が訪れる

「全くレベル5と

言うのは常識を覆す のが好きなだな」

突如大人の男の野太い声が聞こえると、 先ほどまで何もなか

ったはずの空間に、 巨大な鉄の巨人が現れた大我が操る巨大駆

動鎧だ

「頭で考えるより　体が先に動くタイプと思っていたんだが、ワイヤー式射出アームの軌道から、　こちらの位置をつかむとはな」

大我が忌々しそうに軍覇に言う

だがそんな嫌みを軍覇は全く気にせず
指をポキポキと鳴らす

「そんなもんに乗ってるって事は、お前が那由ちゃんの言ったた敵の親玉瀧河大我だな」

軍覇が拳を腰にひきつけて構える

そんな軍覇をモニターで見ながら大我は　軍覇の質問に答える

「正解だ。　那由他　に聞いたかまあいい　ここまで人のビジネスを邪魔したんだ　皆殺しにせねば俺の　気が収まらんわ」

そう言い終わると同時に大我は巨大駆動鎧を操縦しロケットパンチを今度は2つ同時に発射する

それを見た矢文が慌てて軍覇に話しかける

「削板早く俺を降ろせ闘いにくいだろ」

矢文が体を激しく　動かし軍覇に降ろすよう促す

それに対し軍覇は 無言でしゃがみこんだ後矢文を地面に
下ろす

「やぶお前は、那由 ちゃんたちを探し にいけ」

下ろした矢文に背を向け軍覇は言う

「わかった。 でお前は？ って聞くまでも ないか」

矢文はやれやれと言った感じで頭を掻く その後真剣な表情で
軍覇を見る

「削板。

俺是那由ちゃんと 白井ちゃんそして さらわれた子供
たちを命がけで守る

お前はあいつを瀧河大我のクソヤローを ぶっ飛ばせ男と男の
約束だ……守れよ」

矢文はそう言って

巨大駆動鎧を睨む 軍覇の横を走り抜ける

「もちろんだ」

そう言った軍覇は 唸りを上げて飛んでくるロケットパンチ向
けて走り出した

直後軍覇の根性の入った叫び声と強烈な風を背中に感じたが振
り向く事はなかった

守るべき者ため二人の友たちは合流後　まもなく別れたの
だった

夜風が吹きすさぶ　寒い道路に5人の　大人たちが並んでいた並び方は、一人二メートル近い長身の男が立ちその前に六人が直立不動で立っている皆警備員の服装に、ヘルメットをし盾や拳銃などを持って武装している

「皆準備はいいか」

と二メートル近い長身の男が直立不動する六人の警備員達をみわ
たす

どうやらこの男が、指揮官のようだ

部下たちと違い、　黒のタンクトップに　軍人が穿くような
迷彩柄のズボンを着いているというきわめてラフな格好に背中に3
メートル程の長い木刀を担ぎ、腰にはこれまた二メートル程の刀を
差している　部下とは正反対の軽装備だが、放つ威圧感は完全武装
した　部下たちとは比べものにならないものが　ある。

それもそのはず男の名は牛窪範正　警備員　武道師範の役に付く
武闘派警備員の雄　近接戦闘では警備員の中で五本の指に入る
強者で、レベル4とて素手で黙らせるという噂がある男だ　な
お警備員の武道師範は三人いる

牛窪の問いに対し部下たちは無言で全員頷く

その機敏な動きを牛窪は満足そうに見る

「よしこれより作戦を開始する」

そう言いながら牛窪は暗闇にそびえ立つ一つのビルを指差す
「今から中にいる者たちに投降するようにわしが呼びかける

猶予は三分、三分以内に投降の意志が確認出来ない場合は支部内に突入制圧する　なお突入時抵抗する者への発砲を許可する、共に手を取り合い学園都市を守らねばならない同志である警備員の施設にハッキングする裏切り者だ情けは無用
わかったな」

鋭い目で牛窪は部下たちを一人一人見て回る

牛窪が全員見終わった後、部下たちが待っていたように一斉に頷

く

「よろしい。ではわしはこれより49支部に対し投降を呼びかける、各員警戒を怠らず、いつでも飛び出せるように緊張を緩めるな」

そう言った後牛窪は息を大きくすい込ん　だあと拡声器を使わず大声で49支部内の風紀委員たちに投降を呼びかけるのだった

牛窪範正の大声が夜空に轟いたのは時間にして軍覇と大我が遭遇する30分前の事　だった

第五話第四章その4（美琴失態取り逃がした警備員）（後書き）

いかがだったでしょうか ではご意見ご感想何でも待ってます

特に感想や意見は 何よりの励みになり ますので奇特な方は

宜しくお願いします

次回は間章に入り那由他の仲間たちが頑張ります

第五話第五章その1（軍覇大暴れ！警備員遂に動く）（前書き）

最新話です良かったらよんで言って下さい

第五話第五章その1（軍覇大暴れ！警備員遂に動く）

「反応なしか」

そう言うってから牛窪範正はため息を吐いた

牛窪範正が49支部に 投降するように呼びかけてから既に10分 が経過していた

以前支部に動きは ない

牛窪は予定通り突入の命令を部下に下す

「時間だ。 これより49支部内に突入 する全員俺に続け」

牛窪範正はそう言うと、背後の部下たちを置いてきぼりにして前進を開始する

その時

今まで沈黙し続けて いた49支部の入り口から人が出てきた

両手を上にあげ抵抗 の意志は無いことを 示しながらゆっくりと歩いてくる

数は一人服装から見て女性のようにだ

その服装に牛窪範正は一瞬我が目を疑う

それは彼がよく知っている服装だったからだ

（うちの学校の制服 だと！ どういうことだうちの学校の生徒が何故？ 俺の記憶が正しければ、この学区内の風紀委員にうちの生徒はいなかったはずだ）

牛窪は支部から出てきた自分が勤める

長点上機学園の制服を着ている、支部からの投降者を見つづける

その行動により更なる驚愕を牛窪範正は体験する事になる

「お前は！」

投降者との距離がより近づいた事により 牛窪範正は投降者の正体を知った

「お久しぶりです teacher牛窪」

投降者が牛窪範正に 挨拶をしてきた

ウェーブのかかった髪とギョロ目が目立つ17歳ぐらいの少女だ

「布束砥信（ぬのたばしのぶ）……」

牛窪範正は投降者の 名を小さな声で呟く のを最後に黙ってしまふ

少女 投降者の名は布束砥信、彼牛窪範正が担任を勤めた教え子だった

「すごいパンチ」 迫るロケットパンチをジャンプで避けた
軍覇は空中で根性の 入った叫び声を上げ パンチを放つ

ドーン

直後、轟音がなり拳から出た謎の波動がロケットパンチを襲うが
敵もさるもの有線式を利用して引き戻し腕を収納し攻撃を回避する

その間に軍覇は地面に着地

両者は再び睨み合い にはいる

二人は無言で相手を見ながら、共に次の手を考える

(ワイヤー式射出アームでは捉えられんか)

大我は軍覇のスピードに舌を巻く

(かと言って音速の 二倍で動ける奴に 接近戦を挑むなど

自殺行為となると

策は一つ避けられないほどの広範囲を攻撃する)

大我は策を実行に移すべく操作を開始する

(俺のすごいパンチを回避するとはな　デカいのに動きが早いぜ)

軍覇も敵に感心していた

(やぶは無事に行つたみたいだな。
俺もぐずぐずしてられねえな
一気に決めるか)

軍覇は体に力を入れ　両拳を強く握りしめる

すると軍覇の背中から青赤黄色などのカラフルな爆煙が立ち上り、
両拳に不思議なオーラが宿る

「不運だったなデカ　物、俺が新必殺技を　会得したばかりの時
に出会うとはな」

ゴォー

両拳にオーラを宿した軍覇を突如熱波が襲った

『ふん。』

これなら いくら奴と言えども ひとたまりもあるまい』

火炎放射器で軍覇を 焼いた大我はほくそ笑んだ

彼が火炎放射器で焼いた軍覇の周りは 火の海と化している

『おつとあまり燃やしたままだとあちこちに飛び火する。
そろそろ消すか』

大我は手持ちの消化弾を発射しようと火の海を見据える

すると

『何』

大我は火の海の中に 人影が立っているの を見つけた

「ハアツツツ！」

大我が見つけた人影は獣のような雄々しい叫び声を上げる

直後赤青黄色のカラフルな爆煙が再び立ち登ると火の海は影も形もなくなっていた。

あまりに完璧に消えてしまったので、大我も床や壁などに残った焦げ跡がなかったら、火炎放射器を使った事すら疑っただろう。

そう思わせるほどに 炎は綺麗さっぱりなくなっていた

その光景を見た大我は思わず、自分の頬を左手でつねる

キユッ

痛かった

「夢じゃないか…… クソツタレが」

大我は歯ぎしりしながらモニターに映る軍霸を見る

「あゝびつくりした あやうく火達磨に なるそこだったぜ」

コキコキと首を鳴らしながら、軍霸は 肩を叩く

「屋内で火遊びなんていかなあ」

そう言いながら、軍霸は指で巨大駆動鎧を指差す

「その腐った根性を 叩き直してやる」

軍霸はそう宣言する とすぐさまカッツと 踏み込み、わずか数秒で巨大駆動鎧の足元に移動する

あまりの早さに大我 の目には軍霸の姿が 霞んで見えた

「くそ」

大我は慌てて消化弾 から武器を変えようとするが

足元の軍覇がガシツと駆動鎧の脚部を鷲掴みするのが早かった

「うおおおお！」

軍覇は叫びながら鷲掴みした片手をぶん回し壁に巨大駆動鎧を投げつけた

キュガツという凄まじい轟音が炸裂しそのまま駆動鎧は外へと飛び出していく

「まだまだ次はこの 拳で根性注入だ」

軍覇は右拳に膂気楼 を纏わせながら助走 してから外へと飛び出した

後に残ったのは、 完全に崩れ落ち瓦礫になった壁と、焦げ跡の残った床や、天井それと男だった

外へ投げ出された巨大駆動鎧から、何とか脱出した瀧河大我である

「ふん追いかけて行ったか、自動操縦に 切り替えといたから、時間稼ぎぐらいにはなるだろう。

全く付き合ってられるか化け物め」

大我は吐き捨てるように言った。

「まあ仮にあの巨大駆動鎧が負けたとしても保険はかけてあるとびっきりの保険をな」

大我はニヤリと笑い 窓の外を見やる

「さてとりあえずこれで一人は片付いた 多少手こずったが次は地下室だあそこ で人質を取って超電磁砲さえ片付けてしまえば、後はどうと でもなる

だがまずは失った武器の補充だな。

確か発条包帯が一階の武器庫に置いてあったな

試験運用から落ちた 欠陥品だが、それは 一般の警備員どもの話。 俺の能力と

武術の腕があればいつも使えるとは限らない駆動鎧より、体にテーパーリングするだけで常備出来る発条包帯の方が使い勝手がいい。

武器は常に携帯できるのが一番ださらに 気づきにくいというおまけつきだ発条包帯は、仕方ない時間のロスは痛いが無全な状態で挑まねば勝てる戦いも勝てんからな。

首を洗って待ってるよ超電磁砲、人質を取った後、お前の苦悶する表情が見れるのが楽しみだぜ」

大我は軍人並みの冷徹さで、仕留めるための万全な態勢を整えるだった

「兄さん無茶よ

今から学舎の園内に 行くなんで、それに あそこは女性しかないのよ。

男の兄さんが入れる 訳ないわ」

牛窪麟子は車に乗り込んでいる兄を止めようとする

何故麟子が止めようとしているかと言うと、事の起りは10分前に知ったとんでもない情報だ

その情報は投降した 布束砥信からもたらされた、思いもよらない教え子との再会に呆然としていた、 牛窪範正に布束砥信 は自分が49支部でしていたことを、自白すると、一つの資料を牛窪範正に手渡した

それは瀧河大我の

悪行を事細かく書き記されたレポートだった。

それを体をぶるぶる 震わせて見ていた 牛窪範正はレポ―

トから顔を上げて開口一番、「学舎の園にむかう」

と言ったのだ

無論それが無茶と

知ってる麟子は止めに入った

麟子の説得を車の中で聞いていた、牛窪範正だったが、チラッと麟子を見た後

車にエンジンをかけた

「兄さん!!」

麟子が行かせまいと 運転席の窓枠に手を かける

行かせないという思いを込めて、兄を睨む

そんな兄妹のやりとりを助手席に座る布束砥信が見上げる

布束に牛窪が案内するように命じたのだ

ちなみに他の部下たちは、兄妹のやりとりを君子危つき近寄らずとばかりに、離れて見ている

エンジンをかけ終わった兄は前方を見ていたが、妹の方を再び見る

「麟子」

妹の名を呼び真剣な 表情で続ける

「殺されるぞ。」

木原那由他たちは「

牛窪範正ははっきりと言っ

「それは」

麟子は兄のきつい

言葉に絶句する

「瀧河大我は、俺と同じ警備員武道師範　格闘技なら俺の方が強いが剣術や銃の　腕は奴の方が上だ　」

「でも能力者たち　よ中にはレベル5だっているのよ」

麟子は小声で反論する

「レベルとか能力者　とかは関係ない」

牛窪範正は断言する

「いくら強くても　トドメを刺せないような甘ちゃんでは付け入る隙はいくらでもある。

あいつなら死んだふりでももしくは降参したふりして背後から銃を撃ち込む事も　躊躇うまい

あるいは人質をとったりな、そんな事されたら手が出ないだろうが」

「まさかそこまでは」

「奴ならやるさ、戦いに情けは無用躊躇ったら死ぬんだ。

実戦とはそういうものだ肝に命じておけ　」

「でも学舎の園内には独自の警備態勢だつて」

なおも麟子は食い下がる、独自技術オンパレードの施設なのだ、いかに警備員とはいえ勝手に侵入したりしたら、学園都市の情報を

盗むスパイと判断されてもおかしくない
考えるだけでぞっと する話である

だがそんな妹の恐怖 を兄は一向に気にしない

「そんな警備は役に 立たん統括理事の甥のあいつの事だ
警備態勢などいくら でも裏がかける
それに援軍を頼むの も無意味
無報酬で必要以上に 危ない橋を渡ろうなどと思う奴はいない
お前も嫌ならついて来なくてもいい
迷いのある戦士など 役には立たん

麟子悪いが俺は退けんいや退くわけには いかんだ

警備員は学園都市の 正義の砦

まして警備員は風紀委員より上位

裏はどうか知らんが 学園都市の治安維持機構はこの2つしか
ない以上警備員は 学園都市の平和を守る最後の盾なのだ

「

牛窪範正はそう言うと、話は終わったと ばかりに、前方を見
助手席の布束に案内 しろと言う

「はあーわかったわよ悔しいけど兄さんは正しいわ」

麟子は盛大にため息をついた後、すかさずドアを開け後部座席に
乗り込んだ

「すまん。で他の者はどうする ？」

牛窪は妹に謝った　　後部下たちを見て
問う

お供しますと部下たちが言っつて、自分たちの車に乗り込んだのは
30秒後の事だった

「よしこれより我々　は第七学区学舎の園内にむかう
現在は非常時である　非常時に普通の法は　通用せん。

麟子は負傷を見つけ　次第手当てを最優先　に行動時は二人連れ
ていけ。

後一人は俺についてこい人選は任せる
以上」

そう早口で命じた後　大我はアクセルを全開にして第七学区に
むかうのだった

時間にすれば軍覇が　外に飛び出したのと　ほぼ同じ時間であった

第五話第五章その1（軍覇大暴れ！警備員遂に動く）（後書き）

いかがだったでしょうか

ではアドバイス等 いつでも待ってます

読んで頂きありがとうございました

第五話第五章その2（超人再び 突入警備員）（前書き）

三連休最後の日に

最新話投稿いたします

長いですが良かったら見て言って下さい

第五話第五章その2（超人再び 突入警備員）

「というわけですと ミサカは自分が何故 ここに居たか、と生い立ち及びお姉様との関係について説明を終えますとミサカは告げます」

とミサカ19090号は少し疲れた声で話を終えた

失神状態から黒子に 起こされた19090号

は詰め寄る黒子に 懇切丁寧な事情説明を行いやつと終えた
ちなみに黒子はそれをずっと正座した状態で聞いていた

最初はミサカ19090号を美琴と勘違い したままで

『お姉様おかしな冗談はやめて正気にお戻りください』とか言っていたが、シスターズで ある彼女の独特な口調と、美琴とは違う
雰囲気などを見て納得した。

「お話はわかりましたの、つまりあなたはお姉様のクローンであるという訳です のね」

黒子は喜び半分不思議な気分半分の複雑 な気分でミサカ19090号を見る

（噂は流れていましたが、まさか本当に いるとは……何だか不思議な気分ですわね）

黒子はまじまじとミサカ19090号を見る
上から下まできっちり

そんな黒子の視線からミサカ19090号は目を逸らす

「お姉様はどうか知りませんが、ミサカにそっち系の趣味はないとミサカははっきりと拒絶します」

そう言いながらミサカ19090号は、胸の前に両手で？を作る

美琴がその場にいたら私もそんな趣味ないわ！と怒鳴っただろうがここには居ないので、静かなものだ

だが黒子はミサカ19090号の拒絶に対して も心ここにあらずで 一人でぶつぶつと 言っている

ミサカ19090号は怪訝に思ったが、黒子の声が聞こえなかったので、ほづつておく事にした

しばらく一人言を言っていた黒子だが、急にミサカ19090号 ににじり寄る

「一つ聞きたいのですの」

黒子は人差し指を立てながら、ミサカ19090号に質問する

「何ですか？とミサカは一応貞操を守る用心で後方にじりじりと下がりながら 警戒します」

ミサカ19090号は険しい表情で黒子を見る

「お姉様のクローン と言うことは肉体的にも能力的にも同じなのですか？」

黒子は普段の大人びた様子とは違って変わった年相応の少女に戻り目をキラキラさせながら、ミサカ 19090号に言う

「はいあなたの言うとおりですとミサカは肯定します。より詳しく言うと

肉体的にはオリジナルのお姉様と全く同じですただ能力に関してはレベル3の電撃使いですが、ちなみに私たち妹達にも個人差がありレベル 2の者もいますと ミサカは説明します」

ミサカ19090号は

警戒しながら説明する

それに黒子はうんうんと頷く

「なるほどつまり能力以外は大体お姉様と一緒に言うわけですねって私達？

もしかして他にも お姉様のクローンは いらっしやいますの？」

黒子はふと気づいた ことを遠慮なく聞く

それにミサカ19090号はうざそうに思いながらも、ちゃんと答える

（お姉様のお友達に は優しくしないと いけませんねとミサカはオリジナルであるお姉様を気づかいます）

そう心の中で納得した後答える

「はいミサカたちは 妹達と呼ばれています。 私たちは二万体制作されましたが、実験により10031体が廃棄となり現在残っているのは、 10032号から 20000号までの計9969体がいます、いえすみません間違えましたこれに上位個体である打ち止めと現在行方不明になっている試作タイプの00000号フルチューニングを入れれば9971体と ミサカは訂正します」

とミサカ19090号が 長い説明を終えるが 黒子はそれを聞いて いなかった

何故なら

9969体と言われた時点でトリップして自分の世界に旅立ってしまったからだ

ヨダレを垂らして

お姉様が一人うへへと顔を真っ赤にしてにやけている

そんな黒子の様子を 冷やかな目で、

ミサカ19090号は見ていたが、はあとため息をついた後、右手を黒子に向けると

「正気に戻ってくださいとミサカは願い ながら電撃を放ちます」

バチツとほとばしった電撃がヨダレを垂らしてにやけまくっている黒子を痺れさせたのは言うまでもない

「ありがとうございますとミサカは姿の見えない上位個体に

礼を言います」

御坂妹は走りながら 首だけで頷いた

黒子がミサカ19090 号と話をしていた 頃。御坂妹
は木原那由他と共に黒子達 のいる地下室目指して走っていた

むろん黒子たちは知るよしもない

「今だれと話して たの？」

そう言つて那由他が つまづきそうになりながらも話かけてくる。
片腕になったことにより身体のバランスが狂っているのだ

「ミサカネットワークから情報を引き出していましたとミサカは
告げます」

「ふん便利何だね それで何かわかったの？」

「はい。 とりあえず 捕らわれの身になっていた19090号は
無事 だったようです

現在常盤台の茶髪　　の少女ネットワーク　　の情報によると常盤台一年白井黒子と判明しましたとミサカは報告します」

御坂妹は少しスピードを落として那由他の隣に付く

「そう先輩が、さらわれた子供たちを保護したんだね」

那由他はほっとした　　様子で言う

「そのようです。」

ただ、その少女とミサカ19090号だけでは　　守りきれないと思うので早く合流しなければとミサカは進言　　しますが……」

とそこで言葉をきった御坂妹は心配そうな顔をして、那由他の腕のない右肩を見る

「大丈夫なのですか　　とミサカは隻腕のあなたを心配します」

そんな御坂妹の心配　　そんな表情をチラッと見た那由他は、すぐに笑みを返して　　強い口調で言う

「大丈夫だよ。」

シスターズのお姉ちゃん、私はサイボーグだからこれくらい　　の傷は平気だよ

ちよっとバランスが　　取りにくいけどそれ　　ぐらいすぐに慣れるだから急ごう先輩と　　えっと19090号のシスターズのお姉ちゃんの二人だけだったら、保護した子供たちを安全に外に連れ出す

のは無理だよ」

那由他はそう言って 話を終わると、きつい視線で前方を見る

「あなたの言うとおりですとミサカは賛成します」

そう言った御坂妹は 走る那由他の手を握り手をつなぐ

その御坂妹の行動 に那由他はにっこり と笑みを浮かべる

二人はその後黙り ひたすら走り続け地下室を指すのだっ
た

「ここか！」

那由他たちより、一足先に矢文は地下室への下り階段に到着して
いた

「この下に攫われた子供たちが居るんだな」

矢文はそう言ってから周囲を見回す

「一人で降りていく のは危険だけど
そんな事言ってる場合じゃないか」

矢文は決心すると 来る途中で手に入れ た拳銃をポケットか

ら取り出し、いつでも撃てるようにセーフティーを外してから右手に持ってから ゆっくりと階段を下 っていった

人が空を飛んでいる

背中から赤青黄色などのカラフルな煙を撒き散らして飛んで いたその男はくるっと地面スレスレで宙返りを決めると両足から着地する

「到着！」

両足から降り立った その男は前方にそびえ立つ巨大な物体を見上げる

物体の正体は大我が 乗り捨てた自動操縦 に切り替えた全長
7メートルの巨大 駆動鎧だ

「到着早々で悪いんだがすぐに終わらせてもらっぜ。

ダチを待たせてるん でな」

間近にいる巨大駆動鎧に臆する事なく 削板軍覇は不敵に
笑った

その軍覇に巨大駆動鎧は無機質な鉄の拳 を振り下ろす

ゴオーと凄まじい空気を引き裂く音が、
爆風となって軍覇の
髪をなびかせる

常人ならばその拳圧 だけで吹き飛ぶが
軍覇は吹き飛ぶど
ころか、微動だにせず立っている

「拳か！ そうだよ
な男の勝負はやっぱり拳と拳だよなその勝
負受けて立つぜ」

軍覇はうおおお！と 雄叫びを上げながら 自分目掛けて振り
下ろされた拳目指して 走っていく

背中から赤青黄色それに銀色の煙を新たに纏いながら

眼前に迫る鉄の拳
を見ながら軍覇は
左のアップ
アッパー
を下から突き上げる

軍覇の根性が入った 左のアップアッパーと
無機質な鉄の拳が
空中でぶつかり合い 火花を散らす

ドーンと巻き起こった衝撃が辺りの地面
をえぐり瓦礫が飛び
散る

「まだまだ」

軍覇は鉄の拳の重圧
に耐えながら、左アップアッパーを空中に飛び上
がりながら突き上げる

バキバキと軍覇のアップアッパーの威力に耐えきれず、巨大駆動鎧の拳

に亀裂が走り瞬く間に、右腕、右肩へと亀裂　　が達し鉄の拳が砕け
散り、腕がもげる
バラバラと降り落ち　　てくる拳の残骸を
横目に見ながら軍覇　　は空中で右拳を腰に　　に構える

「すごいパンチ」

軍覇が腕がもげた　　巨大駆動鎧の胴体　　目掛けて必殺の
一撃を放つ

拳から出た謎の波動に背中からの煙が吸い寄せられるように、
ついていき螺旋　　を描きながら赤青黄色銀色の煙が、巨大駆動鎧
の胴体にぶち当たり、謎の波動と　　共に巨大駆動の胴体　　に風穴
を開けた

操縦者がいれば、間違いなく即死で戦闘不能だが、すでに自動操
縦に切り替わっている巨大駆動鎧には関係ない
自動操縦は大我が　　インプットしたプログラムを忠実に実行
する

『機体損傷率70%を　　超えました。
これより自爆モードに入ります』

冷たい自動音声が　　非情な宣告をするが　　軍覇には聞こえな
かった

巨大駆動鎧は無事な　　方の腕で、ワイヤー式ロケットアームを
射出する

「おわ！」

すごいパンチを 撃った後気の抜けて いた軍覇だったが、
さすがレベル5

何とか飛んできた拳 だけはかわした

拳だけは

拳の後に伸びてきたワイヤーはくるくると曲線を描き

軍覇の身体を絡めとる動きを見せる

「まずい！ すごい パー」

軍覇が巻き取ろうと するワイヤーを衝撃 で吹き飛ばすより、
ワイヤーが軍覇をがんじがらめにする方が僅かに早かった

ワイヤーが全身に 絡みついて、軍覇は 身動きがとれなく
なる

「こんなもん根性で」

軍覇は何とか首だけ 動かしワイヤーと自分の間に隙間を空けると
歯でワイヤーに 噛みついた

ガギツと金属を叩いた甲高い音が鳴るが それだけでワイヤー
は千切れなかった

まあ歯が碎けなかっただけかもしれません

巨大駆動鎧はあちこち火花を散らして煙を掃きながらもワイヤー
に絡め取った軍覇を引き寄せる

グリーンと軍覇は抵抗 虚しく、巨大駆動鎧の懐に引きずり込まれ

る

「くそ離せ」

じたばたもかく軍覇　を眩い光が包み込ん　だかと思うと駆動鎧
が粉々に砕け散り　爆音と衝撃が辺りに　轟いた

その強烈な衝撃は　辺り一面を吹き飛ばしたが、距離が離れ
ていたため、訓練所内は振動で揺れただけで建物に損害は無かった
が、外はそうはいかなかった

地面がはぜる程の　衝撃とそれに飛ばされた瓦礫などが、呑
気に高見の見物と　洒落込んでいる、　4人の悪党たち
を襲った

「翔角！」

外界が翔角の方を　振り向く事なく叫ぶ

「了解」

翔角は右手を片膝　立ちで地面に付き

能力を発動させ石の　壁を作り出し、衝撃　を防ぐ

残りの三人は外界が　叫んだ時にすでに翔角の背中のおろに避難
している

衝撃が壁を何度も揺らすが強固な壁のようで、ヒビ一つ入らずにやり過ごした

「ふう脅かしやがる 了見の目が良くて 助かったぜ
気づくのが早くて 防御が間に合った」

翔角が立ち上がりながら防壁を解除した

「派手な闘いしやがる危うくとばっちりを食うところだったぜ」

「鳥目に感謝しろよ」

「俺の壁にもな」

翔角と了見が礼を 催促する

「死にはしなかった だろうけど、怪我は確定だったな二人とも
ありがとうな」

二人の催促に冬牙が 答える

「おい何か聞こえないか？」

冬牙と違い外界は二人を無視し、さっきから聞こえる小さな電子音を指摘する

「悪い俺のだ」

電子音が自分の携帯の着信音だと気づいた翔角は慌てて、携帯に出る

「はいこちら鬼川翔角……マスターわざわざ電話とは何かご用で」

翔角の通話相手が　自分たちの雇い主　であることを知った　外界と見は緊張し　唾を飲み込む

「……そんな事に　それで我々にどうしろと……」

翔角もマスターからの命令を緊張した面もちで何度も頷きながら両手で携帯を持って応答する

他の三人は黙り込み　翔角の声に耳を傾ける

「わかりました。

お任せ下さい」

翔角はそう言った後　電話を切るとふうと　一息ついた緊張がきれたようだ

「で翔角よマスターはなんて？」

外界が翔角が一息　ついてからちよっと　待ってから早口で聞く

翔角は外界の方を　振り向いてから答え　だす

「警備員が5人ほど　こっちに向かっているんだってよ。」

警備員どもに証拠を 抑えられる前に、品物の確保または破棄を速やかに行うこと 最悪の場合瀧河大我 と我孫子の両警備員の抹殺及び施設の破棄もやむなし
以上だ……でどうする？」

翔角は残りの三人 一人一人を見る

「どうするも何も

マスターの命令には 従うしかないだろう また首輪つけられて檻には戻りたくないからな」

了見は渋々命令に 従う事にする

「師匠の抹殺もやむなしか。

厳しい命令だな

出来れば避けたいが」

冬牙ははあとため息 ついた後顎に手をあてて考え込む

「ここで考え込んで ても仕方ねえやるか ！」

4人の中で外界だけがやる気を出して 吠え己を鼓舞し皆に指示を与えだす

「了見お前は警備員どもを抑えとけ、空中戦を仕掛けりや重装備の警備員どもなど軽く蹴散らせる

翔角お前は了見の 補佐だ。

空中を飛び回る了見 を狙い撃とうとする 奴を叩くのと増援の対処だ。冬牙だったかお前は 俺と共に訓練所内に 入って商品共を回収 ただ全てを回収するのは難しい敵の抵抗 と了見たちの戦いの 状況によっては、 より高値の付く商品 だけ連れ

出し後は 廃棄する

だから一学たちと

常に連絡を取れ

任せたぞ」

外界は次々との確な 指示を皆にだす

単独行動を好む外界 だが、三人の中では リーダー格でもあり
いざとなったら、 皆をまとめ上げる 指揮官としての
能力 も外界は備えていた

「施設はどうするんだ？」

了見が外界が、指示 しなかった施設の破棄について聞く

「もう結構壊れてる 破棄の方が手っ取り早いだろ

俺の炎ならあつという間に灰燼だ

大我さんと我孫子さんについては、使えるなら救助ヤバいとか足
手まといなら

始末でいいだろう お前らの意見は」

外界が皆に意見を 聞くために首だけで 振り向いて翔角た
ち を見る

「ないなそれでいこう」

翔角が応じ

「こんな真夜中に 警備員が乗り込んで 来るとは信じられ
ないが仕方ない。

それに屋外戦闘の 方が得意だしな」

了見も賛成し

「できる限り師匠は殺さない方向で頼むぜ」

冬牙も賛成した

「よしじゃあ作戦 開始だ、時間も無い 久しぶりに本気で
行くぜ」

外界はそう言う

両拳を強く握りしめ 首を前につきだし

拳を握りしめ続け ぶるぶるとふるわす

徐々に外界の肌が真っ黒な色になっていく

次に前につきだして いた顔が真っ黒になり口がグワアと開かれ

大きくなっていき むき出した歯が 伸びて歯と言うより

牙となる

変化はそれだけでは ない。

脚も真っ黒に変色 し、尻から尻尾が 生えてくる

さらに身長がどんどん大きくなっていき 三メートル程になっ

て止まった

そこには既に外界塵 期の姿はなく

一匹の漆黒色の二足歩行で立つ鱈がいた

「ふう、パイロキネシスのコントロールを磨こうとしてたから獣
化は久しぶりだぜ」

外界は左手を横になくとその左手の爪に 炎が絡みつく

「獣化により身体能力も飛躍的にパワーアップそしてパイロキネシスもレベル5にレベルアップだ

正直ここまでやる必要はないと思うが 仕事はきっちりこなさんと後が怖いからな特にマスターからの命令ともなると」

外界はそう言った 後冬牙の前に歩いて いきその巨体をしやがませる

「乗れ！ その方が 早い」

外界は自分の背に乗るように冬牙に促す

「乗り心地よさそうには見えんが、自分の足で行かない分疲れないか」

冬牙は外界の好意に 甘えて早速飛び乗る

「露払いは任せたぞ」

外界は背の振動から 冬牙が乗ったのを確認すると、しゃがんだ状態から高く飛び上がり訓練所に向かうのだった

「俺たちも行くか」

翔角が横にいる了見 に言う

「そうだな一人か二人血祭りに上げたら ビビって退散する
だる俺が運ぶ

翔角は変身しないで くれ体重が増えて 移動が大変になる

からな」

「わかった」

了見は翔角の返事を聞いた後、鳥人間に変身し翔角を背に乗せ空へと舞い上がった

外界が変身する

五分程前二台の車が学舎の園内に突入 いや突撃しようとしていた

布束砥信を仲間に加えた牛窪範正とその仲間たちである

「駄目兄さん上からの許可下りないわ
学舎の園内には独自の自動警備システムと警備隊がいるから
それに任せろって 言って聞かないわ」

携帯で上に許可を取り次ごととしてた 麟子が首をぶんぶん振る

そんな妹の方を向く 事なく牛窪範正は 前を見続ける

「兄さんどうするの？ 許可もなく動いたら免職されいや学園都市追放もあるわよ」

麟子の悲痛な声に も牛窪範正は耳を 傾ける事なく

車の警備員専用の 無線に手をかけスイッチを入れる

「各員に伝える

目の前に見えている　物資の搬入路のゲートをぶち破り、学舎の園内に突入する　アクセル全開全速力で突き破れー」

「兄さん!!」

その兄の躊躇いのない命令に麟子は悲鳴じみた声を上げる

「正義は我らにあり　今成すべき事を最優先に考える

常時と非常時の区別もつかん馬鹿どもはほっとけ

非常時に手続きもくそもあるか

麟子！　グレネードランチャー発射準備　一刻を争うゲートを叩き壊せ」

726

腕組みしながら牛窪　は後部座席にいる
妹に命令する

「わかったわよ。

そのかわり責任は　兄さんがとつてよね　」

麟子は窓を開けて　車の中にある支部から持ってきたグレネードランチャーを肩に構え窓から上半身だけ出す

「いいわよ」

麟子がゲートに狙い　を定めた後ヤケクソ　で叫ぶ

「発射!!」

発射態勢の麟子に
大声で前方を鋭く
見据えながら命
じる

放たれた砲弾は見事 一発で破壊する

その開かれた道を二台の車が高速で煙を突き破りながら駆け抜け
た

数十秒後煙を突き破った二台の車が
学舎の園内へ到着した

死闘から数時間やっと援軍が到着した瞬間だった

第五話第五章その2（超人再び 突入警備員）（後書き）

いかがだったでしょうか？

アドバイスとかあったら教えてくれると 助かります

読んで頂きありがとうございます

？

第六話第一章その1（迫る脅威漆黒の顎）（前書き）

大変ご無沙汰しております 将真です

書いても書いても 納得いかず、何度も書き直しや筆が進まなくなり、更新が止まっていました
申し訳ございません？

もし待っていた方が いたのなら、大変お待たせしました

新しく読んで頂く方は初めまして、精一杯頑張って書いたのでどうぞ見ていって下さい

第六話第一章その1（迫る脅威漆黒の顎）

「うん？…誰か来る！」

地下への階段を下っていた原谷は、背後から聞こえてきた複数の足音に思わず、立ち止まり耳を澄ました

「音の数からして、人数は二人か」

原谷はそう呟いた後 懐から拳銃を、取り出し膝立ちになり両手で拳銃を構えつつ警戒する

そうしてる間に、後方からの足音は更に近づいて来る

原谷は銃を構えた 状態で足音が聞こえる方を注視する
やがて原谷の視界に 走ってくる二人の少女が現れる

「那由ちゃんと… あれはミサカちゃん！」

味方二人の姿を見た 原谷は拳銃を慌てて 懐に戻し、二人に駆け寄ろうと走り出す

「那由ちゃん、ミサカちゃん無事だったんだな」

こっちに向かって走ってくる少女二人に警戒されないように大声で、仲間である事をアピールする事も忘れない

先に気づいたのは那由他だった

那由他たちも味方だと知り警戒を解く

三人は地下への階段 のほぼ真ん中辺り

で合流した

「那由ちゃん無事で 良かった」

合流した矢文は数時間ぶりに、再会した那由他に満面の笑みを浮かべるが、すぐに片腕のない那由他の状態に気づき険しい顔に変わる

「那由ちゃん！
腕が」

矢文は驚いた後、 那由他の千切れて腕 のなくなった右肩を見てそれ以上言葉が 続かず絶句する

そんな辛そうな矢文の様子を見た那由侘は、仲間に心配ないとはかりに笑みを浮かべ明るい声を出す

「大丈夫。」

私の体が普通じゃない事は知ってるでしょ。
痛覚も遮断してるから痛くもないし、
この一件が片付いたら新しい義手作って もらうから
私の事は気にしないで」

那由他は何でもないとばかりに自分の腕の千切れた切り口を叩く

切り口を二回、三回 叩いた那由侘は、にこりと笑みを見せる
「那由ちゃん……」

こうまではずきり、大丈夫とアピールする那由侘に、原谷には何も言えず絶句するしかなかった

お互いが無言で見つめあい沈黙する

那由侘は笑顔をやめ 慈愛に満ちた優しい眼差しで、原谷はつらそうに歯を食いしばって

「あの、もういいですか？ とミサカはいい感じの二人に気まずい気持ちを隠しながら、割り込みますとミサカは告げます」

しばらく沈黙した二人を静かに見守っていた御坂妹が、恐る恐る手を上げながら 沈黙を破るのだった

「はっ
」

御坂妹の声を聞いた 原谷は弾かれたみたい、後ろに跳ね跳ぶ正気に戻ったようだ

「そうだ！ ボーッ と立っている場合じゃない。
那由ちゃん御坂ちゃん急いで、階段を下りないと」

那由侘と見つめあっていたのが恥ずかしかったのか、原谷は耳を真

っ赤にしながら照れ隠して大声を 上げ早口で言いながら階段を急いで下っていくのを開始する

「ボツとではなく、幼女と見つめあつてだろつ、ロリコン野郎がとミサカは厳しく突っ込みます」

御坂妹は冷めた目で 階段を下っていく、原谷を指で差すがすぐに那由侘もその後を追っているのに 気づき、置いてきぼりになっているに、自分に気づく

「置いていくなこの 野郎とミサカは抗議をしながら、薄情な二人を追いかけます」

差した指を慌てて、握りしめたミサカは 駆け足で二人を追っていくが、走りだして直ぐに壁にぶつかる

「あつ」

ガンと衝撃を受けた ミサカは後ろに倒れ 尻餅をついた

だがミサカの前に 壁などはなかった 尻餅をついたミサカはお尻をさすりながら立ち上がると、那由侘が青白い顔をして立っていた

どうやら壁ではなく 突然立ち止まった那由侘にぶつかってしまったらしい

「どうしたのですか？ とミサカは覗き込みながら、話か

けます」

事実御坂妹は首をぐいっと伸ばして那由侘の顔を見ている

青白い顔で降りて きた階段の方を見ていた那由侘は、チラッと先に駆け足で一人降っていく原谷を 見た後、次に鋭い眼差しで御坂妹を見る キッと聞こえるような鋭い眼光を見た御坂妹は、一瞬ビクッと首をすくめるが、 すぐに機嫌を損ねた と思い謝罪する

「無遠慮に覗き込んで失礼しましたと、 御坂はただならぬ見幕の少女に謝ります」

御坂妹はそう言いながら何度も頭を下げるが那由侘の射抜くのような眼差しは変わらず、ずっと御坂妹を見続ける

(知らぬうちに、かなり怒らせてしまったようです)

御坂妹は自分の謝罪 が足りないのを悟り 両膝を地面に付け

「ごめんなさ」

「シスターズのお姉ちゃん？」

土下座しようとする が、那由侘の大声が 先だった

両膝を着いた状態 で御坂妹が固まる そんな御坂妹の困った様子など気にもしないで那由侘は続ける

「急いで矢文と合流 して、さらわれた人 達を解放してあげて
」？」

那由侘はそれだけを 告げると御坂妹に目 もくれず、先程降ってきた階段を駆け上がり戻っていく

「わかりました。 お任せ下さい」

階段を急いで駆け上がって戻っていく、 那由侘の後ろ姿に
呟いた後御坂妹は もう那由侘に振り向 く事なく、さっきよりもずっと早いスピードで、階段を下っていくのだった

何も言えなかった 何故なら、那由侘が ただならぬ雰囲気
を 纏っているのが御坂妹にも解ったからだ
御坂妹に出来たのは 那由侘の無事を祈り ながら走る事だけだった

タタッタと軽快な早さで那由侘は階段を駆け上がっていた。
だがその顔に笑みはなかった。

険しい表情で那由侘 は無言で階段を駆け 上がる

(一体どうなってる の !)

走りながら那由侘は 頭の中を整理する

(この感じは、間違いなくレベル5クラスの実力者の者レベル5
クラスじゃないとこれ程のAEM拡散力場は存在しない……でもこ
の力場は学園都市にいる七人のレベル5の誰とも一致しない私の知
らない内に八人目が出来たとは 思えないし、どういう事?)

那由侘は階段を下りている途中で感じた 凄まじい能力の波動

の正体を考える

彼女が急に引き返したのはこの強大な力 を感じたからだ

こんなとんでもない 力を持つ者に背後から襲われたら……間違
いなく全滅……だから那由侘は残った

足止めするために

他人の能力の流れを 見てそれを操るのが 彼女の能力だ

それゆえに普通では見えないAIM拡散力場が彼女には見えたり
感じたりしてしまう

(まあ力ザキリや エイワスなどという 例外はあるが……)

幸か不幸かは判らないがとにかく彼女は 背後から迫る脅威に
気づいてしまったのだ

そして階段を上りきった、那由侘の前に その脅威が姿を現す
それは二足歩行する漆黒の巨大な鱈だった

「ここから先には 行かさないよ…… 絶対に？」

自分よりも遙かに 背の高い二足歩行する鱈を見上げながら、
一息ついてから

那由侘は力強く宣言 するのだった

第六話第一章その1（迫る脅威漆黒の顎）（後書き）

最後まで、読んで頂きありがとうございます？

ご意見 ご感想 ポイント いつでもお待ちしております？

より良い作品を書いていきたいと思っておりますので、少しでも気になった事は どんどん感想にお寄せ下さい待っています？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9372k/>

とある野望の凶刃

2011年12月18日23時52分発行